

考証盆栽史大綱

社会事象としての盆栽

誌名	千葉大学園芸学部特別報告
ISSN	00693219
著者名	岩佐,亮二
発行元	千葉大学園芸学部
巻/号	13号
巻号補足	
掲載ページ	p. 156-156
発行年月	1975年11月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



考証盆栽史大綱

社会事象としての盆栽

岩 佐 亮 二

Historical Study on the Bonsai Development in the Social Backgrounds

by

Ryōji IWASA

I 序 論

1) 盆栽と鉢植

現代の社会通念に従って「盆栽」の概念を明文化すれば、鉢やその他の器物に樹や草を植え、時に石を添えるなどして全体を整え、それが対者に自然の景観から受ける豪荘・可憐・繊細・佳麗などの感興を想起させるものを指している、としてよい。一方、このような風趣の重視とは対照的に、鉢内の植物体そのものの葉・茎・花・果実などの形・色・香りあるいは全体の姿などが直接的に観賞の対象となる場合を「鉢植」と名付けて区別している。

要は、景観に接して感ずる美的な心象を生育可能な状態で器物の中に表現するという創作活動、すなわち芸術性の有無こそ、「盆栽」と「鉢植」との分岐点であるといえることができる。

ところで、このような概念の分化は、後述するように明治 20 年頃（1890 頃）社会の一部に発端し、先達の並々ならぬ啓発運動により、約 40 年間に要して、大正末年頃（1930 頃）に至り、ようやく社会通念に昇華した。したがって、最も厳密狭義に「盆栽」を定義づければ、その源流は明治 20 年頃で行き止まる。しかし、事物は粗より精への発展をたどるのが常道であるゆえ、筆者は来歴を探るに当たっては、前記した両型を一本に合せて広義の盆栽とした。さらに「盆石」は観照の精神面で同一の基盤に立ち、またかつては、盆栽との間に一線を画することが困難な事態も存在していたので、附随的に「盆石」を取り上げることにした。

2) 従来の盆栽史

盆栽史の草分けとして横井時冬（明治 25・1892）「盆栽考」がある。これは 2・3 ページの短文ながら、創始を鎌倉時代の絵巻物「法然上人絵伝」・「春日権現験記絵」の中に見付け、同時代の随筆「徒然草」から公家日野資朝の故事を引き、室町初期の「申楽」「鉢の木」を取り上げ、江

戸前期の風俗誌「^{じんりんきんうらすい}人倫訓蒙図彙」の中の「植木屋」を図示し、後期の「^{かつしやわ}甲子夜話」から当時の高揚した「奇樹異草」熱とこれに対する幕府の「停禁」を引用するなど、実に明治以前の大筋は同氏によって解明された。

しかし、反面精細る欠き、また盆栽の成立発展の社会的背景となった国内の諸事情、およびそれらの諸事情に直接間接に係わってきた中国と朝鮮の影響などを全面的に失念したので、結果として、国内だけの数少ない点を平面的に配列した傾向がつよく、また補遺すべき事項も少くない。

なお、年代的には当然のことながら、盆栽は同氏の論説が公刊された時点以降目ざましい飛躍を遂げて今日の境地に進んだが、この期間を増補しなくては発達史に大きな空白を残すことになる。

開原亨（明治43～大正3・1910～1914）「樹木盆栽論」は、世上における盆栽の盛行を反映し、研究課題として、盆樹の組織学的所見・培土の理学的性状などを取り上げて、まさに「盆栽の科学」を発端した。

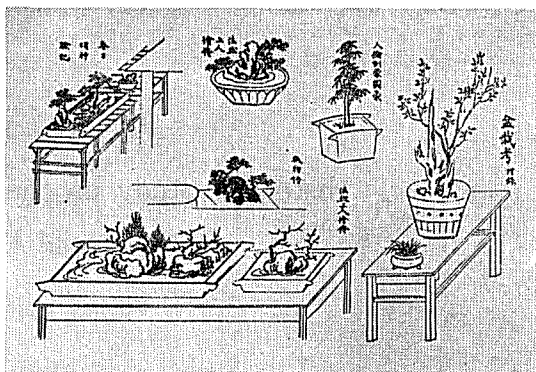
このように、横井・開原両氏の草分け的な功績は、盆栽史の上では、異色な存在として、特記に価する。

その後公刊された盆栽史の多くは、創始者横井氏の姓名を伏せながらも、その路線を踏襲してきたので、論説はかなりの件数に達したにもかかわらず、枝葉的な附加はあったものの、大綱の面ではさしたる進展を加えなかった。

江戸時代には種樹（園芸）の隆昌を承けて、多種多彩な刊本が開板されたが、全体を通ずる傾向としては「布（斑）入り・葉替（変）り」などに代表される奇品に偏し、いわゆる「奇樹異草」を内容としたものがひととき目を引く。また種樹書を全般的に通読すると、「盆栽・盆樹・盆植・登盆・植盆・鉢植」などの文字を見いだすと共に、それらが一様に「はちうえ」の振仮名をもつことを知る。

かつて一部の論者はこの「はちうえ」の振仮名と奇品に偏した内容とを過大視してか、「江戸時代には盆栽に存在しなかった」との速断を下したが、この論断は、当人の盆栽界における主導的地位に裏付けされて、ややもすれば定説めいて盆栽界に通行してきた。

なお、そのような論断と世上の受け取り方との根底には、振仮名によって購読層の増大ねらった出版元の商略を失念し、また、昨今の進んだ盆栽を心象上の尺度として過去に当てはめる誤りを犯すなどの短慮が介在していた。現状における盆栽は、「侘び寂び」に徹し、また樹や草の本性に即しながらその間に美を創成するなどの点でまさに民族固有の芸術であり、その独自性はあえて指摘するまでもない。しかし、それは曲折を経てたどりついた成果である。現下の「精」を



横井時冬（1892）「盆栽考」の付図

註 図中の「狐物語」とあるのは「祭礼草紙」の誤認と考えられる。

もって過去の「粗」を律してはならない。

3) 中国の盆景

中国では往昔から現代まで、日本流に「盆栽」と「鉢植」とを区別する概念上の分化はなく、さらにわが国の「箱庭」および江戸時代の「占景盤・盆庭」などの領域をも合せて、この広い分野を一般的には「盆景」(pén-jǐng) 時に「盆栽」(pén-zāi) と呼び、他に「盆玩・盆花・盆樹」などの文字を与え、時例として、元の頃には「些子景(xiē-zi-jǐng)」の名称を附してきた。また、清初の頃、陳扶搖はその著書「秘伝花鏡」の中で「取盆取景」の呼称を創始した。なお、この国の「盆景」が包含する内容は前記した通りであるが、しかし、「盆景・些子景・取盆取景」などの文字には元来「景觀の縮写」の意味が盛られていることを添えておく。ただし、現実には字義に一致しなく、すなわち、中国では芸術性に通ずる創作活動にまでは発展しなかった。

4) 盆樹と盆器

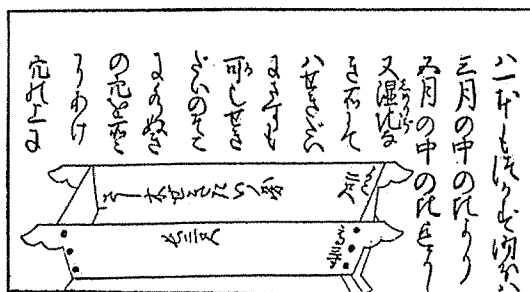
盆栽が木本である場合、その主体を盆栽界では「盆樹」と呼んでいる。この呼称に対し、草本に「盆草」なる文字を当てることはいまだ創始されていない。

器物としての陶磁器は、必ずしも同一義ではないが、「盆栽鉢・鉢・植木鉢」と呼ぶのが一般的である。あえて区別すれば、盆栽の風格にふさわしいものを「盆栽鉢」、鉢植用に向く型を「植木鉢」、両者をしいて区別しない場合に鉢の呼称を当てているとすべきである。

なお、近年盆栽界の一部で「盆器」なる名称が通用しはじめたことを添えておく。

陶磁の器物に対し、板を箱状に組合せたものを古来「花台・石台」と呼んできた。この名称の由来は明らかではないが、文字の上では、江戸前記に相当して、伊兵衛(元禄 5・1692)「錦繡枕」(後の改称長生花林抄)に明記されている。年代の古い絵画から判断して、陶磁の盆器が一般的に供用されはじめた江戸中期までは方形や長方形の「花台」が常用されていたと帰納される。

わが国の「鉢」に該当する中国語としては「花盆」を主とし、外に「盆・磁盆・陶盆・磁盆・瓦器」などの文字を古文書の上から拾い出すことができる。



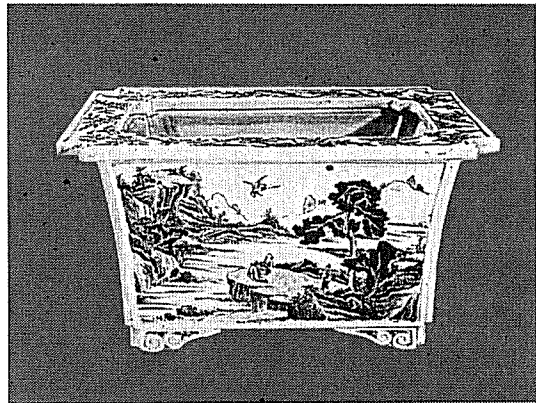
伊兵衛(1692)「錦繡枕」の中の「花台」

なお、中国では前 3000～前 2000 年頃までに、高火度の彩陶・黒陶・紅陶を焼成し、その後間もなく施釉の技法が開発され、また古くから磁器を偏重し、無釉の焼造品は言うまでもなく、陶器さえも下手物扱いにしてきたことを附記しておく。

4000 年の歴史をもつ中国の陶磁は形・色・文様に秀逸な技法を達成し鮮美な表現をしていて、個々の器物に高い芸術性を内包しているが、花盆も上記した傾向の例外ではなく、個々の器物はそれ自体としても鑑賞に耐えうる資質が深く追求されてきた。

わが国の盆栽に占める盆器の役割は、断わるまでもなく、全体の閑雅な風格を醸成する上で副

次的ながらも重要な存在であるが、この点につき、日・中両国間の開きは上記した通りである。しかし、中国の花盆を古今にわたって貫く前記の動向がわが国にも将来されて、かつては「染付」（中国名青花）や「赤絵」（中国名五彩）の鉢が主体を占めていた年代（江戸時代後期）もあったことを添えておく。



技巧に徹した中国の花盆（清初の五彩盆）
日本盆栽協会「鉢・水盤・卓」より

5) 盆栽の文化史的背景

東西の芸術観の差異につき古来、西欧人

は人工美の極根に芸術品を創作してきたが、反対に、東洋人特に日本人は、前述のごとく、自然の本性に即しながらその間に美を醸成するという特異な方途を進んできた。

盆栽の中に宿る本質はこの日本人的な芸術観である。近年、各国の人々がわが国の盆栽のもつ独自かつ卓越した本質を深く理解しはじめたことが、すなわち、日本の盆栽が世界的に高く評価される要因であると結論される。

このような、外部から見れば、一見「東洋の深秘」とも映る領域は、とりもなおさず、「民族性の具象化」であり、盆栽のもつ閑雅な風格がこの国土に育った由来にはそれなりの根底があった。盆栽こそ日本を海外に紹介する本質的な焦点であると言えないこともない。

文化の進展には、各民族・各時代を通じて、近隣からの導入・社会への定着・民族性と風土につちかわれた独自の範型への発展という3過程がある。

筆者は、日一中一鮮にわたり、関係史料を極力渉猟した結果、わが国の盆栽も上記通則の例外ではなかったとの帰結に到達した。すなわち、以下本文で論証するように、(1)大陸との古くからの交流の過程で、唐物・唐様へのあやかりの一端として、賞玩の風習・粗型・盆器が将来されてまず上層階級に根をおろし、(2)後年庶民へも波及して、社会的定着がなされ、(3)次いで民族性と風土につちかわれて今日の境地へと展開してきた。

従来の盆栽史には、ややもすれば、伝承や管見的主観を優先させ、また枝葉的な事例をもって全般を律するなどの傾向が内在していたが、筆者は、当然のことながら、極力古い文書や絵画などに立脚して、努めて客観的な判断を下し、この間、個々の資料のもつ意義を社会的背景の中で勘考し、さらに進んで、相互の関係を年代的な前後左右の方向に位置づけ、このようにして、曲折に富む一本の筋道を帰納的に割り出すことができた。

この意味から、あえて「考証」の2字を冠して立場を鮮明にし、また、「大綱」の文字を接尾して個々の資料の関連づけを強調した。

盆栽を中心としながらも、園芸文化史ひいては一般的な文化史を意識の一部において想を練ってきた。本格的な盆栽史が登場する発端ともなれば幸である。

II 盆栽の隣接領域

1) 概 説

自然の景観から受ける感興を器物の中に表現する芸術的な領域としては、本論文の主題である盆栽の外に、「水石（＝盆石）」・「盤景（＝盆景）」・「箱庭」・「盆画」・「水上画」・「砂絵」などがある。

これらの諸分野につき水石は以下において副次的ながらも、盆栽と並んで取りあげる。他は大体において、江戸前期の寛永（1624～1643）（＝盆画）から中期の天明（1781～1788）（＝盆景）を経て、後期の文化（1804～1817）文政（1818～1829）の頃（＝水上画）に創始された芸能であるが、由来の詳細はここでは論外に置く。

ただ、用語の混乱を避ける意図から、一応常識的な類別を神宮司庁（明治 41・1908）「古事類苑・遊戯部」その他によって略記しておく。

2) 水 石

「水石」の現代的な解釈では、「山水石」の略称であるとされるが、盆中にすえた天然のままの拳大の石で山峰・飛瀑・九山八海などにわたる山水の景趣を連想させるものを指し、かつては、鎌倉時代以降比較的近年まで「盆石」と呼ばれてきた範型である。なお、その間にあって、室町時代には「盆山（ほんざん・ほんせん）」の呼称であった。

水石という文字の創始年代は不明ではあるが、明末の文震亨（1630 頃）「長物志」では、苑池の構成に関し、水中の石の意味に用いられ、一方、江戸中期に相当して、黒川道祐（貞享1・1684）「雍州府志」には京都 竜安寺の石庭につき、「是謂疊石、水石、其石大者、九箇而布、其布置、非凡巧之所及也」との記述があって、共に現下の語意とは異なるものの、文字そのものは昨今の創成ではないことを示している。

なお、室町時代の「盆山」には岩上に生育して根を上中に伸ばさない型式の「石付盆栽」も含まれていたことを附記しておく。

3) 盤 景

「盤景」は「盆景」と呼ばれたこともあったが、水盤中に化土^{けいど}その他によって遠山や地窟^{くわ}などをつくり、適宜小形な樹草を植え、または枝を挿し、時に置物の「茅舎^{くすや}」や「禽獸」をあしらひ、あるいは海浜・波浪・漁舟・遠島を写すなど、全体として自然の佳景を盆上に再現する分野である。ここにいう「盆景」は上記の通りであるが、同一文字ながら中国では語義を異にしてきたことは前記しておいた。

この種の混乱につき、江戸後期に相当して、喜多村信節^{のぶふし}（文政 13・1801）「嬉遊笑覧」は、「今この方の俗人、盆景と云は、盆石とて盆に石を排置^{すゐ}き。白砂を盛たるをいへるは非なり、盆景ここにいふ鉢^{はち}うゑのことにて、もとは草木を植たるなり。」と述べ、和様と唐様の不一致、ひいて

は漢籍への素養を示唆している。この種の不一致は和漢の間だけでなく、国内だけについても、時代により流派によりさらに個人間でも、かなり著しいものがあったが、上文および下文によって、その一端を示しておく。混乱は昨今にはじまった事態ではなかった。

4) 箱 庭

「箱庭」はやや大きめの器物の中に石をすえて山峰や岩壁をかたどり、くぼみには小石や砂を敷いて清流に見立てるなどして起伏をつけ、適宜小形の樹草を植え、時に置物の「茅舎・人物・禽獣」などを配して、自然の景観をやや広範囲に表現するもので、盆栽の一翼を成す「寄植」が象徴する領域を多少広めた範型である。「箱庭」の概念は大体において、江戸後期の頃の墨江武禪（文政 5・1822）「占景盤」、明治時代の「盆庭」、近年の川本敏夫「昭和 44・1969）「木と石のデザイン」の中の「栽景」と合致する。なお、武禪は自己の創始（？）した用語「占景盤」に「盆山」なる伝承語を併用していた。

5) 盆 絵

「盆絵」は盆中に砂をもって山水を写すもので、喜多村信節（文政 13・1801）「嬉遊笑覧」によれば、「……砂を五色に染め、……象牙の丸き匙、また霞板とて笏の形をして、先を三絃の撥の如く薄く作りたるもの大小二つ有り、画かく具どもなり、盆は桐木を用ゆ、塗たるはわろし、……此わざは、いと近世（筆者註 安永年間 1772～1780）より始まるなるべし。」としている。

上記「砂絵」の領域に「奇石」を加えて表現に幅をもたせ、この範型を「盆山」と呼ぶ流派もあったが順石軒磐海（天明 5・1785）「盆山百景図」、順石軒瑤江（寛正 10・1798）「後編盆山百景図」の内容がそれに該当する。

6) 水 上 画

「水上画」は同じく「嬉遊笑覧」によれば、「細砂を染て五色となし、蠟に潰したるを水上に浮べ絵をかく、是は唯小児の遊びなり、」と記しているが、松本一雄（文政 1・1818）「水面指南」中に記述されているように、同人が文化 12 年頃（1815 頃）に創案した芸能であった。

7) 砂 画

「砂画」は同じく喜多村の前記書に「近ごろ物もらひが、砂を手握りて地上に書画をかくもの有り、……」と述べ、さらにその創始を安永の頃としている。

III 中国の盆景

1) 概 説

中国の盆景史を研究報告の形で取りまとめた業績は日・中両国ともに存在しない。

日本人の手になる沿革史のうち、中国の盆景との関連を多少なりとも一義的に論じたのは開原享（明治43～大正3・1910～1914）「樹木盆栽論」を創始とし、下って、宮沢文吾（大正11・1922）「盆栽附鉢植花卉」が後続した程度で、他は単なる推測ないし無縁にとどまっていた。

中国人の著した刊本では崔友文（1961）「中国盆景及其栽培」・伍宜孫（1969）「文農盆景」の中に推論めいた断章が目につく程度である。

杉村勇造（昭41・1966）「中国の庭」は標題通りの内容を持ち、園林・苑池の沿革史を扱ったものではあるが、正文の構成は同氏の学殖と経歴を経とし、これに各時代毎の名園記を緯として織り込み、全体として、殷の建国以来3500年におよぶ歳月にわたり、各時代ごとの名園の景観とその変遷を活写し、また時に応じ場所に応ずる社会的背景を添えている。

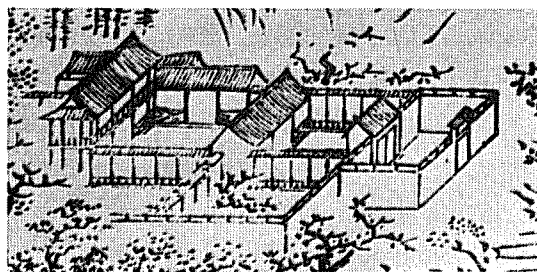
きて、この全編を精読すれば、個々の名園の中に飾られていた盆景への言及が随所に散見されるが、このようにして、盆景に関連をもつ原典を承知し、同時に内容の概略を知る上で有力な手掛りを提供している。

この見地から、中国に関係する部分は同書に示唆されたところが多い。

2) 庶人の盆景

中国の盆景が包含する内容については既述した通りであるが、名園記の端々に上っている盆景は、その植物の本性から判断して、日本流には鉢植えと判断されるものが大部分であり、さらに、この点は、古今の絵画や典籍中の版面などからも明確に断定される。

古来、中国の住居は、敷地を南北に長い長方形にとり、北側に接し南面して「正房（母屋）」を建て、その前方両側にそれぞれ東または西に面して「廂房（附属舎）」を張り出し、敷地の四周を「牆（壁）」で囲い、南側を東西に走る主道に向って、中門・大門をあける。「院子（中庭）」は「牆」（隔壁）によって2、3個所に設けられるが、いずれも方角となる。院子には堅焼きした瓦の平板すなわち「磚」を敷きつめ、時に、一隅の土を露出させて、極く限られた数のマツ・コノデカシワ（柏）・ビヤク



庶民の住居様式
李斗「揚州画舫録」より



花檻の奇石と竹
王驥徳（1613・万暦41）：「校註古本西廂記」より

シン（檜）・ウメ・カイドウなどを配植し、またボタン・シャクヤクなどを植えることもある。なお、栽植の場所を柵で囲んだり一段高く盛上げて「花檻」を設け、そこに奇石をすえたりボタン・シャクヤクの花で飾る仕来たりも伝承されてきた。

それらの植物は、自然の姿態を好んで、あまり人工的な整姿を施さない。

正房の中央にある石段の前面には左右一対の背丈程の大型盆景を飾り、その中間に、周囲が一抱え、高さが腰のあたり程の、金魚を泳がせた楕円形の大型な「水飮」（水がめ）を置くのが常法である。

この種の盆景としては、花期の長いものが好まれ、通常、自然形をしたキョウチクトウ（夾竹桃）・ザクロ（安石榴）・ムクゲ（木槿）・カンナ（曇華）などを用い、外に小型なものでは、タマノカンザシ（玉簪花）・ヤブラン（麦門冬）・キチジョウソウ（吉祥草）・キク（菊）などを飾ることもあり、総じて、供用する種類と本数は余り多くはない。

日本の盆栽に相当する範型が、後述するように、古く発端していたにもかかわらず、社会の一部にのみ存在し続けて普遍化しなかったのは、上述の生活様式が古くから規式化されていたため、庶民の立場では、盆景に華麗を求めても、反対にその雅趣は関心に上らなかったためだと推察される。

3) 文房清玩と文人の盆景

漢末の頃以降、貴族・権臣・富農・豪商などの上層階級は政策を話題にして談論風発する交友の場を持ちはじめたが、その後間もなく、その席に連なった人々は、次第に脱俗的な老荘思想・神仙的道的境地に共感をいだき、魏・晋以降、自己の思想行動を「清流」、席上における談論を「清談」と称し、脱俗を希求する「隠逸」の風潮を発端した。

この領域に身を置いた人々すなわち「文人」は、反俗的な姿勢に徹しながら、深山幽谷に「山居」して「逸民」となり、市井にあっては「市隠」の生活を続け、そこに東洋的とも言うべき閑雅な思潮を醸成し、それに伴って、思想・芸術・生活慣習などの面で、枯淡な静の境地を志向する特異な性格を深めていった。

文人の志向は随・唐に至って「琴棋（碁）書画」として確立し、その席に列した来会者は、伝世の名琴に耳を傾け、碁に興じ、偶感を詩詠や絵筆に托するなどして共に歓を尽くしたが、後年の明・清に下ると、文人の行住座臥は、一面規式化され、かつ、深化して、「文房清玩」が盛行した。

この境地に連なっていた人々は、第宅苑池の構築に当っては雅趣を専一にし、「文房（書斎）」にあっては古来の典籍に親しみ、紙・硯・墨・筆の名品すなわち「文房四宝」をそろえて愛用し、知己相会すれば喫茶の風尚にひたりながら「琴棋書画」に興じ、また「几案（机）」や室内の要所には「瓶花」や庶人の好みとは異なる閑雅な盆景を飾って賞玩した。

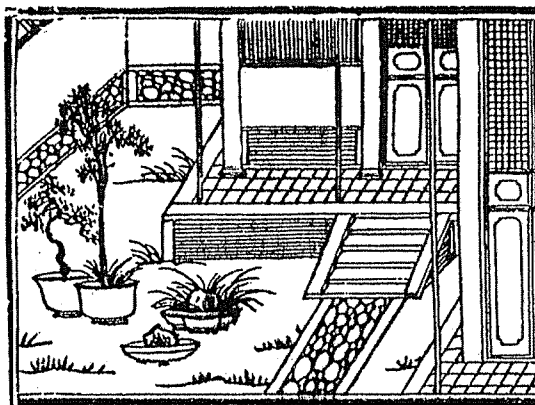
盆景に風韻を求める動向は、上述のたように、庶人の日常生活とは係りのない文人の「文房清玩」に連なって醸成され伝承されていったが、このようにして、庶民的な盆景とは異質な雅趣に富んだ範型が社会の一角に成立し存在しつづけた。

その文人流の盆景は、日中両国間の長い交流の中で将来され、後年、今日的な概念における盆栽にまで発展する粗型になったが、その過程は逐次論証するところである。

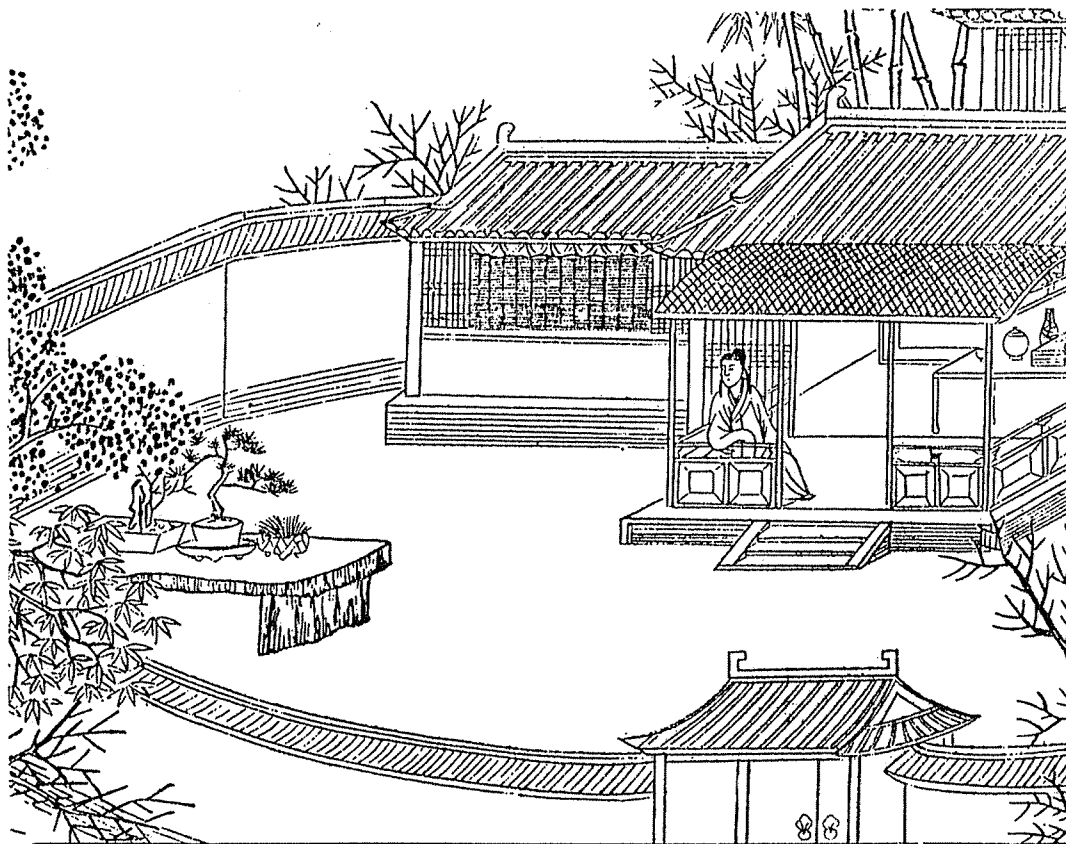
4) 古代の種樹

(1) 周 神農にはじまる中国農業の伝説はさておき、初代の王朝殷（前 1500～前 1200）を経て周（前 1200～前 221）に下ると、種樹についての事柄が宮苑関係の記録に点在してくる。

「詩経」は当時の北方諸国の詩文を編集したものであるが、これによれば、周初代の文王は居所を定めるに当たり、湖水を掘って荘大な霊台を築き、水には魚や水鳥を泳がせ、樹林には鹿を放飼するなどの手法を施したが、王はこの台上にあって昼は遠望をほしいままにし、夜は銀星明



庶民的な盆景の一例
元、王徳信「西廂記雜劇」より



文人の盆景賞玩
明、王以中（画）（万曆 39・1611）「徐文長先生批評北西廂記」より

月を楽しんだ。

周後半の春秋時代（前 771～前 403）、五覇の抗争・呉越興亡の時代に際して、孔子は世の乱れを正すべく、諸王を歴訪して、「徳と礼」を政治の要綱とするように遊説したが、後世の「儒教」はこの言説を基にして成立した。年代をわずか 100 年ほど下って、南方楚の老子は「清虚無為に帰すれば天下はじめて治まる」と説いて対立し、後世の「老荘」思想に端を開いた。ここに儒家と道家の二大思潮が成立し、以降 2500 年の間社会の各方面に計り知れないほどの深い影響を及ぼしてきた。なお後者に属する文人が枯淡な境地を志向したことは既述しておいたが、その中で文人の好尚に即して、花卉の種類が選出され、盆景の雅趣が追求された。

戦国時代（前 403～前 221）に成立した「春秋左氏伝」は、恵王が大臣の圃（野菜や果樹を栽培する所）をとって囿（禽獣を放飼する所）にしたと記しているが、土地の利用区分にはさらに園（花や果物を楽しむ所）の観念も加わっていた。

ほぼ同年代に当る「楚辞」は屈原および一統の辞賦を漢代に編集したものであるが、この中には南方楚国の人々が好んで身につけてその香りを衣服に移した芳草芳木の多くが記され、また自然の風致を林泉にとり入れることを述べた章句を載せている。自然賛美の思潮の深まりにつき、同書から屈原の作、楚辞九歌の一節を岡大路（昭和 18・1943）「支那庭園論」中の和訳として引用すれば、「室（庭榭）を水中に築き、これを葺くに荷蓋（蓮葉）を以てす。……百草を合せて庭に実て、芳馨を積みて門に廐す」とあり、断章ながら、当時における楚人の好尚と南に位置した華中の種樹を描写している。

（2） 秦 秦（前 221～前 202）の始皇帝の構築した「阿房宮」はその壮大華麗を語り継がれてきたが、都の咸陽を離れた渭水の南、上林苑中の前殿としてのこの阿房宮は実に東西 500 歩南北 50 丈の規模をもち、その外にも、野を越え谷を渡る広大な敷地内に多数の宮殿や離宮が造営されたと伝えられる。皇帝のこの偉業は亡国によって完成しなかったが、これによって建築の躍進はもとより、種樹の進歩も著しいものがあったと伝えられている。

（3） 漢 漢（前 202～後 220）を興こした劉邦は都を長安に定め、法治主義に徹したために滅びた秦の先例を避けて法制をゆるめ、その後の帝王を善政を行なったので国力は大いに揚がった。7 代武帝は中央集権を強化し、儒教を公認して封建制に思想的支柱を与え、強大化した武力によって南海・東方・北地を加え、匈奴を大敗させ西域諸国を制圧し、また絹の道を開拓した。このような事態を反映して、長安の宮殿は、秦の様式を踏襲して、まことに荘大華麗であったとされている。その宮苑の 1 つ上林苑には、70 の離宮が建ち、時折り船を浮かべて水軍の演習に供したほどの広大な水面をもつ湖水が 6 つも掘られ、各地から献上された 3000 余株の花木がいろいろを展開し、その間を放飼の百獣が群れ遊んだ。

当時の長安を描写した「西京雜記」の中には上林苑の梨・棗・桃・李・奈（ナイ洋梨リンゴ？）・査（ボケ楂）・梅・杏などの種類と品種名が挙げられている。

漢は王莽の興した新によって中断したものの、劉秀（光武帝）が国を再興し、都を洛陽に移し

て後漢 (25～220) が建国された。

後漢の頃には、周以来進められてきた農地の拡大と灌排事業は農産物に余剰をもたらし、秦に発する製塩製鉄業は大いに発展し、このようにして、洛陽は商業都市の性格を高め、富裕な商人が輩出した。

この時代までの王城宮苑の華麗広大はもっぱら支配者による権力誇示民心威圧的な意図を多分に包含していたが、新たに台頭した富商は、貴族や権臣と並んで、個人的な庭園をもつようになり、ここに中国の種樹史上画期的な一面が加わってきた。

この時代を境にして、後年に下るほど名園記の数が増してくるが、前述したように、それらの行間から盆景を拾いだせば、変遷の一面をたどることができる。

斑固「西都賦」には「靈草冬榮（花咲く）神木叢生」とあり、張衡「二京賦」に「嘉木植庭芳草如積」と記しているなどは、種樹の盛行をしのばせる断章である。

(4) 神仙思想 中国古来の思想には「来世」は存在せず、現世の延長上に「神仙」の超人的な不老不死の境地を求める願望が古代に成立し、春秋戦国の頃には齊（山東）の地方における「この神山は渤海に在って人を去る遠からず……諸僊（仙）人および不死の薬皆在り……」との「三神山説」ともなった（司馬遷「史記」）。

秦の始皇帝が方士徐福に命じ、東方蓬莱に不死の霊薬を求めさせ、蘭地宮の造営に際して、宮苑に広大な「長池」を掘り「蓬莱山」を築かせたのも上記の伝承に根差す事態であった。

前漢の武帝の治世、紀元前後の頃、急に盛行しはじめた中央アジア方面との交流の一端として、仏教が伝来し、漸次上層階級に滲透していった。

後漢末、張魯は神仙になるための神仙術に民間信仰や治病の呪術を結びつけ、さらに、老莊哲学や仏教の教義を採り入れて、道教を興した。なお、道観は、道教の主軸になった神仙思想に即して、深山幽谷に構築されてきた。

5) 六朝の高風

(1) 三国時代 魏・蜀・呉の並立した三国時代 (220～280)、竹林の隠士になって、酒をたしなみつつ、儒家的な礼教を鋭く白眼視していたいわゆる「竹林の七賢」は反儒・反俗に徹した点で、老莊流の系譜の最たるものであった。

(2) 西晋 晋 (280～420) が天下を統一し、王都を洛陽に定めて建国したが、各地に封じた諸王間の抗争によって国力が衰微し、結局、異民族の侵入を招いて首都は攻略された。

(3) 南北朝時代 西晋の王族名族が江南に移り、漢民族としては始めて華南の地に建国し、都を建業（建康・南京）に定めて東晋 (318～420) を発足させた。この国では、広大な地積豊かな自然を開発し、貴族制の確立と相まって、大土地所有制が発達した。

歴代の王都になった建業では、自然の景を生かして、広大な「華林園」その他多くの宮苑が設けられて、皇帝の心を楽しませ、さらに貴族や権臣も、山あり谷ある地積に、水田・果樹園・野

菜園・池水などを含ませて、広々とした莊園（別荘）を構え、共に牧歌的生活を享受した。

東晋の高士王羲之は京師に居住することをいとい、辞官して浙江の会稽山に「蘭亭」を建て、「崇山・峻嶺・茂林・脩竹（竹林）」に恵まれ、「清流・激湍」のある景勝を生かし、その園林に曲水の創意を取り入れて、来会者と共に「流觴曲水の宴」の清趣に興じた。なお、この苑池での曲水や雅遊の方式は、以降、高人の間で、準拠として踏襲され語り継がれていった。また、ここに山水文学が発端した。

奇矯孤高の文人画家顧愷之（虎頭）は靈山名岳に住む神仙にあこがれ、高士英傑を景仰して、画布や「論画」の上で自己の持つ理想社会の映像を深く追求したと伝えられるが、この高士が漢・劉向の「烈女伝」に画稿を添えて翻刻したことは、道家的と儒家的との混交はあっても、英俊を賛仰する生来の志向に合一する事態であった。

中国における玩石の好尚は周時代に発すると伝えられるが、東晋末に板行された顧虎頭画「古烈女伝」はその挿図によって、東晋の頃の玩石と玩花の様相を後世に伝える上においても、数少ない貴重な存在である。

なお、図中の「選石」とは園林苑池の中の佳木芳草に、あるいは花盆の樹草に添えて、主として縦形の奇石を立てる手法であり、後世の明の頃には、その法式が名称を伴って広く行き渡っていたが、晋の頃その手法はともかく、既にこの呼称が存在していたか否かは明でない。

神仙への登化を希求した文人が、山頂の奇勝をしのび、「透空」（孔隙）に富んだ怪石を庭除にすえて神仙の住む「洞天」になぞらえ、長寿延年の果ての「羽化」を望んで、その心象を「選石」の法式に仮托したとの推測が導かれる。

すなわち、古来、文人は苑池に鶴を放飼することを希求してきたが、これも神仙が



東晋の苑池における「選石」
宋・余仁中本「顧虎頭画古烈女伝」より



東晋の苑池に登場した牡丹
宋・余仁中本「顧虎頭画古烈女伝」より

鶴に乗って自由に雲間を往来するとの伝承に根差す事態であったことを添えておく。

東晋の国力が衰えて宋（479～502）に移行する頃、陶淵明は彭沢の令（長官）をわずか 80 余日にして辞官し、「田園居」に復するため、「帰居来辞」を賦して、故山である江西の尋陽に帰り、自適の生活を送り、酒を楽しみ菊を愛しながら、その間に数多くの名詩文を詠懐した。

陶の言行も「棲逸」の思潮につながっていたが、その愛菊につき、崔友文（1961）「中国盆景及其栽培」によれば、この高士は「盆栽」の文字を創始したとのことである。ただし、この詩聖の詠懐した「採菊東籬下悠然見南山」の断章が、「重陽」にちなむ上古からの伝承に即した災厄回避のための菊酒であったか、あるいは観照の雅趣に発したものであったかについては断定し難い。

なお、この遺詠は「飲酒」と題した 20 余編の一部であるが、この詠題からすれば、菊酒の側を採り、さらに南山の頂を望見して、延年の果ての登仙に思いをはせた所懐であったとの解釈が成立する。ちなみに、キクはこの頃から賞玩の用に転じたとされ、後年の唐の年代には、文人の花として、中国古来の黄色を良しとする伝統に即し、杜甫や白居易などが「黄菊・籬菊・黄花」に賦した詩詠にも上り、宋・明に至ると、草姿・花容・色彩に著しい進展を加え、宋の苑成大による「菊譜」、明の文人が好んで描いた「墨菊」ともなって、観照が盛行した。

陶の花盆ひいては東晋の花盆がどのようなものであったかを考定することは、遺品や絵画などの資料を欠くので不明ではあるが、中国陶磁が有史（3500 年）以前の彩陶・紅陶・粗陶に始まり、その後間もなく施釉の抜法を加え、後漢の頃には青磁（古越磁）の焼成をはじめ、西晋の年代には黒釉を開発していたなど、目ざましい発展の跡を集積していた事情からすれば、陶淵明の在世した東晋の頃、花盆の優品が焼造されていた可能性は薄くはないと推測される。

南北朝時代にあたり、華北は遊牧民の活動する場になったが、江南に次々と立国した 6 王朝には貴族的な文化が盛行した。この点で、年代をさかのぼった三国時代から後年の隋による統一までのいわゆる六朝の期間には一貫して自然賛美の思潮が栄え、清談が盛んに行なわれたが、すなわち、六朝の高韻隠士は山紫水明の地に遊び、自然の風致の中に自己の情念の反映を求め、また酒に隠れるなどして、「山居」を盛行させ、後世の清末にも及んだ特異な「棲逸」の思潮を深化させていった。

ここに中国文化を上古からその後にも及んで特色づけてきた精神的な準拠慣習的な伝承の飛躍的な進展があった。

特に、南朝の一国家宋の高士劉義慶は六朝の清談を広く集録して「世説」を上木したが、後世の唐・宋の文人でこの書巻を手にしないう者はなく、このようにして、後世の隋・唐以降の知識階層は朝野とも、六朝時代にあこがれて共感と教養を高め、「山居」や「市隱」の生活態度を深めていった。

後年、盆景に雅趣を求めて、市井の範型とは異なる姿態を成立させた文人の好尚もまた同じ志向に根差していた。

(4) 齊民要術 北朝の後魏(405～556)につき、高陽の太守賈思勰^{か しきう}が推定永熙元年(532)または武帝2年(544)に著わした古今の名著「齊民要術」10巻は農民の必要とする農術、すなわち、農書であり、耕種総論から始まり、普通作物・特用作物・果樹・野菜・林木・養魚・養蚕・畜産・醸造・加工利用・貨殖までにわたり、既往の文献を揚げて論述している。ただし、「花草の流をもって目を悦ばせるべく、徒に春花有って秋に実なく……採るに足らない」として、あえて除外している。

序文中のこの片言^{へんげん}によって、既にその頃、「実益と趣味」・「生産と観賞」の相対が強く意識に上っていたことを知る。このことは、観賞園芸の分野が、盆景を含めて、一方の側から見れば、「実益に欠ける」と白眼視される程度にまで進んでいた、との推測を許すが、これを立証する資料を欠いている。

なお賈の著作は後世の宋・明・清に重刻の回数をかさね、日本でも山田好之(延享1・1744)の和刻その他がなされ、古代の中国農書中、遠く後世にも及んで活用された点で、まさに歴史的宝典であった。

(5) 日本(古代)との関係 4世紀頃、東晋の建国に前後して、大和朝廷による統一が成し遂げられた。当時、大和政権は朝鮮にまで進出して、半島南端の任那^{みまな}を領有(370?)したが、この状態は新羅の攻撃を受けて撤退(562)するまで続き、この間、製鉄・農耕・畜産・養蚕等は、大陸の進んだ技術を導入して飛躍的に発展した。この頃はまた、半島を経由して、仏教・儒教・卜筮・医術・本草・暦法・天文・機械を取り入れた時代でもあった。

なお、領有の期間は、中国の東晋から南北朝にわたる期間に相当した。

500年頃になると、百済との往来は、私船によって、かなり頻繁に行なわれたが、中国との交流は、これより少しく年代をさかのぼる東晋以降、朝廷からの遣使の形で、東晋(413)・宋(数回420～479)との間で持たれ、外に、齊・梁ともある程度関係を保った。中国の種樹や文人の思潮が将来され始めたと推測される。

この頃、半島からの帰化人が宮中の南庭に「須弥山形と呉橋」を構えたことを日本書紀は記している。なお、これはわが国での造庭の始まりだとされている。

6) 隋・唐・五代の盆玩と玩石

(1) 隋の煬帝と海石榴 隋(589～618)の文帝は、乱世を平定し、王都を長安に定めて建国した。2代の煬帝^{ようたい}は父の文帝を殺害して帝位につき、貴族や豪族の勢力を排除する目的から科举(登用試験)の制度を創始した。このようにして確立した王権によって、壮麗広大な宮殿の造営、遠く高句麗への遠征などを急進的に遂行したが、取り分け、華南から華北に通ずる大運河の掘削は、かつて秦の始皇帝が成し遂げた万里の長城の築造にも比すべき大事業であった。

煬帝の「宴東堂」の詩文を津山尚・二口善雄(昭41・1966)「日本の椿」から引用するに、「海榴舒欲尽 山桜開未飛……風花意無極……」とあるが、「海榴」はまた「海石榴」とも書き、海を渡って導入された日本原産のツバキを指す。

「荒淫暴虐」を語り継がれてきた同帝の隠れた一面が現われていることもさりながら、当時ツバキが日本から導入されていた事実を知り、ひいては歴代の王朝の宮苑で、上古から後世にも及んで、どれ程の努力を傾注して佳木芳草を収集したかとの推察にもつながる点から、深い関心が持たれる。

なお、ツバキは、長安や洛陽の冬の戸外では、極寒に耐えないはずであるから、東堂を飾っていたそのツバキは盆植されていたと考えて誤らない。

古来、華北では冬期「地窖」によって盆景や「南花」を保護してきたが、この風習は唐代に至って特に盛行した。この方法によって保護し催花させた盆景に後人が「唐花」の呼称をつけてきたゆえんであり、「唐花」は当初「堂花」と呼ばれたが、これは催花させた盆景を室内に布置する風習、すなわち、供用の場所に由来する名称であった。なお「南花」はすでに西晋の嵇含(300頃)により「南方草木状」として取り上げられていたほどで、したがって、東堂の海榴も「南花」と同様に冬の管理を受けていたと考えられる。ちなみに、「南方草木状」につき、当時の西晋に盆景が存在した可能性も浮び上がってくる。

推古天皇は隋に遣使(600・607・614)を送り、また、隋使の来朝もあって、半島を経由しない交流が軌道に乗り始めた。

煬帝の目に止まったツバキが海を渡った経緯がしのばれる。

(2) 唐代の盆玩と玩石 唐(618~907)は隋王朝の急進性に伴った破たんを突いて建国し、京師を長安、洛陽を副都とした。

この国は政治上の諸制度の整備国力増強策等を強力に推進したので、その実効の急速な向上につれて、朝貢国が増加し、この国を世界的帝国の地位に押し上げた。

盛唐の頃には、多数のイラン人アラビヤ人が陸路海路によって来国し、商人同志の「互市(国際的取引)」が盛行したが、「互市」を可能にした東西交通路の安全性の向上は、唐に西方の思想・芸術・物産などを伝え、このようにして、唐の国際性はさらに高まった。

盛唐の世上には、六朝を承けて、自然賛美の風潮が詩情・絵画・種樹・盆玩・玩石の面にも満ちあふれていたが、前述の「堂花」もこのような風潮のもとで盛行した。

宮廷の殿舎・貴族・権臣・豪商・文人などの第邸で、「歳寒」の候には「地窖」や「暖室」で保護し催花した「南天燭」(ナンテン)・民族的な愛花「迎春花」(オウバイ)などの「堂花」を飾り、夏には上記施設で越冬させた盆植の「長春」(コウシンバラ)や南花などの幾鉢かが、正殿や「文房」(書斎)等の屋内ばかりではなく、「院子」(中庭)にも並べられて、効果的に空間をいろどっていた様相がしのばれる。

なお、南花の盆植は、上記したように、古く西晋の頃にはすでに行なわれていたとして誤らない。南花はもとより、華北・華中原産の種類でも、花盆に植えた状態で、長安や洛陽における冬の酷寒と過乾を越すためには、特別な保護管理が必要であった。

中唐の詩聖白居易の草木や奇石についての好尚は後述するが、白はその詩詠「新葺新居」の中で「平旦領僕使 乗春親指揮 移花爽暖室 涉竹覆寒池 池水変緑色 池労働清輝 尋芳弄水座



章懐太子李賢墓の壁画に見る盆景「中華人民共和国漢唐壁画展」より

昼日心熙々……」と賦し、貯えが豊かでないこともあって、朝がたから僕使を従がえ、春の好季に乗り、親しく指揮をとって苑池を築き、秋の末には花を「暖室」に収容し、また竹の枝をもって白蓮を植えた「寒池」を覆い、夏には緑色に変じた池水の中の芳草が水面に映ずる日月の清らかな輝きを揺り動かす様に見とれるなど、終日心のやわらぎに浸って、清風雅趣を楽しんだ。

ここに、白個人の好尚のみならず、時代的な栽種の法式、すなわち、保護の施設と技法が明記されている。「暖室」に移した花は盆植されていたと確言される。

近年、陝西省乾県で発掘調査された盛唐の頃の章懐太子李賢（陪葬 706）の墓の東壁に残る「宮人図」は、男女の下人がそれぞれ1杯ずつの花盆を棒持している様相を示しているが、その2杯は唐の世上における盆景の詳細、すなわち、浅型の黄釉らしい¹⁰鉢および白磁と見られる木瓜盆（中国名海棠式花盆）の供用、盆器にも及んでいた「選石」、すなわち、類型ながら和名「石付き」の登場などを知る上でも、まさに貴重な資料である。

加えて、捧持の姿態から、宮廷およびその周辺における盆景の評価振りがしのばれる。

既述したように、後漢の年代に青磁の焼成がはじまり、その後唐初頃までに黒釉・黄釉・白磁・青白磁（影青）などの技法を開発していたが、この点に中国人が古来花盆自体にも高い芸術性を求めてきたとの伝統を合わせて推考すれば、貴人の供用を示していることも加わって、当該壁画に写されることになった花盆の原物が優品であった可能性は極めて高い。

浅野湜（昭和 42・1967）「盆栽発達の歴史」によれば、故松村謙三氏談として、北京の故宮博物院には唐代の花盆が所蔵されている旨を伝えている。現品の確認を急ぎたい。

（3）陸羽の茶経 茶は3000年前の周の時代から飲用されていたと語られるが、「齊民要術」には明文として記載され、後年の唐に至ると、それまでの延寿治病の薬物から普通飲料に転じて、庶人の間にも広まった。なお、当時の茶は団子状に固めた「団茶」であった。

茶の普及につき、中唐の陸羽が果たした貢献は極めて大きいものがあった。この高士は不遇な境地から身を起し、素養を積んで高位に上ったが、その後致仕して「茗溪」に山居し、自然復帰の精神運動を展開しながら著作に励み、その間に「茶経」3巻を著して、茶の起源・製茶・茶器・飲法・茶事・効用を論述した。後世陸を茶祖茶神と仰ぎ、茶を「茗」と別称するようになったゆえんである。良水に恵まれない国土性を反映して、名水名泉の吟味がこの頃からきびしくなったが、このような事態は、名泉中の名泉として、後年「天池」が称揚されるようになる契機でもあった。

陶磁は喫茶の風習が普及するにつれてにわかに盛んになり、全土にわたって多くの焼成所が興ったが、陸はその「茶経」の中で、邢・越・鼎・婺・岳・寿・洪の各州窯の名を揚げています。

特に北の邢州窯の白磁（邢磁）と南の越州窯の青磁（越磁・秘色青磁）は当時天下に並び称された逸品であり、後者は水路・陸路によって海外にも広く輸出されていた。

（４）詩聖白居易の好尚 唐の陪都洛陽では、中唐の頃からボタンを名花とし、王公卿士から庶人に至るまで、花の「富貴」として深く愛していた。

詩聖白居易の種樹に関する好尚は一部既述しておいたが、白はその「牡丹芳」によって、諷刺をこめながら、「一城之人皆若狂」として、陽春の候、都人が城内外の寺観や園林に咲きほこる名花を求めて、狂うがごとく遊覧していた様相を伝え、次いで対比的に「白牡丹」を詠じて、この高人が世一般の動向とは異なり、牡丹の名は持っていても、世人にはかえり見られずに、寺観の深い中庭にしか植えられていない白牡丹に強く心をひかれ、自身でもそれを庭除に移したなどの事情を述べ、その「素華」に対する感懐、ひいては市隠生活の片鱗をのぞかせている。

白牡丹

城中看花客 日暮走宮々

素華人不顧 亦占牡丹名

開花深寺中 車馬無來声

.....

衆嫌我独愛 移植在中庭

白が白牡丹に孤高清雅な心象の反映を感じたと同じ意味において、中唐以降、文人は、歳寒のウメ・夏のアス・秋のフジバカマ（蘭草）と黄花のキク（黄菊）などを観照した。

白は杭州の刺史（地方長官）として3年間の任期を勤めあげ、ただ2個の「天竺石」と1対の「華亭の鶴」および「白蓮」をたずさえて洛陽に帰り、効外に茅屋を構えた。なお、既述の「新葺新居」はこの場合に関する詠懐であった。

その後再び蘇州の刺史に任ぜられたが、任期があけて洛陽に帰るに当り、大運河に添っている古来の景勝地太湖（江蘇省）を訪れた。この高士はそこではなくも湖岸の泥中に埋まる2個の怪石を見い出して「双石」を賦し、大運河の水利によってその太湖石を洛陽に運び、苑池に立て

て賞玩した。

双 石

蒼然兩片石 厥状怪且醜

俗用無所堪 時人嫌不取

.....

万古遺水浜 一朝入吾手

.....

太湖石は、偶然にも、白が太湖を訪れることに伴って登場することになったと推定されるが、さらに他の詩人や白による再度の詠物もあって、急速に声価があがり、続いて、権勢を誇っていた宰相李徳裕・政敵牛僧孺による対抗的な収集にまで発展し、このようにして、文人の好尚としての玩石はもともとながら、むしろ権力者による勢威の誇示富の象徴とされ、世俗的な方面にも多用されるようになっていった。

宰相李は、権力によりまた献物として、この名石を多量に収集し、それをもって都郊の平泉に構えた荘大な第邸の園林に「假山」（岩組み）を築き、「平泉山居戒子孫記」を著わした。その中で、「後世平泉を売る者はわが子孫にあらず、平泉の樹草を人に与える者は善き子孫にあらず。」として、何物にも代えがたいほどの愛着ぶりを表明した。

このようにして急昇した玩石熱を承けて、その後間もなく、古来名石中の名石として貴品視されてきた靈璧石・黄石・英石などが登場し、文人の好尚に供せられることになった。

「選石」が遠く晋に既存していたことは前記したが、この方式が初唐の世上に継承され常法化していたことは「李賢墓」等の壁画から推察される。結局、白は中唐に至って、この古来の方式の枠内で、太湖石の常用化を転機したとの帰結に達した。

後世の宋・明に下ると、「假山」と「選石」についての需要増によって原石が枯渇しはじめ、よって、人工による擬石が多用されるに至った。明の頃には、特に「選石」の汎用化が進展し、仏閣・道観・富者の園林などでは「選石」として布置した大型の太湖石が奇観を現出し、一方庶人は財力に相応して、小型は1～2本を立て、時流を摸していた。

盆景に太湖石を添える方式の登場もまた時流に添った事態であったと結論される。



太湖石による庭除中の壮大な「假山」
清・李斗「揚州画舫録」より

(5) 盆栽資料としての絵画と文芸

絵画の面でも、多数の名手が輩出したが、特に山水画は著しい発展を見せた。

中唐の頃、詩文にもひいでた王維は遠意の筆で画面外に自然の妙あふれる余情を感得させる独得な領域を推し進め、後に「南宗画」の始祖とされた。後世の文人は、この流れに添って、余技として絵筆を取り、淡い彩色や墨一色の濃淡を本質とする「文人画」に高士隠人の心象を反映させた。

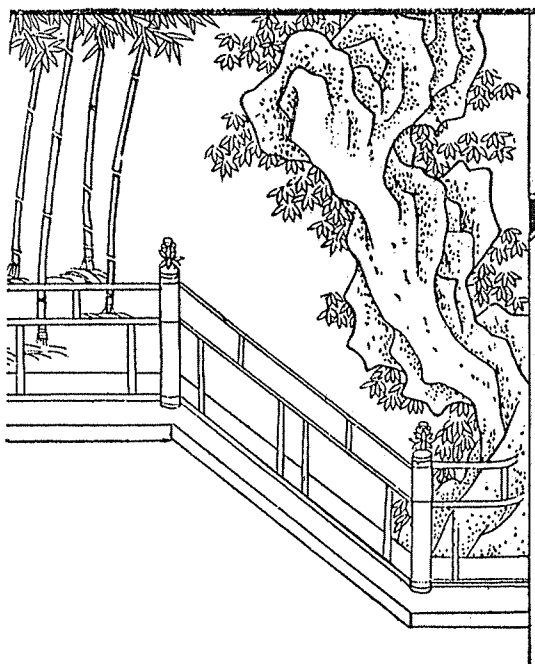
一方、王維と同じ頃、李思訓は伝統的な線描の画法によって、山水神仙を画題にしながら写実的傾向を打ち出し、華麗な色彩と相まって、装飾画的傾向を高め、後に「北宗画」の開祖としての地歩を与えられた。後世の職業画人はこの流派に属し、北宋の朝廷に始まった「院画」もまた後者の部類にはいる。

この年代以降、絵画や版画を挿入した刊本が多作されるようになったが、その中に盆景の姿を求めることは、往時の姿態を理解する上で、極めて肝要なことである。

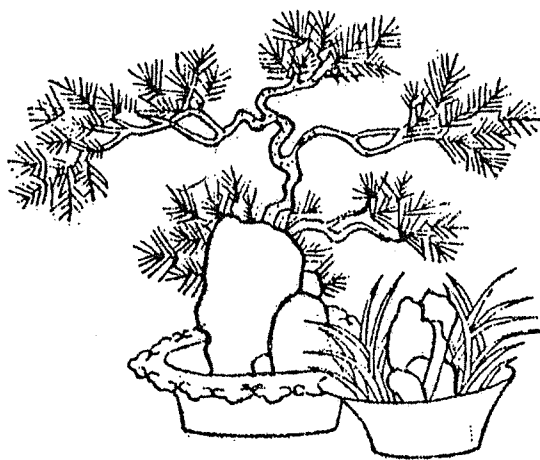
中唐の文豪柳宗元の「種樹^{かくたぐだ}郭橐駝伝」は、郭と呼ぶせむし（駱駝）の種樹家（植木屋）が神技にも等しい技量をもっていたことをたたえる名文として、古来人々に広く親しまれてきたが、筆者の判断では、この一文は郭に仮托しながらも、当該文章家の目を通して後世に伝えられることになった、唐を貫く種樹の盛行振りであったとも受け取れる。

中国では古くから郭を種樹家の始祖として崇敬し、「橐駝」は植木展の同義語とされる一面もあった。

しかし、種樹に関する章句は遠く周の世を取り上げた「詩経」や「西京雜記」などの中にも介在し、また秦の始皇帝が言論統一を期して強行した「焚書^{はんしゅ}」に当って、医・卜・曆と並んで種樹の関係を除外したとの伝承もあって、種樹および種樹家は有史以降の長い伝統につながり、中唐



庭除の中の太湖石による「選石」
明仇英画・清汪庚校「繪図烈女伝」より



盆景の中の「選石」
明仇英画・清汪庚校「繪図烈女伝」より

の郭に発端したものでないことは明らかである。始祖を郭とするのは柳の麗筆ゆえの後人による専決早計と見る。

(6) 遣唐使の将来した種樹とその伝承 大和朝廷の遣唐使は先進唐のすぐれた律令・仏教・建築・彫刻・絵画・思想・学問・文芸・技術・生活様式などを学び取って、それらを建国後間もない当時の国造りに役立てる目的から派遣された。

遣使は630年の犬上御田鍬を第1回とし、838年の藤原常嗣まで、前後200年、15～6回に及び、盛時には、大使・随員・留学僧・留学生を含めて、一行400人に達した例もあり、この間、唐からも使節や商人が来朝し、濃密な交流が保たれた。

入唐した人々は大陸の奥深く長安や洛陽にも足を運んで、文化の精髓や進んだ世情に接したが、中には20年(吉備真備・僧玄昉)10年(僧永忠)の長きにわたって在唐し、また遠く山西にまで達して、仏教の霊山の1つ五台山に入山(玄昉・霊仙・円仁)して修業を積んだ例もあって、先進文化の吸収にかけた熱意と努力は単なる旅行者の流儀ではなかった。

初唐以降の世上における種樹や盆玩の盛行は、確たる史料は欠くものの、遣使一行による賞玩の風習・樹草・花盆の導入をもたらしたと推測され、中唐の頃に普及しはじめた庶民的な洛陽の名花ボタン・文人が観照に供していたウメ・キクなども、同じ経緯で入唐した人々によって将来されたと考えられる。

奈良朝の年代に成立した最古の文書「万葉集」にウメへの詠懐が多く、ほぼ同年代の漢詩集「懷風藻」にキクが題詠されているなどの点は、上述した推察の裏付けとされる。ただ、当時における盆栽の導入は、憶測の範囲にとどまり、盆栽が史料の上で最初に確認されるのは、筆者の知る限り、平安末期に下って、「西行物語絵巻」の中である。なお、その古名「盆山」は「石付き」厳密には「巖上樹」の範型をとり、一例として、古く初唐の李賢墓に描かれることにもなった盆景の「選石」とのつながりが強く意識される。

江戸時代の種樹書では、「橐駝」の文字に附されたウエキヤなる振仮名が目につく。前期の頃以降、盆栽は植木展の兼業として取り扱われていたが、盆栽に長じた種樹家は特に「橐駝師・曲物師」と呼ばれる一面もあった。このような呼称につき、前者が郭の故事に由来することは指摘をまつまでもない。後者の「曲物・曲物師」などの彎曲を表わす言葉は、当時の盆栽が棕櫚繩による牽引や竹の支柱に添える強制などによって、主幹に上方に向かって減衰する蛇行形をとらせる「蛸作り」を主とし、さらに枝条をイグサやミゴ(イネの穂軸)で結ぶことによって下垂させる「枝垂作り」などもあり、総じて、波形ひいてはラクダの背にも通ずる姿態を想像させる表現に発したと考えられる。なお、そのような整姿培養の特技に常人を超える手腕を認めた世人は「師」の尊称を附し、学識者は柳宗元の遺文から郭の故事を引用して素養のほどを示した。ここに、ひけらかしにも通ずる、江戸の世上をおおった洒落と狂歌の片鱗がある。

喫茶の風習は、薬効を主として、入唐した永忠・最澄・空海等により、はじめて導入されたと伝えられる。その後一時中断したが、後世の平安末期、南宋に渡った栄西によって再興され、世上に定着した。

江戸中期、京阪の地に「文人」の領域が成立し、それに連なって「文房清玩」が高人の間で盛

行したが、その席上では、床の間や机上に「文房四宝」を飾り、盆栽や瓶花も「四宝」に準じて並べ、その中で、煎茶をすすりながら、主客共々、陸羽の「茶経」の精心を休し、唐宋以来の琴棋書画に則して、和敬静寂に徹した交友を続けた。この席に現代の盆栽に発展する範型と陳列法および精心的な基底があった。

唐から舶載してきた物産は「官市」の場で交易されたが、人々はその品々を「唐物」と呼んでこよなく珍重した。なお、古今を通ずる日本人の「唐物」(舶来品)へのあこがれはこの頃を境として急昇したが、以降この心情は、歴史の本筋の裏側に当る面で、さまざまな形をとって発露していった。それは雅遊の世界数奇の分野にも深く跡をとどめて文化史に連なるが、日本の盆栽史を貫く流れもまた、基底としては、以下年代を追って論述するように、その例外ではありえなかったと結論される。

(7) 南唐に盛行した文房清玩 五代(907~960)に移ってからの50年間はまさに下剋上の時代であった。

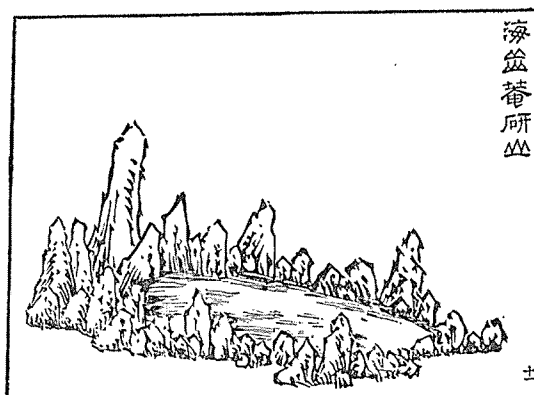
ただ、五代十国中の1つ南唐は金陵(江蘇省江寧府)を都にし、豊かな風土に恵まれ、帝王も学問と文玩の好尚を相伝したので、隋唐の文化を承けて、それを後年の宋元文化に接続する過渡的な役割りををになうことになった。

文房四宝の1つ筆についての関心は漢の頃に始まり、後に紙が取り上げられ、唐代には「端溪」や「歙州」から良質な硯石が発見されて、硯は四宝の第一に見立てられ、墨もまた精選された。

文玩の清趣は南唐の中主李璟・後主李煜の志向を承けて大いに進み、確立の領域に達した。蘇易簡が「文房四譜」を著わし、後年の宋末に趙希鵬の「洞天清祿集」が上木され、同じ頃、林洪が「文房図贊」を著述し、明末の屠隆「考槃余事」、清初的李漁「閒情偶寄」・陳扶搖「秘伝花鏡」と続いたのは、中国の知識階層の間を上古から清末にもわたって伝世していた心象が五代を境にして以降ひときわ深まっていた事態の反映であったと理解される。

その清興の一端として盆景に風趣が求められたことは既に簡述しておいたが、その詳細は年代を追って論述する。

南唐の李後主は36峰をもつ研山(硯山)「海岳庵」および他の名品を所蔵し愛用していたが、「海岳庵硯山」は亡国後北宋の書家米芾(米元章)に渡った。後にこの士大夫は、勝地丹陽に好適な宅地を見付けて、それを入手するため、まことに心残りではあったが、その名品を土地の代償として蘇仲容に譲った。この逸話は明・林有麟(万曆41・1613)「素園石譜」からの引用であるが、能書家米



海岳庵硯山

明・林有麟(万曆41・1613)「素園石譜」より

の一事からしても、五代およびそれ以降に盛行した玩石、ひいては「文玩清興」の深さがしのばれる。

7) 宋・元の盆景と文玩

(1) 北宋の玩石 宋(960~1279)が乱世を平定して国を建て、都を汴(開封)に定めたが、後世江南に移るまでを北宋(960~1127)と俗称する。

この王朝は文治政策をとり、中央地方共、政治の荷ない手を武人から文官官僚に移して、中央集権的な統一を行なった。こうした政策は思想・哲学・芸術などの面で誠に目ざましい発展をもたらして、この時代を特色づけたが、反面軍事力の低下を招き、ために異民族の反乱や侵入はたび重なった。

世上に盛行した文雅の思潮を承けて文房清玩の境地が深められていったが、文人の玩石もその一端であった。

北宋末の政治家蘇軾(東坡)は詩文にもすぐれ、後世宋代文学の最高峰とされている。この文豪は湖口に李正臣を尋ねた時、九峯玲瓏な一異石が壺中の水にひたっているのを見て、「壺中九華」を即詠した。

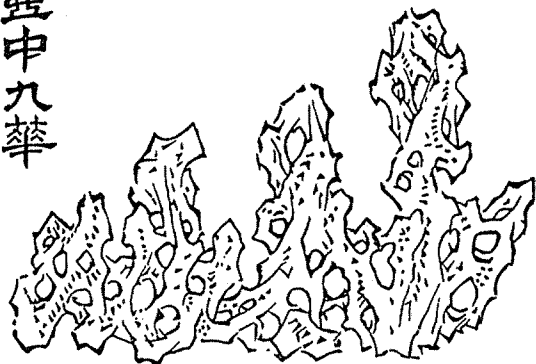
同時代の書画人米芾(東坡)は漣水の守として駐在した任地であって、11品の靈壁石を入手し、各々に美名をつけ、書室にこもって終日愛玩を続け、また既述したように、南唐の李後主に由来する「海岳庵硯山」を蘇仲容に譲って、丹陽の甘露寺下に好適な宅地を手に入れた。中国の玩石では、古来、「透(孔)・色(潤色)・声(澄んだ音色)」を要件としてきたが、石狂元章は透空に富んだ一奇石「小有洞天」に座子(台座)をつける方式を創案し、座中に香炉をすえて常に香をたき、雲煙が孔に満ち、長時間漂うのを楽しんだ。

北宋末の皇帝徽宗は後世に書画の名筆を多数残しているほど文芸絵画の才能に恵まれていたが、皇帝の異常な執念は、全土から珍奇な樹草や禽獸を搜し出し、徹底的に宮苑に移させて図写し、また巨大かつ多量の太湖石を、かつて隋の煬帝が掘削させた大運河の舟便によって、はるばる太湖から王都汴まで、数年がかりの継続事業として運ばせ、それによって王宮の東北方に築かせた巨大な「艮嶽」の上に荘大な假山を築造させるなどの狂態にまで発展して、もっぱら雅遊にふけた。

なお、この輸送は「花石綱(hoa-shii-kuwan)」と呼ばれ、費用の支弁はいわゆる「徭役」によった。この徭役とは官物の輸送・保管さらに事故の場合の弁済を含めた一切をその地方の豪族や富商に負担させる制度であった。

太湖石についての過酷な徭役は激しい恨みを招き、さらに官用をかさに着た人

壺中九華



壺中九華

明・林有麟(万曆 41・1613)「素園石譜」より

夫の目に余る横暴は大運河沿い庶人に劇烈な反感を植え付け、ここに反乱が突発した。

徽宗は急ぎ退位して欽宗が事態の收拾に当たったが、その機に乗じて侵入してきた全軍は王都を攻略し、徽宗欽宗その他の王族を北辺に連れ去った。

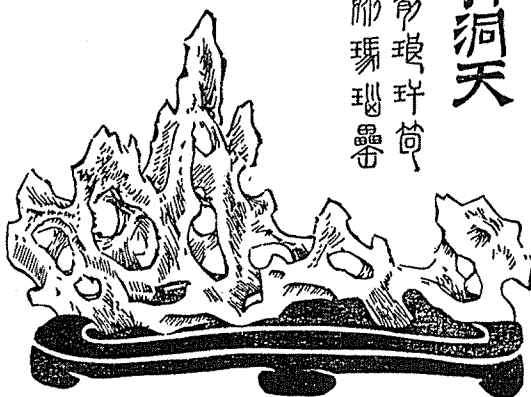
このようにして、皇帝の玩石は亡国の帰結を招いたが、この時点以降、中国人の太湖石に対する貴重視は一層高揚した。

後年の明末に著作された李計成（崇禎4?・1631?）「園冶」は園林庭除の築造に関するすぐれた技術書であるが、その

「選石」の章に列記した名石の1つとして、かつて運河の水底に沈んだこぼれ石を河南や山東のあたりから引き上げて「花石綱」と名付け、園中に置く流儀を述べている。

北宋年代の洛陽につき、李格非「洛陽名園記」がある。文中太湖石には全く言及していないが、これは徽宗の故事に先行する頃の事情であったと受け取れる。

水有洞天
尖勢瓊玕筍
圍廊瑤瑤壘



小有洞天
明・林有麟（万曆 41・1613）「素園石譜」より

（2） 禅的な思潮と宋磁 仏教につき、隋唐では国家の安泰鎮護を主軸とする国教として、王室や貴族の間で栄えたが、宋に移ると、念仏によって極楽往生・延命息災・病氣平癒・降水慈雨などを求める求福的性格を強く持つ浄土教が庶民の間に浸透し、一方、この風潮に反発して、後漢北魏以降、世の裏側に潜んでいた禅宗が、自己の仏心を内観自省によって窮めようとする宗旨を掲げて、社会の表面に現われ、広く知識層に受け入れられて、ここに禅宗は中国史上類例のない最盛期を迎えた。

当時世上をおおった禅的な思潮はその頃の文芸・絵画特に文人画・陶磁などの遺品に強く認めることができる。

陶磁につき、北宋の頃、河北の定窯河南の如窯および鈞窯などですぐれた製品が焼造されていたが、定如の両窯は宋室の用命を受けていた。

定器は端正な器形、清浄感に満ちた象牙色の地肌に線彫り浮彫りの模様を持ち、如器は暗緑色または不透明な青色を呈する釉色に鋭い模様で変化をつけ、鈞窯は不透明な青白色の地色に、概して、窯変による紅紫色の釉を厚く重ね、他の宋器とは異なる一種の花やかさを感じさせる。

江西の景德鎮で生産された影青いんちんと呼ぶ青白磁も、定器に近い流麗な線彫りや浮彫りの模様を持ち、淡い水色または白色の釉薬を施した名品である。

宋朝の特注品や官窯による焼成品は世上には出廻らず、また、それらの名品の多くは金の侵入

に際して散失したとされているが、その後いろいろな機会に収集され、歴代王朝を経て、現在故宮博物院に所蔵されている。その蔵磁の中になんかの数に上る釣窯および如窯の花盆が含まれているが、それらを故宮博物院・中央博物院（1961）「故宮藏瓷釣窯」・同（1961）「故宮藏瓷如窯」の図写に求めれば、釣窯では、深形すなわち「下方」の^{げほう}円鉢中国名の「仰鐘式花盆」、日本名では共に「輪花式」ながら、フユアオイ（葵）の花冠の輪廓を思わせる「葵式花盆」と一重のハス（蓮）に類する「蓮花式花盆」、香炉状を呈する和名の「袋式」およびその胴を伸ばした花瓶状の「渣斗式花盆」、深鉢ながら「隅入り長方」の「長方式花盆」などがあり、形状や大小にわたって、極めて変化に富む。

なお、それらの花盆は、全部を通じて、器底の中央に1個、それを取巻いて周囲に4個、計5個の排水孔を持つ。

水仙盆は房咲のシナスイセンを水栽培して楽しむ一種の水盤であるが、「釣窯」の1冊にはわが国で言う「木爪」に相当する「海棠花式水仙盆」、亀甲型をとる「六方水仙盆」が掲載されている。

盆景を「堂花」として室内に持ち込めば必然的に水受けを必要とするが、当時の受皿「盆托」の図録もある。

「洗」は「水仙盆」や「盆托」に紛らわしい形状を持つ器物であるが、ただ用途を異にして、大小に応じ、洗面・盃洗・筆洗等に当てられる。書中に「鼓式洗」があるが、「鼓式」とは日本名で「太鼓胴」に相当する。

上記の「水仙盆・盆托・洗」に排水孔をあければ平鉢となるが、そのような浅い花盆は既に初唐の李賢墓の壁画に図写されていたので、当該図録には見いだせないまでも、宋磁の一部として焼成されていた可能性が高い。



上段、渣斗式花盆・仰鐘式花盆・葵式花盆・長方式花盆
下段、海棠花式水仙盆・六方水仙盆・鼓式洗
故宮博物院・中央博物院（1961）「故宮藏瓷釣窯」より

如窯については「楕円水仙盆」の3例掲げるだけであるから、それらへの言及は楕円すなわち小判形であることにとどめ、さらに他の如器にもわたって、「氷裂」すなわち和名「貫入」^{かんにゅう}をもつことを添えておく。

(3) 鎌倉時代の絵巻物の中の宋磁 わが国最古の盆栽資料の1つである鎌倉後期の絵巻物——年代的には元に相当して——「法然上人絵伝」の中には太鼓胴の深鉢が描かれ、またわずか数年後の「春日権現験記絵」にも「青白磁」らしい2枚の水盤がセキショウを植え石を添えた状態で台上に並べられている。国内で施釉の花盆を焼造し始めたのは江戸中期の享保年間(1720頃)であったので、上記の花盆は紛れもなく舶載品であったと断定できる。それらを将来した年代としては、元または南宋末と考えるのが最も妥当ではあるものの、北宋さらには唐からの導入も推測の端に上ってくる。

盆栽の科学を最初に論じた開原亨はその「樹木盆栽論」の中で、伝承をもとにして、盆栽の始祖を唐宋の頃の瓶花の愛好家周之免だとしている。しかし、これは同氏も明記しているように明確な基礎を欠くので、盆栽の源流をここに求めることはできない。ついでながら、周は瓶花のたびごとに材料が棄てられるのを惜しみ、花盆への栽植を創案したとのことである。

(4) 南宋の自然観照と玩石 北宋の終末を契機として、江南にのがれた王族が、臨安(杭州)を都として南宋(1127~1279)を興こしたが、その150年間は、曲折はあったものの、比較的平穩に過ぎた。

この間、稲作は農具の改善・水利の整備・水田の拡張・二毛作化などによって大いに進み、絹織業は大衆向きの紬をも加えて生産を増し、陶磁は喫茶の風習の著しい普及が背景となって需要が急伸するなど、華南の産業は風土と世情に恵まれて大いに躍進した。

このような状況の下で、貴族・権臣・豪族・豪商などは、自然の景趣を活用する形式を採って、多くの名園を設け、一方庶人は庶人なりに狭い庭ながらも、小形の太湖石の1, 2本を立てたりして庭作り花作りにいそしみ、平穩な市井の生活を享受した。

呉興は太湖の南岸に添い、風光にすぐれ、古来文化的にも名があったが、南宋の頃、北方からこの地に移り住んで第邸園林を構える者が多く、周密「呉興園林記」ともなった。この文人が都城の雅事を記載した「武林旧事」の禁苑の条には「茉莉・素馨・麝香藤・朱槿・紅槿・玉桂……の南花数百盆を広庭に置く。」としていて、盆景の盛行した様をしのばせる。ただ、これらの花木の本来の生育形からすれば、広庭を飾っていた盆景はわが国でいう鉢植えであったと判断される。

南宋では春のウメ・モモ・カイドウ・ボタン・シヤクヤク。秋のキク・ハギ(?萩日本からの導入?)を追う行楽が盛んであった。また揚州や臨安などの大都會では毎日のように花市が開かれたが、王観「揚州芍薬譜」には「揚州人は貴賤を問わず皆花を戴く、開明橋には毎日早朝より花市が開かれ……。」と述べていて、南宋をおおった民情を端的にのぞかせている。花市には老松・老柏(コノテガシワ)・花木などの盆景も出廻り、贈り物としても広く用いられた。

南宋に移行して後、太湖石への関心が急昇したことは前記「呉興園林記」の断章から推察出来る。すなわち「南沈尚書園」につき、「大池をうがちほとんど十畝……池南に太湖の三大石を立て各石の高さ数丈、秀潤奇峭……」と描写して「選石」の規模を示唆し、同じく「韓子園」について、「太湖三峰は各高さ数十尺、……千百の壮夫を役し移して此に致す。」としている。また、丁子園には「後ろに假山および砌台あり……」とし、俞氏園の条では「……假山の奇は天下に王たり」と述べるなど、この名石の産地という土地柄もさることながら、その急昇ぶりがしのばれる。

玩石を別の面から記述したものに杜綰「雲林石譜」および趙希鵬「洞天清祿集」中の詞章「怪石弁」があり、前者は時流を反映して庭石・盆石・硯石にわたり、名石 116 品を記載する。

後者を中田勇次郎（昭和 36・1961）「文房清玩」第 1 巻に添って抄出すれば次のごとくである。

総論一怪石は小さいながら山がたになり、多くは岩岫（^{いづ}岩頂）がかたくそばだち、山の峯が起伏した形をしているので几案（机）にのせて愛玩することができ、なかなかめずらしいものである。……

靈璧石一絳州の靈璧県からでる。……深い土を掘るとあらわれてくる。……山なりの起伏はなく、岩岫もない。……にせものは、多くは太湖石を色付けしてつくっている……。

英石一英州から銅の鉞（あらがね）のような石がでる。……岩のかげに垂れ下ってできているのを鋸で切りとるから、底に鋸でひいた痕がある。……色のうるおいのあるものは好ましいが、ひからびたものはとりあげるねうちがない。

道石一道州石は山がたの起伏があって好ましいが、ただ石が粗く、またたいそうひからびていてそのうえ質がもろいから衝撞（川水に打たせる？）には不向きである。

川石（四川石）一は高く大きくそばだって好ましいが、多くは人力で彫刻してから急水のなかに置き波にもませてつくったものである。……

桂川石一石が粗くて色がよくない。……もとより花壇のなかに置くにふさわしい（原文、雅宜器置之花檻）もので、ほかでは用いられない。

太湖石一土地の人が大きな石材を採取している。時には高さ 12 丈のものがある。まず彫刻して、それを急流のなかに置いて、流れにもませておくと、ながらくたつと自然にできたようになる。……烟でくすべたり染めたりしても色が黒くなる。……假山をきずくによい。

以上によって南宋の頃の玩石の内容がかなり明確に理解できる。

靈璧石の偽物を太湖石で作し、太湖石や四川石の駄物に彫刻を加え急流に打たせて良品に見せ掛けるなどの技法の横行は良質な原石の枯渇を意味し、ひいては、玩石の高揚を示唆することと推測される。

なお、上文の桂川石に添えた原文の断章につき、筆者は、宋元の絵画に見る岩上樹の図柄をも踏まえて、雅致に富んだ石を台にしてその上に樹草を植え、これを柵で囲った花壇に置くとの見解をもつ。この見解が当を得ているならば、盆栽界で言う「石付」厳密には「巖上樹」に相当する様式がここにもあった。

(5) 禅宗と高風の導入 南宋はわが国の平安後期から鎌倉初期に相当する。鎌倉時代には日本船が、民間貿易の形で、多い年には40・50隻も大宰府と浙江の寧波の間を往来し、宋船の来航もあり、金・砂金・硫黄・真珠・木材(檜)・刀・剣・蒔絵・扇などを輸出し、反対に、錦・綾・絹・陶磁・香料・菜種などをもたらした。なお、輸出品の蒔絵につき、中国では盆景の「座子」(台座)として珍重する一面もあった。

繁多な舟運によって、^{ちようねん} 裔然・覚阿・栄西・円爾^にその他多くの僧侶が宗教改革を目指し、その方向を求めて海を渡り、中国からも、南宋末から元にかけて、高位の禅僧が相繼いで来朝し、帰化し滞留して、禅宗と禅的な思潮・美術・慣習などにわたって南宋の遺風を伝えた。

栄西のもたらした禅宗はまず源実朝の支持を得て東国鎌倉に根をおろし、続いて後期には、帰化滞留僧に対する将軍や天皇の帰依もあって、鎌倉五山京都五山などの建立があり、また、急速に貴族や武士階級を中心として広まった。

当時の両国間における上述の関係を念頭において、年代的に対応する鎌倉さらに少しく降った吉野時代に描かれた2・3の絵巻物の中の、史料上わが国最古の盆栽につき、その石を添えた姿態に見る雅趣と全体の構成、また、同じ頃の「五山文学」の端々に散見される禅僧による盆石への賛辞について、その困ってきた経路と社会的背景を考察吟味すれば、そこには必然的に南宋からの導入、両国の禅僧に仲介された南宋の遺風へのあやかりが明白な結論として指摘される。

当時、最高の知識層に属した渡航者が、人口150万と言われた京師臨安、さらに、古来花をもって名のある第二の大都市揚州などの花市にも足を運んで、庶人の愛花盆玩を身近かに受け止め、また、各地に文人を尋ねて親交を結び、禅寺に滞留して修行を積むかたわら、その先々で盆玩玩石の風習と気韻に接し、帰国に際して、盆景・花盆・盆石・樹草などを将来したと推察しても、論理の筋道をそれることはない。

この頃「和寇」が始まった。これは正常な事態ではなかったとしても、交渉の1つの形態であり、かつ程度の深いものであった。なお、和寇の目指す筆頭は美術品であったが、これは唐物珍重の反映であったとして誤らない。

年代を接する吉野時代、室町幕府による支配がいまだ確立せず、京都に隣接する地域の武将や豪族の間では、「闘茶」や「花瓶合せ」が盛行し、幕府の出した「建武式目」の禁令にもかかわらず「過差」が横行したが、席上に積み上げられた唐物の書画その他の物品および高額な賭け金などは、閉会に際して、惜しげもなく一座した田楽師・白拍子・従者その他に散じられた。なお、このような散財は権勢者による地位の誇示であり、反面、唐物の補給の容易さを裏書きする事態でもあった。

唐物へのあこがれがこのように世上に広まっていた当時、教養人が盆玩を南宋の遺風として受け入れたのは当然として、素養の低い武将や豪族も、権勢の裏付けとして、盆栽を所持することになったとの推測が浮かび上がってくる。

なお、南宋の遺風として受け入れた中国の盆景に「巖上樹」の技法があったことは、前記桂州石についての詞句から遠曲ながらも、論考しておいたところである。

(6) 南宋の陶磁 南宋で宋室専用に陶磁を焼成した官窯は修内司(内窯)と郊壇(新窯)で

あったが、製品は落着いた明るさを持つ青磁で、特に内窯の青磁は人工の極地とまでに賞賛された品格を秘め、新窯の焼造品は器表の釉中に氷裂（貫入）を走らせ、この点で珍重されていた。

民窯では、竜泉窯の青磁は渋い釉色と器表の彫刻に特色をもち、生産数量が多く、世界各地に輸出され、景德鎮窯は唐以来の青白磁（影青）に独自性を出していた。この外、建窯と吉州窯の「建盞」はわが国でいう「天目手」であるが、元来、中国人の陶磁観からすれば下手物であり、古来下層民の什器とされてきたものの、唐末以降盛行した茶の好尚が洗練されるにつれて、その黒釉と黒飴二彩の色調に見られる渋さが、素朴剛健な器形と相まって、茶人の志向に合致し、南宋の頃には、特異な存在として名を挙げていた。

南宋における花盆の質と数量の向上は、世上における自然賛美盆玩の盛行によって、いちじるしいものがあったと考えられるが、それを裏作ける直接的な資料を持ち合せない。

（7） 宋磁の舶載 平安から鎌倉時代にかけて舶載された宋磁はかなりの数量に達したが、そのことは名地の出土品からも明白に読み取れる。

出土の破片その他からすれば、青磁を主とし、青白磁・白磁・天目磁に及び、大宰府と鎌倉に集中して発掘されてきた。

天目茶碗は、当初、禅の修業場天目山に入山した留学僧が、その常什を持ち帰り、続いて、室町時代以降、「書院茶」・「茶の湯」の盛行に伴ってある程度の個数が将来されたと伝えられ、ついでに後年の「大名茶」の場では、名物として法外な評価がつけられた。

鎌倉から室町時代にかけてのこのような陶磁の事情を念頭において、同時代の絵巻物に見られる盆栽に焦点を合わせれば、唐物珍重の風潮の中で、そこに見る盆栽鉢は、「立花」（いけばな）の「花瓶」と並んで、紛れもなく舶載品であったと帰納される。2・3の例を挙げれば、年代上元に相当して、「春日権現験記絵」の中のセキシヨウを植えた2杯の青白磁盆（?）、「慕婦絵 詞」に見る竜泉窯（?）の花瓶、同じく、宜均（海鼠）または広東らしい平鉢3杯一マツの袋式円盆、ウメの足付円盆、カイドウの袋式梅花文円盆などは、器形釉色にすぐれ、特にマツ・ウメ・カイドウと推定される盆栽3杯の鉢は、各樹体の古雅な容姿と相まって、南宋の盆景事情を、傍証的ながら、細部にわたって物語っていると推察される。

上記推察に立脚して論究を進めれば、図譜「故宮藏瓷鈞窯」が示しているように、北宋の花盆がもっぱら深鉢であったと推測されるのに対して、南宋に移ると、文人による工夫改善が加わってか、花盆においても、品格に富んだ器形としての唐代にもつながる平鉢が供用されていたと考えられる。

（8） 元の盆玩 元（1271～1368）は、南宋の衰えた頃、蒙古草原で勢力を伸ばし、ついに南宋を滅ぼし（1279）、都を大都（北京）に定めて、中国全土ひいてはビルマ・チャンパ（ベトナム）などを支配し、朝鮮を属国にした。この国では中央地方共に要職は蒙古人で占め、「色目人」（西域人）をその下にすえて実務を担当させ、漢民族を社会構成の最下位に置いて圧迫したの

で、全体として、学問思想は振るわず、わずかに、文芸・絵画などの面で、宋代の伝統が継承され、陶磁に青花（染付）と五彩（赤絵）が登場した程度であった。

盆景については、史料が至って少いので、往時の事情を究明することは困難である。

ただ、推論ながら、当時の知識層は、社会的地位が得られない事情もあって、山居・隠士の生活を送る場合が多く、その間盆玩に親しむ機会が少くなかったはずである。しかし、郷村におけるそのような行為は社会の裏面に埋もれ、記述の外に落ちた可能性は多分に存在したと考えられる。文人同志の交友は、漢以来の伝統に即し、また、当時のきびしい世情の中で持たれたことと思われる。

中国では、唐以降士大夫が余技とし娯楽として「琴棋書画」をたしなむ風習が成立し、やがて画題として、俗界を離れた境地に交友の場を求めて歓を尽くす文人の有様を、士大夫の理想として、取上げるようになった。

任月山「琴棋書画図」もこの境地を画幅に上らせているが、その中に盆景が描かれている。

文字の面を此君園主人（昭和 9・1934）「盆栽流行史」の中の「五石瓊」に求めれば、「今人以盆盎間樹石為玩 長者屈而短之 大者削而約之 或膚寸而結果実 或咫尺蓄虫魚 概称盆景 元人謂之些子景」とある。これによれば、当時、人々が花盆に樹や石をすえて賞玩し、長過ぎるものは縮め、大き過ぎるものは切り詰め、そうすれば短小にして実をつけ、これを一般には盆景と称するが、元人は「些子景」すなわち縮写した景觀と呼んでいた、ことがわかる。

前述したように、中国人は、古来、庭木や盆樹に自然の生育形を求め、整姿の手をあまり加えない。しかし、上掲の文章は明らかに「整姿煎定」の技法に言及していて、ここに後年の日本の盆栽に通ずる明白な手法が詞句となって残されている。

（9） 日・元間の交流 わが国と元との交流は、文永 11 年（1274）と弘安 4 年（1281）の二度にわたる来襲は異常なものとして、その後は私貿易船や鎌倉幕府の官許による建長寺船や天竜寺船などによって続けられ、また多数の入元僧や帰化僧が海を渡ったが、このような往来は、わが国の文化の進展上さしたる附加をもたらさなかった。

室町時代を特色づける「佗び寂び」は同時代の元・明に負う気風ではなく、一時代をさかのぼる南宋の禅的思想の影響であったが、この意味から、室町時代の盆玩の底流に潜む南宋の好尚を指摘する。

8) 明清の文房清玩と盆景

（1） 明の陶磁と花盆 明（1368～1644）は元の衰運に乗じてこれを北方に駆逐し、金陵（南京）を都として、漢民族の統一国家を再興した。この王朝は、内政の面で、歴代王朝のすぐれた制度を範とし、次々と独裁を強化し、国力の隆運を達成した。

生産技術の伸展は各分野に見られたが、中でも、織物業は従来の絹布に加えて新たに綿布にも及び、ために機業の中心地蘇州は最大の都市にふくれ上り、一方、窯業は景德鎮だけに集中して栄え、鎮の人口の大膨張を招いたほどであった。

この窯業地では明初から御器廠が設けられて、もっぱら宮廷品を焼成したが、この事態は後年の清末に至るまで続けられた。この官窯に対し、この地に多数の民窯が散在し、国内向け輸出向けに多量の製品を焼造した。

明器の特色は、大体において、前半は白地に青の文様を描く「青花」(染付)が主体を占め、後半は白磁に赤・青・黄・緑・紫などで華麗な文様を重ねる「五彩」(赤絵)に求められる。明器のこのような傾向は、宋磁が青磁白磁に代表される単彩清雅であったのに対して、著しい対照であった。ついでに、清の陶磁は、明器の特色を受け継ぎながらも、一段と技巧をこらして繊細になった、

花盆も、中国人の古来からの指向に即して、青花および五彩の優品が焼造された。

後年の万暦年間に当り、神宗が公式の場で着用していた「竜袍」には、正面で上中下に並んだ3個の竜文をはさみ、最上段の胸の部分で、左右一対の猿猴(サル)を意匠した「仰鐘式花盆」すなわち深円鉢が縫い取りされていたが、この一事こそ中国人が古来花盆に求めてきた高い芸術性を端的に表明している好例であったと考えられる。磁盆の優品を、盆樹と組合せないままで、芸術品として観賞してきた一面が存在したことを重ねて指摘しておく。

(2) 日本の赤絵鉢 日本では、花盆の品格に求める中国流の仕来りが絶えず流入してきて、後年の江戸後期の文化文政以降、伊万里焼による「赤絵」の鉢となり、また少し遅れて、沈寿官が薩摩の地で焼いた「赤絵」の小鉢や蘭鉢ともなったが、ついぞ普遍化しないままで経過してきた。

ここに、同じく盆栽を中にしながらも、両民族間に介在する民族性の開きが指摘される。

(3) 宜興盆の登場 前述したように、宋では茶の趣味の向上につれて、雅人は本来下層民の常什である「建盞」を茶の世界に取り入れて珍重したが、明末の頃、同工の線で、茶の名産地陽羨の僧が下手物視されてきた宜興窯の無釉製品一沙壺(一名泥壺)に茶の風韻を認めて茶陶を工夫し、続いて、この種の製品は、それを受け継いだ供春の名作によって一躍高評をもって迎えられ、以降「陽羨陶」と呼ばれて、茶の世界に深く根を下した。

陽羨陶は上海に近い宜興の南に位置する蜀山鎮で焼成される湯罐(湯沸し・ポーフラ)。茶銚(急須・急火燒)・茶心壺(茶壺)・水注(水差し)等を総括するいわゆる茶陶の名品に与えられてきた名称である。本来無釉であるが、器表に梅花や蘭の文様・詩の一句をつけることもある。色彩は原料とする粘土によって、朱泥・紫泥・黄泥・青泥・老泥・白泥・梨皮泥などの区別が生ずる。

蜀山鎮に隣接する鼎山鎮は大器物に特徴をもち、白化粧をかけ、貼花を加え、灰釉塩釉を施し、製品としては花盆・水鈣(水かめ)・火炉(火鉢)を主体としてきた。

鼎山鎮には、また、施釉の「宜均」(和名海風手)を焼成する欧窯が併存するが、ここは古くから「宜均」の本場とされ、その和名海風・白交趾・青交趾・均窯釉等の花盆や火炉は比較的近

年まで、日本へも多量に出荷されていた。

鼎山鎮の宜均・灰釉・塩釉などの花盆はいわば下級品実用品とされてきたが、中国人の陶磁観かられば当然であった。

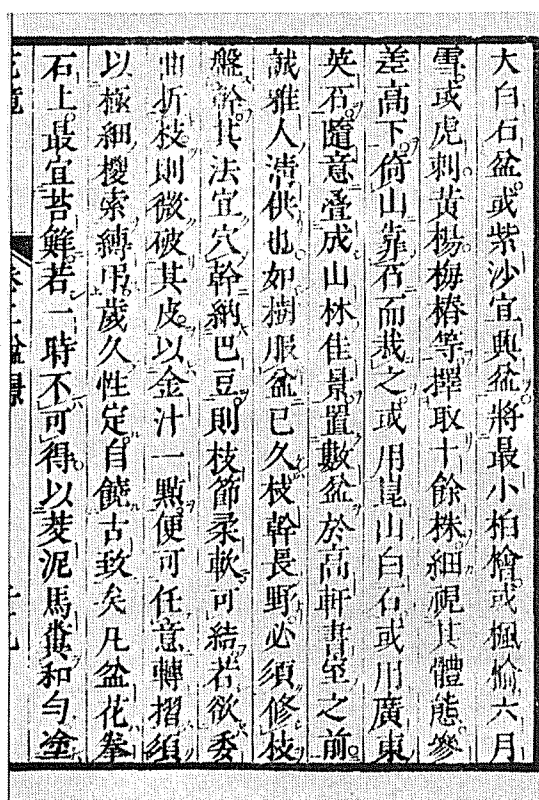
宜興の茶陶が登場した経緯は上述の通りであったが、その後間もない頃、一部の文人が「文房清玩」の席を飾る盆景に、古くからの陶磁観には即さないで、本来下手物の「宜興盆」（和名泥物鉢）を供用しはじめたらしく、すなわち、次の王朝清に移り、その康熙 27 年（1688）に開板された陳扶揺「秘伝花鏡」は、その中で、「紫沙（泥）宜興盆」の文字を明記していて、新たに盆玩の世界に登場してきた異例の趣向を伝えている。

なお、その登場年代を確定する資料を持合せていないが、筆者の見解では、万暦年間（1573～1619）に刊行された後掲の文玩書屠隆「考槃余事」には言及がなく、文房清玩が中国史上最高潮に達したその後の 70～80 年間を経た康熙に至って、はじめて(?)陳扶揺の筆に上ったことからして、この期間こそ宜興盆を成立させた年代であったと考えている。

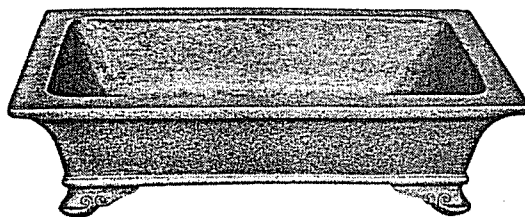
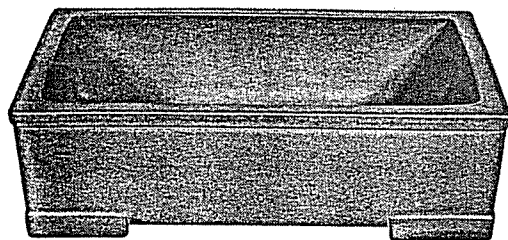
日本の盆栽界で珍重する「古渡り」の「泥物鉢」のうち最古のものは成化（1465～1566）から嘉靖（1573～1619）を経て万暦（1573～1619）にわたるとされるが、宜興の深目の長方盆は本来貴人の墓所にすえられた野香炉であったと語られてきた。

このように 500 年（以上?）にも達する野香炉の歴史からすれば、その技法と器物を派生的に花盆に転用することの基盤は既に出来上っていたと見ることができる。

（4）宜興盆への開眼 煎茶の図録の草分けである田能村直入（文久 2・1862）「青



「紫沙宜興盆」の登場
清・陳扶揺（康熙 27・1688）原著
平賀源内校「重修秘伝花鏡」より



古渡鳥泥長方盆
日本盆栽協会（昭和 49・1974）
「盆栽水石の鉢・水盤・卓」より

湾茶会図録」の中には「盆栽」と明記して数点を記述している。その鉢は白および黒の交趾盆が主体を占め、外に、海風・色磁などにわたる数点および白磁氷裂文方盆・「紫泥円盆」各一点を挙げているが、その単彩特に泥物鉢の登場に注意が引かれる。なお、当該「紫泥円盆」は明らかに宜興の焼成品であり、他の盆器も海舶品であったとして誤らない。また宜興盆のもつ雅趣への開眼は「秘伝花鏡」に因ったことと思われる。

(5) 明の絵画に見る盆景 古来、中国人は文学的教養にあこがれと誇りをもってきたが、代々の帝王が文人を好遇したのも、主因はこのような背景からであった。唐の2代の帝王太宗は、まだ秦王を称していた頃、文学の士18名を文学館博士に任じ、暇さえあれば、日夜を問わず、館に至って文学を論じた。「故宮藏画」の1つ無款「十八学士図」四幅対はこの故事を画題にした宋人の作だとされてきた。しかし、東京国立博物館の海老根聰郎技官によれば、画布をおおう浙派一明代山水画における職業画人派一の手法に注目して、画作の年代を明中期より少し前（筆者註 1450～1500?）と推定する。

画面の群像の前景には、文様に富んだ深円鉢のシュロ・袋式小鉢のセキシウと並んで、雅趣に富み嬌小な姿をしたマツとコノテガシワ（柏）らしい各1杯が描かれているが、特に後の2杯の姿態は、風格のある樹容を「外縁雲足」^{そとえんぐもあし}の長方盆に入れていて、現代の日本盆栽に通ずる感興を起こさせる。

なお、当時、そのような浅形の「外縁長方盆」が供用されていたことは特記に価する事態であり、それはほぼ500年前の時点であった、

伝承によれば、西晋の大富豪石崇は洛陽の金谷に、天下の珍奇を集めて園林「金谷園」を築き、しばしば賓客を招いて詩作をきそい、席上詩詠ができなければ、罰盃として三斗の酒を課した。

この伝承によって、正徳・嘉靖の頃（1500～1560）、高名な画人仇英（実父・十州）は「金谷園図」を描いたが、それは明中期における豪華な園林の構成を適確に伝える資料でもある。

園林台榭のすぐれた構成の中で、客を迎える正面の石段の左右には、一抱え以上と見られる精細な文様を浮彫りにした「海棠花式花盆」（木瓜盆）が一對すえられ、共に屈曲した老幹のツバキが枝先に数輪の花を着けている。なお、ここに見る盆景はそれを配置する上の中国的な仕来りと器体に求める芸術性の指向とを端的に示している。

花盆が意匠の繊細華麗を追求して発展してきたことは前述しておいたが、一對づつを焼成することも古くからの慣習となっていた。

6) 考槃余事の盆玩箋

文房清玩の内容を逐一記述した屠隆（万暦 34・1606）「考槃余事」は章として、「書・帖・画・紙・墨・筆・硯・琴・香・茶・盆玩・魚鶴・器居呉服・文房器具・遊具」の箋を挙げ、前代を受け、南宋から明にかけて大成され、かつ、後年の清にも引き継がれていった文人の雅遊を伝えて



無款「十八学士図」部分 原田謹次郎（昭和 11・1936）「中国名画宝鑑」より



仇英「金谷園図」部分 東京国立博物館（昭 39・1964）「明清の絵画」より

いる。この文玩書は清の乾隆 50 年（1785）に重修され、また、日本に海舶されてのち源謙（東溪）の和刻（享和 3・1803）ともなっており、長い期間にわたり、文人の座右の書として活用されてきた。

その「盆玩箋」は、中国の盆景につき、著作当時の事情はもとより、年代的な前後にわたって文人の間に継承されていった盆景観を的確に記述し、さらにわが国の盆栽が今日の風趣を持つに至った経緯にも深い係りを持っていたので、全文の和訳を掲載しておく。

盆玩篋（筆者和訳）

盆景は机上に置くほどのものを佳とし、これに次ぐものは庭樹（亭）に並べておけるものである。最も古雅なのは天目山（浙江省）のマツであり、その高さは1尺余り、根本は腕ほどの太さを持ち、針葉は短くむらがり集まっていて、姿態は馬遠（南宋の画人）の筆法のように傾斜しかつ丈がつまって屈曲し、郭熙（北宋の画人）の描く樹のごとく、梢端が枯れ、下方の枝は先の方を垂らしてつかみかかる形を呈し（寒梢蟹爪）、劉松年（南宋の画人）の手法に見るように、半ば伏した幹に葉叢が幾重にもかさなり、盛子昭（元の画人）の画布にあるごとく、引き倒された幹は枝先をあげて鳥が飛び立つ様をしているなど、変化に富んでいるが、それを佳器に植えれば、枝が入り組んでごつごつした格好な觀賞に値する。1本の枝がさらに2・3本の小枝を出しているほどの木があれば、3～5個の穴を掘って植え、全体として山林で樹がはえそろっている状態を作り出す。高下長短をつけ、さらに「透空」に富み上品な古めかしい縦形の石を添えて、体裁を整え、それを庭の中に置く。

そのような一本植えに対する者は、丘陵の頂に坐して独立の松樹を楽しむ感興をおぼえ、二本植えに向かい合えば、松林の深处にはいり込むことにも似て、6月（新暦の7・8月）でも暑さを忘れさせる。

閩中^{びんちゆう}（福建の古名）の石山に生育するウメは天生の奇質をそなえているが、根本の石のところから枝を出し、かつおのずからその根は露出しており、曲りくねった古めかしい素朴な感じの枝幹は下を向き上を向いた状態を示していて、花を着け葉を出しながら年数を重ねて枯れない。青い蘚（こけ）や樹皮のひび割れはこの花木の全身に及び、あごひげ状の苔（地衣）は数寸にも垂れ、その緑糸を風が吹き上げるが、そのひるがえる様は賞玩すべきである。それは、さながら観梅の名所羅府（在広東、古来著名）に遊び、樹下で夜を明かすうちに、煙（朝食の）がたなびき、月が淡くなって、うっとりとして夢がさめるにも似た興趣をおぼえさせる。

閩中にはまた「水竹」を産する。その高さは5・6寸ばかりで大きくても1尺余り、葉は細く、幹は古びて、さっぱりした感じを示し、佳品である。盆に数本を植えれば、清流で名のある渭川の感興を生ずる。

この松竹梅の「三友」は机上を飾る盆景の高品である。

次に位するものにクコがある。古びた根本は曲がりくねって拳ほども太く、根は竜や蛇がとぐろを巻いたようになったのを求めるのがよい。枝や幹は青くて古色を帯び、枝の東ねをみな解いて人工の跡をむきだしにしなければ、多分に生まれつきの麗質のように見える。これが雪中にあれば、枝葉は青く茂り、紅い子実^{こじ}は寄り添って房状に下がり、点々として糸でつづったようである。時に雪が積もってこの珊瑚^{さんご}色の実を圧することがあっても、それなりに山林の中での味わいが多分に感じられる。

杭州のアリドオンに100年以上のものがある。高さは2・3尺以下で、根本は笛管状をし、葉は数十層に重なる。一鉢に20株を植えて林とすれば、その白花紅実ははなはだ引き締まり、かつおごそかな感じがするが、厚雪の頃にこれを賞玩すれば、当人は食事を忘れるほど心を引かれる。さらに、古めかしい雅趣に富んだ花盆や奇怪な形をしかつ高くけわしい様子をもった石など

の助けを借りれば、まさに心から観賞するのにふさわしい。

セキショウの一盆ともなると、夜には灯火の煙を吸い取り、朝には葉先にたれる露を取って眼をうるおすことができる。まことに仙霊の世界の善美な種類であって、書斎には欠くことのできないものである。よろしく崑山（新疆の霊山）の古めかしい奇石と定窯の白磁の方形水盤を用いて植え、鉢の水をたたえた底には五色の小石を数十個置き、紅白の石は入りまじらせ、青と青緑色のもの同志は離しておくなどの処置を講ずるべきである。時に清泉をくんで水を換えながら培養すれば、日中には天が映り、夜には露

が宿る。格別賞玩の用に充てるのにふさわしく、また、邪鬼を避けることができる（ショウブに關する伝承による。）

春に芳香を放つラン（一花・九花）、夏のユリとマツリカ、ススキの秋ともなれば、黄花を密着させた矮性のキク、冬の葉がつまったスイセンと美人蕉（*Musa sanguinea* Hook）などは、靈芝（万年茸）を添えて古盆に植え、かたわらに美しい小さな奇石の一塊を立てて、朱色の机に載せれば、清く・みやびやかで・すっきりと明るく感じられて、繁雑でなく、それらの玉にも比すべき賞玩物は美しく立ち、まことに隠人君子にも似ていて、清素な感興が人に迫ってくる。これらの清賞物に向かい合って、名泉天池（江蘇省呉県）の水でたてた茶をすすり、持ち前（おはこ）の詩を吟唱すれば、曇った眼を大層はっきりさせてくれる。

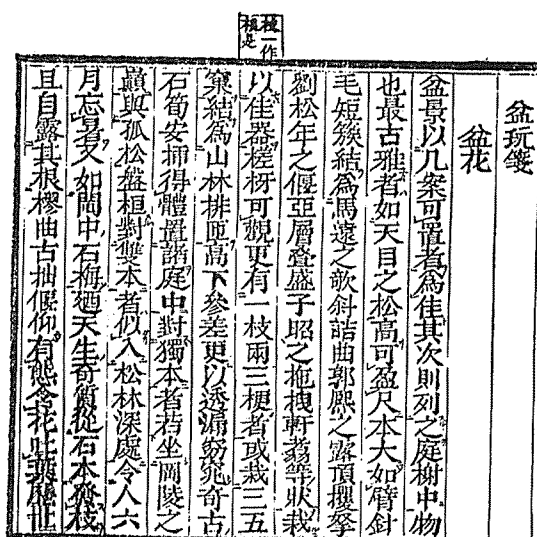
以上の記述によって、当時の文人が茶を仲立ちとする「文房清玩」の境地に身をおき、盆景に風趣を追求していたさまが明確にくみとれる。また、古来「歳寒の清供」とされてきた松竹梅が既に「三友」として組み合わせられ、かつ、その「三友」は盆景として机上を飾っていたことを知るが、特に明の中期から後年の清初にもわたり、天目の矮松閩中の石梅と水竹の3品は最上の高品と定評づけられていた。

行文の綾から、当時、盆景にも「選石」の技法が広く行き渡り、また、花盆に植えるための「原木」の市販もあった事情がくみ取れる。

「園冶」と「選石」

明の京師金陵（南京）陪都北京その他蘇州・揚州などの大都市では園林が数多く営まれ、一例として、壬世禎（嘉靖頃・1522～1566）「遊金陵諸名園記」ともなった。

当時の園林第宅は、庶人の生活とは隔絶して、権力や財力の座にあった富裕な階層の人々が清雅な生活を送った場であったが、その領域の中で盆景の雅趣が賞玩されていた経緯から、盆景の



明・屠隆（万暦 34・1606）原著
源謙重修（享和 3・1803）「考槃余事」部分

背景として、一応取り上げておく。

既に述べてきたように、園林は殷周の頃から営まれていたが、その構築についての計画指南書は明末の李計成（崇禎 7・1634）「園冶」をもって創始とする。

その正文は、相地（場所の選定）・立基（地割り）・屋宇・装折（建具）・内窗（庭門）・墻垣・鋪地（中庭園路）・掇山（疊山）・選石・借景の 10 項目から構成されていて、技術的な面にまで立ち入って講述されている。なおこれらの項目だけからしても、文人の居住様式的一端がしのばれる。またついでながら、この「装折」は江戸時代の日本家屋につき、建具の意匠の変化と発展に大きな寄与を加えた。

「選石」の項には太湖石・崑山石・靈璧石・英石・黄石等の名石中の名石 16 品目を掲げているが、その末尾に「花石綱」を加えているのが注意を引く。

（7）「長物志」の盆景と水石 「園冶」と同年代の文震亨（1635 頃）「長物志」は、少しく下った清初（康熙 10・1671）「閒情偶寄」と共に、当時からその後にも及んで、文人が屋宇園林の構築・行住座臥の方式などの手引きとして活用してきた規範であった。

「長物志」は、技術的な傾向は薄く、概して画人の感覚で叙述されているが、この線に添って、「文房清玩」に関する一切を 12 部に分けている。なお、その章節は、室廬（屋宇）・花木・水石・禽魚・書画・几榻（卓と椅子）・器具・衣飾・舟車・位置・蔬果・香茗・（茗は茶）から成る。

「長物志」はその「室廬第一」の項で、まず庭園設置の場所を述べ、次に細目として、門・石段・窓（窓）・欄干・堂（殿）・山齋・文堂・仏堂・橋・茶寮・琴室・浴室・庭路・樓門・台（方形の高い建物）など、文人の雅遊に相応しい園林を構成するための要素を列記する。

文中の山齋とは庭園中に設ける小施設で、身を清め心を修めるいわば書齋の用に当てる構築物であるが、その箇条につき、「宜しく明浄にすべきであり、広くしてはいけない。……中庭はやや広いのがよい。花木を植え、盆景を列することができる。夏には北側の窓を取り去り、前後をあける。……」と述べて、文人の立場における盆景の賞玩法をのぞかせている。

「花木第二」は概説として、「庭や建物の近くに老幹の樹木や奇石を適宜配置する。草花は繁雑で望ましくないが、随所に植えて画題とする。桃や李は遠望がよい。苔のついた梅を庭の一隅の木柵で囲った場所に植えると風雅である……。」とし、次に、各種類ごとの簡単な解説をつける。その一つとして、「杜鵑（シナサツキ）の花は極めて爛漫であり、樹下陰処がよい。花時には几案に移すのも佳である。別の一種に映山紅というのがあり、石岩の上に植えるのがよく、またの名を羊躑躅（シナレンゲツツジ）と名付ける。」と記述している。すなわち、サツキツツジを盆景として机上を飾り、レンゲツツジを石岩に植え（岩上樹にして？）て賞玩したと受け取れる。さらに梅については、「虬竜のごとく枝の屈曲したものを花盆に植えるとよい。」とし、瓶花の条では、「一般に現代の人は、盆景は几案に置くのを第一とし、庭に置くのはその次であるとしているが、自分は逆に考えている。天目の松は最もすぐれている。高さは 2 尺以下 1 尺以上がよい。……また古梅がある。……枸杞・水冬・青野・柏（コノテガシワ）・檜（ビャクシン）の

類で根が竜蛇のごとくに束縛されず、切傷のないものは高品だといえる。その次は福建の水竹・杭州の虎棘（アリドオシ）であるが、これらは雅と俗の間である。」として、多岐にわたる樹種を高韻風致によって選別し、さらに絞って、高品を厳選していた事情を伝えている。

その他、「花木」の標題ながら草本にもわたって、「春の蘭（一花種）・蕙（九花種）、夏の夜合（ユリ）・黄香（キソケイ）・萱（ホンカンゾウ）・夾竹桃、秋の黄密（?）・矮菊、冬の短葉水仙と美人蕉などの諸種は、随時花盆に上げて賞玩すると面白い。」とし、すなわち、雅致に富んだものから俗受けする種類にまでにわたって取り上げている。

さらに花盆については、「青緑で古銅色を帯びた陶磁、白定窯・官窯・哥窯などは第一級である。」として、好みの方向を磁器に限定して、品格の高下に論及する。

「水石第三」は園池の水中に置く石との意味を拡大して、「石というものは大古の時代を思わせ、水は遠い想いを致させる。庭には水石は不可欠である。その要は山水の秀抜な景をよく移すことで、一峰の姿がよければ、千尋の山岳を思い起こさせるし、一勺の水は万里の江湖を想像させる。」として、象徴的連想的な風趣や用法を強調する。

「品石第四」では、「石は靈璧石が上で英石はこれに次ぐ。二石とも高価であって購入はすこぶる困難である。小さなものを几案に置く。色は漆のごとく、音は玉のようなのが最も佳である。」と述べ、続いて、各論的に、靈璧石・英石・太湖石・堯峰石・崑山石・錦州石・将来石・羊肚石・土瑪瑙・大理石・永石などの品評を展開する。

（８）「素園石譜」 文房清玩のひとつきわ盛行した明後期の万暦年間、往昔からの奇石の好尚を結集して林有麟（万暦41・1613）「素園石譜」4巻が板行された。有麟字は仁父、博識をもって聞え、詞章に長じ、特に奇石の趣味はひとしほ深いものがあつたが、その居所の素園に玄池館を建て、かつて南唐の李後主が愛蔵し、その後北宋の米元章の手に渡った宝晋齋研山・海岳庵研山、蘇東坡の詠物した壺中九華、同じく愛玩した小有洞天、徽宗皇帝の珍藏した宣和六十五石、その他古今の名石中の名石を数多く収蔵し、かつみずから麗筆を振って103石を図写し、これに先賢の玩石についての伝承を添えて図録を刊行した。



米元章が衣冠を正して拝した石丈
林有麟「素園石譜」より

9) 朝鮮李朝初期の盆栽

(1) 養花小録 明の中期、仇英「金谷園図」・無款「十八学士図」が画作され、わが国では、後述するように、室町時代の8代將軍足利義政が盆玩にふけていた年代に相当して、朝鮮では姜希顔（仁齋惠愚）（1474）「養花小録」が刊行された。その内容は、老松・万年松（マンネンスギ）・烏斑竹・菊花・梅花・蕙蘭・瑞香花・蓮花・石榴花（ザクロ）・梔子花（クチナシ）・四季花（コウシンバラ）・山茶花（ツバキ属）・紫薇花（サルスベリ）・日本躑躅花（サツキ?）・橘樹・石菖蒲（セキショウ）・怪石・種盆・内花樹法・催花法・百花忌宜・取花弁法・養花法・排花盆法・養花解の項目を掲げる。

この老松の条章を白井光太郎（昭和 8・1933）「本草学論攷」に準じて和訳して

示せば、「およそ老松を見るに、枝幹は屈曲してそびえ立つ感興を抱かせる。斜の枯枝や古い小枝が多く、針葉は細く短かく、こずえの枝には松毬をつけ、木肌には蘚苔が生じている。老松で巖石の間に寄生しているのは上等品である。性は傷みやすいので、移植しても活着し難い。今年太い根を切り土を盛っておき、次年に盆に移せば活着する。あるいは丘陵に生ずるもの取って盆に植え、活着を待つ。枝が真つすぐなものはこれをためて屈曲させ、長い葉は切って短かくする。年月が久しくなれば石間に生じたものによく似てくる。老松で松毬のないのは古木の風格を欠くので、他木の実を枝先に結びつけて置くのがよい。古びかつ縮まらないものにはヒメイタビ（薜荔）を植えて蔓をからませる。3日に1度灌水する。陰処に置いてはいけな。……老松は根が弱く、寒気に耐えないから、極寒に際しては土窖に収入する。……」と述べている。

この500年をさかのぼる時点につき、あえて年代的な開きを度外視して、わが国の今日的な盆栽のもつ風韻・山採り法・若木の仕立方・保護の方法などの要点を重ねてみると、まさに驚異的な一致を認めることができる。

梅花については「……都下に栽培するものは皆千葉（千重）の紅白梅であり、……嶺南湖北に植えるものは皆単葉の白梅で実を結ばず清香がある。およそウメを接ぐにはまず小さなモモを栽盆して梅樹に掛け、桃梅双方の樹皮をはぎ去り、接合して、クズの皮を用いて堅く縛り、気通を待つ。樹皮が縫合した後ウメの枝の基部を切断する。俗にこの方法を倚接という。……枝梢を交結して横斜した老梅の形を作る。着蕾すれば暖室に入れ、しばしば温水をその枝や根に注ぎ、一

薜石



峨眉山に産した菩薩石
林有麟「素園石譜」より

方、炉炭の火勢をさかんにして寒気に触れさせなければ、冬至前に開花し、清香が室内に満つる。……もしも老衰して枝が出なくなれば花蕾が着かなくなる。その際には移植して陽所に置く。そうすれば根が出て大樹となる。盆梅は花が済んだ後、寒気を受けず、また土窖にかえせば結実する。もしも寒気に触れれば結実せず枝条もまた枯れる。盆は瓦器を用いるが、水をそそげば根焼けを起さない（澆水不焼）。盆梅に古雅を求めるならば、すべからく単葉梅を接ぐべきである。……」と記述し、盆梅を主眼としながら、繁殖には一重咲種をモモ台に呼び接ぎとし、横斜した樹形をとらせて老梅の姿態に仕立て、暖室・土窖によって催花し、もって厳寒時の清賞に当て、樹勢の回復のために植換えをするなど、細目にわたって要点を列挙している。

この小著では、各項目ごとに、まず漢籍中の関連事項を抜粋して並記し、次いで、一段下がって、自己の見解や経験を開陳している。この点に見る中国尊崇の姿勢からしても、さらに、朝鮮はわが国と同じく、往昔から、文化の進展上大きく中国に依存してきたことをも考え合せ、中国の盆景特に古来の文人の雅致に富んだ盆景が、文房清玩の格段に盛行した明中期の事情に結集して、同年代の李朝初期の盆栽に測り知れない程の深い影響を及ぼした形で、この著作を成立させたと考えられる。

(2) 瑞巖寺の臥竜梅 李朝中期、中国の明末に相当して、豊臣秀吉の朝鮮出兵は文祿元年(1592)と慶長2年(1597)の2度にわたって行なわれたが、これによって、半島に渡った将兵が、戦火の中ではあったが、その地の盆景を何らかの形で受け止めたと推量される。この推量に関して、松島の瑞巖寺に伝わる臥竜梅（現在は2代目）は渡海した武将の一人伊達政宗が持ち帰った盆梅に由来すると語り継がれている。

10) 清朝の華夷一体

(1) 向学の奨励 後金後の改称清(1616~1911)は明の弱化に乘じ、満州を本拠とし、王城を北京に定めて国を建て、その後中国本土の統一(1638)を完成した。この統一を成し遂げた聖祖康熙帝、続く世祖雍正帝・高宗乾隆帝の代年はもっとも盛んな期間であった。

康熙帝の治世には、同帝の好学を背景とし、「華夷一体」の基調の上に立って、官営で康熙字典・古今圖書集成・佩文齋廣群芳譜(本草学)・欽定授時通考全書(農学)などの編集が行なわれた。このような政治的・社会的・文化的な背景の下では、異民族の支配にも係らず、中国文化は明を踏襲してさらに発展したが、文房清玩の盛行とその手引書の板行も、上記の世情に負う事態であった。

(2) 秘伝花鏡 陳扶揺(康熙27・1688)「秘伝花鏡」6巻は、丁澎の序文にあるごとく、それまでの類書が典故や詩文などに詳しく、種植の法を落としているのに較べて、花木花草の芸植、禽獸鱗虫の馴飼までを収めた実技書であり、この点で類のない特色を持つ。

この第2巻は花卉に関する汎論的な技術を「課花十八法」に分け、原著者独自の創成語によって、例えば、「分栽有事法・過貼巧合法(接木の秘法)・変化催花法(花色を変え早く咲かせる

燒
官
作
澆

種盆取景法

不宜澆糞。若嫩條已長。花頭已發正時。又不可澆。每日早晚。只須清水。果

實。則亦不可澆。澆則實落。凡植花。三四月間。方可上盆。則根不長。而花多。若根多。則花少矣。或用蠶沙浸水澆之。亦良。草子之宜盆者。甚多。不必細陳。果木之宜盆者。甚少。惟松柏榆檜。楓橘桃梅。茶桂榴槿。鳳竹虎刺。瑞香金雀。海棠黃楊。杜鵑月季。茉莉火蕉。素馨狗杞。丁香牡丹。平地木。六月雪等樹。皆可盆栽。但須剪裁有致。近日吳下出「種訪雲林山樹書」。意用長

大白石盆。或紫沙宜興盆。將最小柏檜。或楓榆。六月雪。或虎刺。黃楊。梅椿等。擇取十餘株。細視其體態。參差高下。倚山靠石。而栽之。或用崑山白石。或用廣東英石。隨意疊成山林。佳景。置數盆於高軒書室之前。誠雅人清供也。如樹服盆已久。枝幹長野。必須修枝。盤幹。其法宜穴幹網巴豆。則枝節柔軟。可結。若欲委曲折枝。則微破其皮。以金汁一點。便可任意轉摺。須以極細纒索縛用。歲久。性定。自饒古致矣。凡盆花。拳石上。最宜苔蘚。若一時不可得。以焚泥馬糞和勻。塗

平賀源内・校（安永 2・1773）「重修秘伝花鏡」

法）・養花挿瓶法」などの18項目を展開するが、その1つとして「取盆取景」がある。

陳はこの盆景の章節の冒頭でまずその効用を論じ、「山林原野地曠風疎 任意栽培自生佳景 至若城市狹隘所安能比戸皆園 高人韻士惟多植盆花小景庶幾免俗……」と記述し、城市の中では狭い屋敷に庭がなく、したがって高人韻士は多くの盆花や小景を愛培して脱俗の領域を設定することになる事情を強調している。

次いで、その「催花」につき、「紙を糊して密室を作るか、地をうがって坎（穴・窩）を掘り、竹を編んで花をその上に並べ、……沸湯を坎中に置く。……数朝ならずしておのずから放つ。」と記述するが、ここに、オウバイ・ボタン・ウメなどを早放（催花）させる技法の詳細と、ひいては、それらの盆花を「堂花・唐花」と呼んで観照してきた古来の伝承とを示している。

細目に移って、「草子宜盆甚多 不必細陳 果木（マツ・タケをも含む）宜盆甚少 惟松柏（ビヤクシン） 榆楓（フウ） 橘桃梅桂（モクセイ） 榴（ザクロ） 槿（ムクゲ） 鳳竹（ホウオウチク） 虎刺（アリドウシ） 瑞香（ジンチョウゲ） 金雀（エニシダ） 海棠黃楊（ツゲ） 杜鵑月季（コウシンバラ） 茉莉火蕉（ソテツ） 素馨狗杞丁香（チョウジ） 牡丹平地木（ヤブコウジ） 六月雪（ハクチョウゲ） 等樹皆可盆栽 但須煎栽有致」として、盆景に供した多くの樹種を列挙する。なお、各種類の生育形からすれば、日本流の昨今の盆栽観に立脚して、雅と俗・盆栽と鉢植えにわたってはいるが、その雅致の面については、既に何回となく取り上げてきた。

続けて、「近頃、呉下（江蘇）では雲林山の樹を訪ねる感興を表出するのに、長大な白石盆や紫沙（泥）宜興盆を用い、最小な柏・檜（コノテガシワ）・楓・六月雪・虎刺・黄楊・梅・椿（チャンチン）の十余株を選び取り、細かに樹の姿態参差高下を見、山に倚り添え、石に接して植え、さらに昆山の白石や広東の黄石を用いて山林の佳景を築いているが、このような数盆を玄関や書斎の前に置けば、雅人の清遊はこれに及ぶものがない。」と述べていて、ここにも「景趣の縮写と寄植え」の明記を認めることができる。なお、容器につき、「白石盆」とは白石をくりぬいた花盆を指すものと推察され、一方、「紫沙宜興盆」の文字は、往昔からの磁器を偏重してきた民族的な伝統に反して、一部の文人による雅趣への追及が「妬器（泥物）」の持つ波さに到達した結果であったとの推測を帰納させる。中国に関する限り、その後も及んで「泥物鉢」の供用は普遍化しなかったが、明末清初の登壇はまさに画期的な事態であったことを指摘しておく。

ついでに、その寄植えは、文意に即した状景と規模から推して、わが国における近年の「栽景」を想到させる。

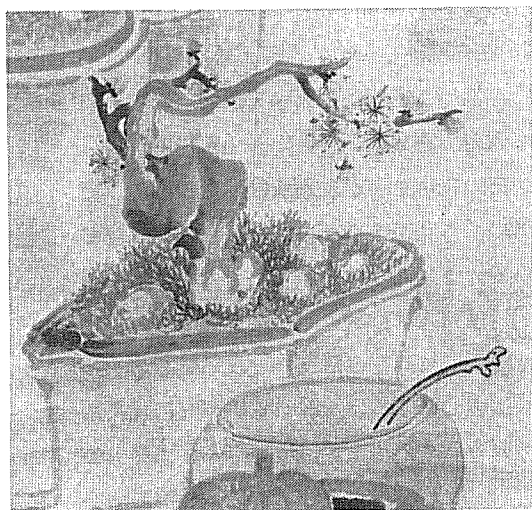
再び、「もし盆に入って久しくなれば、樹幹が下品になるので、枝を整理し樹幹を曲げなければならない。その方法として、幹に穴をあけ、巴豆（*Croton tiglium* Linn. の種子）を納めれば枝が柔軟になるので、結ぶことが出来る。枝に屈曲をつけようとする場合には、樹皮をわずかに去り、金汁（人糞尿）を一滴塗れば、意のままに曲げることが出来る。さらに極く細い棕櫚縄で縛れば、永年の後には形が定まり、必然的に古致に富む。およそ盆花では拳石上が最も苔を生じやすい。急には苔が生えないならば、菱泥（ヒシ沼の泥）と馬糞とを混ぜて、湿った所や枝の間に塗れば、間もなく生え、巖然として古木華林のようになる。」と叙述していて、当時通行していた整姿技術の詳細を語っている。

なお、ここにも盆内の苔にまで気を配って、盆景に雅致を求めた流儀の写実がある。



関貞（乾隆 36・1771）「富貴図」
東京国立博物館（昭 39・1964）「明・清の絵画」より

(3) 絵画詩文の盆景 盆内の古木に雅致を求めた文人の志向を清代の絵画によって示せば、^{びんてい}閔貞(乾隆 36・1771)「富貴図」、黄慎「観梅図」、郭宗儀(清末光緒年間 1880 頃?)「盆梅蘭花図」(筆者所蔵)などが存在する。上記の水墨画「富貴図」では鼎形の火鉢・長方盆の水仙を近景とする奥まった一隅で、^{げいほう}下方円盆に植えられた古梅が横斜した老幹から数条の枝を垂下させて、古雅雄渾な気風を漂よわせており、また、郭の盆梅は、現代の小品盆栽に相応した風格を持ち、屈曲した枝幹に数個の紅花を着け、地表は緑色の苔でおおわれている。



郭宗儀(光緒頃? 1880 前後?)
「盆梅蘭花図」(筆者所蔵)

詩文につき、宋樹穀は旅先で花盆の中の三尺の古梅を見て、はしなくも故郷の地の西谿を埋める千樹の白梅に思いをはせ、「数枝也復影横斜 惹得羈人郷夢除 抛却西谿千樹雪 瓦盆三尺看梅花」との「盆梅」と題する一詠を残したが、ここに盆梅と瓦器の文字を伴って、雅人の観照が盆景史の一端にしるされている。

(4) 秘伝花鏡の影響

清の中国統一と亡国は家光の治世の寛永 15 年および明治 44 年に相当した。

江戸前半、「秘伝花鏡」は数度にわたって海舶され、初期文人の成立にも力を貸し、中期には文人階層の確立・種樹の急昇などに伴って需要が拡大したが、このような世情を反映して和刻本が平賀源内校(安永 2・1773)「重修秘伝花鏡」として板行された。

本草学と漢学で名声の高かった小野蘭山はその子や孫の代にもおよんで、多数の門人に対する講筵に「花鏡」を供用し、またその注釈書を出したが、当時の知識層は、門下門外を問わず、中国に対する崇敬を基調とし、中国古来の文人の志向や起居に限りない憧憬を抱いて、この雅遊書に親しんだので、その影響するところは極めて大きく、他方その種樹の条章に盛られた事項は新知見として世上に流布されかつ実践に移されて、中後期の種樹熱につき、間口と深さの増大をもたらした。

当時の種樹書の一部には花鏡中の原著者による創始語をそのまま借用しているものもあるが、この事実が端的にその間の事情を示唆しているし、また後期に入って間もない文化文政頃の種樹書の中で、にわかに登場しはじめた^{とうむろ}唐室や^{あなぐら}窖による催花や保護の記述も「花鏡」に見る「催花」の文意を具現する形での工夫であったとして誤らない。

(5) 「揚州画舫録」の盆景

揚州は大運河の始点にあたり、古くから商都として栄えたので、名園は数多く営なまれている。

た。李斗（乾隆 60・1795）「揚州画舫録」18 卷 6 冊はこの地の名園を船体に彩色し絵を描いた遊覧船に乗って歴訪した一種の名園記である。

その花市を述べた個所で「天福居の市街門の所に花市がある。花市は禪智寺にはじまる。王観の芍薬譜（註、宋代）によると、揚州人は貴賤を問わず皆花を戴き、また開明橋に朝花市がたつとしているが、この城中の開明橋は（註、王観が既に言及しているように）城外の禪智寺と共に歴史が古い。……張秀才（註、官吏の登用試験科擧の合格者張）の家では百花会をつくり、四郷の名花が集まっている。この秀才は梅の盆景を上手に作る。外に、姚子同秀才と耿天保刺史（地方長官）とを合せて「三股梅花剪」（梅作り三人男）と呼んでいる。」と記述し、この地が宋の頃から引続いて、盛んな花市をもち、知識層の中には盆梅を巧みに仕立てる 3 人の名物男がいたことを示している。

上記した 3 名の文人が盆梅に求めた風趣

は既に関貞と郭宗儀の絵筆を借りて示しておいた図柄から、概念的に一応推察されるところである。

11) 辛亥革命以降の盆景

(1) 中華民国 清末の国力の衰退やその後に続いた社会不安の下では、盆景に対する関心は必然的に低下したが、この不振の状態は現在にまで及んでいる。

この間、辛亥革命（1911）によって中華民国が出現し、その直後、わが国の大正初期、中国の政界財界の新興勢力が日本の盆栽を多量に需要した一時期があった。これらはいかなれば簡易盆栽に当るもので、蛸作り・文人作り・玉作り・笠作りなどの針金や棕櫚縄によって整姿中のいわば未完成品であった。この逆輸出は、上層階級と盆玩とを等格視してきた中国古来の伝承に根差して、旧文人層に代って台頭した新興勢力が自国内で調達し難い需要を日本の盆栽に向けた結果であったと推測されるが、他方、当時における日本の盆栽は既に盆栽芸術を志向するほどの高い領域に達していたので、中国側で求めたのはこの「質」でもあったと考えられる。

ただ、上文にしるした「質」に対する好みの開きは、両国民の民族性の差・生活慣習や伝統の

書局金 第四
天福居在脾樓口有花市花市始于禪智寺載在郡志王觀芍
藥譜云揚人無貴賤皆戴花開明橋每旦有花市蓋城外禪智
寺城中開明橋皆古之花市也近年梅花嶺傍花村堡城小茅
山雷塘皆有花院每旦入城聚賣于市每花朝於對門張秀才
家作百花會四鄉名花集焉秀才名繼宇飲源精刀式謂之張
刀善時花梅樹盆景與姚志同秀才耿天保刺史齊名謂之三
股梅花剪其後張其仁劉式三鬍子吳松山道士效其法繼子
居壽字仁粹號舊山窮而工詩
撲缸春酒肆在街西游展入城山色湖光帶于眉宇烹魚煮
盡飲縱談率在于是青蓮齋在街西六安山僧茶葉館也僧有

三股梅花剪

李斗（乾隆 60・1795）「揚州画舫録」より

相違に基づく部分が多いためでもあったと判断される。

一方この間、台湾の盆栽は、かつての事情からして、必然的に日本国内の盆栽と規を一にして発展し、文人の伝承にもつながって、盛行してきた。

戦後、香港の盆栽は、台湾の事情を承けて、大きな展開を成し遂げた。

（２） 中華人民共和国 近年、中華人民共和国の成立後、その国土は「百花齊放運動」によって飾られているが、新状況の中で盆景がどのような扱いを受けどのような方向を目差しているかについては知見を持たない。

思うに、永年にわたった時の流れの中で、花盆内に雅趣を醸成し観照してきた文人ひいてはその伝承が、近年の人民革命によって全面的に覆滅し、さらに民衆の心情が建国のための多事多端な業務に傾注されている状態では、風韻の高い盆景につき、伝世品の保存に公的な方策が講ぜられていると聞いてはいるが、後継を意図した新たな育成は停滞していると推察される。

IV 日本の盆栽

1) 鎌倉時代における盆栽の急伸

(1) 西行物語絵巻の盆山 絵巻物は平安末期から鎌倉時代を通じて、にわかに盛行したが、それらの中に史料上わが国最古の盆栽が登場した。

その最初のもと考えられるのが、「山家集」を残した平安末～鎌倉初期の歌人西行法師の事跡を描いた伝土佐経隆（鎌倉初期・1195頃）「西行物語絵巻（大原本）」の巻初、その第2段に載る「巖上樹」である。

なお、この絵巻は鎌倉時代に移行した直後に画作されたので、巻初に当る部分は、当該画人がかつて見聞した世情に関し、少くとも完成年代を十数年ほどさかのぼった範囲で、平安末期の実情であったと推考される。

その場面には、梅花の候、流浪の旅への出立をひかえ、都のさる寺院横の草庵に身を寄せている西行を描くが、網代垣を隔てた境内では、僧坊の縁先に接して2本の角柱を立て、その上に長方形の大きな花台を置き、中には数本の矮樹を載せた奇岩をすえている。

(2) 春日権現験記絵に見る高風 後期に移り、高階隆兼（延慶2・1309）「春日権現験記絵」の第5巻第2段では、歌人として宮中に出致した藤原俊成が彼格の信任と榮達を受けたのは、



「西行物語絵巻」(大原本) 第2段の「巖上樹」模本の絵巻物より

その氏神に月参して、熱心な祈願を続けたためであるとの「詞書」^{ことばがき}を附して、邸内の豊かな有様を展開している。

平安時代を生きたこの貴人の第宅は、当時の常法に則して「寝殿造り」の様式をとるが、図柄は、南面する「寝殿」(正殿)の西側に立って、これに隣接する「西の対舎」^{たいのや}(家族の居住棟)とその前方に位置して池に突き出た「釣殿」^{つりどの}の範囲を視界に入れ、それに周囲を取巻く、芝を張ったなだらかな起伏、水禽の群れ遊ぶ池泉、点在するマツ・コウシンバラ・ツツジ・ススキ、それらを縫う曲水などを添えている。

この対舎の縁先には青竹で編んだ禽舎と手のこんだ長方形の棚とが設けられ、禽舎では五彩の珍鳥が飛びかい、棚上には花台に植えた寄植の1杯と青白磁らしい水盤に入れ石を配したセキシウの2杯が飾られている。

ここに見る寄植は、矮小なマツと花をつけている広葉樹の各1本を主体として、石を配し、セキシウを添え、地表を白砂でおおい、また花台そのものも簡雅精巧な彫刻を施し、内側を墨く塗るなど、全体として極めて整った様相を示している。(正本の御物)

このように、画面に見る盆栽には、樹形・容器・全体の構成・賞玩法にわたって、極めて進んだ段階が認められる。

従来の盆栽家は始原を尋ねるに当たって、探索の方向をもっぱら国内だけに絞り、かつ、直線的に上古にさかのぼるのを通則としてきたが、この態度を俊成の画面に当てはめて、必然的に670年前説をとってきた。

なお、この670年は、当該絵巻が完成して春日神社に奉納された年次から起算しているが、俊成が栄達の極に達した年代は約100年をさかのぼって770年前となる。この意味から、一部人士は770年前、さらに筆勢にかられて、1000年前とし、道長の頃に原点を置く例さえもあった。

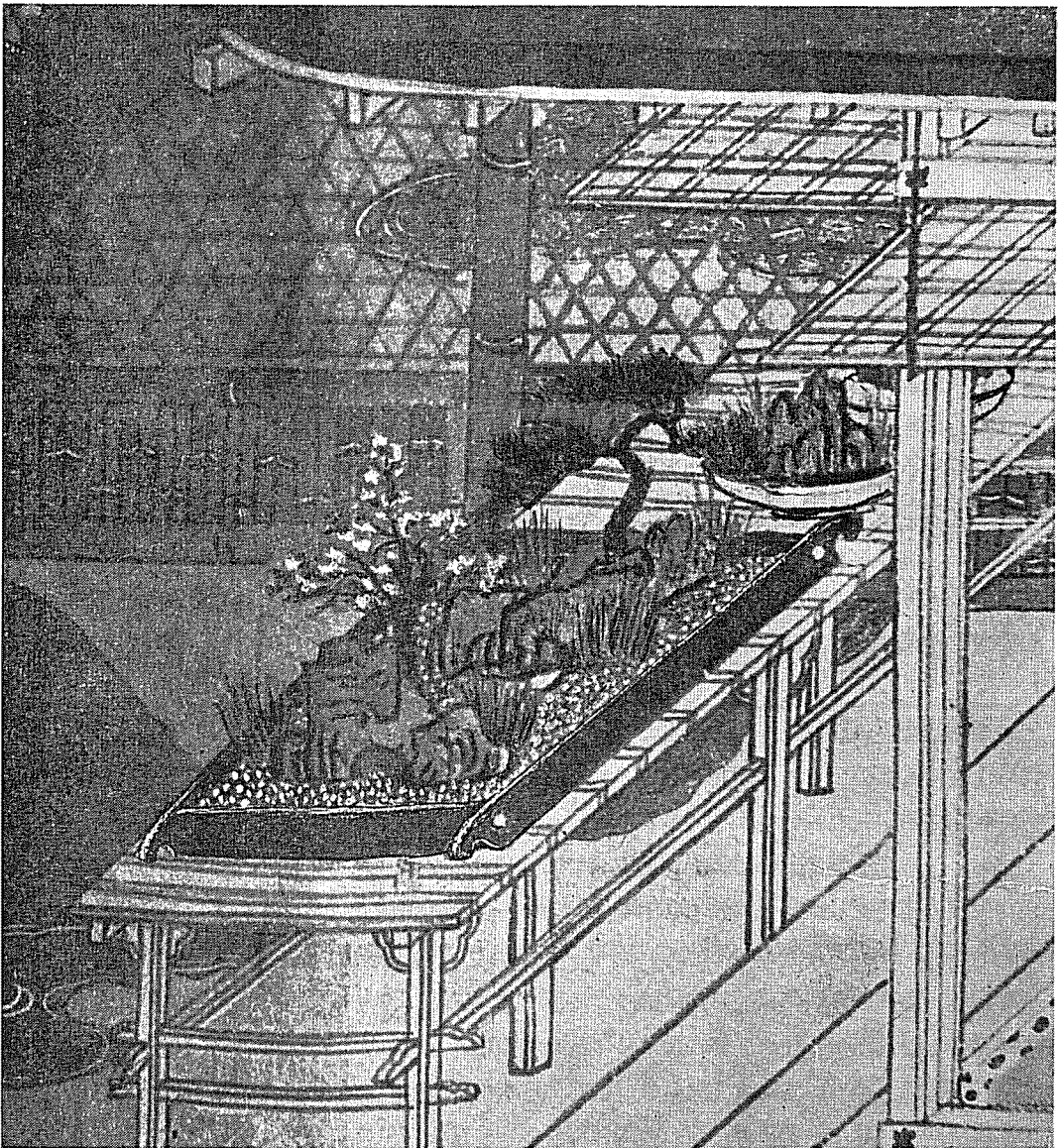
しかし、筆者の判断では、筆勢は除外するとして、その100年前の事情を忠実に描写できるはずがないとの見地から、人間が在世する年数を勘案した上で、せいぜい30~40年をさかのぼり、「春日権現験記絵」に立脚するならば、概算790年前を採るべきであると主張する。

なお、この見解からすれば、画人の筆は鎌倉中期の盆栽ひいては清雅についての広汎な事情を描写したことになる。

ただし、上掲した「西行物語絵巻」の中の盆栽はまさしく上掲数値を100年さかのぼって、概算800年前すなわち平安末期の頃の写実であったと推考されることを重ねて指摘する。

このように、西行に事寄せた800年前説は極めて信頼性が高いが、この数値ははしなくも俊成が在世した年代にかこつけた従来の憶説の線と一致することになった。

この高い信頼性を持つ数値に準拠して、当時すなわち平安末期の盆玩を推考するに、この種の志向は、中国文人へのあやかりとして、平安時代以降宮廷人や僧侶の間に根を下ろしていた可能性が、下述するような社会事情に連なって、結論として導かれる。別言すれば、藤原氏の一門に列していた俊成が、後世の画人による作り事ではなく、当時の上層階級の間に介在していた風潮



藤原俊成の盆玩 「春日権現験記絵」の模本より

の一端として、庭前に盆栽を並べて賞玩する好尚に浸っていたとの見解もあながち無理な推論ではない。

(3) 禅宗の盛行と宋元僧の来朝 鎌倉中期に相当した中国の事情につき、南宋は北辺の蒙古に押されて衰運をたどってはいたが、人々は盛世の頃の世情を受け継いで豊かな生活を送っていた。すなわち、一例として、臨安（杭州）や揚州などの大都会では毎日のように花市が開かれて、盆景の老松老柏もその場に並べられ、庶人の手にも渡り、一方、士大夫は唐・北宋以来の「琴棋書画」の境地に身を置きながら自然讃美の思潮の深め、その一端に連なって盆景の風韻を

観照していた。

わが国と南宋との交流は大宰府と寧波との間を往来した民間貿易船によって極めて密接に続けられていたが、この船便によって、平安末期から鎌倉初期にかけ、^{ちようげん}重源・栄西・覚阿などの僧侶が宗教改革の方向を求めて海を渡り、ここに南宋で盛行していた禅宗を将来する機運が開かれた。

再度入宋した栄西は臨済宗を将来したが、叡山の奏請を入れてその弘通を禁ずる朝命が下されたにもかかわらず、鎌倉に下り、將軍源実朝とその夫人の支時を取り付けることに成功して寿福寺を禅寺に改組し、このようにして、禅宗を支配階層や武士などのいわゆる上層部に浸透させていった。

その間、栄西は京都に建仁寺を創建し、続いて建立された越前永平寺には道元が招請されて曹洞宗を伝えるなど、支配階層が禅宗に寄せた仏心の高まりはまことに急激であった。

ここに現われた禅宗の急伸に伴い、宋僧蘭溪道隆は衰微した宋の世をのがれて帰化し、招かれて建長寺の開山となり、続いて、南宗の滅亡を境にした前後数年の間に、宋僧兀庵普寧は浄智寺、無学祖元は円覚寺の開山として仰がれることになった。それらの禅僧は帰化し滞留して、執権北条時宗・同貞時などの帰依を支点としながら、禅宗の布教に勤め、かたわら將軍や天皇にも親近して、宋学・宋の思潮と習俗・文人高士の清興・その一端としての盆玩や玩石の風習などを紹介し、伝統的な唐風化の心象を宋風への傾斜に転換させ、かつその心象を抜きがたいほどの深さに発展させた。

鎌倉に五山が建立された年代に合致して、京都にも五山が創建された。このようにわずか数十年の短年月の間に多数の禅寺が開設されたが、それを可能にした裏面に思いを致せば、そこに支配階層の禅宗への帰依と物心両面にわたる支持とが改めて浮び上ってくる。

元によって起こされた文永(11・1274)・弘安(4・1281)の両役後、修交使として来朝した一山一寧もその後帰化して、建長・円覚・南禅寺などにとどまり、後宇多天皇や執権北条時貞などの帰依を受け、それらの最高権力者を頂点とする上層階級の間に南宋の遺風を追慕する風潮を定着させる核心となった。

宋・元僧の将来した宋風化の一端として玩石の好尚があったと推考されるが、間接的ながらその論拠として、後述するような、吉野の行宮における後醍醐天皇の愛石の故事、一寧に師事した虎関師錬の「盆石賦」の詠物などが掲げられる。なお、その後の「五山文学」の中に散見される禅僧による盆石への詠懐もまたこの系譜に属することと理合される。

(4) 盆山と盆石に仮托した社会的地位 平安時代からその後の長い期間にわたり、当時の絵画の上に残されている盆栽は「石付き」の範型を主体としているが、その頃の呼称は「^{ぼんざん}盆山」が一般的であり、時に「鉢の木」とも呼ばれていたと考定される。なお、「石付き」すなわち中国の「選石」に合致する範型にあらためて唐宋からの伝承を推測しておく。

俊成に関する画面に見る2杯の石菖盆は「青白磁＝影青」のように受け取られるが、それらは

年代的に対応する元からの海舶品であった可能性が高い。ただし、時代をさかのぼった南宋・北宋ないし唐を考慮の外に置くことの根拠を欠いていることも添えておく。

なお、海舶品であったとする私見につき、国内で帰化人李參平が磁器の焼造に成功したのは江戸時代に移行した直後の元和2年(1616)であり、さらに陶器ではあったが、尾張焼として施釉した盆器の焼成をはじめた年代は、江戸中期に下った享保年間(1720頃)と考定されなどの事情を有力な論拠として呈示しておく。

鎌倉時代から後の400年間、もっぱら舶載の盆器を供用していた由来は、世上にみなぎっていた唐物偏重の風潮に連なり、海舶した陶磁盆に社会的地位の誇示を仮託していたためであったと論断される。

上記した経緯を総合して、鎌倉・室町時代の絵巻物およびその他の絵画の中に散見される焼成盆はまぎれもなく海渡品であったと明言されるが、盆器に関するそのような事情は、間接的ではあるが、盆栽が成立しはじめた契機を中国に求めるゆえんである。

上述の見解に立って、俊成に取材した画面に一応の解釈を加えれば、「90才にも達した長い一生を歌の道にいそしんで、歴代天皇より厚い信任を受け、当時の貴族の常として、漢詩漢籍にも通じていたはずの学殖にひいでたこの雅人が、平安朝をおおった宋風化とみやび(雅)の風潮を継承して、南宋より伝えられた自然讃美の思潮と道家的な好尚に深い共感を覚え、またそのための器物などを入手した上で、盆山を庭先にすえた棚上に並べて観照し、禽舎に舶載(?)した珍鳥を放してその五彩を楽しんでいた」との可能性ともなって、想像の線に上ってくる。

(5) 一遍聖絵に登場する筑前の盆山 同じく後期の絵巻物、円伊(正安1・1299)「^{いつべんひしりえ}一遍聖絵」の第4巻第1段では、筑前の郷士某の館につき、縁側の端に1杯の盆山が描かれている。

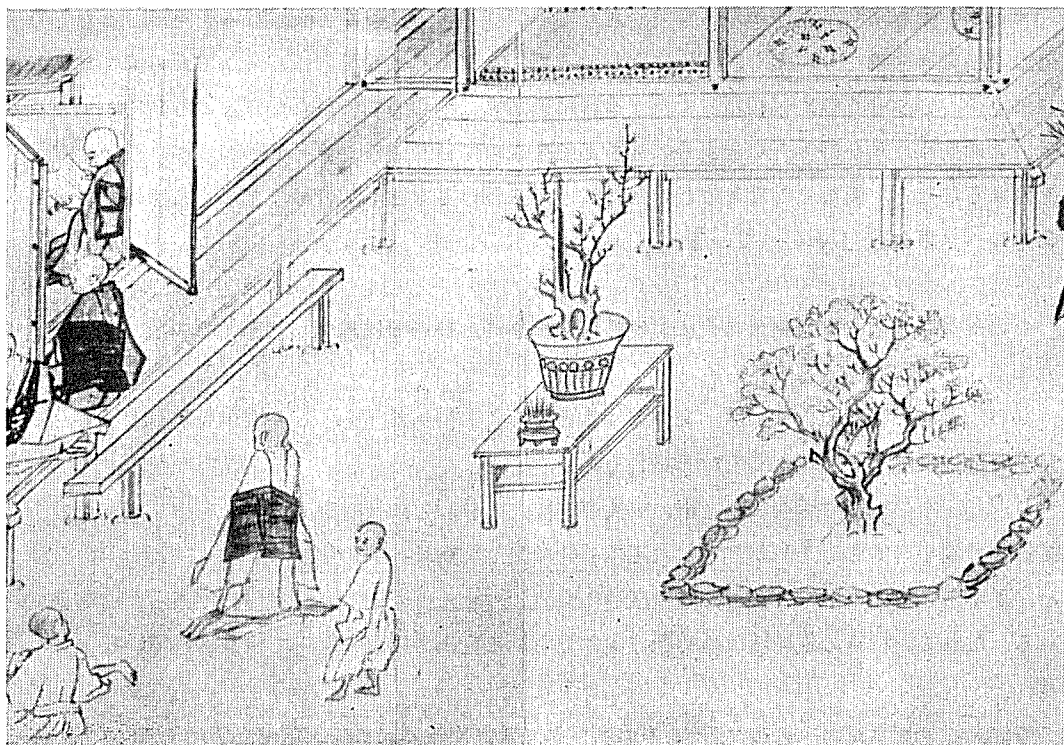
ただ、大和絵の手法に根差す本質として、画中に細密を求めることには限度があるが、取り分けその盆山の誌細は判別に苦しむ状態である。しかし足の付いた浅い寸胴状^{すんどう}の盆器(大型香炉?・曲物?)に樹木を植え石を添えている程度には看取できる。

なお、この絵巻は上人の死後10年目に完成しているので、年代的な開きには問題はない。

大陸に対して開かれていた海港大宰府に近接していた郷士が宋磁の花盆を手に入れて、盆山賞玩の風習にひたっていたとすれば符節が合致する。

まさにこの地域は、宋との交流に当って、先進文化を導入する門戸であったが、そのような経緯に加えて、近年鎌倉と大宰府から多量に上る宋磁の破片が発見されている事情を勘案すれば、上記した郷士の盆玩についての私見は附会ではなく、信頼性の高い考定であるとして提言しておく。

(6) 法然上人絵伝の盆山に見る技法 土佐吉光外7名(正安2・1300)「^{ほうねん}法然上人絵伝」もま



法然上人絵伝の盆栽に見る「神」の技法と太鼓胴の意匠
角川書店（昭和 36・1961）日本絵巻全集 3 集より

た貴重な資料である。その該当する画面では庫裡らしい建物の庭先に棚を置き、その上に「太鼓胴」の深円鉢に植えた「神」（主幹先端の枯れ）を持つ広葉の老木と、「袋式」（香炉状）の小鉢に入れたセキシウを、さらに別の画面では、読経中の経堂（？）の縁先に上げた「陣笠鉢」（摺鉢状円盆）に配した石付きの老木、合計して3点を描いている。

なお、老幹に「神」を付ける方式を採って樹容の向上を期していたことが看取できるが、この技法の登場は特記に値する事態であったことを指摘しておく。

また、「太鼓胴」中国名「鼓式」の意匠については、さきに「故宮藏瓷」につき、宋・鈞窯の伝世品の中から「洗」の1例を引いて記述しておいたが、その北宋の「洗」はこの「絵伝」に200～300年ほど先行した頃の焼造品であったと推算される。

画人がこの絵巻の上に描きとどめた盆器は元または南宋からの舶載品であったと考えられるが、「太鼓胴」に焦点を絞って、現代にもつながる意匠の踏襲につき、その由来を再考し、あらためてこの一点にも秘められている曲折に想到する。

（7）公家の盆玩 鎌倉末期の随筆文学「徒然草」に登場する公家日野資朝もまた好事家の一人であった。吉田兼好（元徳2～元好1？・1330～41？）「徒然草」2巻154段の資朝卿東寺の門に雨やどりの条につき、「この人東寺の門に雨やどりせられたりけるに、かたわどものあつまり

いたるが、手も足もねじゆがみ、うちかえりて、いづくも不具にことやうなるを見て、とりどりにたぐひなき曲物なり、尤も愛するにたれりと思て、まもりけるほどに、やがてその興つきて、見にくく、いぶせく覚えければ、ただすなほにめずらしからぬ物にはしかずとおもひて、帰りて後、この間うえ木を好み、ことように曲折あるを求めて目をよろこばせしめつるは、彼のかたわを愛するなりと、興なくおぼえければ、鉢に植えられける木ども、皆ほりすてられにけり。さもありぬべき事なり。」とのべている。

この一文の登場もまた鎌倉時代における盆山の急伸、ひいては来朝した宋元の禅僧がもたらした宋風化の発露であると考えられる。

なお、既往の論者の一部には、文中の「ことように曲折ある……」との表現を取り上げて、これが当時の常形であったとしている場合もある。

しかし、その極端な屈曲は説話中の当人の気性、すなわち、後醍醐天皇の意を体して鎌倉幕府の打倒計画を推進し、それが発覚した正中の変に際して斬殺の刑に処せられるに当り、詩を詠み、従容として死についたほどの剛毅激情に根差す、全く個人的な志向の現れであったと解釈される。なおこの私見の正当性は絵巻物の中に見られる盆山の樹容によって傍証されていると考える。

兼好の「さもありぬべき事なり。」との結びも、この文筆家が当時の実情から得た認識と、極端な曲折を排し素直を良しとする中庸に即した眼識の両面に発する章句であったと受け取れる。

(8) 盆玩の定着 従来の盆栽史家は、俊成の画面だけを偏重したためか、「盆栽はまず貴族社会からはじまった。」とする結論を導いた。

しかし、既述したように、平安末期から鎌倉後期にかけ、「盆山」が史料の上に登場し始めた時点では、公家に加えて僧侶郷士をも含む階層、すなわち朝廷の周辺だけにとどまらず、各界にもわたる上層階級が母体となっていた。

なお、盆栽が成立した契機は唐風化宋風化の風潮であったと推察しておいたが、次に各階級別につき、あえて割り切れば、僧侶の場合は留学僧の将来した見聞とその波及、公家に関しては遣唐使のもたらした中国貴人の清興と後世にも及んだその伝承、加えて、来朝した宋元の禅僧による「清玩」の急昇。郷士については、当人が先進文化を導入する門戸に近い土地の土豪であったとの地理的特殊性などが掲げられる。

庶民の側につき、当時幕府や朝廷およびその周辺者の苑池は「庭者」と呼ばれた下人によって手入れが行なわれていたが、かりにそのうちの何人かが、主家にならって盆山の所有を意図したとすれば、手近かな植物と板切れで、容易に望みがかなったはずである。

ただし、庶民の置かれていた当時の社会的事情は、市井における生活断片を主題として画幅にのぼせたり文学にとどめたりする状態にはほど遠く、また人々の幕し向きからしても、物心両面で、好尚にひたる余裕は持合せていなかったと考えられる。

この点で、庶民の盆栽が絵画や版本などの形をとって紙面に登場するようになったのは、文化

が庶民的な傾向を強く持ちはじめた江戸時代の下ってからであった。

(9) 天皇と禅僧の玩石 鎌倉幕府の倒壊につながった元寇の役は、戦勝にもかかわらず、敵の所領を奪う形の戦争ではなかったので、戦後幕府は論功行賞として土地を与えるすべもなく、ために武士は、御家人非御家人の別なく、幕府に対して不平不満を沸き上がらせ、また参戦領主の疲弊も所領の質入れや売買をするまでに深刻化した。

幕府の統制力の急落は下部に波及して、本所(荘園主)対荘官・領家対地頭などの間における上下関係の乱れとなり、他方、皇位継承にからむ二皇統間の係争・後醍醐天皇による倒幕計画とその露見・天皇の笠置山潜幸・天皇の配流と脱出・日野資朝らの処刑・足利尊氏の加担・鎌倉幕府の滅亡・天皇親政の復活・尊氏の反乱・南北朝の対立・吉野行宮での天皇の逝去等々、世情はめぐるましく変転した。

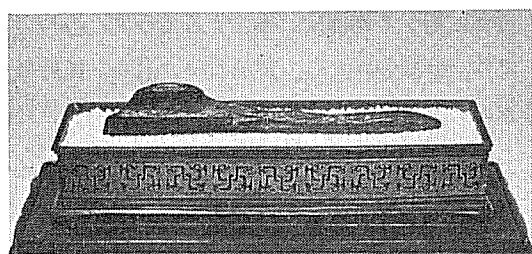
流転激動の渦中にあった天皇は、吉野の行宮で病没されるまでの2年間、常に愛石「夢の浮橋」を身近かに置いて賞玩されたと伝えられる。なお、この名石は中国江寧山の靈石といわれ、石の底には同帝の宸筆と鑑定される朱漆の石銘をもち、後世最高権力者の間を伝世し、現在徳川美術館に収蔵されている。その伝世につき、歴代の所有者はこの石に地位の象徴を感じていたとも受け取れる。後述するように、その心象は他の権力者他の名石についても同様であったと結論される。

この変転の時代を生きた禅僧虎関師錬は仏神儒を兼修し、また元僧一山一寧に師事して宋禅の真髓を学び、円覚寺・東福寺を経て南禅寺の住持となり、後村上天皇から国士号を賜わったほど朝野の声望が高く、詩文にも長じていた。

この高僧は、吉野における天皇の玩石に年代が符合して、「盆石賦」を詠懐し、「1尺足らずの盆にのせた数寸の石がよく山水の広大な風趣を表現する」旨を残している。

天皇や師錬にまつわる盆石観照の故事は、その後の五山文学の中に見る同種の詩文を合せて、当時における朝廷の周辺および公家に匹敵する存在であった仏寺等で、玩石の好尚が急騰していた事態を示唆したことと受け取れる。

ここに重ねて、来朝した宋元の禅僧とのつながりを推察しておく。



後醍醐天皇の遺愛石「夢の浮橋」
日本水石協会(昭和45・1970)
「第10回日本水石名品展」より

2) 室町文化の中の盆山(巖上樹と盆石)

(1) 室町初期の過差と盆山 京都に幕府を開いた尊氏は、北朝をたてて公家の荘園を保護し、各地に管領守護などをおいて、社会的秩序の維持を計ったが、反面、政権内の不和確執、武

士層をおおった「婆沙羅」(秩序無視)の時流と「過差」(過度な華美)の横行は、権威無視下剋上の底流となって、幕府の支配力を揺がした。

尊氏が手近かな施策として打出し師錬が起草した17条から成る「建武式目」の第1条では、「近日婆沙羅と号してもっぱら過差を好む……もっとも厳制あるべきか。」とあり、第2条では群飲佚遊^{いっ}を制せらるべきこととして、「好女の色にふけり、博奕^{ばくち}の業におよぶ、此外またあるいは茶寄合^{よりあい}と号し、あるいは連歌会と称し、莫大の賭におよぶ……。」と掲げているが、当時の茶は4種目の茶を百服にたて、洛北梶尾産を本統とした当時の評価に沿って、本非を飲み分けるといわれる闘茶の形をとり、特に盛行した武士の間では、後世の太平記(正平21・1366)にも書き止められているように、かって宋から海舶した豪華な衣服を着け、金銀づくりの太刀をはき、机上には多数の唐物を積み重ね、また本朝の重宝をそろえ、その中で高額な金銭をかけて、茶の本非高下を争った。

ついで茶事が終ると、山海の珍味を集めた酒飯をくらい、さらに伴い來たった田楽・猿楽・白拍子・従者などに、惜しげもなく賭銭や唐物の書画什器などを配り棄てる有様であった。

玄恵法印(鎌倉末?)「喫茶往来」は茶の席で、左に唐絵である思恭の彩色した釈迦、右に牧溪^{ぼく}の墨絵の観音を掛け、さらに脇絵として普賢・文珠の画幅を添え、手前に故銅(からかね)の花瓶^{かへい}を置く有様を述べている。これは、仏家的ではあるが、茶の席に現われた時流の一面であった。

このような形で、当時の実力者は闘茶を仲立ちとして自己の権勢を誇示したが、その誇示の媒体に唐物が供用され、ひいては世上の唐物趣味を格段に高揚させることになった。

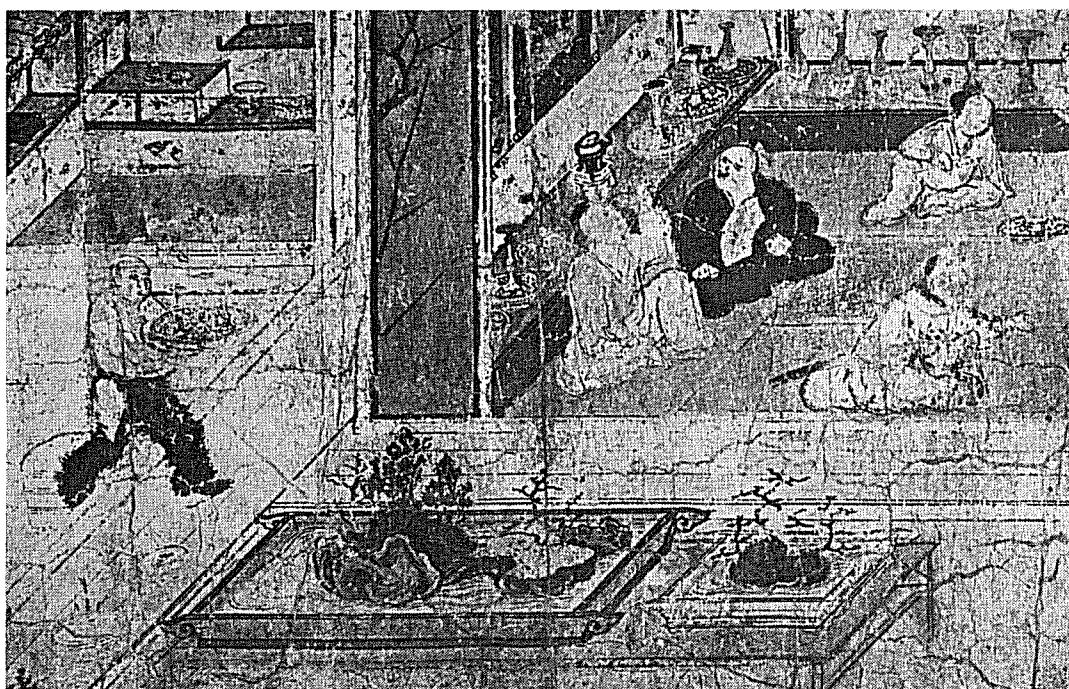
ついでに、闘茶そのものも宋代習俗の踏襲であった。

吉野時代およびその前後、倭寇は、元の衰運と鎌倉室町兩幕府の統制力低下に乗じて、とみに激化したが、当時の高騰した唐物の需要はある程度その頃の略奪品によって満たされていた。この点に関し、中国や朝鮮で略奪する主たる対象は美術品であり、外に活動の根源となる食料品があった。

唐物に対する傾倒は、後述するように、当時の「花合一名花瓶合^{はなあわせ}」の領域にも見られたが、ここでは、公武各界とも、参会者は「会所^{かいじょ}」に持寄った花瓶そのものの高下をきそい、本来の花草竹木の布置はほとんど問題外とされていた。吉野時代末の画作と考定されている「祭礼草紙」の一コマがその花合せの情景を、含蓄をこめて、後世に伝えている。

「物合せ」の雅遊は、唐の風習を取り入れて、平安朝の宮廷人の間に盛行し、国風化されて様々な形をとったが、年代が下った吉野時代およびその前後の頃の闘茶や花合せは、根底では清興に発するとはいえ、本来の精神を喪失した形骸^{がたい}に因り、唐宋の文物や文人流の慣習を仲介として、自己の権勢や社会的地位の高さをひけらかす俗流の最たるものであった。

後掲する花合せの画面には花台を供用した「盆山」の2杯を配しているが、当時の花瓶合せの本質を踏まえるならば、権勢者は縁先に布置する盆山にも同じく地位と素養の誇示を潜在的に仮託していたように推察される。重ねて、変転・浮動・下剋上の世にあって、高位の座についた人々が、地位のあかしを盆山と盆石に求めていたとの推察もあながち附会ではないとして再記して



「祭礼草子」に見る「花合せ」とその場を飾る「盆山」
水尾比呂志（昭 41・1966）「いけばな 花の伝統と文化」より

おく。

（2） 慕婦絵詞に見る盆山の風韻 室町幕府草創の頃、前記「祭礼草紙」と年代を接して、本願寺三世覚如宗昭の子慈俊が亡父の伝記をつくり、藤原隆章・隆昌が絵を、三条公忠外数人が詞書を分担して、観応2年（1351）に「慕婦絵詞」10巻が完成した。この絵巻物も当時の諸事情を視覚によって看取する上ですぐれた資料であるが、自然観照の面では、特に宋元の花瓶による「立花」、同じく海舶した盆器による盆山などの事情を後人に伝えている点、さらに、後者では、卓越した樹容とそれに合わせて適切に選出されている盆器が図写されているなど極めて高い価値をもっている。

なお、全巻を通じ、次記する8点の盆山が描かれていて、当時仏寺において盆玩が盛行していたことをしのばせる。

巻1 第3段 「宗昭天台宗を学ぶ」

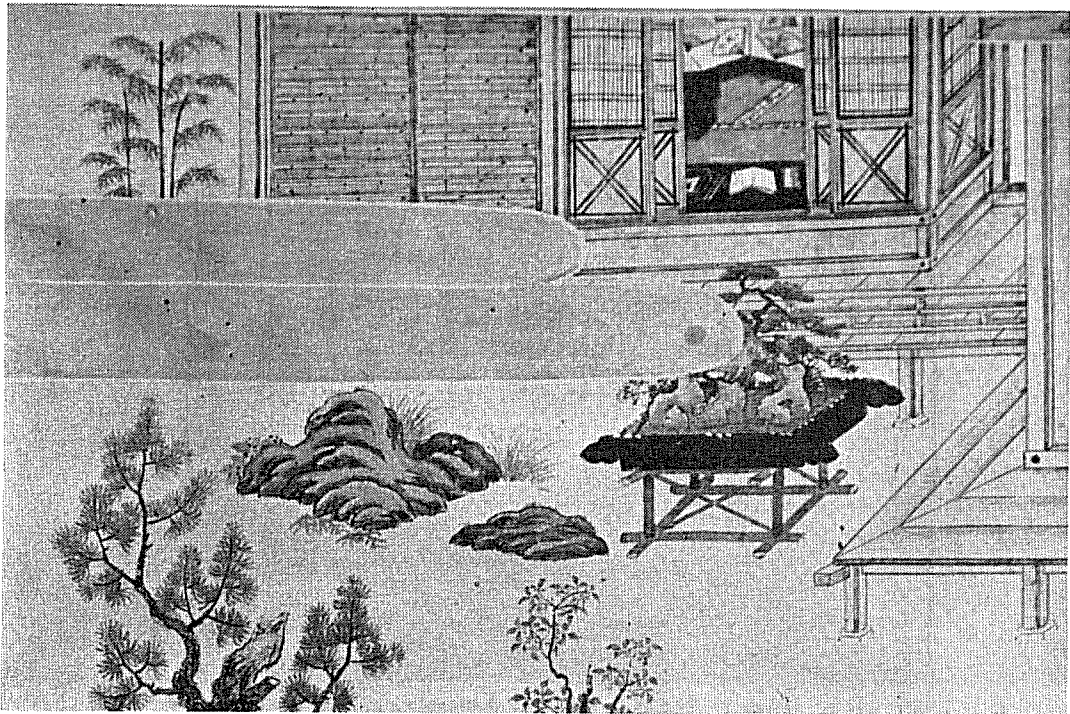
堂宇に囲まれた中庭に竹で組んだ台を置き、その上の大型の花台には水をたたえ、中にすえた奇岩には屈曲した1本のマツと2本の広葉樹を配する。（後掲）

巻2 第2段 「行寛に法相学を学ぶ」

縁先にあげた長方花台の石付セキショウおよび円鉢の盆石計2点を描く。

巻9 第2段 「隆存 阿闍梨に和歌を贈答す」

縁側に接して立てた青竹の丁字形台3本に、それぞれ、宜均らしい釉色をもつ袋式梅花文



「慕婦絵詞」巻1の中の巖上樹
斎藤幸蔵編（昭和 17・1942）「続日本絵巻物集成」4集より

円盆の老松（？）、足付円盆の古梅（？）、袋式斜影文円盆に植えた双幹の海棠（？）を載せ、共に鉢内を白砂で化粧する。（巻頭 原色図版）

巻10 第1段 「口伝書を製作す」

縁先に袋式石菖盆と切立石菖盆の2杯を並べる。

外に、巻1第1段「宗昭生誕」の場面で、庭前にある池畔のマツが蛇行形の幹をもち、後世の江戸時代の盆栽に見る姿態の主流であった「蛸作り」の祖型を思わせる。

ただこの巻1は巻7と共に、中期の將軍義政が借りだしていた間に紛失し、その頃補欠されたので、その意味では、該当する巻の中の範型はむしろ室町中期とすべきであるとの疑問も持たれる。しかし、その「巖上樹」の姿態は既に平安末期以降の伝統ともなって存在した点から、原作補作に関連した年次の開きは論議の対象にはならない。

いずれにしても、従来一部の盆栽史家が「蛸作り」を目して、「明治初期、素養のない植木屋が案出した」との言説を述べてきた点については、更めてその誤認を指摘しておく。

（3）義満の禅宗保護と花御会 義満は正平21年（1368）3代將軍の座についたが、たまたまこの年には、大陸で明が元を滅ぼし、漢民族の王朝を回復した。

この將軍の施策が実効をあげるにつれて、世情は急速に安定し、辺民の大陸沿岸への侵寇は下火となり、代って、「勘合貿易」が日明間を結ぶ主体となるいとぐちが開かれた。

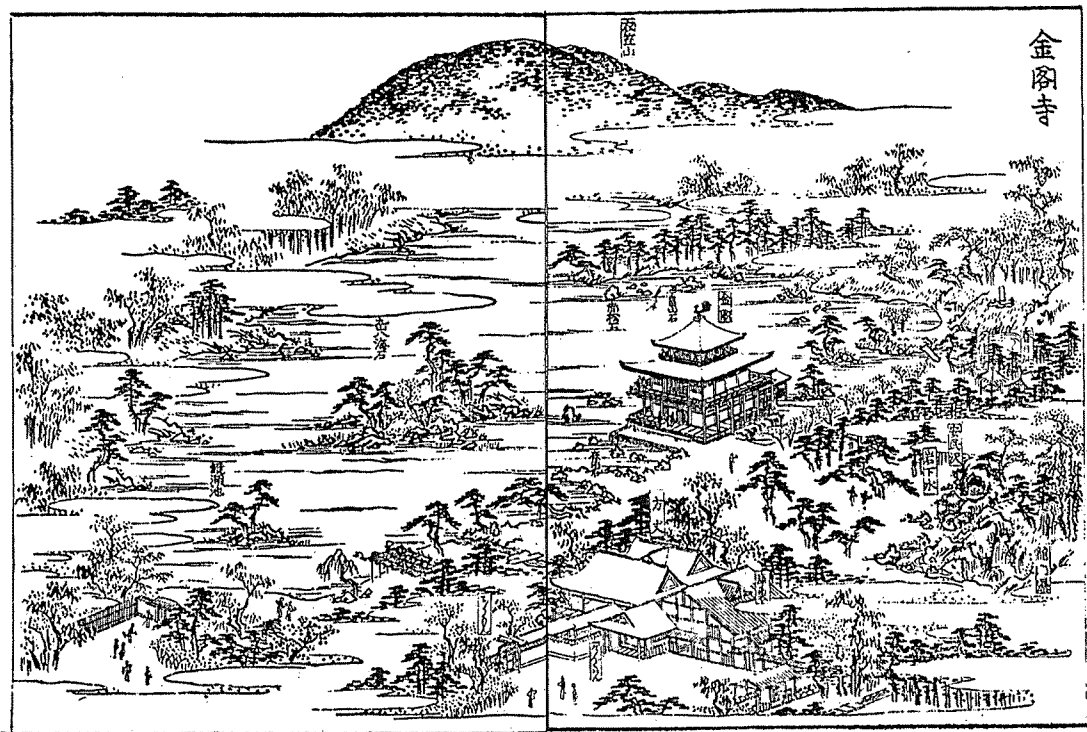
この將軍は尊氏以来の方針に従って禪宗を手厚く保護して五山十刹を完備し、相国寺を創建して五山に列し、その寺域内の塔頭鹿苑院には五山僧侶の進退を担当する僧録司の制を置いた。なお、その院主は代々蔭涼軒主を称し、將軍に親近し、本来の禪僧の出所配転に加えて、政治・経済・文芸なども筆録したので、室町幕府とその周辺についての貴重な史料となっている。

禪宗はこのようにして栄え、また將軍の志向に添い、学問詩文を志す禪僧が輩出して五山文学の最盛を導いたことも加わって、禪的な風潮は世上をおおったが、わが民族の本性である自然即応の精神は、当時の時代思潮を強く受け止め、「侘び寂び」の心象となって昇華し、その後にも及んで、民族精神として定着し継承されていった。

ここに日本の盆栽のもつ本質、盆栽を観照する看者の精神的なより所が明確な姿を整えた。

室町頭初の唐物趣味は、闘茶と花合せに例をとって既述しておいたが、その延長を大井ミノブ(昭和 39・1964)「生活からみたいけばなの歴史」から抄出すれば、「仏教の伝来に伴って供花が仏への供養の一つとして盛んになったが、やがて仏教の庶民化(註、時宗・浄土宗などの普及)につれて、供花は庶民の身近かな功德として生活の中にとけこんだ。

室町前期になると、さらに観賞花へと発展したが、その著しい例として、足利義満は唐物趣味に心酔し、平安時代からの伝統である物合せの一変形として、花瓶中心の花御合をしばしば催



金閣の池泉にすえられた「九山八海石」
秋里籬島(安永 9・1780)「都名所図会」より

し、海舶した花瓶の高下をきそった。

七夕は中国の風習をまねて、奈良時代の朝廷に入り、平安朝に移ってから、詩・和歌・管弦・連句・連歌・けまり・酒などを取入れた七遊ななあそびに発展して、2星への供養となった。

義満はこの平安朝に根差す風習を花御会に結びつけて、七瓶花合しちへいはなあわせを催したが、席上、人々は和歌や連句をよみ、茶礼を行ない、干飯・饅頭・菓子（果物）などを食して、大いに楽しんだ。」

その席は七夕の翌日一般に公開されたが、人々はその場に集められている唐物の花瓶・画幅・什器などによって、今更のように、將軍や参会者の権威を身近かに感得した。

明との修交を企図した將軍が明使を兵庫の浜に迎えるに当って、宋服を着たとの故事もまた唐物への傾倒に根差していた。

義満は壮年の頃に將軍職を幼小な義持に譲り、北山に建てた金閣に移ったものの、政務の実権は手中に収めていた。この実権者は上記した楼閣の前面に広がる「鏡湖池」の中洲に奇石「九山八海」をすえて賞玩したと伝えられるが、この玩石の好尚も度外れた唐物趣味の具現であったとの推測が成り立つ。

なお、この石銘は範型と共に室町時代はもとより現代にも及んで、玩石家の間に継承されてきた。また、この範型が中国古来の「研山」一例として南唐李後主に発した「海岳庵研山」「宝晋斋研山」などの垂流であるとする事も行き過ぎではないと考えている。

（4） 観阿弥の看取した鉢の木（盆栽） 將軍義満に認められて手厚い保護を受け、民衆の間で盛行していた平俗な「猿楽さるがく」を貴族的な境地に引き上げた観阿弥（観世清次）は、後世、謡曲観世流の始祖と仰がれている。その手になった一曲「鉢の木」は、取材を鎌倉中期のかつての執権最明寺入道時頼に関する説話に求めているものの、作中に記述されている「鉢の木」の諸事情は、時頼とこの能役者との間に100年の開きが存在する点から推察して、鎌倉時代の史料だとしてきた一部人士の言説に対し、筆者は当該戯作者が在世中身近に見聞した事情に外ならないと反論する。

この構想の下では、既に取上げた「慕婦絵詞」や「祭礼草紙」に年代を接して、共に従来盆栽が空白ないし不振であったと考えられてきた室町時代、適確には、室町初期の描写であるとする。なお、中期・後期も順を追って論究し、もって、定説ともなっていた「空白」を埋めて行く。

作中、地頭莊官の正邪を正すべく、お忍びで諸国を行脚していた時頼が、大雪の夕、上野こうずけ佐野の在で、落ちぶれた郷士佐野源左衛門常世に一夜の宿を乞い、……「夜の更くるにつれて殊の外夜寒に候。焚火をしてあて申したく候へども、恥づかしながらさやうの物もなく候。や、案じいだしたる事の候。鉢の木を持ちて候程に、これを伐り火に焚いてあて申さうずるにて候。」「何と、鉢の木を伐り火に焚かうずると仰せ候か。」「さん候。」「お志はさる事にて候へども、それは思も寄らぬ事にて候。」「某もと世にありし時は鉢の木を数多あまた持ちて候が、散々の体に羅り候間、木好きも無益と存じ皆人に参らせて候。さりながら未だ三本持ちて候。あの雪持ちたる梅桜松に

て候。」……「枝を矯め、葉を透かし、かかりあれと植え置きし、其のかひ今は嵐吹く。松は本より煙にて薪となるも理や。」

この労作によって、当時「鉢の木」と呼ばれた盆栽が、文化の中心であった京都や鎌倉を遠く離れた寒村においても、地侍などに賞玩され、かつ一人で数多く所有することもあり、さらに樹種も多岐にわたり、また風情を向上させ維持するために、行届いた整枝葉透しの手を加えていたなどの諸事情が感得できる。

観阿弥が文字に書き止めた当時における「鉢の木」の手入れや風情を、一例として年代が接した「慕帰絵詞」の中のマツ・ウメ・カイドウの3杯に重ねてみると、この原作者が描写の準拠としたであろう特定の松・梅・桜の3杯、ひいてはその3杯の背後に控えるその頃の盆栽の一般的な事情がかなり明確な姿で浮び上ってくる。

(5) 義政の好尚と東山文化 義政は幼小にして8代將軍の座についた。治世の始めの頃には管領畠山持國らの補佐によって事なきを得ていたが、長ずるに及んで政治に飽き、夫人富子や側室らに政務への介入を許し、また一任することにもなって、もっぱら淡雅を求め、同朋衆として、書画・唐物の古書画什器の鑑定・連歌・茶事・作庭・盆玩・玩石などの数寄の分野に長じた趣味人、中尾真能・真芸・真相の父子3代すなわち能・芸・相の三阿弥や村田珠光らを召し出して日夜雅事にふけり。さらに、後年には東山に山莊慈照寺を建立し、ここに移り住むことになるなど、生涯の後半に始まった戦乱の世情をよそに、風流生活への逃避を急速に深めていった。

室町時代後半の文化を特色づける、建築についての書院造りと茶室の創始・能阿弥世阿弥を承けつぐ能楽の発展・書院茶の登場に続く村田珠光による「侘び茶」への転進・作庭に見る大徳寺大仙院の枯山水や竜安寺の石庭のもつ風格・周文能阿弥らによる水墨画の登場と雪舟によるその大成・池坊専慶の打ち出した立花の確立など、「侘び寂び」に徹した東山文化は、義政の志向を起点として急速な展開が見られた。

前述した幕府に関する公式記録「蔭涼軒日録」から、青壮年に達した頃の日常生活を拾えば、歴代の將軍にも増して、連日のように諸五山諸寺院を訪れて焼香し、茶や精進料理のもてなしを受け、花や紅葉などを楽しみ、また、本尊・地藏・古銅（青銅）の香炉・鑪石（真鑪）や青磁の花瓶などを寄進し、一方寺院側は「御成」に際し、小袖・段子（緞子）・繻子・盆・扇子・書画・香合・花瓶・高檀紙・杉原紙などを「御引物」とし、他にも、御所に季節物として、菓子（果物）・松茸・新鮮などを上進するなど、極めて緊密な交流が保たれていた。

献物とされた絹織物・陶磁・書画・堆紅（朱）盆などは舶載品であり、ここにも唐物偏重の伝統、ひいては、貿易船のひん繁な往生を傍証するより所がある。

盆の一部につき、桂製と注記しているのは盆石をすえる器物としていた「かつら盆」であったと考えられ、さらに推測の範囲を広げれば、「日録」中には端的な言及を欠くものの、関連する文面を総合判断した結果、原文中で注記のない場合には、「盆仮山・盆山」（水盤物）などに供用する水盤も含まれていた可能性が浮び上ってくる。

義政の治世に相当する、明中期および李朝初期にわたる大陸の盆景事情は既に述べておいたが、この両国の盆器・盆樹・盆草などが、諸寺院側の持注もあり、貿易船や遣明使などのひん繁な舟運によって海舶され、続いてその一部は寺院へのお忍びに際して、將軍の意を迎えるための「御目に懸け奉る諸盆山・石上諸草」となり、また「進上」されて「被召置」となったとの推論が導かれる。

ただし、義政の盆假山に関する好尚、ひいては、当時の盆栽事情が鎌倉吉野時代以降の伝承に連なっていたことは明白であり、その根拠とする一例として、義政が本願寺に伝わる慕帰絵詞を借り出して目を通していた事実を掲げておく。

その第1巻および7巻は將軍の借り出し中に紛失したので、当時補足されたが、この点からすれば、第1巻中の水盤物に見る「盆假山を船にすえ水をたたえる」範型は、当初の画卷についての記憶をたどって再現したか、または室町中期にも及んで踏襲されていた約100年前の「祭礼草紙」流の方式を画人が身近かな見聞として取り上げたのか、取捨を決め難い問題である。

ただ、当該史料中に散見される義政の盆玩に関する多数の個所につき、大局的な結論を引き出せば、後者の側を主とする。すなわち、論題となった様式は過去をうける伝承であり、かつ、当時の常法であったと考定される。

(6) 蔭涼軒日録から見た義政の盆玩 「日録」の中に厳存する「石上諸草」の用語に則して推量すれば、その頃「石上樹」の呼称も通行していた可能性が考えられる。

「石上諸草」や「盆假山」をすえる器物を「船・台」と呼んでいたことは明示されているが、関連して、この「船」と同義の「花台」(石台)の文字は、既述したように、後年の江戸前期に板行された三之丞伊兵衛(元禄5・1692)「錦繡枕」(後年の改称長生花林抄)の中に図を添えてしるされている。この点で、現代にも伝承されている「花台(石台)」の供用につき、器物としては平安・鎌倉・室町時代の「船」の後継であり、呼称が「花台」に改まったのは、江戸前期の頃またはそれ以前であったと結論される。

「日録」中から義政の盆玩を拾えば、寛正から文正の年代にわたった傾倒振りが、克明な記述となって、随所に散見される。

次にその数例を抄出しておく。

寛正4年(1463)5月7日、諸五山中の盆假山を御覧なされとのことであるから、それを所持する僧は皆一たん蔭涼軒(相国寺塔頭鹿苑院)に持参し、千秋刑部少輔(披露奉行)がそれを奉る旨を諸五山に触れた。(原文、擬漢文、以下同様。)

5月8日、前日のお申し出によってまず愚老(蔭涼軒主真榮)が所持している盆山をお目にかけ奉った。所々から献ぜられたのは28箇であるが、その内の4箇を召置された。愚老の献じた2山の内、小楓と五葉(松)の2樹を召置なされた。これはもっとも光榮とするところである。

5月10日、諸五山諸寺院の盆山をお目にかけ奉り、千秋刑部少輔がその詳細を説明申し上げた。すなわち、曹源院盆山、石は美濃石、樹は柏森(真柏)2株、梅津長福寺盆山2箇、石は

愛宕石^{あたご}、うち1箇は五葉他の1箇は柏森。南禅寺栖真院盆山、石は美濃石、樹は柏森1株と躑躅^{つづじ}1株。この4盆山は、千秋刑部少輔を介して、愚老が預置しておくようお言葉があった。皆船がない。4盆山以外は返下された。

5月17日、盆内に諸草木を植えた13箇を寛正3年4月27日愚老に預下されたが、それを千秋刑部をして（御所に）召された。ただし、このうち青磁盆で紋は牡丹の1対、植えられているのは芦^{あし}、銅盆で中の石上に南天竺（ナンテン）を植えている計3箇は召置なされ、その外の9箇は元のようにお預けになり、保養せよとの別紙が添えられていた。

3箇の盆を（保存のために）御倉につかわ（遣）された。

5月22日、寛正3年4月27日に小盆諸草12箇を預下されたが、それらの諸盆山並びに石上諸草をお目にかけ奉った。それらとは、

1. 古銅の松皮形盆で中の石の上には石穀^{せつくく}。
2. 青磁坪^{へい}（平＝浅）盆、紋は牡丹、芦。
3. 青磁坪盆、迎涼草（ウラハグサ＝風致草？）。
4. 古銅方形盆、菊銘石（菊石？）に観音草。
5. 青磁坪盆、足は鬼面、石菖。
6. 古銅平盆、石穀。
7. 青磁平盆、石菖。
8. 古銅方盆、石菖。
9. 青磁牡丹文平盆、木賊^{とくさ}。
10. 古銅円盆、南天竺。
11. 青磁坪盆牡丹紋、芦。
12. 古銅円盆、石穀並びに忍草^{しのぶぐさ}（シノブ）。

である。これらを2年間保養した。千秋刑部少輔と河原者の兩人がこれを奉った。

（外に）寛正4年5月22日千秋をもって預置された以前の12箇を皆（御所に）召した。

諸盆を御倉につかわされたと承聞した。

夜に入ってから、以前預置した五種、1青磁盆に蘭、2小石に忘草^{わすれぐさ}（ホンカンゾウ）と石菖、3小石に石菖石穀並びに岩檜^{いわひば}、4小石にキホフシ（ギボウシ）、5木上に石穀忍草石菖、を重ねて預置なさる旨を千秋が御所から奉ってきた。

文正元年（1966）4月17日、鎌倉主君（管領）から盆山が献ぜられた。その山上には富士松（カラムツ）11株を植えてある。（公方様は）億阿弥を介して預下された。この山は奇石奇松、その秀色はすばらしい。世に稀に見るものである。

6月15日、愚老に預置されていた富士松の盆山を召還なされた。内裏に献ぜられるためである。御使者には億阿弥が当る。その船には黄金がついていて、台には紀（州）沙（砂）を盛る。この紀沙は公方様の考案である。

以上、室町中期の盆栽事情を理解するため、冗長をいわずに要所を抄出したが、ここに引用した断章およびそれら以外にもわたって、次のように要約される。

樹も草も共に石まれに枯れた根株上に植え、それを水の盛られた器物の中にすえる、現代名のいわゆる水盤物が主流を占めて、そのための器物には、木片で組立てた「船」、青磁・青銅・真鍮などの長方・方・円などの形をした浅鉢当時の呼称坪（平）盆などが供用されていた。

盆内に上げられた植物の種類は多種多様で、ミヤマビャクシン・ゴヨウマツ・カラマツ・ツツジ・ナンテン・マユミ・コウシンバラ・シュロ・タケ（小竹）・セキショウ・セツユク・ホンカンゾウ・ギボシ・カンノンソウ・アシ・ウラハグサ（?）・イワヒバ・シノブ・トクサなどにわたった。

文中石上樹・石上諸草が主体を占めている事態は、伝統とはいえ、義政の志向が大きく反映したためと推察されるが、樹草の種類についての選択にも同工の基調が感得される。

義政は1つの「盆假山」をしばらく観賞した後、軒涼軒主に預けて保養を命じていたが、行文のあやから軒主が培養の妙手であったこと、御所での手入れには「河原者」二郎五郎と彦三郎が当たっていた事情などが汲み取れる。

内裏に富士松の盆山を献ずるとの片言は、盆栽史上で朝廷と盆栽とを関係づける意味から、希少な一事であったと指摘しておく。この点で、後花園天皇もまた盆山に関心を寄せておられたと推察される。

盆石については、寛正4年（1463）4月26日、すなわち盆假山に関する記録が多出してくる直前に当って、「山海の奇石66箇、公方様より預下せられた。」との断章があり、筆者の判断では、この頃義政の好尚が盆石を去って盆假山に移った。との筋書きを立てている。

（7）室内飾りとしての石菖盆と砂之物 義政が山荘慈照寺の書院飾りに石菖盆を供用した旨が「東山殿御飾記」に示されているが、その盆草は中国の古法に則し、一旦根を洗って石に付け、それを小石や砂で盆に植え、清水を注いで培養したものであったと推測される。

セキショウの砂植えは盆内に清浄感を求めて工夫された方式であったと理解出来るが、この心情につき、絵巻物の中の俊成の寄植えや本願寺の学問所の縁側に接する3杯の盆栽は、地表を白砂でおおっていて、当時、盆内の土に不浄を感じていた時流を示唆している。さらに加えて、このような白砂の化粧にもかかわらず、盆栽はせいぜい縁側の端に上げた位置で賞玩されていたことを画人は絵筆によって物語っているが、盆栽が室内に上げられて、机上や床の間を飾るようになったのは、一般的には、現代に近付いた大正年代であった。

「立花」^{たちばな}は室町時代の思潮の中で、知識階層の男子のたしなみとして著しい発展を遂げ、法式化が進んだ。その範型の1つである「砂之物」は方形・円形などの古銅や陶磁などの浅い容器に風格に富んだ老松の枝や竹幹などを立て、季節の花物などをあしらい、器内を白砂で満たすものであった。

この「砂之物」は、室町時代には、くつろいだ気風をもつ「常の間」で、床脇の低い棚の下段に飾られたが、この位置は後年の明治 20 年代に料亭を会場とする盆栽の「席陳列」が始まると、そこが選ばれることになった。

この経緯から筆者は、明治の趣味家が料亭に盆栽を上げて布置するに当り、かつての「砂之物」の位置に想到したと推定する。

低い棚の下段に飾られる両者の間には、先覚の想到を自然的に誘った必然性が感じられる。

ついでに、室町後期の文阿弥流の立花では、改まった気風をもたせる「御成の間」につき、「押板」(床の間)の門口に応じて、一幅の「中尊絵」やさらに「脇絵」を添えた「三幅一對」・「五幅一對」などを掛け、その「押板」上に「香炉・花瓶・燭台」の



文阿弥花伝書に見る「砂之物」
水尾比呂志 (昭 41・1966)
「いけばな 花の伝統と文化」より

三具足 (三莊嚴) ・その左右に花瓶を加えた「五莊嚴」等の飾りを布置する方式を採った。

筆者は明治年代に創始された「席陳列」で床の間に書画の佳幅を掛け、正面に香炉をすえ、横に花瓶や果物の盛籠を飾った流儀の発端を上記した室町後期の「押板飾り」の方式に求める。

室町後期以降、上記の様式に因って床の間を厳肅莊嚴な場にする慣習が強く定着し、加えるに、土を不浄視する前時代からの伝承も背景として作用したためか、盆栽を床の間に飾ることは、近世までの長い間意識の端にさえも上らないで経過していった。

後年の明治時代、盆栽を芸術品と感じ、その所有と観賞を上層人の教養とする風潮が醸成され、さらに仏心の低下もあって、「立花」の方式を承ける「押板飾り」の定型がすたれはじめ、代って盆栽を床の間に上げる基調が醸成されていったと推論される。

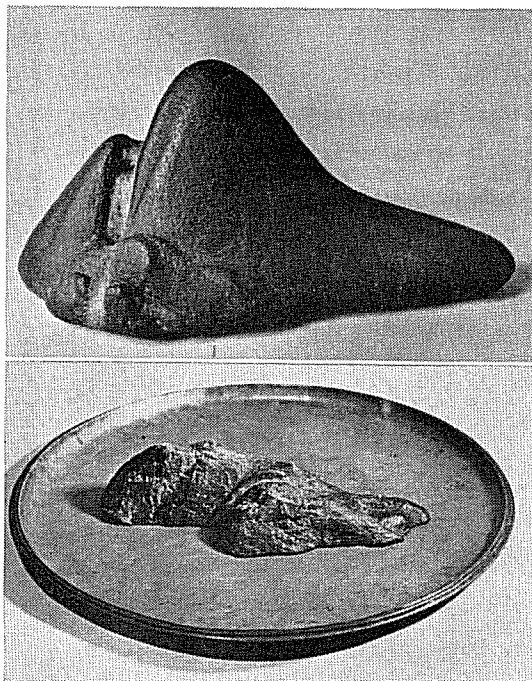
(8) 富士山形の盆石 盆石の好尚は、既述した経緯をとり、鎌倉後期から室町初期にかけて、にわかに台頭したが、この時流に連なって、義政も盆石に深い関心を寄せていた。この將軍の遺愛石「雄の山」が三十三間堂本坊に伝えられ、同じく「未の松山」は 100 年後に織田信長の手に渡り、ついで曲折を経て本願寺の所有に移り、寺宝として今日に及んでいる。

義政の遺愛石を介して当時の傾向を推察すれば、吉野時代およびその前後の頃の盆石が「夢の浮橋」や「九山八海石」から看取されるように、中国的な気配をある程度もっていたのに対して、その後国風化が進み、「富士山」を目途とした「遠山石」に発展していったと推論される。

なお、この範型への転換を着想した玩石家の氏名や年代を同定するための資料を欠いてはいるが、しかし、まれに見る多芸多才な教養を身につけていた同朋衆の一人能阿弥につき、江戸中期の雅人木村孔恭（兼葭堂）は能阿弥の案出した手法を当人にかかわる伝承に即して、「能阿弥伝盆山式」として書き止めていることを添えておく。

義政の頃に創案された書院造りにつき、当時の「押板」（床の間）は間口が広く奥行きが浅い型式であったが、この大床を生かした「書院茶」の席で、能阿弥は義政の意を体して新規を計り、墨跡を掛けず、瓶花を飾らず、中央に3個の石を立て、備前砂を打ち、その石の由来記を添える流儀を編み出した。

ついで、後年の室町末に当り、富士山形の盆石（盆石）と備前砂の取り合せに釣香炉を加えて、立ち昇る香煙を雲のたな引きに見立てる創意が將軍義輝の歌会に登場した。



義政の玩賞した「雄の山」と「未の松山」
日本水石協会（昭 48・1973）
第2回全国名石総合展（雄の山）
日本水石協会（昭 45・1970）
第10回日本水石名品展（未の松山）

（9）盆石の写しとしての竜安寺の石庭 竜安寺の石庭俗称「虎の子渡し」は、大徳寺大仙院の枯山水と共に、禅思想の具象化として、古来高い評価を附されてきた。この石庭については、従来、定説とはいえないまでも、室町後期の明応8年（1499）相阿弥によって作庭されたとの説が主流となっていた。

しかし、大山平八郎（昭和 45・1970）「竜安寺の石庭・七つの謎を解く」によれば、作庭者に相国寺の画僧後の西芳寺（苔寺）の住職子建を当てて、相阿弥説を排し、年代を西芳寺住職に任命された天文6年（1537）以前としている。なお同氏は、「東山殿御飾記」の中にある押板上の盆石が富士山形をしている点に着目し、ついで、当該石庭中の庭石が富士山形からはずれている事態を根拠として、石庭と盆石との関係を否定する。

上記の論説に対し、筆者は、既述したように室町時代の盆石は必ずしも富士山形に限定されてはいなかった点、および、盛行していた玩石の風潮の中で、特に禅僧は、鎌倉後期以降の伝統からしても、概して、日頃この好尚に浸っていたと考えられる事情などから、「盆石との関係の否定」を逆に肯定の側に転ずるとの見解をとる。

日夜盆石を身近かに置き、その風韻に接していたはずの禅僧が、ふとした機会に、盆内の石と砂との取り合せを盆外に展げて、盆石の庭園化を創意する可能性は十分に伏在していたと考えら

れる。

年代の古い名園中の寂びた庭石とそれを取巻く白砂の筋目は、発想を転換させれば、逆に盆石の象徴する岩頭と波紋の感興を想起させるが、この点から推して、筆者はほぼ同年代に成立した枯山水の技法もまた「庭園化」に根差す考案であったと提言しておく。

(10) 盆石および石菖盆と佗び茶 書院茶が成立して幾ばくもない頃、義政の茶道の師をつとめた村田^{じゆこう}珠光は六条堀川に四帖半の茶室を建て、茶に精心的な領域を取り入れ、これを承けた武野^{じようおう}紹鷗が堺の地で「佗び」の境地を格段に深め、その弟子千利久は法式礼法を整えて「茶の湯」を大成した。

利久は、まだ宗易と称していた当時、工夫改善の過程で茶の湯から盆石をはずす方式を打ち出したが、この間の事情を同年代の山上宗二はその著作「茶器名物集」(天正 16・1588)の中で、「石ノ事、昔ハ其数多シ、高麗鉢又ハ漆鉢に立ル也、当時^{ことごとく}悉捨^{なる}ル、但此両石は名物成ニ依テ、未^{いまだ}賞玩スル人モアリ……」として2名石「未之松山」と「残雪」を掲げた。

上文の中で、「昔はその数多し」と記述された名石は、夢の浮橋・九山八海・廬山石・浅間山・万里江山・残雪・飛竜・八橋などであったが、その間の事情は、室町末の書き付けを後年の江戸中期に上木した「盆山秘言」が報じている。

石菖盆も宗易によって、同じ扱いを受けたと考えられるが、この点を「茶器名物集」は、「一紹鷗^{じようおう}石菖鉢^{そうきやう}宗久ニ有、青紫ノ物花入ニ成、一宗暫石菖鉢紫野^{しゆんおく}春屋和尚ニ有、右同」との断章によって物語っている。

推察するに、宗易が石菖盆を茶の湯の席からはずしたので、かつて紹鷗が所持していた中国釣窯の石菖盆は、本来の用途を離れて、今は女婿の今井宗久の手もとで茶花の器になっている。宗暫の石菖盆も同様で、大徳寺の春屋和尚に移り花いけになっている。との筋書きが出来上がる。

3) 織豊時代の玩石と盆玩

(1) 山口宗仁の遺著 江戸中期の中川良英(水竹居蔵)編(明和 9・1772)「盆山秘言」は、板行年代よりさかのぼり、足利・織田・豊臣・徳川の4家に親しく接した雅人法印^{にん}山口宗仁(武将長谷川源三郎)の残した盆石事情に関する書き付けを内容としたものであった。

石の選び方を同書に拾えば、「大さ五寸ばかりより七寸まで、高さ三寸より四寸までをよきところと定めたるなり、然れども自然のものなれば、定めたる寸よりも大なるもちいさきも有、形よろしきはもちゆべし、格好よろしきといふ共、作りたるは死体石としてもちるざるなり、富士の形したるを、第一とするなり、嶺岳市邑備りたる石賞玩なり。谷川の石もちゆるによしといへり、海石山石はよろしからず、もちるざるなり、ひき(低)き石には、下簀板をしくなり、すはり(坐り)を切たる石を用るに、うらを純子(綴子)の絹にてはりてもちゆるなり、添え石をあ

しらひ石といふ、あひて（相手）石ともいふなり。……」と記述する。

「石立様の事」では、「盆はかつら盆、故実なり、入角木瓜丸盆或は足のあるものなどおもしろくとも、^{かなど}形りのかはりたるものはもちひず、かねの盆もちゆるなり、されど真（真・行・草の真）の荘（飾）りには不用なり。」として、曲物に漆を塗った洲浜形（楕円形）の黒色盆が正規の器物であり、唐物の胡（故）銅盆は略式として供用するとのべた。

「四季砂の事」の個条につき、「かけもの（懸物）とり合せの事、石とかけもの見立有こと、釣香炉もちゆる事、石はふじ石、すなうち様考え有べし、口伝、光源院（義輝）歌会るとき、釣香炉、盆山はふじ石、法印宗仁、薫りくる煙にふじのこととへばのきばの風のそよこたへよ、三つ石^{かさざり}荘りの事、床に盆山三つ並ぶる事、砂うち様、三石名ある事、かけものかさざり、物取合せある事、此荘りは東山殿書院かさざりの図にもあるなり、……」。

さらに、「砂打具」にも及んで、「さじ砂うちべら ふくさ 竹箸 羽箒 盆はるびつ形りに、輪二すじ有て、黒ぬりのもの、定りたる砂うち盆なり、是をかつら盆といふ。」

以上の引用によって、室町後期ひいては江戸中期にも及んだ盆石事情が詳細にわたって理解出来た。

室町後期の頃、盆石は、賓客の接待に即席で飾り、また貴人間の贈答にもなるなど、著しい進展があったが、これを裏付ける史料として、将軍義晴の治世に当る頃の「大館常興日記」は「天文 12 年（1542）8 月 8 日、盆山高信方より来、^{この}之取次富八也、おもしろき物也」と述べ、さらに少しく年代が下って、桃山時代、宮中の清凉殿に附属した控えの間御湯殿の女官が書きとどめた「御湯殿の上の日記」の中で、「慶長 3 年（1598）10 月 19 日、四辻少将よりもぼんざん（盆山）上申さる、一でうるん（一条院）どのより、ぼんざんまいる」として、盆石を取巻いていた社会的な背景と風習を後世に伝えている。

この頃から江戸時代に及んだ玩石家の高峰として、豊臣秀吉・細川幽斎・後水尾院などが名を連ねていたのも、伝統に即する好尚ではあったが、名だたる伝世の盆石を所蔵する行為の裏に高位の意識を潜在させていたように受け取れる。

（2） 信長と名石末の松山 天下の平定を目指した織田信長は「茶の湯」を政治的な面に活用して、本来の「侘び寂び」に徹する茶人の志向にもかかわらず、人心操縦・論功行賞の性格を強く持たせて、点前を限られた人々に対する特許とし、また行賞に「名物」の茶碗や肩衝（肩造りの高い茶壺）を下賜するなどして、「大名茶」と俗称される方向に変性させた。室町幕府の最高権力者などに代々伝えられてきた「名物」の盆石「末之松山」も信長の収集するところとなったが、この所蔵も、伝世の名石に仮託した社会的評価からすれば、当然の成り行きであった。

信長は平定作戦の過程で、当時浪華に位置していた本願寺の寺領の持つ戦略的要衝性を重視して、その略取を計り、武力を行使したが、寺院側の門徒を結集した強力な反撃によって、容易に結着がつかなかった。よって、信長は朝廷に仲介を奏請し、これによって、ようやく和解が成立

して寺領の明渡しが実現した。名石「未之松山」はこの明渡しに際し、信長から寺院側に渡されたと語り継がれてきた。

盆石の所有は、好尚の精神面だけにとどまらず、地位の高下・俗世間的な千金にもまさる価値観につながる裏面を深く内蔵していたと帰納されるが、この傾向を激化させたのは信長であった。

(3) 信長と秀吉の盆玩 織豊時代の盆栽を記録した資料は希少であるものの、前時代の基調を承けてその延長にあったと思われる。

わずかに後世の浄瑠璃などで、語り草ともなっていた伝承は、史実としての信頼性には問題があるが、一応筆録しておく。

その中で、「秀吉が献上によって所持していた松の盆山が弱ってゆくを見て気をもんでいた際、曾呂利新左衛門が、松は常盤とこぎわの命を殿下に譲って枯れる旨の狂歌を詠んだので、機嫌を直した旨を伝え、また別の面では、信長に対する光秀の恨みは、一因として、主君の愛玩する献上品のソテツの鉢植を光秀の妹と家来が損傷した行為について、度外れた叱責と恥辱が加えられたことにあったとの流説が語られてきた。

上記2説が虚構であったとしても、その頃の人々が献上という行為に託した盆山の価値観は明瞭に汲み取れる。

4) 江戸時代の奇樹異草熱と文人盆栽

(1) 江戸前期の世情と遊楽 秀吉の死後、天下は徳川家康の支配に移り、江戸に幕府が開かれた。

幕府は草創の当初から封建体制の整備・民政の安定に努め、諸藩もまたこれにならったので、幕藩体制は急速に整い、3代家光の治世に制定された鎖国政策と「参勤交代」によって完成し、きびしい封建専制の形態をとって、社会の安定が確立した。

経済的な面につき、当時の財政的基礎は米に置かれていたので、支配者は米の増産を目途して、政策・土木工事などを進め、他方農民の側は、農具の改良・肥培の工夫・新品種の獲得等を積み重ね、それらの結果、一般的傾向としては、過酷な年貢米を上納しても、何程かの量が商品として出廻るまでになった。

陸上や海上の交通路も整備が進み、大坂やその他の商業都市を成立させ、江戸を始めとする他の城下町への人口集中と相まって、ここに膨大な消費の背景が出来上った。

このような世情の中で、建築業・運輸業が登場し、元禄の頃には、農業部面に、四木三草と総括された、農家に現金収入による潤いをもたらすクワ・チャ・コウゾ・ウルシ・ベニバナ・アイ・アサに加えて蒲団と衣料用のワタ・灯火用のナタネを取り入れて、商業性を強め、さらに社会全般としては、生産と消費の間に商人が台頭し、中には支配者に一目おかせer程の「財用の樞」を握る豪商も現れはじめ、また生産業商業などの進展につれて、職人奉公人の層も厚くなってい

った。

このような庶民の経済力の伸展は年代的には慶安から元禄にかけ、将軍では4代家綱から5代綱吉の治世に相当する。

庶民の生活に生じた物心両面のゆとりは全社会をおおう「遊楽」の風潮を巻き起こし、ここに遊里・歌舞伎・人形浄瑠璃・物見遊山などが始まった。

後年庶民の間に種樹（園芸）を楽しむ風習が浸透し、「奇樹異草」の数々を出現させて江戸の種樹を特色づけ、盆栽が縁日に並び「吊台」に載って市中を「振り売り」される程に親しまれたなどの根底は元禄以来の「遊楽」の風潮とそれを裏付けた生活面の余裕であった。

家康は早くから教学に意を用い、再々藤原惺窩を招致して講書を受け、江戸に移って間もなく、その弟子林羅山を重用した。

羅山は続いて幕府の顧問に任ぜられ、以後4代家綱に至る間、教学・制度等の政策樹立に参画したが、特に、朱子学をもって国学とし、それに因って君臣父子の間柄を律し、ひいては封建体制を維持するための方策とした。

羅山は家光に支援されて私塾弘文館（後世の官学昌平坂学問所）を開設し、旗本・御家人の子弟に文武両道を教授して、幕政の担当者の養成を計ったが、このようにして、学問によって昇進し、また当時のきびしい封建的身分制のわくを脱する方途が開かれ、さらに各藩も幕府の教学方針になったので、向学の風潮が急騰した。

江戸前期、幕府の文治政策に沿って、儒者・国学者・本草家などが輩出したのも、時流を受け止めた事態であった。

庶民の側もこの風潮に影響され、社会的な地位の著しい向上を背景として、寺小屋の普及をもたらした。なお、これによって教養を身につけた町人は、それまでの長い期間、文化の荷ない手であった武士と僧侶に加わって、急速に頭角を現わし、庶民性を強く持った多種多彩な文化の登場を発動した。

市川团十郎（江戸）坂田藤十郎（大坂）による歌舞伎・談林派と蕉派の俳諧・井原西鶴の好色一代男に始まった浮世草子・近松門左衛門と竹本義太夫による人形浄瑠璃、加えて、水野元勝による種樹書の草分け「花壇綱目」・江戸染井村の種樹家三之丞伊兵衛（3代）・伊兵衛政武（4代）ら一統が著作した「錦繡枕」（ツツジの専書）と一連の「花壇地錦抄」に代表される種樹書などに町人や下級武士の進出を強く認めることが出来る。

後述するように、中・後期の頃、京阪の地に文人の領域が形成され、その「琴棋書画」・「文房清玩」に連なる煎茶の席に伴って文人盆栽が出現し、市井の趣味家も漢籍の「秘伝花鏡」を熟読して「唐暖室」を知り、この技法によって早春に盆梅を催花し、海舶した南花を安全に越冬させ、それらの経験を盛った各種の培養録を著作するなど、事柄を種樹と盆玩に限っても、そこに世情の安定と経済力の伸びに裏打ちされた人々の志向と文字の読解力があった。

（2）将軍の花癖とその波及 家康は江戸に居城を定めると、かねて駿府時代から城中の庭を

管理させていた小野寺の住職を再び江戸に招いて、「吹上」のお花畑の手入れを任せた（阿部家伝）。

2代目の最高権力者になった秀忠は、元和元年（1615）の「武家深秘録」に従うと、「徳川二代將軍花癖あり、名花を諸国に徴し、後園に植えたる中に広島椿といふ飛入（斑入）の珍花を献じたる者あり、……」と記述されているが、これによって將軍の花癖振りが並大抵ではなかったこと、主権者の志向に添って珍花の献上が相継いだことなどが判明する。

またこの資料によると、その椿がようやく咲く段になって、たまたま大御所が死去したので、ひたむきに開花を待ちわびていた秀忠ではあったが、哀悼の深意を表明して、とうとうその年は花を見るのをこらえた。

このような動機から、まずツバキ・サザンカに対して異常な関心が触発され、続いて、20～30年の間に、サクラやボタンなども加わって、ここに、江戸時代、ひいてはわが国の園芸を古今にわたって特色づける未曾有の津波が、まず庭植えの花木を発端として、動き出した。

3代家光はこの方面で秀忠にまさるとも劣らない趣味の深さを持ち、伝承ではあるが、吹上のお花畑に多数の盆栽を陳列して楽しみ、時折り大名に下賜することもあったが、その余りの高進振りを、大久保彦左衛門が將軍の愛盆の一つを地面に投げつけていさめる一幕さえもあったと語り継がれてきた。

また、愛玩のマツの小鉢（小品盆栽？）を箱枕の抽出しに入れて寝たとの逸話も伝えられる。

このような家光にまつわる伝承につき、当時の史料にはお花畑の管理を目的とした7人の夜廻りの新設を記録しているので、同將軍の花癖は、大筋としては、深い信頼性に裏付けられるとして大過はない。

「家光遺愛の松」と語り継がれてきた五葉松が皇居内に現存している。

その伝世の松につき、種樹書の著作で名のあった猪（伊）兵衛一族は代々同名を名乗り、前期の中頃から頭角を表わして、「江戸一の植木屋」との評判をかちとり、大奥の御用をも承って、盛業していたが、この盆松を下賜され、代を重ねて相伝し、これが後年の明治早々の頃、零落によって人手に渡り、次いで元老伊東己代治伯の所有に帰し、最終的に宮内庁に移って今日に及んでいると伝えられる。なお、3代目三之丞が植木屋を創業し、最も栄えたのは4



家光遺愛の五葉松（宮内庁）
毎日新聞社（昭 49・1974）「皇居の盆栽展」より

代伊兵衛政武であったが、政武の屋敷を鳥瞰した「翻紅軒霧島之図」には、他の下賜品はあっても、その盆松が加わっていない点からすれば、拝領は描画（推定、享保16年）後ないし5代目以降であったと考えられる。

いずれにしても、明治年間に改作の手が加わり、また300年余の歳月を重ねているので、伝世のその老松も、当初の盆栽事情を知る手掛りとしては問題が多い。



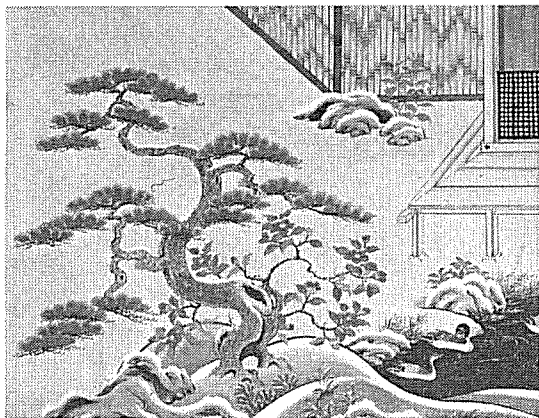
家光遺愛の五葉松（東京都立園芸高等学校）
日本園芸会雑誌 64（明治 28・1895）より

（3）^{なこつくり}蛸作の整姿形とその伝統 東京都立園芸高等学校には、同じく遺愛ないし同時代と言われる五葉松の2杯と赤松の1杯が受け継がれている。なお、それらについては改作の跡や記録がないのみならず、加えて、下述するように、ここに転載したその明治中期の写真では、樹容と盆器の両面について、江戸時代の範型を深く宿していることが認められる。

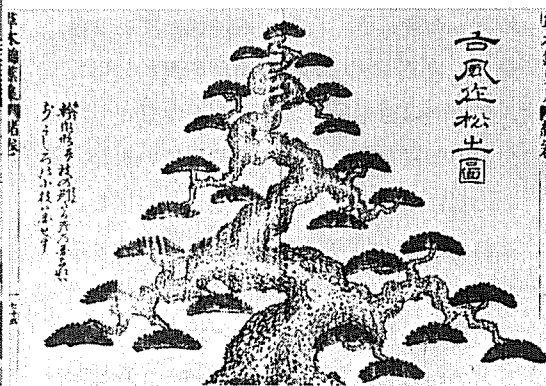
当該挿図の中の「染付鉢」につき、この種の植木鉢を国内で焼成し始めたのは、図中のゴヨウマツが盆栽として発足したとされる寛永の頃より約160～170年下った文化初頭（1805頃？）と考定されるので、この点からしても、挿図の鉢は当初から供用されていたものではなく、後年樹体が大きくなってから植換えられたものであったと推察される。

その鉢は深^{まる}門鉢であって、現代の盆栽にかかわる通念には則しないが、「染付^{まるげほう}の円下方鉢」の供用は江戸後期特に江戸市中の盆栽が持っていた常法であった。

主幹が蛇行形をとりながらも、上に向って屈曲の程度が弱まる整姿形江戸時代の古名「蛸作り」は、既述したように、庭木についてはすでに室町時代に適用されていたが、江戸前期に発足したとされる園芸高等学校の伝世の盆松にもその手法が適用されていたことを看取できる。



室町時代の「慕婦絵詞」に見る「蛸作り」のマツ
同上絵巻物（原図）より



「蛸作り」に該当する「古風作り松の図」
水野忠暁（文政 12・1829）「草木錦葉集」より



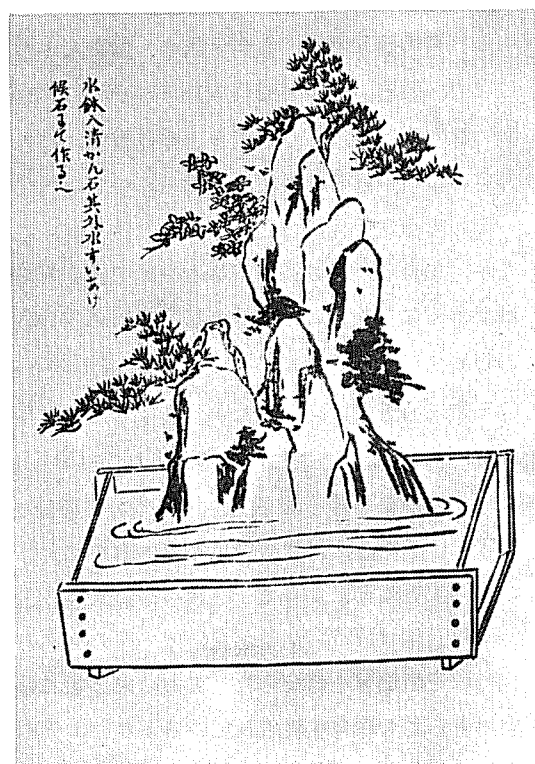
「染付下方鉢」に植えた「蛸作り」の盆梅
阿部喜住 (天保 8・1837)「草木育種後編」より



錦絵の中の「蛸作り」盆松
歌川国貞(弘化末・C・1847)「市美弥景姿の福最貞」より



立形しょうりつの巖上樹 日本園芸雑誌 14 (明治 28・1895) より



ちなみに、それ以降においても、江戸市中の盆栽は、明治中期にも及んで、「蛸作り」と「染付下方鉢」の範型を主流としていたが、そのことは当時の版本中の挿図や錦絵などの画面から結論される。

家光の治世に相当する「寛永中の古写本に見ゆ、水鉢ハコ植方」と題する2葉の図が日本園芸会雑誌64号(明治28・1895)に掲載されている。家光の盆玩につながるものであろうか。

この古写本の原典は明らかでないが、写本とするほかに筆者は、特定の実物についての臨写ないし惜しくも上木に到らなかった稿本であるとの可能性も考えられるとしておく。

いずれにしても花台に盆山(巖上樹)をすえ水をたたえる方式のいわゆる「水盤物」の一種は平安・鎌倉・室町時代以降の伝統であり、この意味では「寛永の水鉢」を由来した経緯はあえて再記するまでもない。

ただ、縦に長い石を用いてそびえ立つ岩壁に掛る老木を表現し、図中の添え書きのように、吸水を考えてか、多孔質の石を供用するなどの点に新奇を感じ取る。筆者はこの図に描かれた元の現物と年代を^{しょうりつ}聳立形石付きの先駆と受け止める。

(4) 植木屋の盛業 江戸時代以前から、京都の北野、浪華の天満・高津・下寺町などでは植木屋が集落をつくっていたが、江戸の繁昌につれて東国に下る者も現われ、さらに江戸近在の百姓も加わって、江戸市中では、下谷池の端・京橋長崎町広小路・四谷伝馬町・芝神明三島町、近郊については、巢鴨・染井(駒込)・入谷などで創業し、特に明暦3年(1657)の大火を境にして、一段と繁昌するに至った。

これらの植木屋は、大名・旗本・御家人・^{おおだな}大店・寺社などに出入りして、庭の造成や手入れに当たり(雅称、庭師・庭作り)、その他自家で植木や草花を育て(花園樹寄)、鉢物の培養に専念し(鉢物師)、奇品の取引きと発見育成に打ち込む(^{かわ}替り物師)など、多彩な分野にわたって、各自の事情や好みの線で、業態を継続し専門化を進めるなどして、栄えていった。

染井の百姓伊兵衛三之丞(3代目伊兵衛)は始め近くの藤堂和泉守の下屋敷で露払いをしていたが、和泉守が花の済んだ草木を棄て去るのを惜しみ、自宅に持ち帰って栽培を続け、種類や数量が多くなったところで、貞享頃(1685前後)、家業の百姓をやめて専業の植木に転進した。この専業化以前の明暦2年(1656)、大坂からキリシマツツジの貴品の苗木5本中の3本(銘、^{おも}面向・無三・^{むさん}唐松)を求めたが、成木したその3本の紅花が評判になったので「つつじ屋(^{はんこう}翻紅軒)」を家号とし、当時の植木屋としては珍らしくも種樹書を著作して該博な知見を世に広めた。

ツツジ類の専書^{せんしゅうまぐら}「錦繡枕」・草木の多種類を扱った「花壇地錦抄」がそれである。

子、伊兵衛政武は父の地錦抄の内容を拡大した「増補地錦抄」・「広益地錦抄」、および実技面の改善工夫などによって「江戸一の植木屋」と呼ばれ、大奥にも出入りして、盛業した。

享保元年(1727)華船が長崎に一種の奇木をもたらして、将軍に献上したが、花戸伊兵衛(政武)はその増殖を命ぜられ、工夫の末、幸にも成功したので、その1本を下賜された。これは盆栽用としても昨今重視されているトウカエデの渡来にまつわる経緯であった。なお、同人はその貴種に関し、「世間へ弘むることをば窮(う)。蒙御許容。願千板(万)と云来。」との感激を、

総計 100 種のカエデを図録した稿本の第 3 冊目、染井早子（享保 17・1732）「追加楓集」の巻頭に納るトウカエデの紙面を借りて表明している。

元祿の頃以降、盆植のカエデが盛行したが、この点につき、同人の屋敷を鳥瞰した享保 16 年頃の「武江染井翻紅軒霧島之図」によれば、入口から奥の端まで 2 町（約 220 メートル）にも及ぶ長方形の広大な面積を擁し、その屋敷の中央、家屋の前面に当り、拝領の「唐楓」を植えて柵で囲み、それに接して「百色もみぢ」の花台多数を並べる。さらにこの場所を中心にして、東・北・西の 3 方に盆栽柵をしつらえ、その東と北の柵の上には、「染付」と見られる「下方（深）円鉢」を多数陳列し、その他、母屋の裏側にも盆栽柵が作られていて、好陰性植物の培養ないし植換後の保養などへの配慮を想像させる。また灌水上の利便や日向水のためらしく、貯水池を掘ることもわたって、心が配られているのを見る。

屋敷内を縦横に巡る園路には武士や町人が散策していて、公開を明示するが、ひいては、染井が四季折々の花見の場所であった当時の事情の連想にもつながる。

この 1 枚の絵図から判断すれば、伊兵衛一家の業態はまさに「鉢物師・替り物師」であった。この図面に専業とも受け取れるほどの盆栽商の草分け（？）が記録されていることを特大筆しておく。

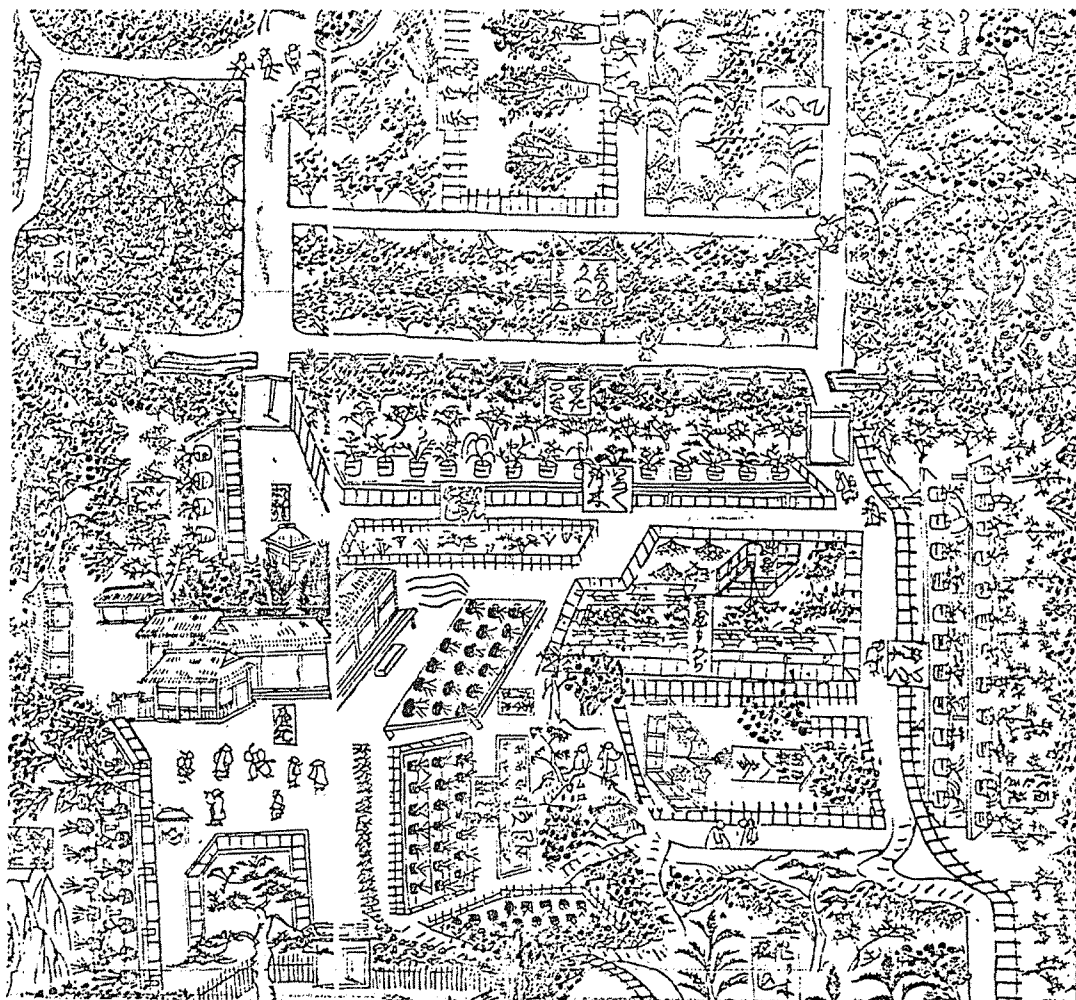
（5）施釉鉢の焼成 後年の種樹家金太（文政 10・1827）「草木奇品家雅見」の文面には、享保の頃（1720 前後）江戸の永島某が尾張（瀬戸）の陶工に命じて、国内では初めての施釉鉢として白罍黒罍鉢を焼成させた旨を記述している。

この点からすれば永島の創案から数年後、すなわち、政武が図中で盆栽柵に鉢を並べていた年代には、永島某を中心として結成された同好会—永島連を介して、市中に朝顔状の白罍黒罍鉢はある程度出廻っていたはずである。

しかし、当初に焼造した白黒の単彩から脱して、青い文様をもつ染付鉢を加えるようになったのは、種樹書や錦絵の中の鉢に見る経年的な推移などから判断して、上記鳥瞰図が作られた年代から 80 年ほど下った文化初頭（1805 前後）の頃と考定されるので、政武の前庭に並んでいた染



唐楓、その海舶と弘布の由来
伊兵衛政武（享保 17.1732）「追加楓集」より



武江染井翻紅軒霧島之図 津山 尚 (昭和 44・1969)「日本の椿」より

付鉢は紛れもなく、海舶品であったと断定される。

ついでに、染付鉢や赤絵鉢の登場につき、喜多村信節（文政 13・1380）「嬉遊笑覧」は「近ごろ植木鉢美を尽し、尾張焼もさまざま手をこめたり。」として、手をこめた鉢の創成年代を示唆し、文化の頃とする筆者の推定を裏付ける。

年代をさかのぼった元祿の頃、支那鉢が多量に海舶され、またその後も輸入品の一部に加わっていたことを白井光太郎（昭和 18・1943）「改訂増補日本博物学年表」が伝えているが、そのような史実の一端が画面についても確認されることになった。

陶磁のいわゆる土物鉢が国内で焼成されて多量に出廻るようになるまでは、海舶盆は数が少なくかつ貴重なものであったので、代って花台が多用されていた。

源三郎（元祿 3・1690）「人倫訓蒙図彙」^{じんりんくもんづい}は公家から乞食までにわたって各階層の生業を図録するが、その「植木屋」の図写その他から、江戸でこの職業が繁昌しはじめた年代、すなわち前期の頃には花台が多用された事情などをくみ取ることができる。

なお、当時の輸入鉢の一部として混在していた南京^{なまкин}や海鼠^{なまこ}（宜均）などの単彩釉の鉢は珍重的であったと伝えられる。

政武の庭前に並んでいるセキシウやその他の草物らしい浅鉢は単彩であると受け取られるが、上記の事情に関連して、深い関心が寄せられる。

染井に花を尋ね、つつじ屋を訪れた遊客はキリシマ・サツキ・ミヤマキリシマなどの苗やカエデ・ウメでなどの盆栽を求めて持ち帰ったと推察されるが、ここに当時の江戸の人々と盆栽との係わり方が、既に庶民にも波及していた盆玩の趣味、売買方法の一形態などの面にわたって、図示されている。



元禄の頃の植木屋

源 三郎（元禄 3・1690）「人倫訓蒙図彙」より

（6）江戸前期の玩石 織豊時代の玩石を江戸前期に伝えた趣味家としては、

信長・秀吉・家康の3代に仕え、和歌にひいで、故実・古典・茶の湯にも精通した細川藤孝（幽斎）、詩歌・連歌にすぐれ、和漢の学にも深い造詣をもった後水尾天皇などを高峰とすることが出来る。その他、大名・権臣・儒官等の間にも盆石の好尚が存在したが、松島の瑞巖寺に伝世している伊達政宗の遺愛石「青竜山」、政宗の孫で宇和島藩主に封じられた宗利の「三茅石」などが、この間の事情の一端を物語っている。

羅山文集の「三茅石記」によれば、宗利は三尖の愛石につき、幕府の儒官林羅山に石銘の撰定を要請し、これに対して、羅山は中国の故事から「茅盈^{ほうえい}三兄弟の登仙」にまつわる伝承を引用して、「三茅石」の銘を付けた。

羅山の「石記」から推察するに、その石は三尖の頂をもつ姿ではあるが、その行文からは、中国人が太湖石や靈璧石などに求める一種異様な文字通りの「奇石」の姿とは異なった、むしろ、国風化された富士山形を第一とする範型が感得される。これは現代流の「遠山石」であるが、政宗の「青竜山」もまた同工の姿を持ち、高低2峰から成っている。

羅山・宗利にからむ石銘撰定の逸事は、はしなくも、知識階層や支配者などによる盆石の受け止め方を具現する例証となったが、それが室町織豊時代以来の伝承に連なっていたことは附言を要しない。

(7) キクに現われた投機熱 既述したように、江戸初期の種樹は家康・秀忠・家光の「花癖」に発端し、加えて、「参勤交代」の制定を契機として、大名・旗本・御家人・藩士・儒官等の間に奇品を追及して止まない風潮が醸成され、やがて庶民をも巻き込んで、奇樹異草を求めて狂騒する時流へと急転回していった。

1 例をキクに求めれば、奈良朝末期に海舶され、朝廷を中心として、まず漢詩人の間で、花の隠逸なるものとする唐風に即して詠物の対象に選ばれまた菊酒ともなり、接尾した平安朝初頭には国風化が進み、詩歌の題材や菊合せの公事として定着しはじめて、総じて、長寿延年を祈念する中国流の「重陽の宴」の仕来りを基調として、宮廷人の関心事に上っていた。

このような求福的な伝承はその後の長い年代にわたって上流階層に受け継がれたが、その間、室町時代には庶民の側にも広まって、秋の庭をいろどり、また菊酒の祭事ともなって親しまれるようになった。

江戸時代に移ると、高揚しはじめた種樹熱に連なって急速な発展を遂げ、水野元勝（天保 1・1681）「花壇綱目」では、大中小輪の外、寒菊を加えて 80、伊兵衛三之丞（元禄 8・1695）「花壇地錦抄」は、秋菊・寒菊につき大中小から魚子・丁字にわたって 231、さらに「夏菊のるひ」として 20 を加え、総計 251 を載せ、続いて、子の伊兵衛政武（宝永 7・1710）「増補地錦抄」では 87 を追補するに至った。

しかし、政武の年代には古来からの花の隠者とする通念が残存していたらしく、品位の高下を定める 10 箇条の 1 つとして、「花形ゆったりとして隠逸の風儀あるをよしとし……」と明記していて、キクの取り上げ方につき、古くからの形而下の伝承が間もなくすたれて、既に発足していた新奇を追求してやまない潮流に置き換えられてゆく過程を言外に語っている。

中期に移って間もない正徳・享保（1711～1736）の頃、京都の丸山を中心とした各所で、大輪を主、小輪を従として、菊合せ（菊花大会）がしばしば開催され、「勝ち菊・負け菊」の勝負に利殖と名誉ひいては身の浮沈をかけて、花の高下をきそったが、当時の「割苗帳」は 1 芽 1 両から 3 両 3 分にわたる高値を書きとどめている。なお、菊合せは享保 2 年（1717）に江戸でも始まった。

要するに、前期までの「世をいとう人のたぐいとく（菊・聞）の花、うえて心の友としも見ん」（村田春海）の境地から離れて、「菊作り汝は菊の奴かな」（蕪村）、「負菊をひとり見直す夕べかな」（一茶）となり果てた。

このようにして、キクに発した投機熱は、分派した一つの方向を斑入り葉変りに求めはじめ、急激に奇品の数を増してゆき、後期の文化・文政（1804～1829）には狂乱した奇樹異草熱を巻き起こしたが、当時カラタチバナ・オモト・マツバランなどの貴品の一部には、1 芽 100 両ないし 200 両・300 両の法外な呼び値がつけられ、カラタチバナに「百両金」の別名が生まれた。

なおこの価格をあえて概算すれば500万円から2,000万円に相当すると考えてよい。

繁亭金太（文政10・1827）「草木奇品家雅見」・水野忠暁（文政12・1829）「草木錦葉集」・長生舎主人（天保7・1836）「松葉蘭譜」などに納る多種多様な奇品の図写に接するにつけ、精細な図録の紙背に秘められた化政期の種樹における狂騒が感知される。

（8）奇品熱の激化と手をこめた鉢 鉢の側も、その中に植えられる奇品の法外な評価額に対応する方向をとり、技巧をこらし、意匠を工夫して急速に発達したが、その間の事情は前記「奇品家雅見」の図写からも読み取ることが出来る。

しかし、長生舎主人（天保1・1830）^{きんせい}「金生樹譜別録」では、形状・文様・浮彫り・透かし彫り・釘彫りなどの面で様々な考案をこらした鉢を多数描写し、焼成地として、尾張（染付）・伊万里（錦手・染付）・京都（楽焼）を掲げ、他に中国からの「清渡鉢」を加え、さらに鉢の下に敷く「水板」や「机卓」^{しよく}をも図録して、当時における鉢の事情を集大成している。

なお、この種樹書には当時の貴品オモト・マツバラン・セッコク・フウラン・カラタチバナ・フクジュソウ、錦糸南天などにつき、寒暑・雨露・盗難からの保護と陳列場所の工夫などを微に入り細をうがって図示するが、その書名が利殖の手引書を意図して撰定されたことを考え合せれば、多くの紙面を削いて、枯損を防ぎ増殖をもたらすために迫真の指針を提供している由来が納得できる。

「金生樹譜」に掲載されている焼成品の外に、他の資料によれば海舶品として、「阿蘭陀焼」や「南蛮焼」（安南？）も少数ながら加わり、貴重視されていた。

錦手すなわち赤絵の鉢が焼造されていたことは上文で言及しておいたが、中後期の年代に数多く画作された「錦絵」の中にそれを求めても皆無に等しく、代って、「染付鉢」が主体を占め、「海風・黒釉・飴釉」などの単彩鉢および瓦鉢も描かれていることを見る。

これは、当時赤絵を焼成していた有田・薩摩・加賀などで、藩の方針とした陶工も、世上でこの上もなく貴重視されていた赤絵の焼物の中に、二義的に供用されかつ土を盛る鉢を加えることを意識的に避けていたためと推察される。



技巧をこらした文化文政期の鉢
長生舎主人（天保1・1830）「金生樹譜別録」より



技巧をこらした文化文政期の鉢 長生舎主人（天保 2・1830）「金生樹譜別録」より

この意味から、伝世する数少ない当時の赤絵鉢は概して、当該藩が朝廷・幕府・他藩などへ上進するため、主命によって特製させた稀少な貴品であったと考えられる。

なお、名だたる陶芸家が鉢の焼成を回避する風潮は現代にも及んでいる。

化政期の盆器につき、喜多村^{のきよ}信節（文政 13・1830）「嬉遊笑覧」は「近ごろ植木鉢美を尽し、尾張焼もさまざま手をこめたり。」と記述して、この年代に多様化が起こった事態を端的に書きとどめている。

江戸時代の盆栽、特に後期の頃の江戸市中では、盆栽は奇樹異草の潮流に強く影響され、その一端として、鉢も技巧をこらした形状色彩に偏したので、総体的に、雅趣風韻に欠けるものであったと帰納される。



御物となっている薩摩焼の赤絵小鉢
毎日新聞社（昭和 49・1974）「皇居の盆栽展」より

（9）秘伝花鏡による種樹の進展 中期の本草学者小野蘭山は多数の門弟に対し、中国より舶載した「秘伝花鏡」を教本としてしばしば「講筵」を開いたが、同年代の物産学者平賀源内は世上における上記書の需要増に応じて安永 2 年（1773）に和刻の「重修秘伝花鏡」を刊行し、このようにして、蘭山父子と源内はその他の儒者・本草家などと共に、中国における文人の境地を紹

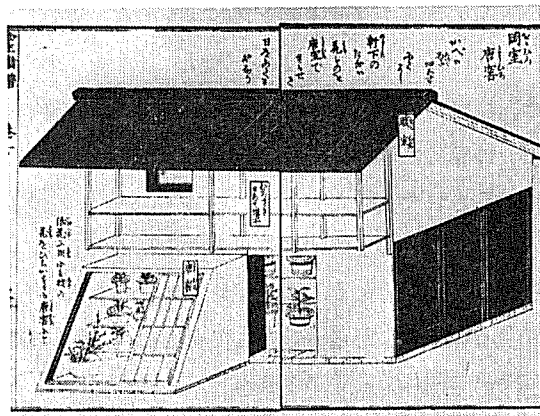
介し、加えて、種樹についての進んだ事情や技法を世間に広めることに貢献した。

化政期を中にした前後の頃、にわにか登場した「暖室」(岡室=盆栽小屋)や「唐窖」(温床)の施設、および横穴を掘って厳寒時に盆梅や切枝を入れ、炭火や熱湯によって催花する技術などは、明らかに「花鏡」の文面を実技に転じた工夫の跡であった。なお年代的な一致から、斑入り、葉変りなどの奇樹異草を取り上げて狂騒していた世情に際会して、それらの貴品を保護し増殖するなどの意図から、「花鏡」の活用が創意され、ひいては実地の見聞や種樹書の紙面を介して、急速に世人の新知识となったとの経緯が想到される。

このようにして、当時高額な呼び値が付けられていたムラサキオモト・ウチワサボテンなどの南花も安全に冬を越し、さらに好事家は春にさきがけた厳寒の候に盆梅や福寿草などを催花して「歳寒の清供」とし、また、それらの盆栽は「年の市」にも並べられて庶民の手に渡り、賀春の用に役立てられたり新らしい年の多福を祈念するささやかな願望のより所ともなるたど、総じて種樹の面には急速な展開が実現した。(巻頭原色図版)

(10) 天保の改革と種樹 文化文政の退廃の世情を承けた天保5年(1834)、老中の座についた水野忠邦は、内では、打ち続く各地の飢饉に原因する物価騰貴・百姓一

揆・大塩平八郎の乱などに対応し、外では、阿片戦争における清国の敗北を教訓として、封建制度の復古的強化を計り、各種の施策を打ち出したが、その「天保の改革」(天保12~14・1841~43)の一項目に「奢侈禁止令」があった。当時狂騒化していた奇品熱がこの「停禁」に触れるも



岡室と唐窖
長生舎主人(天保1・1830)「金生樹譜別録」より



地窖による盆梅の催花
阿部喜任(天保8・1837)「草木育種後篇」より

のとして弾圧を受けることになったのも、成り行きとしては当然であった。

青山の種樹家某すなわち金太は、自身も「草木奇品家雅見」を著作し、また忠暁の「草木錦葉集」について材料を提供するなど、奇品熱をあおって奢侈浮薄を助長したとの理由によって「^{いづ}關所」の罪科に処せられ、すなわち、身は江戸追放、家財は没収となり、またその一部は路上にまき散らされたと伝えられる。

版木も没収の上焼却されたと語られているが、そのためか、「奇品家雅見」が世上に出廻った部数はかなり少なく、また「草木錦葉集」に関しても、当初に計画された13冊の内、前・後編の7冊に「い」から「む」までを収め、「う」以降の続・終編の6冊は来刊に終って完結に至らなかった。なお、この末刊は忠暁の死去（天保5・1834）が主因となり、続いて、金太の江戸所払い、弾圧による奇品熱の急冷なども要因として作用したためと考えられる。

しかし、この改革も忠邦の失脚によってわずか2年で終り、その後の種樹は変化咲アサガオに偏しながらも、ミスミソウ・ハナショウブ・サクラソウシャクヤク等にも及んで多彩な分化を遂げつつ、江戸時代の終末を迎えることになった。

(11) 版本の紙面に見る盆栽 江戸の前・中・後期を通じて板行された多種多様な種樹書の紙面は、既述してきたように、概して「奇樹異草」によって占められ、それらの中で盆栽・盆樹・登盆等の文字は「ハチウエ」の振仮名を持つ場合が圧倒的に多い。

なお、そのような奇品に偏する内容と振仮名および好事家の間で語り継がれてきた異品についての伝承などから、「江戸時代には盆栽は存在しなかった」との早計が引き出され、従来盆栽人の間で定説めいて受け止められてきた。

この早計は現代の盆栽が持つ精をもって過去の粗を律したことによる誤認でもあった。

しかし、既述したような前期の頃の家光が体現した盆玩の故事にも連なって、後期に下り、岩槻城主大岡主膳忠固は、領内特産として、安行産の松の鉢植えを幕府本丸（将軍家慶）に献上し、その後毎年「鉢植木」と百合根を奉獻したとの埼玉県（昭和26・1951）「埼玉県史」（第6巻）に載る逸事を取り上げれば、そこに上層階級を貫ぬいていた上古からの流れが汲み取れる。

一方、庶民の側の事情を中後期の風俗誌・地誌・絵本・浮世絵（後述）などの中に求めれば次の如くであり、すなわち当時の盆栽は種樹書の紙面には載らなかったものの、高騰した奇樹異草熱の裏側で庶民の日常生活に密着していたことが判明する。

なお、この分野の版本を園芸文化史の資料としたのは、宮沢文吾（大正11・1922）「盆栽附鉢植花卉」が先駆として江戸前期の源三郎（元禄3・1690）「^{じんりんきんろうすい}人倫訓蒙図彙」の中の「植木屋」を取上げたのに始まり、前島康彦（昭和36・1961）「江戸の植木屋と江戸時代の園芸の流行」で取材の範囲を拡大した2例にとどまった。

中 期

奥村政信（寛延3年頃 c. 1750）「絵本小倉錦」

小倉百人一首を狂歌風に解釈した絵本の中であって、藤原興風の「たれをかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」の一首を謡曲の「鉢の木」に結びつけて、縁側に置かれた寸胴鉢のマツと、火に焚くために枝を切り取られたウメ・サクラ計3杯を描く。

長谷川光信（宝暦 1・1751）「絵本家賀御伽」

寛延年間に大坂市中・堺街道・京都・江州・江戸の名所風俗に取材し、これに狂歌や旧詠を附する。書中、「天満天神の金魚屋につき、金魚の水槽の奥にある陣笠鉢の老松・寸胴鉢のモモ・袋式鉢のカエデ・花台のウチワサボテンなどを示す。

北尾重政（明和 5・1768）「絵本吾妻の花」

江戸の庶民風俗を故事を交えて描写する。その中に「稗蒔き売り」を入れる。



大坂天満天神の境内に並んだ盆栽

長谷川光信（宝暦 1・1751）「絵本家賀御伽」より

後 期

喜多川歌麿（寛政 2・1790）「絵本駿河舞」

江戸内外の名所について風俗画を描き、それに狂歌100首を添える。「書肆耕書堂葛屋重三郎の珍藏する金鶏石と本書を交換して、作者の喜び一方ならず、天津少女が衣を得たる心地して、駿河舞と題する。」

書中「茅場丁」の一葉に「振り売り」の植木屋を納める。

山東京伝（寛政 10・1798）絵本「四時交加」

江戸市中四時折り折りの風俗を描く。3月の段に「振り売り」の植木屋が「吊台」に土物鉢と花台に植えた盆栽各1杯、根巻きした植木を載せ、路傍で行人に売っている様を描写する。

喜多川歌麿（寛政 13・1801）「四季の花」

江戸の一年四時の行楽・遊戯・家居を描く中で、手まりをつく縁側の盆梅と、夏の候縁先に置いた植木屋の吊台の2葉を収める。

種樹家金太（文政 10・1827）「草木奇品家雅見」

本名青山金太郎。布（斑）入り葉替（変）りの多数につき、写生の奇才大岡雲峰・関根雲停・石川碩峰が臨写し、その描写は鉢にも及ぶ。さらに、奇品家の巨星旗本水野忠暁の集録した多彩な奇品家の略歴を添えて書名とする。尾張鉢の創始者および「連」の結成者として永島某の名を挙げる。

鉢の描写につき、^{まるげほう}円下方鉢の胴の部分に金太（この種樹書の著者）が絵付けした岩松「石付松」と錦糸南天を植えた「阿蘭陀焼」の各1杯があり、通人が鉢にも求めている高い価値感をしのばせる。
斎藤幸雄・孝華（天保 7・1836）「江戸名所図会」（巻頭の図写参照）

江戸および周辺の神社・仏閣・名所・旧跡を絵入りで解説する地誌。寛政 17 年（1800）に脱稿し、36 年後に孫の幸成が上木した。「茅場町薬師堂の縁日」の場面に植木屋の出店を示す。そこにはマツバラン・ソテツ・カラタチバナ・オモト・サボテンなどの奇品と並んで、円下方鉢2杯の老松盛開のフジなどがある。

外に、「葛西の辺の人家の後園」として、当時流行してきた立花の材料を江戸に供給するため、副業として花材を栽培している有様を収める。その中で花盛りのケシの手前に置かれている下方円鉢のユキオコシ（クレマチス）・下方方鉢のラン・袋式盆のカラタチバナなどの数杯を添える。

盆栽に一脉通ずるそれらの鉢植につき、現代にも及ぶ特産地鹿骨の由来が看取される。

上掲した数例の資料に採録されている盆栽は、図柄から判断して、庶民の手が届く値段であったことを想像されるが、この点を白井光太郎（昭 9・1934）「本草学論攷」3 巻の中に収載される天保年間（1830～1943）の岩崎常正（灌園）の書付けによって示せば、抜粋して、

3 両。火蕉（ソテツ）1 丈芽 5 ツ 6 ツ。

7 両。真の唐楓樹（*Liquidambar formosana* Hance）、斑入浜万年青（ハマユウ？）。

10 両。斑入紫万年青、数年持込（み）手間多く懸りたる大松。



盆栽や植木などの「振り売り」
山東京伝（寛政 10・1798）「四時交加」より



鉢に図写された石付の「勇蔵工夫の松」
金太（文政 10・1827）「草木奇品家雅見」より

30両。其地に初て冬枯れざる草木にて斑入になりたる品又格別に葉形替(変)りたる物。阿蘭陀・唐土・琉球等より日本に初めて渡りたる草木類。

以上の高額に対して、盆栽は品格にもよるが、やや珍奇の部類にはいる草木と同等に扱われて、

100文。たこ作り桃、しの(篠)作り梅桃類、万両、コアツモリ、石下(化)サボテン、サザンカ。

200文。たこ作り桜、ツバキ、大名オモト、海棠、岩カガミ、芍薬。

300文。たこ作り梅、石菖有栖川、姫石楠、紅ウラ大文字草、コンロン花。

1分。根上り松、駿河蘭、唐ベニ山査子、長島カウジ。

備考。江戸時代の通貨は小判を1両と定めて基準とした。その現代的な換算価値は、経済機構の相違や前後10回程度の改鑄の度毎に品位が低下したため等もあって、算定が困難である。しかし強いて表現すれば、江戸後期の頃で、1両が4～5万円に当たる。

補助的な銀は秤量制で匁を単位とし、100匁=1貫、1/10匁=1分、1/100匁=厘と呼び、後期には銀貨として流通した。天保の頃、通貨に関する相互関係は次の通りであった。

1両=1分銀4枚=1朱銀16枚=天保銭40枚=1文銭(寛永通宝)4,000枚。

すなわち、上掲した盆栽の評価換えにつき、あえて、1文=10円、1分=1万円としておく。

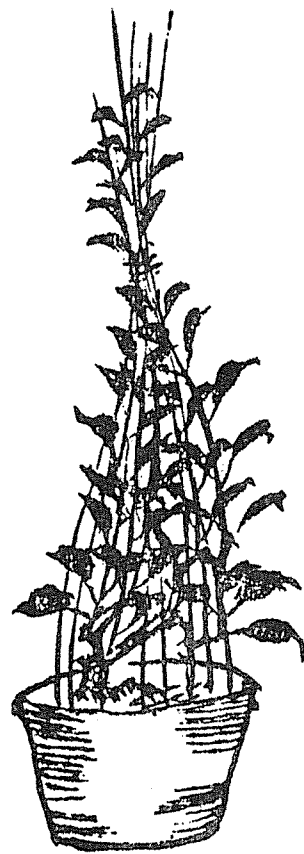
上記した灌園の書付けによって、当時盆栽の整姿形に「蛸作り・根上り・篠作りなど」があり、またマツを高く評価しウメがこれに次いでいた事情などが読み取れる。

(12) 錦絵に登場する盆栽 浮世絵は、庶民の遊樂生活に題

材を求め、あるいは古典や史話に新らしい釈釈を加えて、画面に上らせ、江戸前期の頃、菱川師



浅草雷門外に並んだ盆栽
斎藤幸雄外(天保7・1836)「江戸名所図会」より



「篠(寄)作り」一名「簞作り」の整姿法 今井兼角(明治23・1890)「培養手引草」より

宣^{のぶ}（元和4～元禄 7・1618～1694）によって始められたが、庶民に身近かな画題と木版画技法による安価さによって、たちまち大衆をとらえた。

当初は墨一色であったが、少しく後年になって中期に移る頃、奥村政信（貞享2～明和 1・1685～1764）は「墨摺絵」に丹色（^{べんがら}紅殻）を筆彩色した「^{たんえ}丹絵」を、続いて丹色を紅に換えて、「^{べにえ}筆彩紅絵」を工夫し、さらに墨に膠を混ぜて漆状の艶を出す筆彩の「^{うるしえ}漆絵」を制作するなど、次々と新しい技法を開発して改良に努めた。なお、西欧の線遠近透視法を採り入れて「^{うきえ}浮絵」と称したのも、この絵師兼版元であった。

その後、板摺によって、墨の主版に紅と草の二色版を重ねる「紅摺絵」に進んだが、鈴木春信（享保 10?～明和 7・1725?～1770）はさらにこれを多色摺りのいわゆる「錦絵」に改めて、間もなく現出した黄金時代に道を開いた。

盆栽関係の史料としての浮世絵特にその中の錦絵は、庶民生活に密着して存在し続けた盆栽を、しかも現物に近い状態で展覧し得る点で、まさに掛け替えのないほどの評価を与えることができる。

ただ、従来の盆栽史家は総じてこの分野を失念し、一方、由緒の深い明治以来の盆栽家は、好事家から業者にわたって、その何点かを所持したことはあったが、史料としては活用しなかったもので、あたらしい貴重な領域は、現在まで、全く等閑に附されてきた。

ただ相当な数に上る遺品に当たって、ようやく次の数例を選出できた事情からすれば、総体的には、盆栽を画面に取り入れた作品は極めて限られているように思われる。

該当作品の描かれた年代順は、重なったり不詳な場合もあったりして、一部に問題が残るが、一応順序をつければ次のような排列となる。

江戸中期

鳥居清倍（?～享保 1・?～1716）「植込み鉢」（丹絵）。

盆栽を画面に登場させた例では草分けであり、また盆栽が主題となった唯一の例と受け取られる。深型の花台にサクラ・タケ・ツツジを植え、太湖石（?）を添える。

鈴木春信（享保 10～明和 7・1725～1770）「中納言朝忠（見立寒山拾得）」

画面の一隅に、^{すんどう}寸胴状の鉢に植えた広衆樹の風格に富んだ1杯を描く。

同 「見立鉢の木」（挿図）

謡曲「鉢の木」にかこつけ、盆栽棚の上で雪を被っている下方円鉢のマツ・ウメ・サクラの3杯を描く。鉢の胴にある幾何学的な「雷文」の模様に注意が引かれる。

その鉢に関連して、春信は「かほよばな」と題する一葉に、同工の鉢に植えたセンノウ（?）を描く。

一筆斎文調（?～寛政 2・?～1790）「市川高麗蔵・山下金作」

明和7年（1770）作。舞台の一隅にある台上に白濁釉の「下方円鉢」に植えられた古梅の一杯を飾る。

勝川春章（享保 14～寛政 4・1729～1792）

「大谷広治」

役者が右手に花台植えのボタンを掲げる様を描く、いわゆる盆栽ではないが、尾張焼の土物鉢が広く供用されるようになるまでの事情を示唆している。

江戸後期

鳥居清長（宝暦 2～文化 12・1752～1815）

「風俗東之錦・植木売」（挿図）

初詣での人々を相手に、境内で、植木屋が吊台に載せて運んできた「下方円鉢」の古梅・渦紋をもつ「袋式円鉢」のマツの小品、小さな花台や半鉢に植えたフクジュソウなどを客にすすめている。

そのマツを現代の小品盆栽と対比すれば少しく大振りではあるが、小品の先駆とも考えられる。

天明（1781～1788）期の画作と考定されるので、その年代は後述する歌麿の「通世山下綿・一」と共に、江戸中期が終りかかって後期に移行する直前に当る。

同 「座敷八景・塗桶暮雪」

同 「障子前二美人」（柱絵）

共に2名の美人の背景として、縁側に置かれた盆梅を描く。

前者の鉢は「下方輪花鉢」で白濁釉とも見える色調をもち、後者は「飴釉」の寸胴鉢であり、すなわち2杯とも単彩の深鉢である。

このような単彩に対し、上述の「植木売」に見る盆梅の鉢は、上半分に「流し掛け」の黒釉をもち、「袋式小鉢」の渦文をも加え、総じて、天明・寛政頃の鉢に関する事情を伝えている。

喜多川歌麿（宝暦 3～文化 3・1753～1806）^{かよひやんせやましたのわた はじめ}「通世山下綿・一」

上野山下の遊里を画題にしたもので、この絵師の初期作品とされている。人物の背後に半ば隠れた状態で、軒下に置かれた「楕円胴紐盆」の老松を描く。

天明期の画作との考定であるが、この年代は染付鉢の焼成以前であつたらしく、画面の鉢は淡紫褐色の単彩物である。



江戸中期の盆栽
鈴木春信「見立鉢の木」

後人による錦絵や種樹書などの紙面につき、天保（1830～1843）弘化（1844～1847）の年代以降には「染付」の下方鉢が多く登場するが、この点で、他の資料をも参照した結果、天明から天保にわたる50～60年の間に喜多村信節のいう「さまざま手をこめた鉢が出現したと考定される。

再記するに、それらの紙面から、深鉢が常用されていたことを察知するが、この事情からすれば、歌麿の「通世山下綿」に見る平鉢の描写は類例のない一事であったと論断される。

同 「行楽図」（挿図）

初夏の夕べ、料亭の離れの縁先やハナショウブの咲く庭先にすえた涼み台で興ずる数人の遊客を描くが、近景として、浮彫りの竜文を持つ飴釉の下方円鉢に植えられた風趣の高い老松を配する。

この1杯に見る格調、すなわち屈曲した老幹・淡褐色の淡い釉色・竜文の気品などは、錦絵の中に登場する他の盆栽と対比して、同じ絵師による「見立忠臣蔵」（後掲）と共に最高のものと受け取られる。

同 「千代鶴」

寛政の頃の作品で、掛行燈に千代鶴の

名が見える。縁側に涼む藍の浴衣を着た美人の横に下方円鉢の2杯が置かれているが、その浮彫りの雷文をもつ白濁釉の鉢にスルガラン（?）、同じように雲文の浮彫りをもつ海鼠らしい他方に老松が植えられている。

同 「高名美人見立忠臣蔵」五段目

忠臣蔵に見立て、高名美人を12枚に納める。その五段目の遠景には上掲の「行楽」の場合に類して、竜文の浮彫り鉢に格調の高いマツを植えた1杯を描く。

歌麿の技量が円熟してからの作品に登場する盆栽は、上述したように、樹容もさることながら、一様に浮彫り鉢であり、高い格調を感じさせるが、それはこの絵師が「美人画は哥子にとどめ……」と高言したほど自負が強かったので、画面構成にその気性が反映し、たまたま当時の奇



鳥居清長「風俗東之錦」に見る天明の頃の盆栽

樹異草熱の急騰期に合致して出現した浮彫り鉢に着眼したためと推察される。

筆者は錦絵や他の資料の中の植木鉢に見る経年的な動向から、浮彫・釘彫・透し彫などの彫刻鉢が焼成され始めた年代を上記した「50～60年」の期間に求め、さらに年代を絞って、寛政（1789～1800）の頃と推定する。

北尾政演（宝暦 11～文化 13・1761～1816）

「一寸徳兵衛・市川門之助」

植木屋が吊台の上に、下方円鉢のマツとツバキ（？）およびサボテンの各1杯、外にセキシヨウ・根巻きしたランとハギを載せ、鳥居の近くで休息している。

栄松斎長喜（？～寛政 1～文化 5～？・？～1789～1808～？）「青楼松竹梅」

画面の中央に遊女松葉屋喜瀬川を描き、その手前に浮彫りのある下方円鉢の老松を配する。

歌川国貞（3代豊国）（天明 6～元治 1・1786～1864）「市美弥景姿の福最貞」（弘化末・c. 1847）（巻頭原色版参照）



歌麿の「行楽図」に見る盆松
菊地貞夫（昭和 40・1965）「歌麿Ⅱ」より

「市みやげ」とは歳の市での買物の別称であると思われる。雛段式に並ぶ多数の盆栽につき、種類としては、幹模様のすぐれたウメの紅枝垂と白香篆（枝が波状に屈曲する形質をいう）が花をつけ、マツの根上りとも見られる蛸作りの1杯が枝を張り、マツバラも並べられ、鉢植えや根巻きのセンリョウが赤い実を輝やかせ、フクジュソウは「来年こそ福を引き当てよう」との庶民のささやかな仮託に応じて、根引きとしても数多く準備されていて、歳時記的時代的な世相を展開する。

植木鉢の側では、通常の「下方円鉢」・「下方方（角）鉢」・汙斗状の「朝顔鉢」水甌状の深鉢・香炉状の「袋式小鉢」などでその形状は変化に富み、地色や文様は染付けを主としながらも、黒釉や褐釉にも及んでいる。

同 「春宵梅の宴」（弘化・嘉永の頃、c. 1848）

大名の下屋敷でもあろうか。梅の香る池のほとりにおける観梅の宴を描く。一隅を雛段状に

並べた多数の盆栽で飾るが、上段には、やや深い「外縁^{そとえんちようほう}長方」の染付鉢に植えた香篆梅の老木・大振りな染付袋式鉢に納まる枝垂梅、下段には、袋式円鉢のフクジュソウ・外縁方鉢のマツバラン・大型な朝顔鉢に植えた老幹のマツなどが置かれ、それら7杯とも染付けに属する。

同 「美女と桜」(弘化・嘉永の頃, c. 1848)

一隅に紺青の呈色をもつ下方輪花鉢の根上りゴヨウマツと波状文が幾重にも積み重なる水甌状の鉢に植えたスルガラシ(?)を描く。

同 「芝居絵・西行法師」(弘化・嘉永の頃, c. 1848)

画中、「植木うり木ノ下村東吉」が吊台に染付けの下方円鉢に植えたウメ2杯・フクジュソウ・春の七草の寄植えなどを載せ、かがみながら汗をふいている。

同 「芝居絵・早野勘平おくみ」

大型な花台に植えたクロマツの老木を写す。

江戸時代の盆松は画面から判断するに、大方ゴヨウマツであるが、この点で、クロマツの登場は稀少な一例と受け取れる。

同 「四季花くらべの内・秋」

秋の樹草を売る夜店を描くが、遠景の盆栽棚の上には、ソテツ・オモト・マツバランなど当時の貴品が並べられている。

鉢は形状色彩とも変化に富む。

同 「清書^{きよがき}七伊呂婆^{いろは}」

謡曲「鉢の木」になぞらえ、近景にサクラ・ウメ・マツの盆栽を描くが、3杯とも染付けの下方円鉢である。

同 「浅草雷神門の光景」(嘉永 6・1853)

立春の候らしく、雷門の横に常設とも見られる3段の棚をしつらえ、その上に白梅・紅梅・香篆梅、老幹のアカマツ・若木のごヨウマツ・ソテツなどを陳列し、外に、ヤブコウジ・マツバラン・オモト・フクジュソウ等も点在させる。

全体として縁日的な気配が感じられるが、この場所での露店は既述した「江戸名所図会」にも収載されているので、この地誌が脱稿された寛政17年(1800)以前から、常設として出店する場所であったと思われる。

同 「南港松の賑い」(安政 7・1859)

2代目広重と共作。品川の料亭の庭先にすえた盆栽棚を描く。

菊川英泉(寛政 1~嘉永 1・1789~1848)「松」(挿図)

肉筆。マツの盆栽を手入れしている美人を描く。根上りとも見えるゴヨウマツの老木を白濁釉の下方円鉢に植え「水板」を敷く。なお鉢は竜文を施し「貫入^{かんにゅう}」をもっている。

外に近景として画面の中央にマツバランが置かれ、小型な「卓」を添えている。

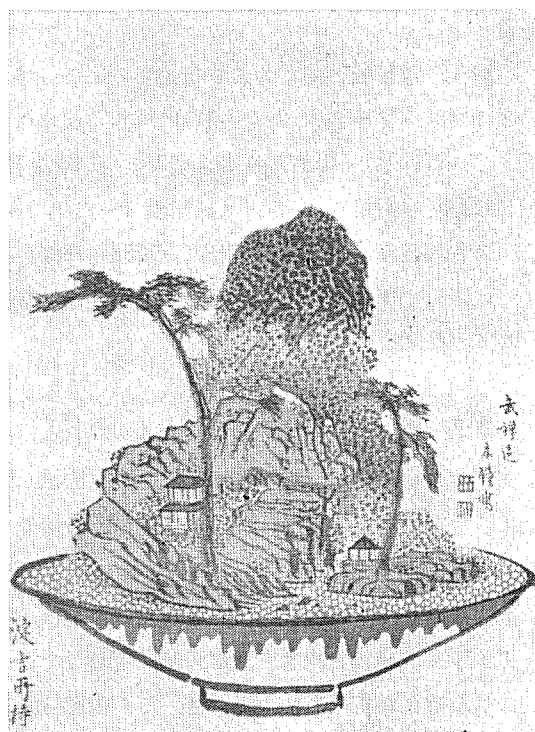
「机卓^{きしよく}」を敷いた盆栽を描写している点で、特に注意が引かれる。

歌川国芳(寛政 9~文久 1・1797~1861)「鉢の木」

染付けの下方円鉢に植えられた雅致のあるマツ・ウメ・サクラが雪を被っている様を描く。



菊川英泉の松 模本より



染付けの創始を思わせる「陣笠鉢」
墨江武禪（文化 5・1808）「占景盤」（特装本）より

同 「絵兄弟・やさすがた」の「梅」

雷神門（？）を背景にして、美人が染付円下方鉢の小振りな盆梅を「家づと（苞）」にするため、右手の掌中に入れてかざしている。少しく大振りではあるが、当時の小品とも受け取れる。

安藤広重（2代）（文政 9～慶応 2・1826～1869）「雷神門外の躰」

仲見世通りからはずれた浅草寺境内の場末で、ささやかな露店を張る植木屋を描く。台上にはフジの1杯を中心にして、マツ・サボテン・オモトなどの数点を並べ、外に台の横下にサクラソウ（？）の数鉢を置く。

上掲した錦絵を通じ、弘化およびそれ以降の画作では、年代や絵師が違っても、一様に染付鉢が主体を占めていることを知る。

既述したように、筆者は天明から天保・弘化に至る 50～60 年間に關して、まず寛政の頃に彫刻鉢が登場したと推測しておいたが、さらに染付鉢については、下記の墨江武禪（文化 5・1808）「占景盤」（特装本）その他によって、文化（1804～1817）初頭に焼成の始点があったとの考定を下している。

なお、この特装本に図写されている 36 杯の中には、器形と文様の両面で、手のこんだ中国的意匠をもつ染付鉢の 5 杯が含まれる。ただ、その 5 杯は海舶品とも考えられるので一応論考の対

象外とするが、他の1杯は形状および施釉の技法に稚拙が感じられ、和製の創始を示唆している。

附1 浮世絵の中に盆栽を探索するに当たって、一見紛らわしいものに「砂之物立花^{りつか}」がある。古山師政（?～宝永7・?～1710）「新吉原座敷けんすもう」（漆絵）・一筆斎文調（?～寛政2?・?～1790?）「中あふみや半太夫」・鳥居清長（宝暦2～文化12・1752～1815）「隅田川遊船」（猿踊り）・栄松斎長喜（?～寛政1～文化5～?・?～1789～1808～?）「涼み舟」・鳥居清峯（2代目清満）（天明8～明治1・1788～1865）「浮絵・新吉原図」などがそれである。

従来、一部の人々はこの種の立花を盆栽と誤認していたようにも受け取られるので、一言を添えて、注意を喚起しておく。

附2 明治年代の浮世絵で、盆栽を取り上げている例としては、揚洲周延^{もかのぶ}（天保9～明治45・1838～1912）「名誉色咲分・小町メ子」（明治16・1883）・「雪月花・野州」（明治18・1885）などがあるが、この2例は共に染付けの下方円鉢にそれぞれ枝垂紅梅と立性の咲分け梅を植えた姿を画面に上らせている。

明治20年（1887）頃は、後述するように、江戸的な盆栽がすたれはじめ、現代の盆栽にも通ずる「文人盆栽」的な傾向が一部に台頭してきたので、周延の描いた盆梅は、この画人がかってなじんできた江戸の盆栽につき、その残影を飾る最後の記念碑であったと受け取れる。

（13）墨江武禪の占景盤 江戸時代に板行された多種多彩な種樹書が概して奇樹異草の側を取り上げていたのに対して、墨江武禪（文化5・1808）「占景盤」は、同人が箱庭ないし寄植あるいは近年の「栽景」などに一脈通ずる様式で自然の景趣を盤中に表現した跡を数多く図録していて、異彩を放っている。この版本はまた、見方によっては、盆栽を図示した江戸時代唯一の専書でもある。

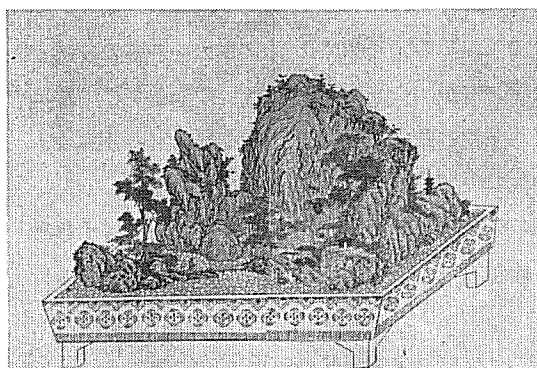
特に筆者が所蔵する法帖作り（折本）の特装本は、多色刷りによって、苦心の成果を詳細に書きとどめている。

武禪は山水画に巧みな大坂の画人であったが、晩年、南宗画の興趣を木石に托して奇絶な境地を創案したので、たちまち評判になり、同人に追随する好事家が大坂を中心として輩出し、社を結成したほどであった。

同書は武禪の死後、嫡子の愛山が父の考案の滅失を恐れて遺作を臨写し、それによって板行したものであった。

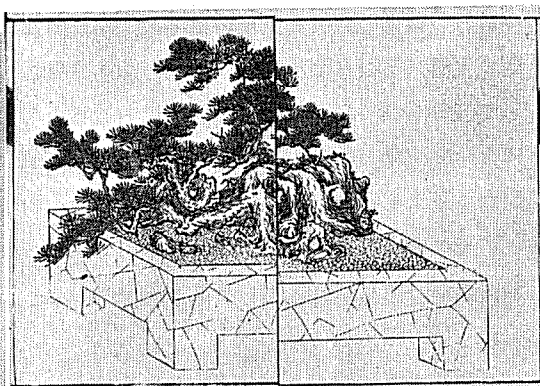
行文中に「縮景盤・景盤・盆假山・盆山」などの呼称を連ねているが、「盤中に土を盛（り）、石樹を按排して假山をきずく、是を漢名にては占景盤或は縮景盤ともいへり、……和名未（だ）これあらず……。」として、書名と意匠を中国に求めて成立させた事情を述べている。

既述したように、国中の盆景はわが国の盆栽と鉢植を合せ、さらに箱庭を立体化した範型をも



盆中に表現した中国文人の清興

墨江武禪（文化 5・1808）「占景盤」より



風趣の高い盆松

加えた広い領域をもっているが、この点で武禪の「占景盤」はその中の立体化した範型につながる考案であったと見ることができる。

なお、武禪は「本邦中古、盆庭といえるものあり、これは銅盤磁盤の類をもて池を造り、水を貯（え）るやうになせるものにて、其趣たがへり」と述べていて、すでに「盆庭」の領域が成立していて、かつ、その構成が立体感に乏しいものであったことを示唆した。

当該図録に見る占景盤は、盆器として摺鉢状のいわゆる「陣笠鉢」を多用し、外に浅い染付、緑・瑠璃・褐の施釉ないし貫入をもつ円鉢・方鉢・鉄鉢などを用い、器底から川砂山土の順に入れ、その上に山城清閑寺石・豊後臼杵石・平戸番岳石・伊豆黒石・紀伊熊野石・淡路平林石・大和葛城石・鞍馬墨石などを立て、それにマツ・チャボヒバ・ツゲ・テイカスズラ・スギゴケ等を植え、全体として深山幽谷の景趣を表現し、さらに楽焼ながら中国風に意匠した楼阁・亭榭・橋梁・禽獣 人物などの置物を添え、全体として、文人が世俗を離れた仙界に遊ぶ有様を具象したものであった。

この版本の中の挿図からは、当時江戸の市中で多用されていた「下方鉢」の1杯も見いだせないが、ここに当時存在していた東西の著しい対照が感知される。

江戸中後期、京阪の地に形成されていた文人の領域では、後述するように、隣邦明清に盛行した「文房清玩」に連なって、煎茶を交友の仲立ちとし、またそれを書斎に取り入れながら、「琴棋書画」の清興に没る好尚が急進したが、席を飾る盆栽には、閑雅を求めて、単彩釉の平鉢が偏用されていた。

文人が盆栽の風姿に具現したその志向は、庶民の側にも波及して、既に中期の頃、当時の俗称「文人植木」は京阪の盆栽を主導していたと考定されるが、その間の事情は後文で取りあげる。

なお、武禪の供用した平鉢は、既述したように、国内における焼成事情から推して、舶載品であったと推測される。

(14) 教学の振興と庶民の識字力 家康は江戸に幕府を開く以前から文教の面に意を払い、民間の大儒京学の祖藤原惺窩（肅）を深く尊信し、また、その弟子林羅山「信勝」は秀忠の侍講として迎えられ、以降、家光・家綱にも儒官として仕えたが、この儒家の依拠した朱子学は、幕府によって正学（国学）の地位を与えられて、徳川 300 年の教学を方向づけ、君臣上下の「大義」、臣たり子たる者の忠孝の「名分」を不動のものとした。

家光は羅山に江戸忍岡の土地を与えて私塾（後の弘文院）を開かせたが、その後綱吉はそれを神田湯島台の昌平坂に移して昌平坂学門所とし、林鳳岡を大学頭^{かみ}に任じて、官学の性格を明確にした。

諸藩も幕府にならって藩校を興とし、儒官を迎えて家臣の子弟を教育したので、それまでは支配者の教養としての範囲にとどまって、宮廷や寺院の中だけに閉ざされていた儒教が広く公開され、特に朱子学の教義は、上述した経緯もあって、社会全般の道德律として定着した。

庶民の子弟の教育には、鎌倉時代以降江戸前期の頃まで、寺院が当たっていたが、教学振興の風潮の中であって、庶民も読み書きのできる程度の素養と算盤の能力を求める者が多くなり、それを承けて中期の頃、儒者・浪人・老農などで私塾「寺小屋」を開く者が現われて、日常の用を弁ずる程度を目安にしながら、町人や農民の教養を進展させた。

江戸時代を通じて多種多彩な著作が上木され、また漢籍の翻刻も加わったのは、全般的な教養水準の向上が背景となっていたが、しかし、版本の売上部数を伸ばすためには、庶民の識字能力を考慮して、振仮名附きとする商略は欠かせなかった。

一例として、「盆栽・登盆・植盆」などが「ハチウエ」の振仮名を持っていた理由はそのような商略にあり、音読みの「ボンサイ」ひいては「盆栽はなかった」とする後人の判断は当たらない。

(15) 初期文人の成立 江戸幕府草創の頃、幕府や諸藩は一時人材の登用を行ったが、その世情を承けて、家柄や二三男などの身分から、仕官や昇進等の途をとざされていた野望に燃える有為の若人は、封建制度に由来するきびしい身分的制約から脱するため、儒学を志すようになった。しかし幕藩体制の確立は反面社会の固定化を伴ったので、高い教養や才能をもちながらも、仕官の口がないままに、やむ無く野にとどまる者が多出し、逆に一人は官途に就きながらも束縛や薄祿をきらって野に下る者もあり、また朱子学の実践道德や世界観に賛同しない「異学の徒」も生ずるなど、事情はさまざまではあったが、それらの人々の一部には反権威反俗に徹して、老荘思想や白杜の詩境を賛仰し、また中国古来の文人が形成してきた「山居」や「市隱」の生活に共感を深め、その「琴棋書画」・「文房清玩」を体現する者も出現した。

なお、この体現のための座右の書としては、明末の「考槃余事」や清初「秘伝花鏡」などが活用されたが、それらの漢籍が和刻されたことにも需要の広さが示唆される。

文人の出現は、江戸中期の頃の郡山藩の儒官荻生徂徠を発端とするが、次第に領域を広めて、祇南海（紀伊藩儒官）・服部南郭（儒官・漢詩人）・柳沢棋園（大和郡山藩士）などが加わり、と

もに官途に就きながらも一面文人の境地を進展させた。

(16) 煎茶の登場 江戸前期の承応3年(1654)、4代家綱の治世に、明僧隠元は新興した後金(清)の世をのがれて来朝し、幕府の支持を得て黄檗山万福寺を創建したが、この禅師は教化のかたわら、中国の文人が書斎でのくつろぎにまた交友の仲立ちとして「煎茶」を取り入れている事情を伝え、それに伴って、持参した「風炉・茶心壺・茶銚」などの茶陶で清趣高風の漂う玄妙な境地を体現した。

江戸中期の享保20年(1735)、かつて万福寺で修業したことのある禅僧柴山元昭(月海)は、61才にして布施にたよる生き方に疑念を抱き、半俗に還って高遊外・売茶翁と称し、京摂の間、みずから勝景地に茶具を荷なって出向き、茶席を設けて何人とも分け隔てなく交流し、風夕雪朝に吟唱しながら、茶を仲立ちとする幽趣の高い境地を分ち合った。

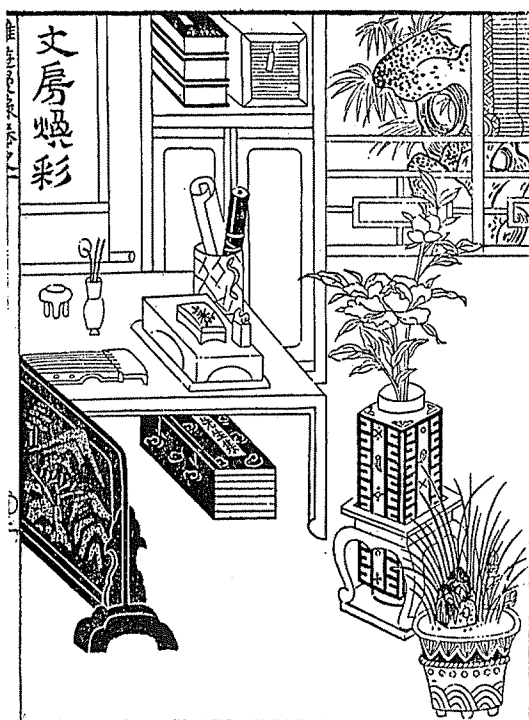
香道家大枝流芳は、市井の側にあって、本来の「茶の湯」は「茶禅一味」を本義とするにもかかわらず、封建勢力と結びついていわゆる「大名茶」に墮し、茶具の由緒や値段の高下を偏重する事態に立ち至っていたことに強く反撥して、「煎茶」に「点茶者家流の法に拘り律に泥むの費を不用、雅趣を守るとして新奇を出すべし。一定の法なし」とする高趣清風の境地を深めた。

結局、流芳がその茶書「西湾茶話」で成文化した煎茶の領域は、隠元のもたらした中国文人流の好尚と売茶翁の体現した幽趣を京阪の地に定着させる核心となった。

煎茶人はその後の長い歳月にわたって、売茶翁を「煎茶の祖」として景仰し、また唐・陸羽の「茶経」を精神的な準拠として尊重した。

なお、近年にも及んで、盆栽家がいわゆる「席陳列」などに際して煎茶を供応し、その際茶を「茗」と呼ぶのは、「文房清玩」の流儀と陸羽が茶経を著わした「茗溪」の地名による。

流芳の茶書に載った西湾は淀川の河口に当り、江戸末期まで煎茶人が「その水質が西湖の水味」だとした隠元に関する伝承に即して好んで採水し、また地を相して居宅を設けるなど由緒の深い土地であった。



大枝流芳の「雅遊漫録」

(17) 文房清玩の盛行 流芳に接尾し、ようやく数を増してきた京阪の文人の中であって、都賀庭鐘（儒者・医家）・^{つがていしやう}彭城百川（俳人・南画家）・与謝蕪村（俳人・南画家）・池大雅（南画の確立者）上田秋成（^{あきなり}医家・読本作者）木村兼葭堂（酒造家・物産学者）などはしばしば交流の場を持ちながら、席の「雅趣を守るとして新奇を出す」べく、各人各様の工夫をこらして、それとなくきそい合った。

なお、その考案の準拠が「考槃余事」や「秘伝花鏡」などであり、またこの年代に盛行しはじめた南画の手本が、一例として、「芥子園画伝」や「十竹斎画譜」等であったことを再記し附記しておく。

中国で唐の頃に発端した南宗画は、本来職業画人とは異質な文人の余技とし好尚として存続したもので、わが国には鎌倉時代に将来され、室町中期の頃、水墨画として雪州によって大成されてはいたものの、江戸中期に至り、文人の輩出に伴って、飛躍的に進展した。「芥子園画伝」の和刻が、主として京都において、回を重ねた理由はここにあった。

上掲した人々の後を承けた南画家^{たのむらちくせん}田能村竹田・岡田半紅、儒者頼三陽・篠崎小竹、陶芸家青木木米、^{もくべい}医家小石玄瑞、僧雲華なども、煎茶につながって交友を深めたが、当時伊丹の酒造家剣菱坂上桐軒方には、これらの文人が常宿として参集していたと伝えられる。

剣菱における煎茶の席で、数人が仏手柑の画幅を共作し、その中で山陽が盆栽の文字を画賛したとのことであるが、従来、これが「盆栽」の文字の発端だとする一説となって、流布されてきた。しかし、この説が管見的な誤りを犯していることはあえて指摘するまでもない。

なお、この画幅は現在京都の仏光寺に所蔵されている。また、その「盆栽」の文字が文人によって、「ハチウエ」ではなく「ボンサイ」と読まれていたことは、文人の盆栽を受け継ぐ現代の盆栽界で、ことさらメギ（小葉）・バラ（薔薇）・イタドリ（虎杖）をショウビヤク・ショウビ・コジョウと呼んでいる伝統から類推しても、さらに高い識見を自負していた文人の気位からしても、疑念をはさむ余地がないほど明白である。

(18) 煎茶の席の構成と高風 文人を構成した人々は、前記した列挙からでも分るように、儒者・漢詩人・南画家・書家・^{てん}篆刻家・陶芸家・香道家・歌人・国学者など多彩にわたり、外に庶民の中の「文人の生き方に共鳴する」支持者をも加え、総じてそれらの高人は、煎茶の席の清雅な風韻を仲立ちとする特異な精神的領域を共有した。

煎茶の席は輪番に、また折に触れ時に際して設けられたが、その日の主催者は「茗主」となって席を高致精妙にしつらえ、また、参会者が清風を堪能するよう終始意を尽した。

また、年1回の大会では、数人が各1席づつを受け持ち、一見さりげない風をよそおいながら、互に新奇な趣向をきそいつつ、外部の人々をも快く迎えて、和敬清遊の輪を拡大した。

煎茶の席を受け持った文人の書斎や年に1度の大会の場には、幽趣を醸成するために、由緒の

ある書画の軸物を本席（床の間）に掛け、手前に香炉をすえて名香をたき、そのかたわらに瓶花または盛籠を飾り、床脇や机上には文房四宝や法帖典籍などを置き、また同じ位置に盆栽や盆石（海舶した太湖石や霊璧石など）を加えることもあったが、そのような雰囲気の中であって、宜興で焼成された湯罐（湯沸し）・茶銚（急須）・水注などいわゆる「陽羨陶」などによって、茶の名品を楽しんだ。

なお、このようにして、京阪の地では、煎茶に関連をもった軸物・茶陶その他が需要され、また、一方芸能化し規格化した煎茶道が加わったことも大きく作用して、骨董商が盛業し、さらに、安政の頃には、文人盆栽（俗称文人植木）の取扱いを専業とする植木屋が出現することにもなった。



煎茶の席に具現された文人の志向
田能村直入（文久 2・1863）「青湾茶会図録」より

文人はそれぞれ自己の専門とする分野の外に、余技として、漢詩文・絵画・墨書・陶芸・玩石にも親しみながら、煎茶を書斎でのくつろぎに取り入れ、また自宅の書斎や文人に心を寄せる豪商豪農などの家を交友の宿として、煎茶を仲介とする清雅な境地に浸り、席上では本技から余技にもわたって、伝世の名琴を奏し、共に碁に興じ、偶感を詩文に盛り、画境を絵筆に托するなど、何らの規範をも設けずに、和敬に徹しつつ、自己を表現し、思想を深め、芸術を高め合った。

それは当時の大衆に受けた黄表紙・合本・洒落本・絵本・狂歌・川柳・俳諧・連歌・浮世絵・人形浄瑠璃・歌舞伎などに代表される庶民的世情に背を向け、高踏的貴族的とも言うべき反俗反権威の姿勢を護持しつづけた教養人の独尊的心情が構成した世界であった。

江戸中後期、東西の地の盆栽に著しい対照が見られた根底には、庶民の好みと文人の志向との対比があったと結論される。

田能村竹田の小品を後年編集した井沢保治（明治 12・1879）「竹田画譜」の中の一葉は、中期の頃の文人盆栽を短的に活写している。

図中、盆内に見る「^{わいし}霊芝」は、一般論として、古来中国人が瑞祥を感じてきた対象物であったが、その伝承が日本の文人にも受け入れられていたことを示すこの遺作からも、間接的ながらあ



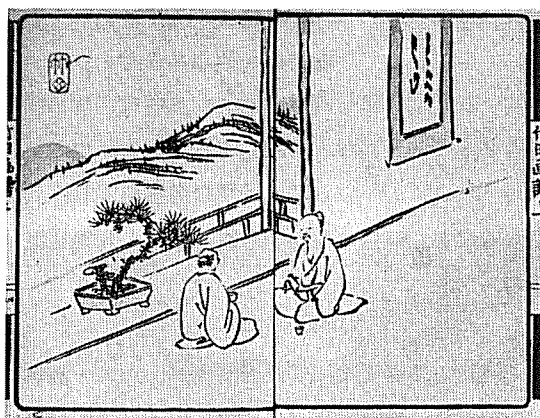
煎茶の席で「琴棋書画」を行ずる文人
田能村順（明治 14・1881）「直入寿筵図録」より

らためて文人盆栽の成立した由来が看取できる。

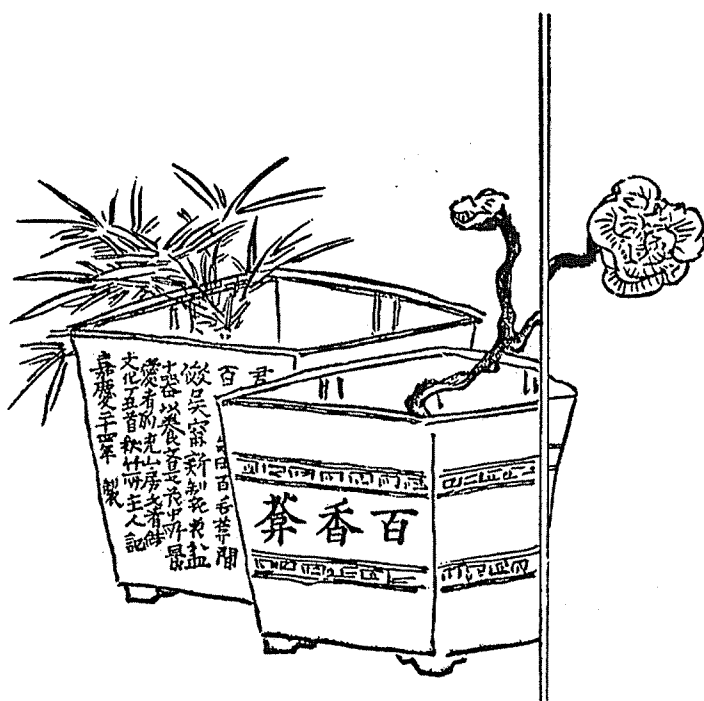
文人盆栽では盆器として「交趾」を主用し、すなわち江戸で常用されていた「染付」の深鉢とは異なる単彩な平鉢が好まれたが、この点は後掲する別の資料によって論述する。

中国鉢が輸入商品の一部に、一般品としてまた特注品として、含まれていたことは既述しておいたが、これによって文人盆栽や墨江武禅の「占景盤」なども構成されていたとはほぼ誤らない。

後掲する松平家の特注品につき、文化年間、国内における染付鉢の焼成はようやく始まったと推測されるが、既に「占景盤」の図録から判断しておいたように、当初の焼成品は稚拙なものであったので、清国景德鎮窯などのすぐれた焼成品が海舶され、一部の人々の手に渡ったとの筋書きが想到される。



甲府の知友を訪れた竹田
井沢保治（明治 12・1829）「竹田画譜」より



書室前數十畝雜栽花卉百種其中盆
蓄者六不下數十種紅紫芬芳四時無間
命曰百香葦間倣吳窑新製花盆十器
以養之是花卉中所最愛者聊充山房之
清供文化丁丑首秋竹所主人記

文化14年(1817) 竜岡の松平家が特注した染付鉢
田口松旭(明治25・1892)「美術盆栽図」より



江戸中期、京都の市井に存在した文人盆栽の流儀
秋里籬島（安永 9・1780）「都名所図会」より

(19) 京阪の文人盆栽 江戸時代、庶民が遠隔地に旅行することはきびしく制約されていたが、寺社参りを名目とする場合には比較的ゆるやかな扱いを受けた。中期から後期にかけて、「名所図会」が、取材地を代え著作者を代えながら相継いで板行された一面はそのような世情と遊樂の風潮にあった。

江戸中期の秋里籬島（湘夕）（安永 9・1780）「都名所図会」・同（天明 7・1787）「拾遺・都名所図会」は同種版本の草分けとなったが、前者の中の「一条戻橋」の紙面に見る盆栽には文人盆栽流の風趣が認められる。

なお、上述した「文人流」との推察を裏付け、また当時、京阪の市井に「文人植木」が広く出廻っていたことを立証する資料として、同じ図会から「粟田口の陶工」を掲げておく。

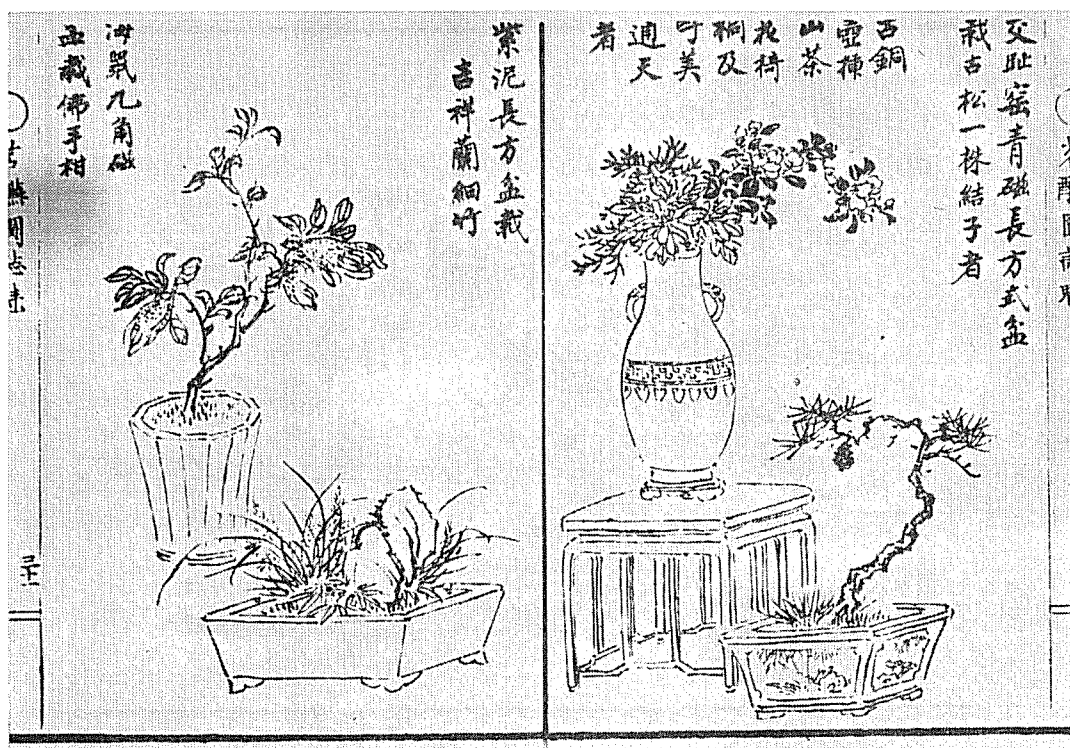
図中、棚の上には、上段の奥の方から、外縁長方雲足盆・六方下方鉢・袋式平鉢・下方輪花鉢・六方寸胴鉢、さらに下段にも2・3枚が並べられていて、変化に富んだ形状が看取される。

まさに中期以降、京阪においては、文人植木は庶民のものでもあったとして誤らない。ただし、この地方にも江戸的な盆栽が介在していたと考えられるが、その論拠の1例として、前掲した「天満天神の金魚屋」の挿図を取り上げる。

既述したように、江戸中期の頃、煎茶の世界が成立した一要因は抹茶が本来の精神とは異質ないわゆる大名茶に墮していたことへの反発であった。



江戸中期、京阪の地で供用された盆器のいろいろ
秋里籬島（安永 9・1780）「都名所図会」より



江戸末期から明治初頭の頃の文人盆栽の風格
山中吉郎兵衛（明治 8・1875）「青湾茗礪図誌」より

しかし、その煎茶も席の構成に新奇を求め考案を重ねる間に、茶具はもとよりその他の器物にもわたって、名品や由来を重視する方向に転成していった。

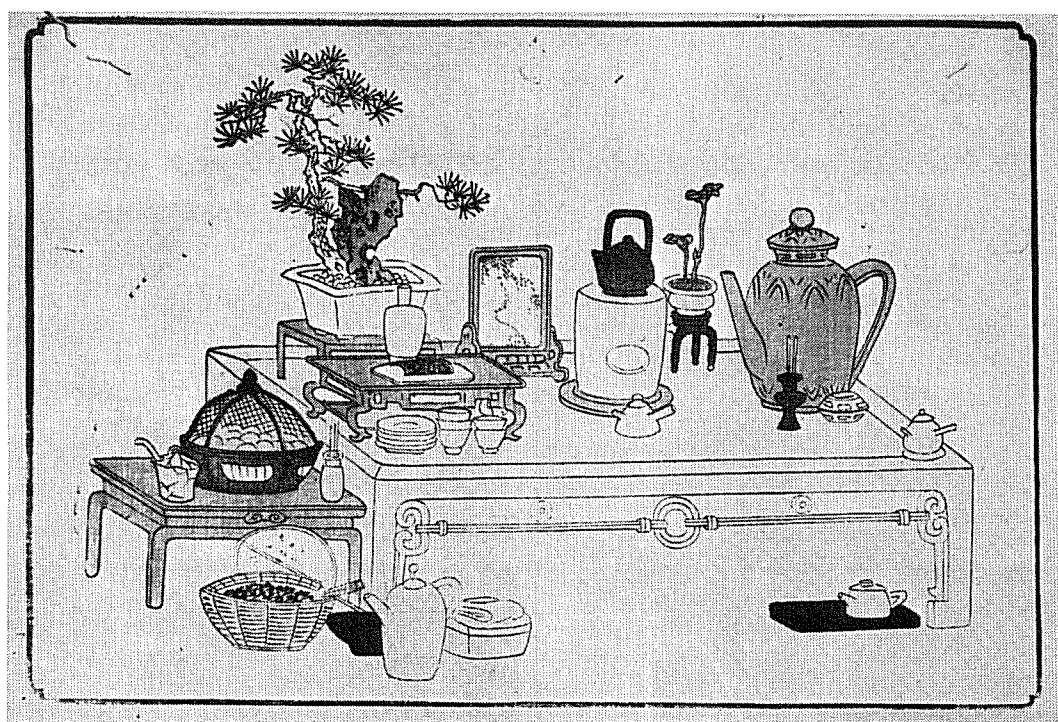
すなわち、茗主は茶具・煎茶・机卓・筆墨・料紙・盆栽・盆石などの優品をそろえ、それらの布置に趣向を凝らして、一見さりげない状態を装いながらも、それとなく席の品格の高下をきそい合った。

「考槃余事」の「盆玩箋」や「秘伝花鏡」の「取盆取景」などによって発足し、かつ、それらの文意に準拠してある程度の風格に達した文人の間の盆栽が、次第に簡雅な範型に進んで、いわゆる「文人盆栽」の域に達した過程には、主因として、上述したような、高人の間の競演があったことを指摘しておく。

(29) 煎茶道の派生 文人の煎茶も、江戸後期に移った頃には、成立当初の精神から外れて器物の高下や由緒を偏重していたが、このような事態に加えて、「文房清玩」の本義ながら、文人は風韻高趣の追及を事とし、茶は席を維持する媒体とされていたので、それらへの反省が一部の人々の間に台頭するに至った。

大坂の富裕な酒造家田中元長（鶴翁）は文化7年頃（c. 1824）「売茶翁の風を慕い……別に茶の一家をなして世上に広める」ことに踏切り、花月庵流の煎花道を創始した。

同じ頃京都の医家小川弘宣（可進）は日常茶を身近かに置き、「夫れ茶は活物なり」との意識



煎茶の席を構成するための茶陶・烏府（炭入れ）および文人盆栽など
今村了庵（慶応 1・1865）「煎茶図式・草」より

の下に、茶の本性を最大限に生かす方途の解明に執念を燃やしつづけ、ついに医業を捨てて、小川流を立てた。

可進は町医者ながら、医と茶によって公家にも広く出入りして交流の環をひろめていたが、ここに本来野人の領域のものであった煎茶が宮廷周辺に伝えられる一つの接点があった。

江戸後期特にその後半の頃には、京阪の地に文人の煎茶と規式化（芸能化）した煎茶が併存し盛行したので、前述したように、その地域の骨董商が栄え、また、文人植木の育成と取引が盛業した。「道」化した煎茶の茶具を図録したものに今村了庵（慶応 1・1865）「煎茶図式・草」がある。

(21) 文人盆栽の風韻 上掲した挿図につき、盆松に添えられている石は「太湖石」と判断されるが、この石をこのような縦長の範型に用いる方式の2点にも中国からの伝承が感知される。中国で「選石」に「太湖石」を供用する流儀は中唐の詩聖白居易（楽天）に発し、宋・明・清を通じて盛行し続けた好尚であり、市井の庶民にも衆知されていた定形であったことは既述しておいた。

外に、この盆松は、全体の構成・樹容・盆器について、錦絵の中の盆栽とは極めて対照的な風趣を宿している。

ここに図示されているような多種類の茶陶につき、一般論として、茶盃わんは和製のものも広く用いられ、陶芸家青木木米・高橋道八などは文人に組みながら、その焼成に苦心を重ねたが、風戸

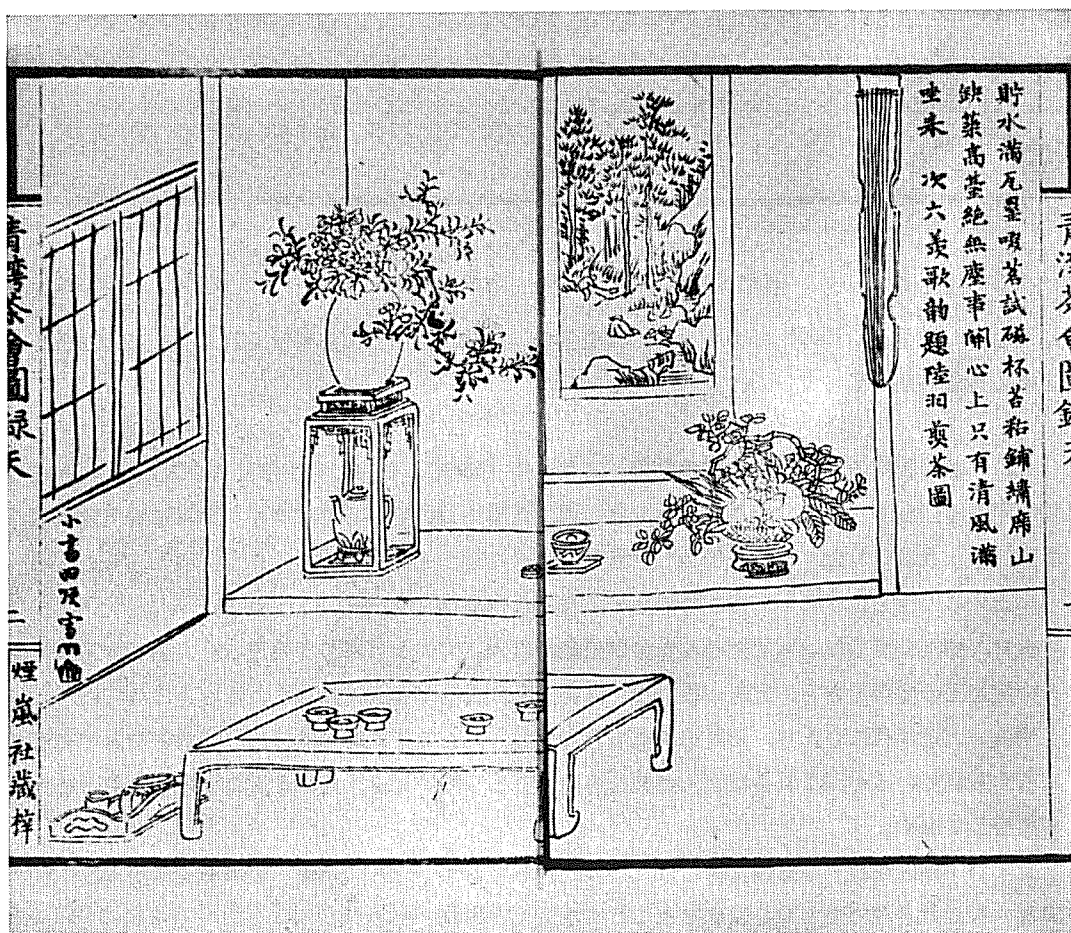
は白磚を主とし、湯罏（湯沸し）・水注（水差し）茶注（急須）などは、明末に発端した「陽羨陶」を賞用する規式に則して、宜興窯の「砂壺」（泥物）が常用されていた。

なお、それら特に急須が今日のいわゆる「万古焼」として国内で焼成されるようになったのは、後年の明治11年（1877）、常滑で杉江寿門、4代伊奈長三らが清人金士恒について技法を修得したことにあった。

煎茶人が常用した盆器は多く「交趾」であったが、この種の植木鉢は中国各地で焼成されていたので、かつての煎茶に関する盆器の産出地を1地点に絞ることは困難である。

ただ、従来宜興と一括されてはきたが、砂壺を焼成する濁山鎮に近い鼎山鎮と欧窯の「宜均」（海鼠手）灰釉（塩釉などの「火炉」（火鉢）・花盆・水甕（水かめ）等は比較的近年まで多量に輸入されていたので、この地帯の盆器が、江戸中期から明治にもわたって、文人盆栽に多用されていた可能性が推論される。

上述の経緯で導入した急須焼成の技法によって、同じく常滑で泥物の盆栽鉢の生産を始めたの



煎茶の席における器物の布置

田能村直入（文久 3・1863）「青湾茶会図録」より

第一席 喉潤 大長精舎		茗主		田能村小齋	
補助五名		木邨小園		田上小泉	
瀧山晴暉		津田文操		平泉柳煙	
幅		周東村畫陸羽煎茶圖 絹本着色		香爐	
香盒		青磁以黑漆小方盆承之		香	
朱漆器有鏤細布袋像		黑香餅 爐居堂製		菓盤	
古竹盛枇杷梅子筍村香藥五種有檀坐		花餅		交趾窰海鼠色磁桶錢葵石榴以檀高阜承	
之		水餅		交趾青磁黑漆勒賣茶遊外字及花押有檀	
坐置高阜内		琴		明製鳥海上人舊藏	
机		菓子器		朱漆琉球製十枚盛黑児信曰牡丹餅	
煙盒		樟漏空蝙蝠附新船白磁火爐青竹啞壺			

煎茶の席を構成する器物の品目
田能村直入（文久 3・1863）「青湾茶会図録」より

は明治 30 年代 (c. 1900) であったが、この年代は盆栽が芸術観に裏付けられて、今日的な意匠を整える急昇期に当たっていた。

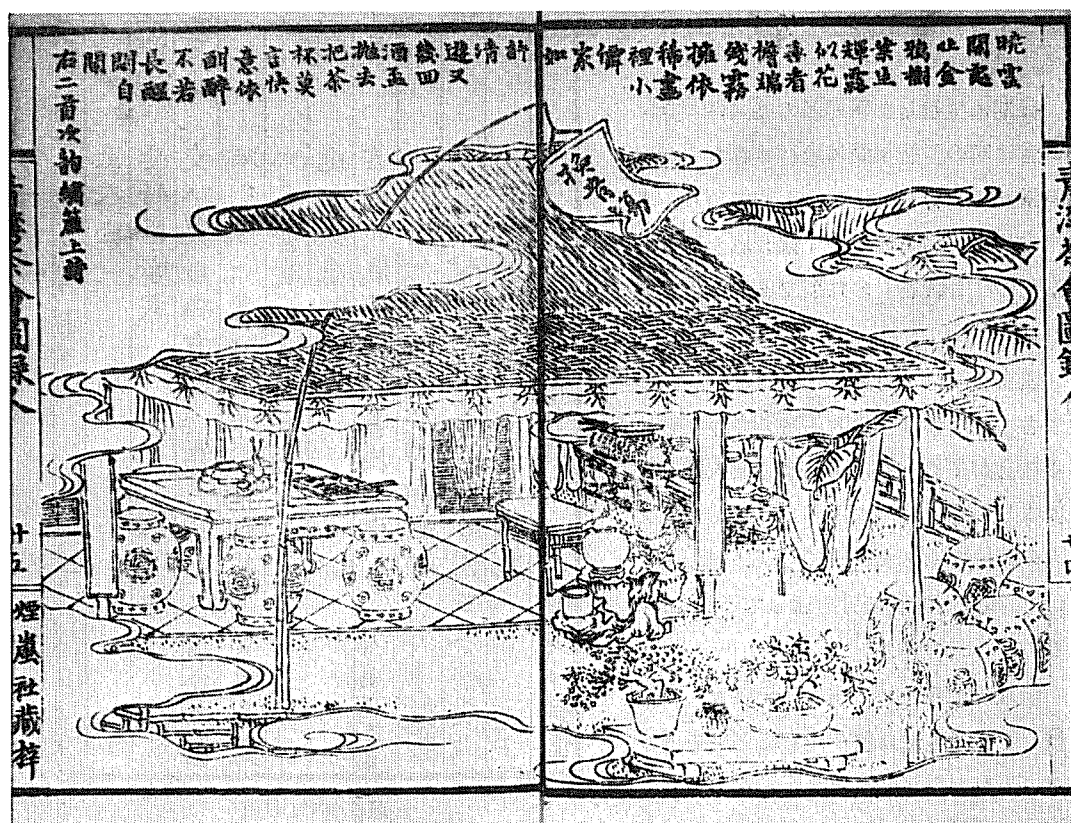
(22) 煎茶図録の刊行と泥物鉢の供用 文久 2 年 (1862)、竹田の弟子田能村直入は売茶翁の 100 年忌の開催を主唱し、それによって春の頃、青湾の地に点在して 7 席が、さらに夏 7 月にも同数の席が設けられた。各席を担当した茗主は創意を働かせ工夫を凝らしたが、直入とその子順（小斎）らは席の様子を写し器物を録して、備忘の用に供した。

後日、知友の奨めによって公刊したのが田能村直入（文久 3・1863）「青湾茶会図録」であり、その記述上の体裁とさらに図録の版行は、次降、準則として後人に踏襲されることになった。

明治・大正年代にわたり、賀寿追善にも及んで催された煎茶の席の盛行は、図録となって後世に伝えられているが、それらは文人盆栽を解明しその系譜を知るための貴重な手掛りであることを指摘しておく。

文人が「秘伝花鏡」を熟読玩味したことは既述しておいたが、「花鏡」の中の「紫沙（泥）宜興盆」もその過程で文人の公知するところになったと推測される。

中国において、「宜興盆」は明末ないし清初の頃、一部の高士に供用されたものの、その後普及しない状態で経過した模様である。



泥物鉢供用の発端（右白交趾方盆，左紫泥円盆）
田能村直入（文久 1863）「青湾茶会図録」より

記録の上で、宜興の泥物鉢は江戸末期の頃、「青湾茶会図録」に初めて登場したが、その事態は、文人が紙面から得た知見を長崎の華番を通して体现した結果であったと考えられる。

なお、現代の盆栽界で常識化している泥物鉢^{でいもの}の供用は上述した年代と経緯で発足したとの筋骨きが当てはめられる。

社会の一隅に過ぎなかった文人の世界の中で成立した文人盆栽が、世上の表面に進出して主導的地位を占めた経緯は後文で論考する。

(23) 盆石に現われた新傾向と庶民の玩石 江戸中期までの盆石は既に前文で述べておいたように、室町中期以降の「富士山形を第一」とする志向に即して賞玩されていたが、その詳細は「盆山秘言」に因って既述したところである。なお、その範型は現代流の呼称「遠山石」に該当する。

後期に移る頃から、「遠山石」や室町初期を承ける「九山八海石」に見るような、景観を巨視的に象徴する従前の方向に加えて、逆に景観の一局部としての「水溜石」^{すいりゅう}や「茅舎」^{くすや}あるいは神仏・禽獣などを形象する、いわば微視的な一面が登場したが、このことは柏木紹甫（藤世衡）（寛政 7・1795）「盆山石図式」や伝世している頼山陽の遺愛石などから結論される。なお、そのよ

うな「物象石」は今日の水石に継承されて、主要な範型となっている。

後期に生じた新局面の展開につき、筆者は明の万暦年間に版行された「素園石譜」の影響を推定する。すなわち、1例として、山陽遺愛の「観音石」は「石譜」の「菩薩石」の類型であると指摘される。

漢籍や漢詩に精通していた江戸時代の儒者・漢学者は「素園石譜」の存在を知る機会が多く、特に山陽は、文人階層を構成した有力な一人として、当然中国文人の領域であった玩石にも深い関心を払い、「素園石譜」に目を通していたはずである。

伝承によると、山陽は「大原女」に依頼して予選させた賀茂川石などを運ばせ、その一部を選出して残りの大部分を棄てたので、居宅の裏側には石の山が出現したとされている。

平安時代以降、支配階層の間に、社会的地位の象徴ともなって発端し継承されてきた盆石（盆山）に加えて、江戸中期の頃に相当した文人の出現に伴い、「文房清玩」の清趣に連なる玩石が新たに登場したが、これとはほぼ年代を同じくして、盆石趣味の庶民化も現われていた。

すなわち、普遍化は秋里籬島（寛政 9・1797）「東海道名所図会」について確言できる。

同図会は安部川畔の宿場丸子の場景に関して、「名産盆山石、丸子の名産にして、市店に出して沽也。」とし、また、駿府につき、「阿部市今の府中をいふ、名物は籠細工、桑細子……盆山石鉢植の樹木其外いろいろあり……。」と列記して、盆山石や盆栽が名物ともなって、広く庶民の需要を満たしていたことを書きとどめている。

(24) 奇石家木内石亭と石の修行 同じ「東海道名所図会」の中には、別の個所で石狂木内小繁の奇石を図示し、略歴を記述している。

斎藤忠（昭和 37・1962）「木内石亭」によると、琵琶湖畔の山田・坂本のあたりで生涯（享保 9～文化 5・1724～1808）を過ごした石亭は、幼小の頃から石に興味を持ちはじめ、長じた頃には、各地を巡って採石し、知友を遠近に求めて知識を深め、竜骨（化石）・神代石（石器）^{まがたま}・勾玉・木化石・鉾石等、文字通りの奇石の収集と研究に全力を傾倒し、「図会」の編著者が訪ねた頃にはその数 2000～3000 点にも及び、道中の名所ともなっていた。

月清者會圖録	十一
主人坐	曲欄 紫竹、亞字式
盆栽 交趾窰、白磁方盆一。養石榴結子者、海鼠色。 磁小盆一。養石菖蒲、俗稱針管者、紫泥圓盆一。養紫薇花、以置石盤上。	幔 退桃紅色、輕羅
旗 素綿面、鼠色綿廓、書換骨場三字、竹翁居士書	此席假構小亭、於櫻祠西畔、苔蘚淨處、蓐蓬布甍、設座移蕉、以逃日光。王琴齋黃衣載烏帽倚榻、其趣可入詩畫。
以上第七席換骨場	榻
櫻井宇兵衛	

煎茶の席の目録

田能村直入（文久 3・1863）「青湾茶会図録」より

菩薩石



頼山陽の「観音石」

日本水石協会（昭 45・1970）「日本水石名品展」
10号より



「素園石譜」中の「菩薩石」

明・林有麟（万曆 41・1613）「素園石譜」より

この点につき「図会」は、「此人、生得若年より和漢の名石を好んで、年歳諸国より^{あつ}聚めこれを^{もてあそ}翫（ぶ）事数十年に^{およ}逮べり、海内其名高く、四方好事の輩、^{ともがら}貴となく賤となくここに^{まじ}駕を枉て数の石を見る事多し、……山田翁は古今の名石家にして、奇石怪石数品を^{おさ}蔵めて都て二千余种あり。」と採録するが、まさに「時の人」であった。

当時、奇石家が「石の修業」と称し、自慢の奇石を携行して全国的に同好の士を訪ね、また奇石の売買を生業とする者も現れるなど、まさに奇異な時流が全国的に生起したが、それは石狂「石の長者」に負う世相の一面であった。

石亭が生涯をかけた業績は「雲根志」などの中に集大成されている。

木内小繁（安永 2・1773）「雲根志前編」

同（安永 8・1779）「雲根志後編」

同（享和 1・1801）「雲根志三編」（外）

がそれである。なお書名は「雲は山頂の岩石から生ずる」との中国の伝承から引用されたが、すなわち「雲根」は石の別名である。

後世、石亭を頂点としながら、全国的に盛行した奇石熱が盆石家の間を語り継がれる過程で、他の部面を失念したためか、「江戸時代には奇石しかなかった」との通念めいた口伝が生じ、現代でも一部に残存している。



木内石亭の収集した奇石の数々
秋里籬島（寛政 9・1797）「東海道名所図会」より

誤認を招いた主因は、当時の時流が余り

にも異常であったためと推察されるが、他の一因としては、中国側の玩石事情が「素園石譜」などを通してわが国に伝えられ、紙面の「奇石・怪石」の文字さらにその表現に相応した図写の数々が、国柄を越えて、「富士山形を第一とする」根強い伝統をおおい隠したとの可能性が掲げられる。

なお、怪状をもつ中国の太湖石や霊壁石などが京阪における文房清玩や煎茶の席を飾り、また、その地の骨董商の店頭にも並んでいたが、これも「石譜」中に見た奇石の概念を現物によって定着させる一助となったと考えられる。

ちなみに、「奇石・怪石」の表現は一面言葉のあやでもあったが、その感触を全面的に見落した傾向も感知される。

(25) 字義の混乱した盆山・盆景等 江戸後期、盆山・盆石・盆景・箱庭・盆庭・占景盤などの言葉は、異種同名逆の同種異名などの関係において、すでに混乱を来たしていた。

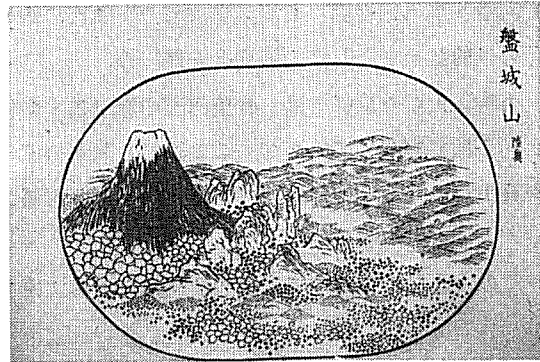
この間の事情につき、喜多村信節（文政 13・1830）「嬉遊笑覧」はその「居処」の個条において、「石台といふもの花を植るのみにて、此石を呼ぶも、もと石を置きたる故なり、これ即ち盆石なり。……昔の俗に、石菖鉢のたぐひを盆山といへりと見えて、一代女盆山に奈知石（那智石）を蒔て（立てて）石菖蒲の根からみ青々としたるを詠むともいへり。……」とし、同じく「附録」に、「今この方の俗人、盆景と云は盆石とて盆に石を排置き、白砂を盛るをいへるは非なり、盆景ここにいふ鉢うえのことにて、もとは草木を植えたるなり、其風情幽趣あらしむるを植盆取景などいへり、石など立添えたるは後世のことなるべし、^{さて}諸ここに石を専らにし、木にて作れる箱は花のみを植ても是を石台と呼び、今は箱庭というなり、……」と記述している。

結局、信節自身にしても、漢籍の上の盆景（＝取盆取景・盆栽）の概念をもって、わが国で成立した盆景（＝盆庭・盆石・現在の盤景等の類型）を律して「……非なり」と断定する誤りを犯したと言いうる。

現代、一流派でいう盤景、すなわち水盤上に石をすえ、^い化土で地瘤をつくり、色砂をまき、置

物を添えるなどして、自然の佳景を写す流儀は、かつての一般名盆景に属し、さらにその意味での盆景は江戸時代一部で盆山とも呼ばれていた。

なお、既述した墨江武禪の「占景盤」には同義語として盆山の文字が使用されているが、ここにもまた混乱していた事情を示す一例がある。



江戸時代「盆山」を称した「盤景」の類形
順石軒磐海（天明 5・1785）「盆山百景図前編」より

既述したように鎌倉・室町時代の古名盆山は現代名の石付盆栽と水石（盆石）を含んだ範囲を指していたが、往々盆栽全般にも及んでいたと推察される。

江戸時代、ひとしく「盆山」の文字を使用しながらも、内容には各自の創意工夫を盛ったので、古法の包括する領域が更に拡大することになった。ただし、本来の範型も通行していたが、その点を「奇品家雅児」から転載し、82頁に図示しておいた。



江戸後期の頃の「抱岩樹」
大原民鑒（文化 7・1810）「名数画譜」より

なお、この図に見る整姿形は現代名の「抱岩樹」に相当する。

また同工の石付（抱岩樹）は、年代を接して、大原民鑒（編）（文化 7・1810）「名数画譜」の中の「五清」として掲載されている。ここに描かれている清玩の対象は、「貫入」をもつ外縁長方盆の中の石を抱えたマツを主とし、それに添えられたタケ・ウメ・ラン（一花）、別の浅い円形水盤に入れた石付きのセキショウ、合計5種類である。

（26）盆栽商の創業 既述しておいたように、幕末の頃、京阪の地における煎茶の領域では、本来の文人に加えて、既に「道」として転成し規格式化していた別の面も並立し、総じて、煎茶人はかなりの数に達していた。

その一例証として、前掲した「青湾茶会図録」の中で原著作者直入は、「煎茶人の参加 1,200, 一般の参加者数千人」としるし、その盛会振りを伝えている。

このような世情を背景として、安政5年頃（c. 1858）かねてから酒造家剣菱方で文人植木の管理を任かされていた使用人某は、その種の盆栽を専業とする草楽園を大坂の地に創業し、続い

て、清花亭（三樹園）も同業に加わり、また、両名が共催して、慶応2年（1866）に、盆栽史上草分け的な企てとしての陳列会を開いた。

当時、大坂や京都では、骨董商山中簞篋堂・梨雪堂・来々堂・霞村等が有力な多数の顧客にさえられて盛業していたが、この繁昌も煎茶の席を構成するための書画・机卓・茶陶などの売買や貸出しに負うもので、それを由来した煎茶人層の幅と厚みの増大なしには達成されなかった。

このような情況の中で、盆栽商一樹園・梅文園も創業し、骨董商簞篋堂を興とした山中吉兵衛は一代で産をなした。

その後間もない頃、吉兵衛の子吉郎兵衛が先考の追福に盛大な煎茶会を開催し、その席の事情を山中吉郎兵衛（明治8・1875）「青湾茗醺図誌」として書き留めているのも、先代の盛業振りを示唆し、かつ、煎茶の盛行がその儘明治に継承されたことを語る資料である。

同じ意味をもつ資料としては、外に、熊谷直行（明治9・1876）「円山勝会図録」・田能村順（小斎）（明治14・1881）「直入翁寿筵図録」等を掲げることができる。

5) 明治改元以降の盆栽

(1) 文人盆栽の東上

幕末の激動期、京阪の地に奔走した勤皇志士は反体制反権威の心象から文人に共感を覚え、特に幕吏や佐幕派の人々に追われる身は、時に朝廷の天領伊丹や近衛家の知行地にのがれることもあったが、この地伊丹の剣菱御影の嘉納等の酒造家は頼山陽が訪客として知遇を受け、絹本や紙本に揮毫して謝金を手に入れていた頃から、山陽やその他の文人が煎茶の席を設ける常宿となり、その後にも及んで、高揚した気風を保持していたので、酒造家の庇護を受けた志士の一部は煎茶の風趣を知り、文房清玩の好尚に連なることにもなった。

一方、土佐の山内容堂らの勤皇大名も、宮廷およびその周辺の高人に接して、煎茶の好尚を身につけ、その関係から、京阪の骨董商との間に深いつながりが生じた。

大政奉還（1867）明治改元（1868）となって封建体制は崩壊し、それに伴って、旧支配階層と深く結び付いていた抹茶（大名茶）は見る影もないほどに急落し、代って、新政府に高位を占めて参画した要人の好尚としての煎茶が、それまでの日陰的な存在を脱して、一躍社会の前面に登場することになった。

明治4年（1871）の廃藩置県によって旧大名は華族に列したが、その直前、山内容堂は高位につきながら、廃藩置県等に関する献策が入れられないまま、病氣と称して品川の下屋敷に隠棲し、文事にふけり風月を友とする日常を送ることになった。

この閑居に連なって、明治4年（1871）、容堂はかねてから交渉のあった大阪の骨董商梨雪堂安井恒七に文人盆栽を発注して東京へ取り寄せた。

この納入について、梨雪堂は盆栽商大阪の三木三樹園東京の市樓の協力を得たが、これが京阪の文人盆栽が東上し、ついで江戸の盆栽を制圧することになる発端であった。

三樹園の納入は、容堂の場合に続いて、旧伊勢津藩主藤堂高潔^{たかきよ}・旧佐賀藩主鍋島直大^{なほひろ}等についても行なわれ、その結果、文人盆栽への関心が政府の要人や華族などの間に高まって、明治10年頃までに、有栖川宮家・木戸孝允・黒田清隆・大隅重信・西園寺公望・山県有朋・鳥尾小弥太等の貴人や権臣が愛盆家として名を連ねるに至った。

また、宮内庁も別格の一員であった。

なお、上文の要点は橙軒生（明治41・1908）「三樹園盆栽談」—雑誌「華」の1記事によるところが多い。

（2）盆栽の呼称確定 江戸時代を通じて、現代の盆栽に相当する文字としては「盆栽・盆植・盆樹・鉢植・鉢栽・植盆・登盆」等を当て、総じて「ハチウエ」と訓じ、一部、京阪の地では「文人植木」が通称であった。

明治初期の盆栽界は、既述した経緯で、新政府要人を有力な支持者として発足したが、その当初の頃から、音読みの「盆栽」が単一の通用語とされていた。

この単一化につき、誠文堂新光社（昭和43・1968）「最新園芸大辞典」に載る一説では、そのような転機をもたらしたのは「西園寺公望の創見」であるとしている。

上記の流説を承けて推察を加えれば、英才を受け継いだこの殿上人は、若年の頃から、朝廷に伝わる平安朝以降の仕来りに従い、さらに、幕府が朝廷に求めてきた政策「政治からの隔絶」に即して、当然和漢の古文書に精通していたはずであるから、日頃親しんでいた好尚の分野につき、手元や宮中の専書を開いて、そこに盆栽の同義語を見いだしていたはずである。

さて、それらの中から、語感や語呂などによって取捨するとすれば、「盆栽」の文字こそ最良であったと思われる。

有力な他説として、三省堂編修所（昭和29・1954）「盆栽」に掲載されている清水利太郎（瀨庵）の談話記事を引用すれば、愛盆家の要人（某）と趣味家の筆頭永井磐谷・田口松旭が相会した際、話題の一端として名称の件が取り上げられ、同席した文人村瀬秋甫が「盆栽」を提案したとする流儀もある。

村瀬秋甫がこの提案をした年代は何時の頃であったのだろうか。

文人が上記の時点以前から「盆栽」の音読みを常用していたことは、頼山陽の画賛の故事や田能村直入の「青湾茶会図録」等を引いて既述しておいたところである。

客観的に見れば、江戸時代を承ける庶民の間の「ハチウエ」と呼ぶ慣用名を「ボンサイ」と呼び換えようとする提案であったと解釈される。

江戸時代の読書人は、「盆栽」の呼称をはるか昔にさかのぼって、東晋の陶淵明の故事や李朝

初期の姜希顔の「養花小録」について承知しなかったとしても、また、「奇品家雅見」の序文中に伏在するただ一例だけの振仮名「ボンサイ」を見落すことがあっても、座右の書として熟読された「秘伝花鏡」の中で当該文字を2・3ヶ所にわたって見だし、さらに、「奇品家雅見」の本文中に挿入されている漢文書きされた奇品家の略歴文中にこの文字を見付けていたとして誤らない。

ただ、折角承知した音読みも庶民の間の訓読みに圧倒されたまま明治に及んだと考えられる。

明治に移行して煎茶の姿勢が表面に現われ、さらに文明開花および教学振興に伴う術学的姿勢も加わって、音読みが選ばれたと推察される。

上記の2説は共に、全面的に誤っているとは言えないまでも、昨日的な時点にさかのぼって音読みの文字「盆栽」を再発見したとすべきである。

(3) 江戸の盆栽の後退と文人盆栽の進出 要人の間で盆玩の好尚が広まるにつれ、それまで高官邸や大家などに出入りしていた植木屋の一部が、盆栽の兼業を脱して専業に転化しはじめたが、草分けとしては、鈴木孫八の香樹園（東両国）・木部米吉の苔香園（飯田町）・平井新次郎の百草園（入谷）・清水藤吉の清大園（駒込）などが名を連ねた。

明治10年（1877）の西南の役は基盤の確立していない新政府をゆさぶる大事件であったが、その影響の一面として、官民両面特に要人の間の盆栽熱の低下をもたらし、数年にわたる沈滞を招いた。

しかし15年頃になると、政府の経済政策に添った産業革命が実効を挙げはじめ、民間企業の興隆がみられるに至り、ここに財閥として登場した大阪の藤田伝三郎・五代友厚・住友友善・久原房之助等の人々が盆栽を愛好し収集をはじめたので、この地の盆栽界は上向の傾向をとってきた。

一方、当時の東京においては、石川邦猷・穴戸璣・三菱商会の2代目岩崎弥之助等の華族や財界人が新たに愛盆家となって層を広げ、また、上層階級の間では、盆栽の賞玩と所有を趣味としてよりも教養と受取る風潮が醸成されたので、盆栽に対する関心は一段と高まった。

その頃台頭した東京の中小企業主や商店主の中からも熱心な趣味家が現れたが、その一部の人々は盆栽の資質の向上を求める動きを展開し、香樹園・苔香園を中心とする「盆栽界の五人組」を結成して工夫改善に努め、あるいは彩花園・芝花園に依拠して「研究会」を組織し、時に、当時の有力紙万朝報の社屋の大広間に盆栽会を開いて研究考案を重ねるなど、総じて、むしろ趣味家の先達が業者を引ずる形において、資質の向上陳列の工夫が進められた。

上記「五人組」の一人田口松旭、「研究会」の木曾庄七（義昌堂）・神田楽天などは特に熱心な人々であった。

（以上、主として、無待庵主人（明治40・1907）「明治の盆栽界」—盆栽雅報 Vol. 11 による。）

(4) 盆栽の質的向上と盆栽界の急昇 既述したように、明治初頭の頃には、東京の盆栽界はもっぱら大阪側に依存し、京阪の文人植木を運んで成り立っていたが、20年(1887)頃の時点では、逆に東京側の優位が確立しはじめ、25年には東京の専門家は37軒にも達した。

ここに生じた逆転は、一面、首都としての土地柄から政財界の有力者が多数参集し、それらの人々の間で盆玩を好尚とし教養とする風潮が醸成されていったためではあるが、反面、市井の熱心家が先達となって、江戸時代を承けるいわゆる文人盆栽を基底としながらも、盆樹の姿態・盆器の取り合せ・盆盤の布置などに工夫を凝らし、質的な飛躍を遂げていたことが大きく作用した。

上述したように、東京の一部人士の間で、向上改善を目指す動向が20年頃に急昇し、次いでそれらの人々は希求する方向を盆栽の芸術性にまで高め、その結果、本来は南画の習画帳であり、江戸中期以降文人画の成立に寄与してきた「芥子園画伝」の転用を想到し、盆樹の整姿形はもとより、盆内の配植や添石等の手本としても活用するようになった。

さらに、この活用の過程で、当該原典中の図写である「直幹・懸崖・雑木」は整姿の範型だけにとどまらずに、その呼称までも借用することになり、以降現代にも及んで踏襲されている。

ただし、「直幹」の実態はその後変成したので、図写と現状とは一致していない。

王叔明大松多作直幹其筆較諸家者稍長難雜亂中極有文



李唐懸崖雜樹法



「画伝」に見る直幹と用語
李魚(康熙26・1687)「芥子園画伝・二集」より

「画伝」に見る懸崖と雑木の図写と用語李魚
(康熙26・1687)「芥子園画伝・二集」より

(5) 芸術盆栽観の台頭 現在通用している「芸術」の概念は、明治年代には「美術」と表現されていた。

田口松旭（明治 25・1892）「美術盆栽図」3巻は、盆栽の資質向上に傾倒していた趣味家や業者が、日頃同好会に因って研究を積みまた各自が工夫を凝らした作品を、本郷根津の神泉亭に持ち寄り、いわゆる「席陳列」の形をとって参会者に展覧し、互に成果をきそい研究し合い、その際の出品物を、画家高森砒巖の麗筆を介して書きとどめたもので、盆栽に芸術性を求める動向の発端を後世に物語る貴重な資料である。

この書巻に載る数多くの図写は、整姿の方式や盆器の選択等に現代の盆栽と相通ずる様相を濃厚に示していて、そこに、最も厳密な意味における「現代盆栽」の源流を認めることができる。

この点につき、明治8年の「青湾茗醺図誌」に見る江戸時代を継承する「文人盆栽」と20年代に登場した「美術盆栽」の対比は、その一端を図示して、わずか20年足らずの間に達成された飛躍を明らかにしておいた。

20年代に成し遂げられた目ざましい向上は盆器の選択にも及んだが、その跡を「美術盆栽図」の紙面から拾えば、現代の盆栽界で常法化している「泥物鉢」の供用が、ほぼ80年前にさかのぼって、急昇の兆候を見せていたことを看取できる。すなわち、全巻にわたって類別すれば表記の通りである。



江戸時代を承ける文人盆栽の風趣（瓶花の併陳は煎茶の席に依拠する）
山中吉郎兵衛（明治 8・1875）「青湾茗醺図誌」より

また、長方鉢の多用も一見してそれと気付くほどに進んでいた。

(6) 宜興盆の常用化 宜興盆(泥物鉢)の発端については、既に「秘伝花鏡」の中にある「紫沙宜興盆」の文字によって、清初ないし明末の頃と推定しておいたが、その後中国では、ほとんど供用されることなしに経過してきた。

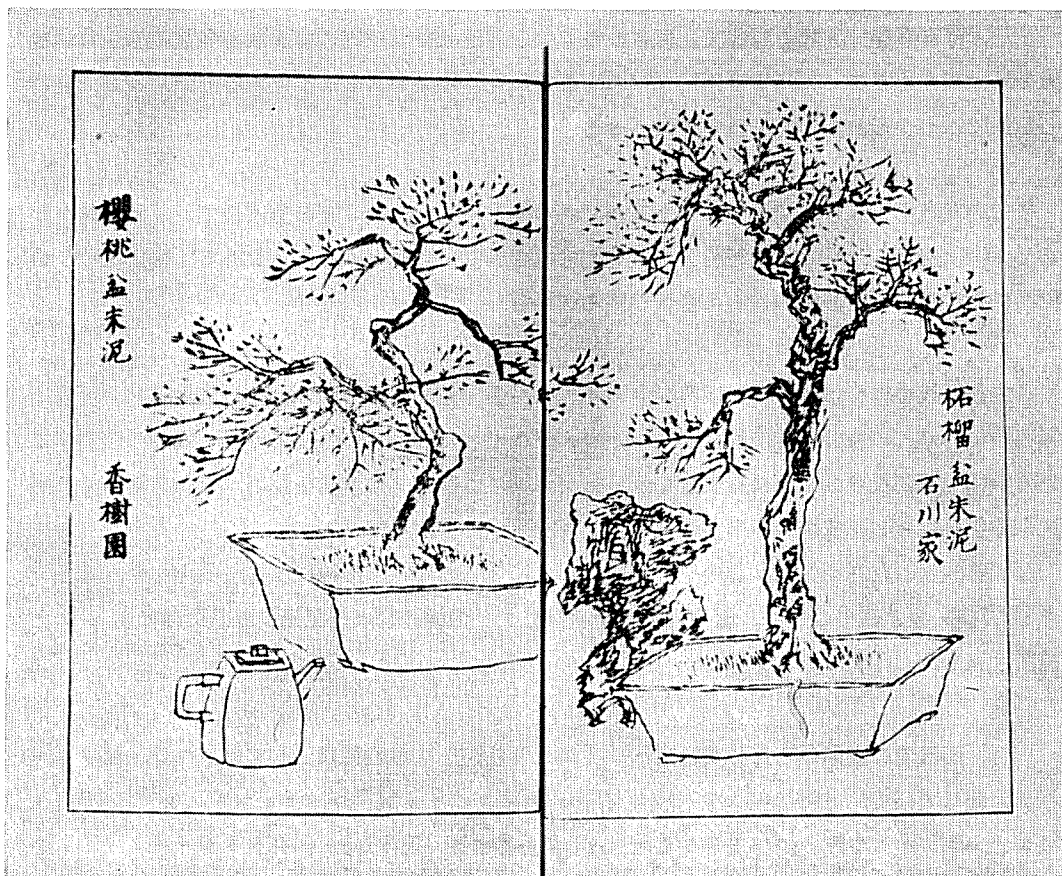
一方、江戸中期に成立した日本の文人階層は「文房清玩」の好尚を確立するに当って「花鏡」その他の文意を踏襲し、その過程で「紫泥盆」の存在を知り、次いで長崎の華商を仲介とする導入が実現したとの筋書きが想到される。

すなわち、江戸末期の「青湾茶会図録」に載ったただ1例だけの「紫泥盆」は文人による「紫泥盆」への開眼とそれに随伴した海舶とを示唆するものと受け取れる。

明治改元を境にして、「文人盆栽」は社会の表側に現われ、次いで急速に煎茶の席に伴う従前

第1表 「美術盆栽」の紙面から拾った「泥物鉢」の急昇

朱	泥	43	青	磁	2
紫	泥	8	瑠	璃	2
白	泥	2	白	磁	2
梨皮泥(蕎麦)		1	洋紅窯(辰砂?)		2
白	交	趾	25	伊万里(錦手)	1
青	交	趾	8	今戸窯	1
黄	交	趾	1	均窯	1
海	鼠	16	古	銅	1
青	花(染付)	4	(不	明	7)



明治20年代に大転換した整姿形と盆器
田口松旭(明治25・1892)「美術盆栽図」より

第2表 「青湾茗醺図誌」に見る
「紫泥盆」への関眼

白	交	趾	8	白	磁	5
黄	交	趾	2	紫	泥	4
青	交	趾	1	白玉(大理石)		1
海		鼠	7	古	銅	1
青		磁	6			

の副次的な存在から脱して主体性を高め、独立した価値をもつ賞玩対象へと転化していったが、その変成過程の発端を「青湾茗醺図誌」中の盆器の種類別に求めることができる。

当該「図誌」中の盆器を類別し、それに使用度数を並記して第2表を得たが、この結果を前掲し

た第1表と対比すれば、資質の向上を求める動きはまず「泥物鉢」のもつ独得な風格を認識し、それを活用する方向をとって始まったと推考される。

明治8年(1875)、鳩居堂主熊谷直行と弟の直芳は先人酔香を追善して煎茶会を京都円山の正阿弥・多福庵・松林院等にわたって開催し、その席の状況を熊谷直行(明治9・1876)「円山勝会図録」として刊行した。

書中、諸名家から出陳を仰いだ多数の法書・名画・茶具・机卓等を列記しているが、盆栽はわずか6点にとどまり、すなわち、この場合、盆栽は依然として副次的存在であったことを思わせる。

明治7年と8年、大阪と京都で開催された2つの煎茶会で、一方には盆栽が多数陳列され、他方では数点にとどまった経緯は不明ながら、盆栽に主体性を持たせようとする動向が大阪で先行し京都ではやや遅れていた事情を想像させる。

後者の6点中1杯は「紫泥盆」であるが、ここに引用した前後2席の煎茶会で、「泥物鉢」がある程度進出し、かつ、「紫泥盆」だけで供用されていた事態に、あらためて「秘伝花鏡」の紙面に見る文字「紫沙宜興盆」の余響が感知される。

日本の盆栽を特色づける「侘び寂び」の風趣は一面「泥物鉢」の助けを借りて大成し、世界に類例のないほどの独自性と優秀性を持つ地歩を築き上げたが、その盆器につき、本来の焼成地である中国で等閑視されてきた宜興盆を返ってわが国においてその真価を認め、それを活用した点に飛躍をもたらした成因の一半があった。

なお宜興盆の存在を知り、真価を認め、常用化に至った時点と経緯は上文で論考したところであり、「美術盆栽図」こそは、泥物鉢の面から見ても、飛躍の原点を記録する記念碑であったと論断される。

(7) 画伝流の姿態から自然美盆栽へ 「美術盆栽図」に載る種類としては、マツ・ザクロ・ウメに偏っていて、当時の主体を示唆するが、外に、ハイネズ・ゴヨウマツ・スギ(株立形)・カエデ・コノテガシワ・サツキ等がこれに次ぎ、ケヤキ(雑木形)・メクラフジ・モミ・ヒノキ(半懸崖)・ヤマザクラ・カラマツ・サンシュユ・ハボタン(多分岐懸崖の3年生株)・マツバラシ・マンネンタケ(靈芝)等にも及んでいる。

なお、本来枝垂形をとるハイネズで懸崖を仕立てることはともかくとして、スギ・ヒノキ等は通常の生育形とは異なる垂下性の異形を選出して、この形式に当てていたように思われる。ハイネズ・枝垂アカマツを含めたそれらの垂下形は、「画伝」の「懸崖」に対応するためのものであり、また、スギやケヤキについても、枝幹にナラやクヌギを模したような樹容をとらせる、すなわち、「画伝」の「雑木」を無理に現出した跡が感じられる。

急昇し続けた盆栽熱は27・8年(1894~95)の日清戦争によって一時停滞したが、その後さらに進展した。

新聞の紙面にも、この隆運と世人の関心を背景にして、30年(1897)頃から盆栽関係の記事が載り始めた。

当時の有力な日刊紙万朝報の社長成島柳北は盆栽の発展を願って多大な利便を提供し、同じく副社長兼主筆の生島一(無待庵)は紙面に困って世人の啓発に努めた。

また生島は筆名で、当時創刊早々であった日本園芸会雑誌にもしばしば盆栽についての報道的記事を投稿し、紙上を借りて盆栽の向上発展に力を尽くし、ややもすれば趣味家や業者に欠ける文筆の面を補った。

上記したように、盆栽の資質は「画伝」に準拠して急昇したが、続いて「画伝」への拘泥を脱して、盆内に風韻に富んだ自然の幅広い景趣を写す方向が台頭した。

この志向に即したほぼ10年間の攻研は、図録の第2陣としての木曾庄七(明治36・1903)「盆栽瓶花・聚楽会図録」の中の影像として後世に伝えられている。

当該図録の序文の中で無待庵主人は、「従来存する一・二の画譜図録は所謂文人的にして、雅趣は即ち之ありと雖も、未だ真を写し得たりと云ふ可からず」として、先覚の動向を記録した。

このような指向は「画伝」の框にははまらない自然の樹容草姿に新たな場を与えて整姿の範型とする、すなわち現代流の盆栽を登場させる源泉であった。

後年雑誌「盆栽」を主催した小林憲雄^{のり}は上記の指向を「自然美盆栽」と呼んで好事家を主導したが、かつて生島一・木曾庄七等の先達に発端した志向は、それを承けた小林憲雄の生涯をかけた啓発により、昨今の盆栽が内包する現代的な概念として世上に定着し、さらに社会通念にまで昇華した。なお、定着は大正末(1926頃)であった。

要するに、元来「鉢植」の同義語であった「盆栽」の文字に対して、芸術観を移入したのが明治20年代であり、「自然美盆栽」への転進はほぼ10年後の30年頃に台頭し、通念化は30~40年にわたる啓発によってもたらされ、すなわち大正末年に成立したと結論される。

一方、この期間には、マツの「蛸作り」や「根上り」、スイリュウヒバに一部チャボヒバを接いだ異形など、江戸的な盆栽が市井に多く存在していたので、そこに啓蒙すべき対象があった。

「聚楽会図録」では顕示した指向に即して、スギにいわゆる直幹形が登場し、その2本立ちを

「双生杉」と名付け、コノテガシワの双幹物を「双樹栢」と呼び、自然の樹冠を持つケヤキすなわち「簪立ち」の範型を登載するなど、かつての「美術盆栽」とは異なる新しい領域への向上が加えられていた。

また、好事家の出品した4～5点のミヤマビャクシン（真柏）によって、当時この樹種がよく流行の緒につき、さらに、幹に白骨化の部分をもついわゆる「舍利」の技法がまだ登場していなかったことを知る。

整姿形の進展と針金掛け 古い年代の整姿は、「^{しゅうろ}綜欄縄掛け」、枝条を鋏で詰める「切込み」、蘭草やミゴ（イネの穂軸）で誘引する「ミゴ釣り」、竹を太枝に添え概して水平方向に整枝する「撥当^{はくどう}て」、主幹に背負わせた竹に添って幹を蛇行形に屈曲させる「櫛曲^{くしまが}げ」などの技法によって実施されていたが、明治中期の頃、大阪の好事家通称「淀亀」が針金掛けを創案し、これを大阪の業者が採用して改善を加え、さらに針金を掛けたままの幾鉢かが東京へ運ばれてこの地の業者に踏襲され、続いて全国的に普及して、それまでの技法に代ったとされている。

なおこの新法が初めて紙面に載ったのは、年代を下って、木部米吉（明治 36・1903）「盆栽培養法」を草分けとした。

年代的な符合から、「聚楽会図録」の盆栽にはこの新技法が適用されていたことと考えられる。

それ以降の盆栽は針金掛けを抜きにしては存在しないと極言出来るほどになってきた。

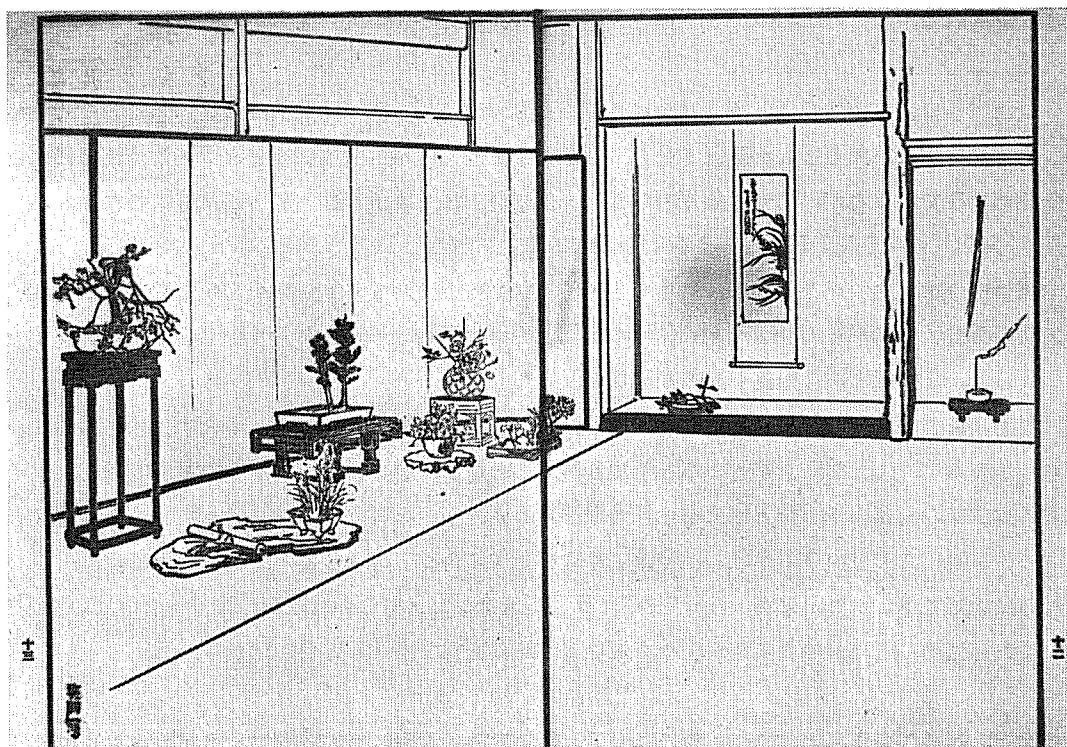
当時の整姿形を上記した「盆栽培養法」から引用すれば、直幹・双樹・株立・根上り・寄植・懸崖・半懸崖・石附の8種がある。

このような類別につき、「石附」は、名称こそ確立していなかったものの、鎌倉・室町時代の「盆山」において主体を占め、「根上り」および8種以外の「文人作り」が江戸時代を承け、「直幹・懸崖」が「画伝」に依拠したことは既述した。したがって、「双樹・株立・寄植」は明治30年代の創案であったと推測される。ちなみに、昨今通行する上記以外の「蟠幹（模様木）・根連^{ねつらなり}・筏吹^{いかだぶき}・斜幹」の用語と範型はその後に登場した考案であったとして誤らない。

（8）高度に規式化した盆盤の布置 上述したように、盆栽人は樹容の向上や配植の工夫に努力を重ねたが、同時に「盆盤の陳列」の面でも、煎茶的傾向を延長しながら、創意を練り雅趣風韻を深めて、「席陳列」の方式を案出した。

この陳列法では、床の間を飾る書画の佳幅は季節や骨董的価値について極度の考慮を払い、その手前に置く香炉や瓶花にも細心の配慮を加え、これに配する床脇の盆栽は「本席」（床）の興趣を承けて選択するなど、ここに高度な仕来りが成立した。

陳列の場における主木に対する^{しなぐさ}下草（添え物）の組合せもその過程で構成されたが、そのことは「聚楽会図録」の紙面が示唆しているところである。



規格化した陳列法「席陳列」の登場
木曾庄七（明治 36・1903）「聚楽会図録」より

その後大正年代にもわたって、陳列法の規格化は一層深まったが、金井紫雲（大正 14・1926）「趣味と培養・盆栽」には多彩な取り合せが集大成的に詳述されていて、かつての事情を物語っている。

そのような偏向は、飛鳥時代から尾を引く唐物趣味が、江戸時代に激化した文人の中国傾倒によって煎茶の席に集約され、明治前半における「画譜」の転用によって盆栽の上に変成し、さらに陳列の競作によって極限化した事態であったと結論される。

そこに見る極限化は、賞玩の精神がいたずらに文人趣味の形骸を追求する方向に偏した逸脱であったと受け取れる。

（9）初期の盆栽書 盆栽関係の刊行物は、三戸与彰（明治 16・1883）「盆栽手引書」をもって草分けとする。当時は民間の趣味家の間にも盆栽が普及し始めたので、僻遠の地岩手の寒村でも和 15 丁の小冊子ながら、刊行を成し遂げるほどの盛り上りが醸成されたのであろうか。

横井時冬（明治 25・1842）「盆栽考」は2〜3ページの雑誌記事ではあったが、明治以前を大綱として確立した盆栽史の原典であり、後世の盆栽史家が等しく踏襲する準拠とされてきた。

当時盆栽の賞玩は、趣味もさることながら、上層階級の人々には教養視されるほどに盛行していたので、工業史その他を手がけたこの文化史家の関心をひき、盆栽史の取まとめを結果したこ

と思われる。

日清戦争による沈滞のあとをうけた急昇に際して、井口松之助（蘭欧仙史翁）（明治 29・1896）「草木図解盆栽培養全書」が版行された。これはようやく本格的な体裁をとりはじめた技術書の先駆的存在であったが、内容は盆栽の培養法・接木挿木法・害虫駆除・窖・温室等にわたり、外に、「庭物」の「草花」と「植木」をも加えている。

細目につき目立つ点としては、アオギリ・イヌツゲなどのかなり太い幹を切断して萌芽させる当時の呼称「切込みもの」・「千本松・千本梧桐」のいわゆる「千本作り」・「根上り松」等が多く収められ、また深円鉢の偏重も見のがせない。

この「培養全書」の盆栽を既述した「美術盆栽図」の内容と対比すれば、年代が同じであるにもかかわらず、大きな開きをもつことを知るが、この点で、前者は世上の平均的事情であり、後者は数少ない先達の先駆的労作であったと理解される。

この年代以降大正前半にかけ、いわゆる鉢物をも加えた同工の盆栽書が若干刊行されたが、それらは総じてシュウカイドウ・ハス・サギソウ・ハボタンなどについて紙面の半ばをさいている。

これも先達の指向が社会に定着するまでの過渡的な様相であったと受け取れる。

盆栽の概念が現代流に通念化したのは大正末年頃であったが、その過程で、一部の盆栽人が本草学者植物学者の言説を評して、「シクラメンの盆栽」・「サイネリヤの盆栽」などと呼んだとして軽侮の意を表明したこともあったが、江戸時代を承ける、幅広い範囲を包含する盆栽（ハチウエ・ボンサイ）の庶民的感觉、その従前からの社会通念を一握りの先覚の間に盛り上った新しい流れに置き換えるには、並々ならぬ努力に裏付けられた実物と言論による啓発およびほぼ 40 年の歳月を必要とした。

(10) 同好会誌が主導した自然美盆栽 この意味の啓発には、同好会の機関紙として発足した盆栽誌が、新聞紙上の記事と並んで、世人の間に新しい感覚を定着させることに大きな役割りを果たしたが、それらの発行をささえた人々の先見と志向に因ってこそ、盆栽のもつ現代的な概念が社会に定着し、民族性の象徴とされる今日の姿にまで昇華したと見ることができる。

同好会組織は明治 20 年頃から発足していたが、30 年頃以降一段と盛況を呈してきた。

田代与志（昭和 46・1971）「明治盆栽三大商のうち香樹園鈴木孫八と村田利右衛門について」によれば、香樹園の村田利右衛門は薫風園の蔵石光蔵と謀って「盆栽同好会」を組織したが、「席陳列」による繁雑と失費を避ける意味から簡素化した陳列形式を案出し、その流儀に則して月 1 回の例会を開き、その席を取材して明治 39 年（1906）月刊紙「盆栽雅報」を発刊した。

なお、ここに登場した陳列形式が昨今の展示会に見る公知の方式となった。

「雅報」の編集には万朝報紙の主筆生島一が当たったが、時流に乗って、たちまち 6,000 部にも上る盛行に達したと伝えられる。

続いて、芝の苔香園木部米吉の主催する「東洋園芸会」が金井紫雲を編集者として、40年(1907)に同好会誌「東洋園芸」を発足させ、また、同年、「大阪園芸会」の松井吉助が、担当者に小倉柿花を迎えて、雑誌「華」を世に送った。

明治の後半に現出した異常なまでの盛況も大正初期に入ってから、不況のあおりで衰退し、また同好会も内部事情が重なり、そのために機関誌は次々と姿を消していった。

ここに生じた空白を埋める形で、静大園清水利太郎を中心とする「盆栽奨励会」が、会員組織を採って、大正10年(1921)に月刊「盆栽」の発行を始めた。

この会誌を編集し発行の事務を担当したのが小林憲雄であったが、同氏は紙面に因り、その後の長い期間にもわたって、「芸術としての自然美盆栽」の展開に傾注した。

大正12年(1923)、関東一円を襲った大震災は、盆栽の面でも、愛好者や業者の羅災・名品の焼失損傷を招き、ここに全国的な中心が失なわれて、沈滞の期間がはじまった。

東京の一部の業者が、清水利太郎・加藤留吉の周旋で、埼玉県の大宮在に集落地盆栽村を開設したのはその翌年の13年(1924)であった。

多くの同好会は中心を失い支持者が減って解散に追い込まれたが、この状況下で、同好会誌であった「盆栽」は大正14年(1925)に小林の主催する「^{くさむら}叢会」に引き継がれ、以降公開制を採って刊行を続行した。

盆栽の水準が向上しかつ定着していった裏では、小林の掲げた指向と生涯をかけた奔走が大きく作用したが、その一環としての昭和9年(1934)に始まった「国風盆栽展」の開催は、会名と会場に日頃の抱負を含め、それに相應する名品の数々を多数の公衆に展示することによって、世人の啓発を行ったものであり、この催しが盆栽の進展に果たした役割りはあえて指摘を要しない。

(11) 盆栽、床の間に上る 鎌倉時代の絵巻物について承知したように、かつては盆器内の土に不浄を感じたせいか、表面を白砂で化粧しながらも、せいぜい縁先に上げる程度で観賞し、室内に入れることはなかった。

ただ室町中期の「東山殿御飾記」によれば、セキシウの根を水洗して盆石につけ、清水を注いで培養した「石菖の盆山」を書院飾りに供用したが、これも土に対する不浄観からの派生であったとも受け取れる。

江戸中後期、盆栽は「文房清玩」と連なっていて、煎茶の席を飾る景物として室内に取り入れられ、床脇や机上などに並んだが、その行為は「盆景を几案に置く」との文玩書上の記述が具現された事態であったとして誤らない。

その頃の錦絵中の何点かは盆栽を室内に飾る図柄を示しているが、そのような進展は当時の高

揚した奇樹異草熱に伴って、奇品に対する世俗的な高い評価が、一部の人々につき、伝統的な土への不浄観を忘れさせた結果か、あるいは、文人流に「几案に置く」ことにもなったとの事情を想像させる。

明治中期の頃の「美術盆栽」や「聚楽会図録」を由来した席陳列でも、茶席の景物から観賞の主体に転じたものの、煎茶の席における法式の延長であり、床の間の正面は与えられなかった。

料亭における席陳列に伴って、趣味家の書斎や客間でも盆栽の煎茶的供用が普及しはじめたが、その様式は、既述したように、本席（床の間）には季節にちなんだ墨跡や山水の佳幅を掛け、香炉をおき、瓶花や珍果を飾り、盆栽は床脇またはそれに類する位置に展げた毛氈の上の机卓しよくや地板（水板）の上に布置するとの伝統に即していた。

すなわち、盆栽が本席に上って主座を占めるまでには至らなかった。

金井紫雲（大正 14・1925）「趣味と培養・盆栽」には「盆栽界の老宿渡辺千秋伯は平常床の間に白地の紬こう（絹地の画布）を2尺幅に仕立てて掛け、その前に盆栽を陳列した。すると盆栽は幅の中の生きた絵になってしまう。」との片言があるが、この隻句によって、床の間に芸術品としての盆栽を上げた一部人士の試みが後世に伝えられることになった。

盆栽の科学登場、明治後半に見られた盆栽の興隆はまことに目ざましい状態であったが、その世状を背景にして、開原亨は盆栽の歴史・盆内の土壌のもつ理化学的性質・盆樹の内部形態などにも及ぶ一連の研究を遂行して、盆栽の科学を発端した。なお、その詳細は間もなく日本園芸会雑誌が分載した。開原亨（明治 43～大正 3・1910～1914）「樹木盆栽論」として公刊された。

(12) 盆栽組合の結成 昭和 5 年（1930）、東京中心の同業者が相寄って盆栽組合を結成したが、これは対外活動や大家の所蔵品の売立て入札などの母体として発足した団体であった。なお、その後全国的な組織に発展して、日本盆栽協同組合となり、事務所を上野公園不忍池池畔の東京盆栽クラブに置いている。

(13) 公開展の組織化と日本盆栽協会の結成 公開の盆栽展は、昭和 2 年（1927）に雑誌「盆栽」が朝日新聞社講堂を会場にして「大正昭和名品盆栽展」を開催したのを皮切りに、その後しばしば開かれたが、昭和 3 年（1928）の御即位記念の催しは、東京都と協会とが共催した形を取り、会場を日比谷公園にして大規模に行ったもので、その後 7 回に及んだ盆栽会の初回であった。

小林は年来「盆栽はわが国固有の芸術」であると主張しつづけていたが、昭和 9 年には数年がかりの奔走が実を結び、会場を日比谷公園から上野の美術館に移すことに成功し、会名も「国風盆栽展」と改め、初代会長に松平頼寿を戴く等、新たな発展を推進した。

以降 34 年 (1959) まで、その間大太平洋戦争による中断があったが、「国風盆栽展」は春秋 2 回ずつ開催され、計 32 回を数えた。

なおその後は叢会に代って新たに発足した「国風盆栽会」がその展示会を開くことになり、通算 38 回 (39 年現在) までを受け持った。

その後、39 年 9 月に、盆栽の発展と普及を願って趣味家と業界人が相寄り、任意団体としての「日本盆栽協会」を設立した。

協会は最初の仕事として、東京オリンピックの期日に合わせ、日比谷公園を会場にした「日本盆栽水石展」を開き、世界各国から来朝した多数の人々に「独自の芸術」・「民族的個性」を強く印象づける成果をあげた。

近年、内外共に、欧文による盆栽書が多数刊行され、また「BONSAI」の呼称がそれまでの「DWARF TREE」・「MINIATURE TREE」に代って国際的な通用語にまでなった由来は、その時の来朝者が受けた感銘によるところが大きい。

この感銘につき、元来西欧系の芸術品は人工を駆使して造型物に美的感覚を盛ったものであるが、東洋人特に日本人の芸術観は自然のあるがままの姿を尊重しながら若干手を加えて美を醸成するという基調を持ち、この一見海外人には異様とも映ずる日本の本質への理会有ってこそ盆栽が国際化し、「BONSAI」の文字が世界的に普遍化したと結論される。

このように急昇した内外の盆栽に対する評価と盛行に裏付けされ、盆栽の内的外的な核心を意図して、40 年 (1965) 2 月、任意団体であった協会は「社団法人日本盆栽協会」に発展し、初代会長に吉田茂を戴き、不動の地歩を確立した。

同時に第 39 回国風盆栽展を東京都美術館を会場として継承開催したが、以降年 1 回として続けられている。

一方、昭和 33 年の初回以降有志の団体日本盆栽会が毎日新聞社との共催で、日本橋三越を会場として、毎秋開いていた「日本盆栽名品展」も、昭和 40 年の第 8 回以後は、新たに発足した日本盆栽協会に引き継がれて昭和 46 年の第 13 回まで続き、発展的解消の結果、47 年には会場を上野池の端の盆栽クラブに移し、会名も「日本盆栽逸品展」と改めて開催されている。

昭和 45 年 (1970) の「日本万国博覧会」では、政府が出陳した日本庭園内に、協会の協賛によって、「日本万国博覧会盆栽水石展」が開かれたが、全世界から来朝した参会者は、そこに展示された多数の名品に接して、かねてから日本の盆栽に寄せられていた世評と期待を自己の視覚によって確認した。

なお、これによって、盆栽を日本美の結集とする海外の声望は一段と高揚した。

明治改元以降の主事要項を第 3 表に列举しておく。

第3表 明治改元以降における盆栽の歩み

明治4年	1871	山内容堂	品川の藩邸に閑居し、煎茶の席を開くため、文人盆栽を大阪の骨董商梨雪堂に発注。文人盆栽東上。
明治6年	1873	山中吉郎兵衛	先人の追福に煎茶会を催し、それを図写して「青湾茗醺図誌」を刊行。書中多数の文人盆栽を掲載。
明治9年	1876	熊谷直行	鳩居堂主兄弟が先考の薦を催して「円山勝会図録」を刊行。
明治14年	1881	田能村順之助	父直入の61才の賀宴に煎茶会を開き、「直入寿筵図録」を刊行。文人盆栽を多数茶席に供用。
明治16年	1883	三戸与彰	「盆栽手引書」刊行。江戸的鉢植的な盆栽を内容とする。
明治20年(?)	1887(?)	大隅重信	岩石松(現代の錦松)を賞玩。錦松登場。
明治25年	1892	横井時冬	日本園芸会雑誌に盆栽の歴史「盆栽考」を寄稿。明治以前の大綱解明。
"	"	田口松旭	根津神泉亭に陳列会を催し、「美術盆栽図」を刊行。江戸の盆栽を排し、文人盆栽を「芥子園画伝」に準拠して改善した成果を多数図写。盆栽芸術の意識台頭。泥物鉢多用。
"	(?)	"	(?) 大坂淀亀 煙草屋通称淀亀針金掛けを創案。(Gardeners Chronicle Vol. 6, 1846 に中国の盆景につき wiring を記述)
明治26年	1893	横浜植木会社	欧文カタログを創刊し、盆栽を登載。チャボヒバ・ゴヨウマツ・アカマツ・ビャクシン・カエデ・ウメ・ケヤキ等。
明治27年	1894	錦松	呼称確定。産地中心に人気上る。
明治29年	1896	井口松之助	筆名蘭翁仙史、「草木図解盆栽培養全書」刊行。鉢植にもわたり江戸の盆栽を記述。
明治33年	1900	山中商会	ロンドンの山中商会、日本よりチャボヒバその他の盆栽を取り寄せて競売。盆栽への認識高揚。
明治34年	1901	津村東一(?)	ロンドン日本協会の主催した講演会で日本の盆栽を紹介。幻灯にてチャボヒバ根上りマツ等上映。
明治35年	1902	山中商会	ロンドンにて輸入直後の47点を競売。
"	"	中島信義	「草木実験盆栽仕立秘法」刊行。新傾向の盆栽を内容とし、好評を受け重版数回。
明治36年	1903	木曾庄七	「盆栽瓶花聚楽会図録」刊行。現代盆栽の原点。ケヤキの簪作り・スギの自然形・下草の布置登場。席陳列の方式確立。
"	"	貴族院	第19回開院式に表玄関と便殿に盆栽を飾る。公式的な室内布置始まる。
"	"	木部米吉	「盆栽培養法」刊行。新傾向の盆栽を内容とし、針金掛けの技法を活字とする。
明治39年	1906	生島一(編)	同好会誌「盆栽雅報」発刊。香樹園村田利右衛門発行。盛行時には6,000部。
明治40年	1907	金井紫雲(編)	同好会誌「東洋園芸」発刊。苔香園木部米吉発行。
"	"	小倉柿花(編)	同好会誌「華」発行。大阪園芸会松井吉助発行。
明治42年	1909	日英博覧会	ロンドンの会場にビャクシン(真柏)・マツ・カエデ等7杯・盆景(盆庭)1点を展示。公式出陳の始め。
明治43年~大正3年	1910~1914	開原亨	日本園芸会雑誌に「樹木盆栽論」を分載。歴史・土壌の理化学的性状・盆樹の内部形態にわたる。盆栽の科学を創始。

大正2年～1913～	大	学	館	相継いで盆栽書を刊行。鉢植をも含むが盆栽の盛行した世情の反映。
大正6年 1917	宮沢文吾・盧貞吉			「実験花卉園芸統編」刊行。書中花卉観賞の沿革を記述。
大正10年 1921	小林憲雄(編)			同好会誌「盆栽」発刊。静大園清水利太郎発行。「自然美盆栽」の展開始まる。
大正11年 1922	宮沢文吾			「盆栽附鉢植花卉」刊行。書中盆栽の歴史を詳述。
大正12年 1923	関東大震災			多数の盆栽を焼失損傷。同好会組織解散。
大正13年 1924	盆栽村			東京の盆栽業者が大宮に盆栽村を開設。清水利太郎・加藤留吉周旋。
大正14年 1925	小林憲雄			叢会を組織し、月刊「盆栽」を公開誌として引継ぐ。
" "	パリ平和博覧会			多数の盆栽出陳。盆栽への認識急昇。
" "	皐月同好会			大日本皐月同好会結成。日比谷公園にて展示会開催。人気上昇。
昭和2年 1927	公開盆栽展			叢会が朝日新聞社講堂で「大正昭和名品盆栽展」を開催。公開展の創始。
昭和4年 1929	白井光太郎			「盆栽の歴史」を簡述。(総合園芸大系・総論)
昭和4年～1929～	盆栽技術書			盆栽の盛行を反映し、刊行増加。
昭和7年 1932	蝦夷松			千島の国後島産の原木の活着に成功。盆樹の雄として人気集結。
昭和9年 1934	国風盆栽展			上野の美術館を会場として発足。叢会主催。会長松平頼寿 副会長酒井忠正。
昭和10年 1935	石付盆栽等			石付盆栽・錦松・スギ全国的に流行。
昭和12年 1937	フランス万国博覧会			盆栽80点出陳。金大賞受賞。西欧社会に盆栽定着。
" "	農業世界			昭和12・13・14の3年連続して「盆栽名木写真集」を刊行。
昭和13年 1938	国風盆栽展			非常時下春の盆栽展を中止。
昭和14年 1939	東京盆栽倶楽部			村田憲治を初代社長として発足。
昭和19年～1944～ 21年 1946	戦禍			国風盆栽展休止。盆栽の焼失放棄多数。沈滞激化。
昭和25年～1950～	欧文盆栽書			「BONSAI」の呼称が一部で国際語となり、欧文の盆栽書登場し始める。主として日本に駐留した将兵の影響。
昭和27年 1952	日本水石協会			水石熱急昇。協会結成。
昭和30年 1955	五葉松直幹			直幹型流行。
" "	小品盆栽			人気急昇。
昭和36年 1961	チェルシーショー			ロンドンの盆栽商 Japan Society of London が Chelsea Show に日本から輸入した盆栽を出陳。
昭和39年 1964	盆栽協会			任意団体として日本盆栽協会結成。国風盆栽展を継承。
" "	東京オリンピック			会期中日比谷公園にて盆栽水石展を開催。来会者は「日本固有の芸術」を強く認識。
昭和40年 1965	盆栽協会			社団法人に組織換え。支部結成開始。初代会長吉田茂。
昭和45年 1970	日本万国博覧会			場内の盆栽水石展に多数の名品を出陳。多数の来朝者に「BONSAI」のイメージを定着させる。
" "	盆栽協会			加藤芝の編集によって「盆栽大観」刊行。書中岩佐亮二日中鮮にわたる盆栽史を発表。盆栽史観変る。
昭和49年 1974	皇居の盆栽展			主催毎日新聞社協賛日本盆栽協会。来会者総数15万人。未曾有の盛況。
昭和50年 1975	アメリカへ盆栽贈呈			1976年の建国200年祭に備え、要請によって名品50点水石6点を国として寄贈。(国際交流基金)ワシントンの国立樹木園園長 John L. Creech と日本盆栽協会の奔走によって実現。

V 盆栽の国際化

1) 東洋に旅行した植物関係者

往昔、アラビヤやイランの商人が隋・唐を訪れ、その後西欧人が宋・明等に旅行したが、盆景は記録の一端にも上らなかった。

近世に下って、清の前中期までの中国および江戸時代の日本を尋ねた西欧人についてもまた同様であった。

近世日本に來朝した著名な事例に次の人々が掲げられる。

Francisco de XAVIER (天文 18・1549) その他多くの宣教師・William ADAMS (三浦按針, 慶長 5~元和 6・1600~1620)・Engelhart KAMPHER (元禄 3~5・1690~1692)・Carl Peter THUNBERG (安永 4~5・1775~1776)・Philipp Franz von SIEBOLD (文政 6~12・1823~1829)・Carl Johan MAXIMOWICZ (万延 1~文久 3・1860~1863)・Robert FORTUNE (万延 1~文久 1・1860~1861)・J. G. VEITCH (文久 1・1861)・Thomas Wright BLAKISTON (文久 2~明治 17・1862~1884)・Paul Amédée Ludvic SAVATIER (慶応 2~明治 9・1866~1876) 等。

幕府の鎖国政策の下、外国人の行動には厳しい制約があったものの、盆栽が來朝者の目に止まる機会は皆無ではなかったと思われる。

その点で、長崎の出島に駐留したオランダ商館長は毎春將軍に謁見するため江戸参府をしたが、特に、商館長の随員として江戸に往復した THUNBERG と SIEBOLD は共に博物標本として動植物を多量に集め、また参府の途次大坂天王寺の植木屋に立寄って鉢植(盆栽)や灌木を数多く入手し、長崎に届けさらに本国に転送した。〔上野益三(昭和 48・1973)「日本博物学年表」による。〕

幕末の頃には行動の制約は大幅に緩和されたので、当時 plant hunting に來朝した FORTUNE や VEITCH は各地に旅行し、意欲的に収集して母国に送付した。

SIEBOLD がドイツの Leyden に届けた生きた植物は 1856 年 Siebold Co. から売り出され、FORTUNE と VEITCH の収集品もイギリスに送られ、共に日本の植物が欧州各地に広まる基底となった。

長い日数を要した当時の輸送につき、鉢植の形はまことに好都合であったと考えられるが、着荷後盆栽としては扱わずに苗圃に栽植されたのであろうか。

いずれにしても、來朝者は総じて盆栽に対して関心を払わなかったか、またはその見聞を自己や狭い周囲にだけとどめておき、公表することはなかったと結論される。

2) 西欧人と盆栽との出向い

西欧人の盆栽に対する印象が文章の形で公刊されたのは Gardeners' Chronicle Vol. 6 に掲載された W.I. (1846・弘化 3) "Chinese Method of Dwarfing Trees" を創始(?)とする。

この投稿記事は、阿片戦争後通商交渉のため清国を訪れたフランス使節団一行が広東の祭日に

当って、街頭を埋めつくした出店の一角に果樹や林木の盆景を見いだして心から奇異に感じ、その中の一人 M. RENARD が自己の印象や仕立方の見聞記を通信し、それを W. I. が寄稿したものであった。

西欧人の第一印象は、—

And these little trees, so contemptible in appearance the height of a foot!—carrying, each Orange-tree, 20 enormous Oranges? And each apple-tree, 20 or 30 large Apples?

As for the dwarf tree, there is that a mystery of horticulture or rather sylviculture, to divine.

M. Renard had noticed, on visiting the apartments of the Mandarins, similar little trees of the height of some few inches, pitted to look at unhealthy, distorted, and covered with excoriations with out number, and a thing which astonished him, the little foliage which ornamented the extremity of the branches, belonged to kinds that ordinarily attain an enormous size, such as the Elm, the Bamboo, and the Cypress.

M. Renard arrived at the following solution of these eccentricities: That for the Chinese nothing is beautiful, but that which is hideous; that a stunted shrub without leaves is a wonder that is worth all the forests in the universe; and so the principale occupation of the Chinese nurserymen is to combat Nature in everything that is beautiful and rich.

すなわち、M. RENARD は始めて見た矮化樹の奇態につき、その成因を推察して、「中国の植木屋の頭の中にある主たる考えは美しく豊かである総ての点において自然に挑戦し、無残にも、不健康に、ねぢ曲げて、本性をゆがめることである」との結論に到達した。

なお、この一文は、全体を通じて、あからさまな軽侮を表明しながらも、仕立方の詳細や針金掛けを記述していて、中国における 19 世紀中頃の技法を知る上で、貴重な資料である。抄訳すれば、—

「中国人は彎曲した形に仕立てるに当り、こぶが多くかつ曲りくねった小枝を選び、切りつめてさらに形を整えた上で、一部分の樹皮を環状に剥去し、そこに土を包んだ布を巻きつけ、その後毎日灌水して発根させる。それから残酷にも水を制限して葉を黄変させ、次いで枝が生き続けるための少数の葉を残して他を除去する。

春、樹液が流動を始めると、ある間隔で横方向の切れ込みをつけるが、損傷部で樹液が凝固し、見るも無残な状態に樹皮が膨大する。

その後縦方向に切り込み、蜂蜜・砂糖・染料・さらに酸さえもすり込む。多くのアリやハエが集中して樹皮をかじり突き刺し、一方酸は触れた部分を焼く。

このような処置の末、木は異常な形状を呈し、本物の怪物になり果て、辛うじて生き続ける。

植木屋はその枝を切り離して土を落とし、方形の鉢にすえ、小粒の砂礫で植えつける。

その後必要な管理はその植物が水不足で苦しんでいると見た時軽く灌水することである。

このような木は高価で取引され、驚いたことには極限の寿命を保ち、100 年 200 年も稀ではない。

女王に送られてきた若干の盆景には、上述のような木の苦しんだ跡に加えて、針金で幹を何箇所もしばり込み、また針金の作用による枝のねじれや屈曲を見いだした。」

上文により、わが国の江戸後期に相当して、中国の植木屋は鋏による「切り込み」や「針金掛け」によって幹に屈曲をつけ、また樹幹に膨脹した奇態を持たせるために、針金を何箇所にも巻きつけたり、あるいは環状に樹皮を損傷することによって癒傷組織を形成させ、さらに虫の誘引や酸の塗布によって縦の方向に樹皮を剥ぎ、いわゆる「舍利」を作っていたなどの事情が判明する。

RENARD の見聞に基づく限り、それらの盆景はあくどく感ずるほどの誇張と異様さをもつ極端な作り物であったと想像されるが、そこに中国の盆景を二分する庶民的な俗風と高人の愛好した清雅な姿態との対比が浮び上がってくる。

わが国の盆栽にも、かつての江戸的な盆栽は、下掲の図写が示すように、奇態をいたずらに誇示する一面があったが、それらが西欧人の盆栽に対する印象の形成にどのような影響を及ぼしたかはあえて考究するまでもない。

盆栽に対する Renard 流の見解はその後にも継承され、Osborne Royal Garden や Kew の Royal Botanical Garden に日本から導入された盆栽を見て、略名 C. W. C (1862) は日本人の堅忍不拔と勤勉の結果を認めて敬服しながらも、不合理と醜悪を感じて、盆栽観を *Gardeners' Chronicle* に投稿した。

なお 1862 年は文久 2 年に当り、したがって C. W. C の見た盆栽は江戸的な範型であったとして誤らない。

またその一文では、日本で「石付き」が流行し、イギリスにその幾つかが届けられている旨を述べている。江戸末期の頃にはいわゆる「石付き」よりはむしろ類形の盆庭(墨江武禪の占景盤)が盛行していたので、多分その何杯かが海を渡ったことと推察される。

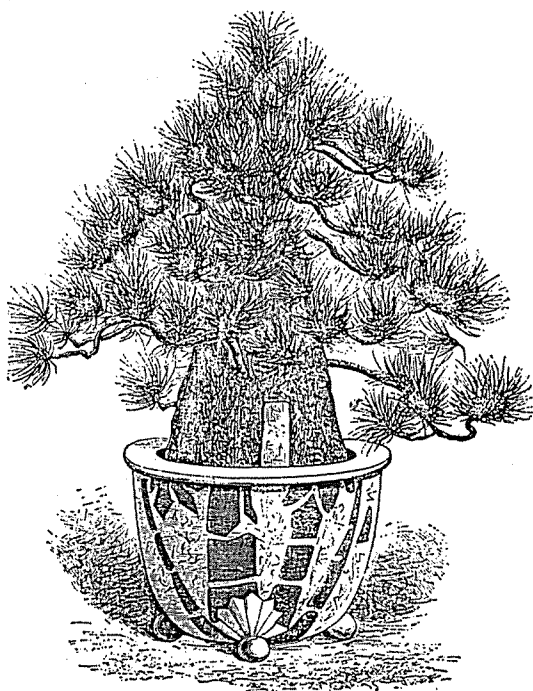
1889 年(明治 22 年)にも、依然として、*Gardeners Chronicle* は *The Dwarfed Trees of Japan* の見出しの下で、「そのような矮化樹について何か賞讃すべき点があるとするならば、感覚さえも疑われる。それらを一見すれば日本人が鉢の中に仕立上げた植物のもつ異様と不自然な形だけが目に入る。」と軽侮した。

軽侮の半面、関心の高まりを反映して、同じ年次に M. VALLOT の通信文を *Japanese Distortions* として載せ、「仕立てる当ってはまず矮性形の幼植物を選出し、直根を切断することによって支根を四方に出させ、地上部にも摘心や切り込みを加え、次いで平鉢に移す。鉢内の土は一定期日毎に削り、丁度クモの足状に土から離なす。」として「根上り」の技法を解説する。

ここに記述された対象は「根上り」であり、さらに前文の「美的感覚の欠損」を疑われた場合をも含めて、ことさらに奇態を誇示するいわば江戸的盆栽の中の極端な範型が紹介されていたと



明治年代に流行した「根上り松」の俗風
井口松之助（明治29・1896）
「草木図解 盆栽培養全書」より



芝増上寺の赤松に見る奇態
Gardeners Chronicle 1874, 367

結論される。

1872年は明治5年に相当し、改元早々の東京では、換言すれば全国的に江戸的盆栽が主流を占め、文人盆栽はようやく大阪から東京に入り始めた年代であった。

すなわち市井の盆栽は大方「蛸作り・根上り・篠作り」等に属し、「盆庭」も存在し、それらが来朝者の目に止まり、また母国に届けられて、奇異観と軽侮の対象に上り、いたずらに樹令の古さが頭に残ったと結論される。

仮りに、現代の盆栽に類した範型がその頃西欧に紹介されていたとしたら、西欧人が盆栽に寄せた印象はかなり違っていたと想像される。

3) 評価の好転

長い間続いた酷評と軽侮にもかかわらず、西欧人の接した盆栽には奇異ではないものもあり、また見馴れたせいもあったか、次第に評価が好転していった。

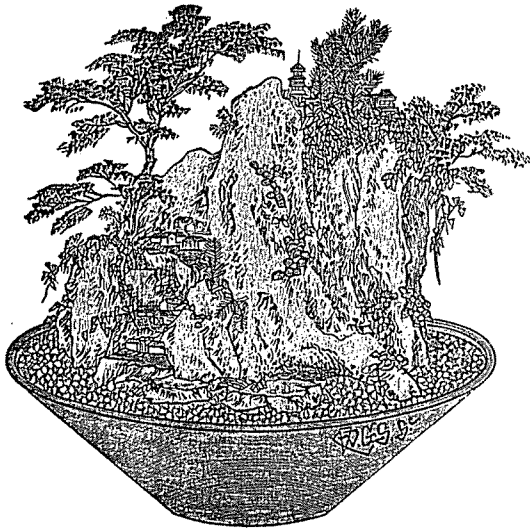
フランス人は早くから良い意味での関心を寄せたが、1890年（明治23年）のParis Exhibitionには盆栽と盆景（盆庭）の数点が出陳された。

アメリカで始めて盆栽の記事が載ったのは1870年（明治3年）に American Horticulturist が掲載した雑誌 Boston Traveller の海外特派員の寄稿であった。その後1893年（明治26年）にはシカゴで開かれた Nurserymens' Congress

で Henry IzAWA が招まれて、日本の庭園と盆栽に関する講演を行い、関心の高まりを反映した。

次第に好転した印象を承けて、1900年（明治33年）ロンドンの山中商会在日本から輸入したチャボヒバその他の盆栽は競売に附され、高額で落札された。

続いて1901年（明治34年）には、ロンドンの日本協会が主催して、津村東一（？）を演者



盆庭（占景盤）を紹介した Revue Horticole の図写
(Gardeners' Chronicle, 1877 より)

Auction Gallery では日本から輸入された直後の47点が入荷後間もなくせりにかけられ、1品も残らず売りさばかれた。

山中商会が盆栽や浮世絵その他工芸品などを欧州に運び、日本の美術工芸を西欧人に紹介した功績は少なかった。

江戸後期に来朝した西欧人特に植物の収集にひとときわ熱心であった Siebold・Fortune・Veitch 等が欧州に紹介し販売に附した日本原産の野生植物や特異な園芸植物によって、欧州各国の植物愛好家の目は強く日本に引きつけられた。

明治早々の開港によって植物の輸出と同時に、外国産の有用植物の導入が始まったが、盆栽の海外進出もその動向に連なる事態であった。

このような機運に乗じて横浜植木会社が創業し、特に同社は明治26年(1893)の英文目録第1号以降数ページをさいて盆栽に当て、輸出の円滑化に門戸を開いた。

前述したように、ロンドンに開業し、日本の工芸品や浮世絵などを売りさばいた山中商会も盆栽を海外に進出させた草分けであった。

なお、当時の品目はチャボヒバの蛸作り、アカマツ・ゴヨウマツなどの根上りを主とし、その他ビャクシン(真柏)・カエデ・ウメ・ウメモドキ・カエデ・タケ等にわたっていた。

個人的に盆栽を母国に持ち帰った事例も少くはなかったが、かつてのアメリカの駐日公使 Anderson は数多くの盆栽をボストン郊外の邸宅に培養して楽しみ、1938年その収集品を Arnold Arboretum に寄贈した例は著名な一事であった。

4) 世界的な定着

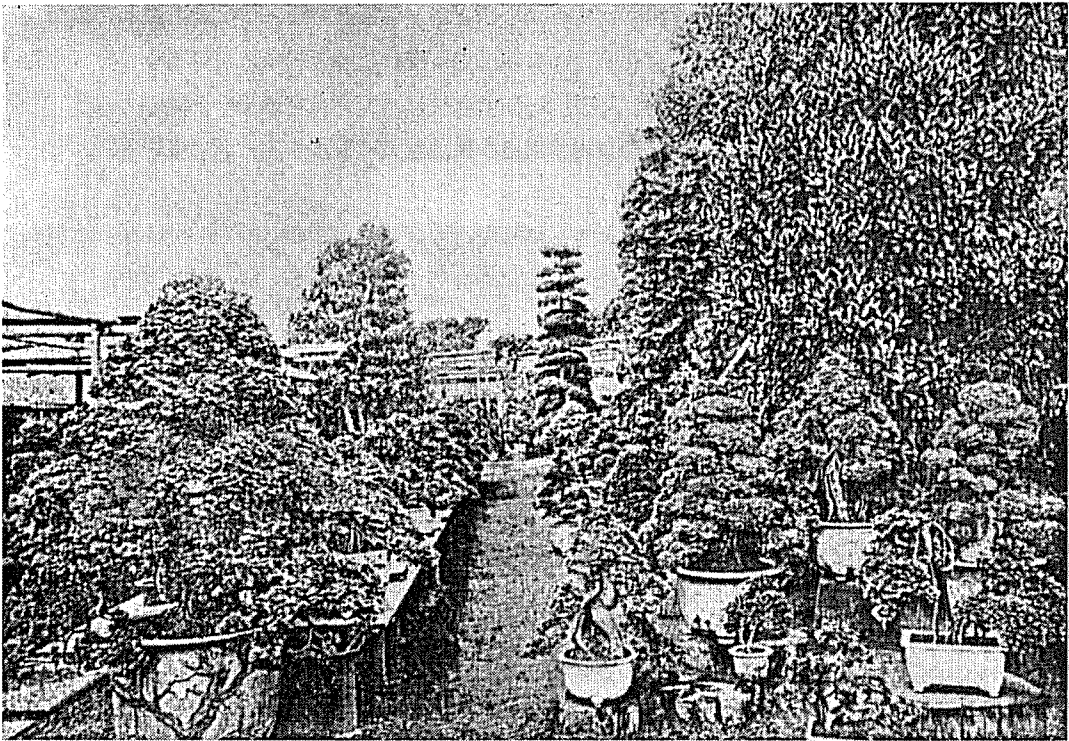
太平洋戦争後、日本に駐留した外国の将兵は日本固有の美術工芸品に接し庭園や盆栽を観賞して、西欧的な本質とは異なる日本人の芸術観を理会して帰国したが、その後、室内調度品に日本

とする盆栽の講演会が開かれるほどに進展した。

席上、座長を勤めた Arthur Diosy は日本の盆栽家を評して Gaden Artist と賞讃したが、このような印象の転換には日本国内で進行しつつあった盆栽の質的向上が作用した面もあったと推考される。

なお、その際の記録は Transaction and Proceeding of the Japan Society Vol. 6 (1903) に、席上供覧されたチャボヒバ・根上りマツ・盆景(盆庭)などの写真を添えて、公刊された。

1902年(明治35年), Conduit Street



英文カタログの中の盆栽 (Catalogue of the Yohohama Nursery Co., Ltd. 1904) より

的意匠が汎用され、盆栽が世界的な関心の対象に上ったなどは、文化交流を進め、相互の理解を深める上に極めて有効に作用した。

イギリスでは、古くから盆栽に寄せていた関心に立脚して、1961年（昭和36年）、かつての Japan Society of London の名称を継承する形で、同名の専門業者が開業し、同年の Chelsea Show に日本から輸入した盆栽を出陳して来会者の目を引きつけた。

その後愛好者が急増し業者もふえたが、1975年の Chelsea Show では室内展示場の114区劃中4社の盆栽業者が自国内で養成した独自の盆栽を展示したほどで、その急昇を裏書きした。

なお、Japan Society of London 内に事務所を置く BONSAI KAI は Royal Horticultural Society と提携して、展示会に出品される盆栽の審査を対象として、1961年、R. H. S. Handbook on Judging の中に基準を制定した。

近年、アメリカでも盆栽の愛好者が急増し、1967年に発足した California Bonsai Society をはじめ、その他各地の Bonsai Society が盛んな活動を展開し、雑誌に Bonsai・Bonsai Bulletin 等が発刊され、全国的な組織を意図して、Bonsai Club International・American Bonsai Society などが結成された。

1976年7月のアメリカ建国200年祭に備えて、昭和48年、合衆国政府の企画を非公式に代表

したワシントンの国立樹木園々長 John L. CREECH は日本盆栽協会宛に来信して、盆栽の寄贈を要請した。協会は盆栽を核心とする文化交流の意義を強く受け止め、日本政府に働きかけ、国際文化交流基金の援助を受けて、昭和 50 年 4 月名品 50 点外に水石 6 点を贈呈した。

アメリカ側は、所定の隔離栽培後、国立樹木園内の保護施設に展示すると聞いている。

上記した 2 国に加えて、オーストラリアでも隔月発行の盆栽誌が 1969 年（昭和 44 年）に発刊し、ニュージーランドと南アフリカ連邦にも、年代を接して、Bonsai Society が発足した。

世界各国の盆栽人は、自国に産し自己の周囲にある植物の中から、盆栽の本質にかなった適材を選出し、独自の樹種独自の範型を目差して向上に努力を重ねている。

VI 摘 要

1) 明治 25 年の横井時冬の短文「盆栽考」は盆栽史の草分け的存在であり、明治以前の変遷を荒筋としての確にまとめた創見であった。しかし、精細を欠き、盆栽の成立発展にも及んだ大陸文化の影響を失念し、当然ながらまた、明治 20 年代以降、目ざましい発展を積み重ねて今日の境地に到達した過程を欠いている。

2) 趣味家のもとより、園芸学者・本草学者等の手に成る従来の盆栽史は、総じて、横井の引用した出典の範囲にとどまって論説されてきたが、その当然の帰結として類型化を招き、件数が増してもさしたる発展がなく、また往々にして、資料の渉猟に周到を欠き、あるいはその不用意な解釈に原因して誤説を立て、社会に片寄った通念を形成させてきた。

3) 従来の盆栽史家の大半は鎌倉時代末期の絵巻物法然上人絵伝・春日権現験記絵などに見る盆栽(盆山)を最古のものとし、その画作年代 1300 年頃をわが国で独自に発足した源流だとする論説を展開し、一部中国からの将来を推測した人々も、日本の文化が先史・原史時代以降中国や朝鮮に範を取って大きく進展してきた事実に十分な評価が及ばなかったためか、絵巻物に盆栽が登場した由来を大陸での諸事情に求めるまでには至らなかった。

4) 筆者は上記絵巻物よりも約 100 年さかのぼる西行物語絵巻(大原本)に見る盆山が国内最古のものであることを指摘し、総じて、それらの鎌倉時代前期から後期に登場した盆山を、賞玩の好尚と盆器にわたり、南宋、元に移行してからは、南宋の遺風への追慕に結び付け、その由来を遣唐使以来の度を越した唐物尊重の伝統と、元による圧迫を避け、幕府の招請を納れて来朝した禅僧のもたらした「文房清玩」の 2 点に求めた。

5) 年代がわずかに下った吉野時代の絵巻物慕帰絵詞にも計 8 点の盆山が描かれているが、鎌倉時代の絵巻物にもさかのぼって、当時の陶磁盆は紛れもなく海舶品であったと断定する論拠を得た。

筆者は盆器を海舶していた事実を、間接的ながら、盆栽を賞玩する慣習の成立にまで適用して、大陸からの導入の準拠とした。

6) 中国の漢末以降、隠人高士の間に盛行した「文房清玩」の好尚は、唐に至って「琴棋書画」として定着し、自然讃美の風潮を醸成する核心となったが、当時、金殿堂宇の内外や高人の文房(書斎)に飾られた「堂花」(室内の盆景)を模写ながら初唐の頃の章懐太子李賢墓に残る壁画の面に見いだして、世上に通行していた慣習を明示し、また、白居易の詩詠を引用して、冬期に盆景を保護し「早放」(催花)きせる施設としての「暖室」を当時の文字の上で呈示した。

7) 中国人の間に伝わる玩石の好尚「選石」(添え石)を東晋の文人画家顧愷之が挿図を添えて補作した劉向の「烈女伝」の中の図写に見い出して、経過しながら、その伝統の古さを具体的に明示し、その風尚の成立した契機を中国古来の登仙思想に求め、さらに後年唐代以降の「堂花」や園林苑池における「選石」の汎用に言及した。

8) 晩唐以降、「選石」や「假山」(岩組み)に賞用されてきた太湖石の供用を、中唐の詩聖白居易の詠懐「双石」に準拠して割りだし、すなわち、白をその創始者と認定した。

後年、わが国の江戸中後期から明治初期にかけ、煎茶の席を飾った太湖石。同じくその席に上げられた文人盆栽の「選石」(添え石)としての太湖石につき、その風尚の導入先を明清の「文房清玩」に、その根源を白の故事に求めた。

9) 北宋の頃の「花盆」を「故宫藏瓷」の中に探求して、器質の典雅と形状の多様性を確認し、後年の鎌倉時代の絵巻物に見る盆器の意匠と器質に宋磁の特質を認め、主としてこの知見から、傍証ながら、盆玩の好尚が中国の盆景に結び付き、鎌倉時代は南宋で盛行していた盆玩を承ける接点であって、独自の始点ではなかったと結論した。なお、古く遣唐使による導入も推測しておいた。

10) 明代に高人の賞玩した盆景を中期の無款「十八学士図」(年代は東京国立博物館の海老根聰郎技官の教示による)・仇英「金谷園図」等に求めて、庶人のいわゆる鉢植的な盆景に対する高人隠士の清雅な範型を呈示し、一方、その清雅な風趣を典籍に求めて、明代の文玩書「考槃余事」の中の「盆玩箋」を独自の見解によって和訳した。

なお、「十八学士図」によって「外縁長方雲足盆」が当時供用されていた事実を指摘し、あわせて、「その器形は明治年代に日本人が創案し、宜興窯に発注して焼成させた」とする従来の通説を正した。

11) 室町幕府の將軍義政につき、壮年に達した頃の盆玩事情を蔭涼軒日録によって解明し、当時の盆山が「船」(木製の平箱)に水をたたえ「石上樹」をすえる範型を主体とし、盆器には、「船」の外、青磁・鎗石(真鎗)・故銅(青銅)等の海舶品も供用されていたことを明らかにし、また、義政の創案によって「船」の中に紀州砂を敷き、これに「富士松」(カラマツ)の「石上樹」をすえて内裏に上進した事例を掲げた。

なお、この上進は宮廷と盆栽とを関係づける最も古い記録として特記しておいた。

12) 「日録」に見る義政や諸寺院の盆山は、年代的な縦の方向を受ける伝承ではあったが、半面、上述した盆器の舶載につき、それを可能にした遣明使の派遣と繁頻な貿易船の往来に関連して、当時盆玩の盛行していた明中期・李朝初期の盆景に、横の方向の影響としてつながる可能性を指摘しておいた。

13) 江戸前期の種樹（園芸）は家康・秀忠・家光にわたる3代の將軍の「花癖」に基因して発端し、家光の治世に制定された「参勤交代」の実施その他の世情によって急速に深化した。

染井の種樹家伊兵衛政武の屋敷を鳥瞰した「翻紅軒霧島之図」に当時における種樹の盛行を見ると同時に、庭先の棚に数多く並べられた盆栽について、盆栽業の創始を想像し、あわせて、染付鉢を思わせる図写から、中国鉢の供用を推測した。

14) 江戸後期に板行された「草木奇品家雅見」によって、「尾張焼」の名称をもつ初めての施釉鉢が前期の享保年間（1720年前後）に焼成されたとの事情を知ったが、それらは白および黒の釉色をもつ陶器の深鉢であり、「白罎・黒罎」と呼ばれた。

土地柄としての江戸の盆栽は、前・中・後期を通じて、「下方円鉢」（丸形の深鉢）に偏していたことを地誌・風俗誌等の挿図および浮世絵などから解明したが、その器形の鉢が多用される発端を白罎黒罎鉢の創始に求め、あわせて、中後期の世上をおおった斑入り葉変り等の奇樹異草熱が手のこんだ染付鉢を登場させたので、江戸の盆栽鉢は盆樹の姿態と共に、世上の大勢に引かれて、風情はおろそかになったと推論した。

15) 江戸時代の盆栽を考究する史料として、始めて地誌・風俗誌・絵本・浮世絵等を総合的に活用する方途を開いたが、それらの図写によって、江戸の盆栽は「蛸作り・根上り・篠作り」等に偏して風趣に欠け、他方京阪の盆栽は中期以降その地に居住していた文人の好尚に強く影響されて、樹容から盆器にわたり、高い風格をもっていた事情を解明した。

16) 日本の文人は、江戸中期、京阪の地に成立したが、それらの隠人高士は中国古来の文人が形成した「文房清玩」・「琴棋書画」にあこがれ、その境地を明末の「考槃余事」や清初の「秘伝花鏡」によって体現した。

それらの雅遊書に従って、交友の席や書斎に煎茶の風尚を取り入れ、「盆景を几案（机）に置く」との文意に即して清雅な盆栽を室内に上げ、ここに煎茶と結び付いた文人盆栽を登場させた。

文人盆栽は明治改元後発展して江戸的な盆栽を排し、現代の盆栽に昇華したが、それらの経緯を資料の上から割りだした。

17) 幕末の頃京阪の地に奔走した勤皇派の志士や大名は「文房清玩」につながる煎茶の風尚を身につけたが、やがて新政府の要人に昇進すると、その風尚ひいては文人盆栽を社会の日の当たる面に引きあげる事態をもたらした。

その後間もなく盆栽を主煎茶を従とする関係に転じ、ついで盆栽を語りまた所有することを教養人の教養とする風潮が派生し、新興財閥の当主や中小企業者・商店主等、多数の人々が盆栽人に転じたので、急速な進展がもたらされた。

その急昇の過程で、資質の向上が少数の先覚者に企図され、南画の習画帳「芥子園画伝」に準拠して「美術盆栽図」、次いで自然美を目途して「聚楽会図録」に図写された段階にまで到達し

たが、筆者はその明治 20 年代から 30 年代の期間を、日本の盆栽の最も厳密な意味における源流であると規定した。

18) 日本の盆栽は「泥物鉢^{でいもの}」の供用によって風韻を現出しているが、その別称「宜興盆」につき、筆者は、明末の「文房清玩」のひとときわ盛行していた世情の中で、一部の文人が本来下手物視されていた宜興の「砂壺」に茶の志向を認め、これによって茶陶の名品「陽羨陶」を発端させ、一方盆景にも宜興盆を供用し、やがてその花盆は清初の「秘伝花鏡」の上で「紫沙宜興盆」となり、後年その文字は日本の文人の目に触れて、「青湾茶会図録」の「紫泥円盆、養紫微花」ともなったとの経緯を解明した。

その後、明治 20 年代に始まった改善工夫の段階でその本質が深く認められて先覚の間で賞用され、その後「泥物鉢」の供用が常形化して広く盆栽の半身となり、盆栽の風趣を全般的に向上させた。

19) 西欧社会への盆栽の紹介は、知見と現品を合せて、1846 年、阿片戦争直後、清国の盆景 (dwarf tree) に始まり、その際イギリス女王への献上もあった。

20 年ほど下った江戸末期、1862 年には Osborne の Royal Garden と Kew の Royal Botanical Garden に、「石付き」を含めて、江戸的盆栽が飾られた。

両国の盆栽はいたずらに奇態を誇示したもので、軽侮と残酷感の対象とされ、ただ長命だけが関心に上った。

1890 年(明治 23 年)頃からは日本の盆栽の質的向上もあって次第に好評に転じ、少数ながら日本からの輸出が軌道に乗り、1909 年(明治 42 年)の日英博覧会に最初の公式出陳があり、1933 年(昭和 12 年)のフランス万国博覧会では金大賞を授与された。

20) 世界の人々は太平洋戦争後、将兵の日本駐留、東京オリンピックと日本万国博覧会による来朝等に際し、多数の名盆栽に接して日本的な芸術観を盆栽の上に認め、西洋にはかつて存在しなかった自然美の表現方式を会得して、盆栽を世界的な関心事に押し上げ、BONSAI の呼称を国際的に定着させた。

21) 筆者は、昨今、盆栽の賞玩や陳列に際して供用する中国趣味的な机卓^{きしよく}やいわゆる「席陳列」に伴う中国的な方式に、江戸中期以降の文人が中国古来の「文房清玩」を踏襲し、あるいは過度にその境地を深めたなどの軌跡を認めて、この点を明示し、もって、盆栽を核心とする日中両国の関係を「文房清玩」を軸としながら、歴史的な経過の中で体系づけた。

VII 謝 辞

筆者は本務の一端として、わが国の園芸を世界的に特色づけてきた特有な花木や斑入植物等につき、その成立・育種・普及等の部面を社会学的文化史的領域にまで立ち入って考究してゆく過程で、盆栽の存在を承知した。

江戸時代、いわゆる奇樹異草は数多くの種樹書に主役として登場し、それらが後世に伝えられてわが国固有の種類となっているが、その研究が始まった頃、はからずも北米バージニア在住のナーセリー経営者石山寅三氏から、盆栽の指導を通じて日本を紹介する基本的な知識を形成するためとして、盆栽史関係の資料収集を依頼された。

その収集の過程で、当時誠文堂新光社に勤務していた故加藤芝氏、大宮市盆栽町の九霞園主村田久造氏、世田谷の光風園主故吉村鋭治氏、京都の香艸園主河合保三氏、出光美術館の杉村勇三氏、東京国立博物館主任研究官菊地貞夫氏、同文部技官長谷部楽爾氏、同海老根聰郎氏、竜谷大学教授宮崎円遵氏、日本画家舟橋満氏、洋画家で東洋蘭の趣味家黒崎陽人氏、千葉大学園芸学部文部教官横井政人氏、京都大学農学部文部教官安藤敏夫氏、韓国綜合造景公舎尹澄五氏、およびその他多くの方々から御教示や御便宜を戴いた。

一方、千葉大学園芸学部前教授林四郎氏、同教授藤井健雄氏は論文としての執筆を勧奨され、また終始御鞭撻を戴き、東京農業大学前教授松原茂樹氏・京都大学農学部前教授塚本洋太郎氏には、それぞれ全文の校閲資料の検討について御骨折りにあずかった。

論文の形をとる以前に同工の構想を取りまとめたが、それは故加藤芝氏の御勧奨によるものであった。

執筆を終るに当たり、上記の方々に対して深謝の意を表します。

VIII 引用文献

- 阿部喜任 (1837・天保8): 草木育種後編
- 秋里籬島 (1780・安永9): 都名所図会
- (1797・安政9): 東海道名所図会
- 浅野 湜 (1967・昭和42): 盆栽発達の歴史, 新花卉 53: 58
- 仏書刊行会 (1912・大正1): 蔭涼軒日録 (大日本仏教全書 1—5), 仏書刊行会
- 文 震 亨 (c.1630): 長物志
- 長生舎主人 (1831・天保2): 金生樹譜別録
- (1836・天保7): 松葉蘭譜
- 中国歴代名画編集委員会 (1965): 故宫博物館所蔵 中国歴代名画集二巻 宋, 人民美術出版社, 北京
- C. W. C (1862・): The horticulture of the Far East. Gard. Chron. & Agric. Gaz., 22
- 江原春夢(梅松)外 (1903・明治36): 盆景盆石盆山盆庭秘訣図解, 博文館
- 栄 宝 斎 (1958): 中国版画選, 栄宝斎, 北京
- 古橋柏堂 (1913・大正2): 北京の正月と盆栽, 盆栽雅報 81: 9
- Gard. Chron. (1872): Japanese art. Gard. Chron. & Agric. Gazz., 1386
- (1877): Japanese gardens. Gard. Chron., 207
- (1889): The dwarfed trees of Japan. Gard. Chron., 136
- (1889): Japanese distortions. Gard. Chron., 360
- 玄 恵 (鎌倉末?): 喫茶往来
- 伍 宜 孫 (1969): 文農盆景, 永隆銀行, 香港
- 原田謹次郎 (1936・昭和11): 中国名画宝鑑, 大塚工芸社
- 原田伴彦 (1967・昭和42): 茶道盛衰記, 角川書店
- 長谷川光信 (1751・宝暦1): 絵本家賀御伽
- 長谷川仙斎(著)中川良英(編) (1772・明和9): 盆山秘言
- 樋口 弘 (1967・昭和42): 中国版画集成, 味燈書屋
- 平賀源内 (1773・安永2): 重修秘伝花鏡
- 穂坂八郎 (1943・昭和18): 花卉及觀賞植物の発達, 日本農学校長協会編日本農学発達史, 農業図書刊行会, 279
- 井口松之助 (1896・明治29): 盆栽培養全書(草木図解), 魁真楼
- 伊兵衛政武 (1710・宝永7): 増補地錦抄
- (1719・享保18): 広益地錦抄
- 伊兵衛 (1773・享保18): 長生花林抄
- 今井兼角 (1890・明治23): 培養手引草
- 井上 清 (1963・'65・'66・昭和38・40・41): 日本の歴史(上中下), 岩波書店
- 今村了庵 (1865・慶応1): 煎茶図式 草
- 岩佐亮二 (1970・昭和45): 盆栽史考抄, 加藤芝編日本盆栽大観, 330, 誠文堂新光社
- (1974・昭和49): カエデの鑑賞と培養の歴史, いけばな芸術全書, 11, 主婦の友社, 62
- (1975・昭和50): 中国における文房清玩の系譜とわが国の奈良平安時代の種植(1), 植物と文化 13: 67
- (1975・昭和50): 中国における文房清玩の系譜とわが国の鎌倉室町時代の種植(2), 植物と文化 14: 73
- (1975・昭和50): 盆栽の歴史(1) 絵巻物の中の盆山, ガーデンライフ 14: (8)
- (1975・昭和50): 盆栽の歴史(2) 浮世絵の中の盆栽, ガーデンライフ 14: (9)
- 井沢保治 (1829・明治12): 竹田画譜上, 鐘香園

- 順石軒磐海 (1785・天明5): 盆山百景図前編
 順石軒瑤江 (1798・寛政10): 盆山百景図後編
 開原 亨 (1910—'14・明治43—大正3): 樹木盆栽論, 日本園芸会雑誌 22(8)—26(2)
 角川書店 (1958・昭和33): 西行物語絵巻, 日本絵巻物全集 11, 角川書店
 ——— (1960・昭和35): 一遍聖絵, 日本絵巻物全集 10, 角川書店
 ——— (1961・昭和36): 法然上人絵伝, 日本絵巻物全集 13, 角川書店
 ——— (1963・昭和38): 春日権現験記絵, 日本絵巻物全集 15, 角川書店
 ——— (1966・昭和41): 善信聖人絵・慕婦絵詞, 日本絵巻物全集 20, 角川書店
 金井紫雲 (1926・大正14): 盆栽 (趣味と培養), 交誠堂書店
 勸修寺経雄 (1915・大正4): 京都の維新後の変遷, 日本園芸研究会編明治園芸史, 日本園芸研究会, 559
 柏木紹甫 (1795・寛政7): 盆山石図式
 川本敏夫 (1969・昭和44): 木と石のデザイン (盆栽・栽景の実習), 鶴書房
 木部米吉 (1903・明治36): 盆栽培養法, 三銀水石園
 木原均 外 (1972・昭和47): 黎明期日本の生物史, 養賢堂
 菊池秋雄 (1944・昭和19): 北支果樹園芸, 養賢堂
 菊地貞夫 (1965・昭和40): 歌麿Ⅱ, 美人画役者絵5, 講談社
 木村孔恭 (兼葭堂) (): 能阿弥伝盆山式
 金 太 (1827・文政10): 草木奇品家雅見
 木曾庄七 (1903・明治36): 聚楽会図録 (盆栽瓶花), 義昌堂
 喜多川歌麿 (1790・寛政2): 絵本駿河舞
 ——— (1801・寛政13): 四季の花
 喜多川信節 (1830・天保1): 嬉遊笑覧
 北尾重政 (1768・明和5): 絵本吾妻の花
 仇英(画)汪庚(校) (1779: 乾隆44) 絵図烈女伝
 小林是空 (1961・昭和36): 盆栽の歴史, 盆栽 41(6)・(7)・(8)・(9)・(10)・(11)・(12)
 小林憲雄 (1968・昭和43): 盆栽道初篇, 叢会
 広文編訳所 (1964): 齊民要術 (影印本), 広文書局
 小泉子章 (1835・天保6): 檀森斎石譜
 幸玉幸多 (1955・昭和30): 標準日本史年表, 吉川弘文館
 故宮博物院中央博物院共同理事会 (1961): 故宮藏瓷 鈞窯, 開發股份有限公司, 香港
 ——— (1961): 故宮藏瓷 如窯, ———
 顧 虎 頭(画) (1825・道光5): 古烈女伝 (北宋余仁中本の翻刻)
 国書刊行会 (1904・明治38): 古今要覧稿 (活字本) 1—6, 国書刊行会
 庚 辰 仲 (1880・光緒6): 冶梅石譜
 小山磐海 (1804・文化1): 勝地百盆
 熊谷直行 (1876・明治9): 円山勝会図録
 黒川道祐 (1684・貞享1): 雍州府志
 桑田忠親 (1958・昭和33): 日本茶道史, 河原書店
 前田曙山 (1915・大正4): 明治年間花卉園芸私考, 日本園芸研究会編明治園芸史, 505
 前島康彦 (1961・昭和36): 江戸の植木屋と江戸時代の園芸の流行, 松平康邦・中村恒雄編 たのしい庭
 木と花木, 誠文堂新光社
 毎日新聞社 (1974・昭和49): 皇居の盆栽展, 毎日新聞社
 松木一雄 (1818・文政1): 水画指南
 松浦静山 (c. 1835. 天保年間): 甲子夜話, 国書刊行会 (明治25・33・43) 覆刻
 源 謙(東溪) (1803・享和3): 考槃余事 (翻刻)
 源 三 郎 (1690・元祿3): 人倫訓蒙図彙

- 宮沢文吾 盧貞吉 (1917・大正6) : 実験花卉園芸続篇, 裳華房, 1097
- 宮沢文吾 (1922・大正6) : 盆栽附鉢植花卉, 養賢堂
- (1931・昭和6) : 盆栽, 養賢堂
- (1943・昭和18) : 花卉及観賞植物の発達, 日本園芸中央会編日本園芸発達史, 朝倉書店, 279
- 水木信夫 (1971・昭和46) : 盆栽史覚書, 盆栽世界 14: 74
- 水野忠暁 (1829・文政12) : 草木錦葉集
- 水野元勝 (1681・天保1) : 花壇綱目
- 水尾比呂志 (1966・昭和41) : いけばな 花の伝統と文化, 美術出版社
- 村田憲司 (1970・昭和45) : 明治の元勳と盆栽 (盆栽こぼれ話), 盆栽世界 1(8)
- 村田圭司 (1970・昭和45) : 盆栽の歴史 1—4, 盆栽世界 1(8)—(11)
- 無待庵主人 (1903・明治36) : 神田楽天君の盆栽談, 日本園芸会雑誌 139
- (1907・明治40) : 明治の盆栽界, 盆栽雅報 11
- 中田勇次郎 (1961・昭和36) : 文房清玩 1・2・3, 二玄社
- 中川良英 (1772・明和9) : 盆山秘言
- 中島信義 (1902・昭和35) : 盆栽仕立法 (草木実験), 博文館
- 植林忠雄 (1971・昭和46) : 煎茶の世界, 徳間書店
- 植崎宗重 (1965・昭和40) : 清長 美人画役者絵 3, 講談社
- 日本盆栽協会 (1964・昭和39) : オリンピック記念 盆栽水石展, 日本盆栽協会
- (1970・昭和45) : 日本万国博覧会 盆栽水石展, 日本盆栽協会
- (1974・昭和49) : 盆栽水石の鉢・水盤・卓, 日本盆栽協会
- 日本中国文化交流協会 (1975・昭和50) : 中華人民共和国漢唐壁画展, 中国人民对外友好協会
- 日本学士院 (1963・昭和38) : 明治前日本生物学史 2, 日本学術振興会
- 日本水石協会 (1970・昭和45) : 日本水石名品展 10, 日本水石協会
- (1973・昭和48) : 第2回全国名石総合展, 日本水石協会
- 日本浮世絵協会 (1974・昭和49) : 清長百六十年記念 鳥居派八代浮世絵展, 日本浮世絵協会
- 能勢 萬 (1943・昭和18) : 樹石 (盆栽随筆), 大雅堂
- 小倉芳彦 外 (1966・昭和41) : 教養人の東洋史 (上), 社会思潮社
- 岡 大路 (1943・昭和18) : 支那庭園論, 彰国社
- 奥村政信 (c.1750・寛政3頃) : 絵本小倉錦
- 大枝流芳 (1755・宝暦5) : 雅遊漫録
- (1756・宝暦6) : 西湾茶話 (煎茶仕様書)
- 大原民鑒 (1810・文化7) : 名数画譜
- 大井ミノブ (1964・昭和39) : 生活から見たいけばな, 主婦の友
- 大塚杉陰 (1910・明治43) : 煎茶式, 吉川弘文館
- 大山平八郎 (1970・昭和45) : 竜安寺の石庭 七つの謎を解く, 講談社
- 李 漁 (1669・康熙18) : 芥子園画伝初集
- 李 格非 () : 洛陽名園記 (写本)
- 李 炳薰(註) (1973) : 養花小録 (覆刻), 乙酉文化社, 京城
- 李 計成 (1634・崇禎7) : 園冶
- 橋川時雄 (1970・昭和45) : 覆刻, 渡辺書店
- 林 有麟 (1613・万暦41) : 素園石譜
- 大村西崖 (1923・大正12) : 翻刻, 図本叢刊会
- 李 斗 (1795・乾隆60) : 揚州画舫録
- ROGER, Alan (1971) : Bonsai : The story and developement of the dwarfed tree. Jour. R. H. S. 96: 249
- 最新園芸大辞典編集委員会 (1968・昭和43) : 盆栽, 最新園芸大辞典 1: 293

- 齊藤幸藏 (1942・昭和17): 慕婦絵詞, 続日本絵巻物集成 4・5 集, 雄山閣
- 斎藤幸雄 外 (1836・天保7): 江戸名所図会
- 斎藤 忠 (1962・昭和37): 木内石亭, 吉川弘文館
- 三戸与彰 (1883・明治16): 盆栽手引書, 篆々堂
- 三省堂編修所 (1954・昭和29): 盆栽, 三省堂
- 埼玉県 (1951・昭和26): 埼玉県史 6, 埼玉県
- 崔 友文 (1961): 中国盆景及其栽培, 商務院書館, 香港
- 山東京伝 (1798・寛政10): 四時交加
- 沢田牛磨 外 (1934・昭和9): 盆栽芸術 (日本趣味芸術叢書), 成美堂書店
- 沢田由治 (1972・昭和47): 常滑のやきもの. 盆栽世界 21: 52
- 銭 興華 (1967): 中国美術年表, 五洲出版社 台北
- 此君園主人 (1934・昭和9): 盆栽流行史, 立命館出版部
- 白井光太郎 (1931・昭和6): 盆栽の歴史, 石井勇義編園芸総論 綜合園芸大系 1: 234
- (1934・昭和9): 本草学論攷, 春陽堂
- (1943・昭和18): 日本博物学年表 (改訂増補), 大岡山書店
- 相 阿 弥 (1523・大永3): 東山殿御飾書
- 染井卓子 (伊兵衛政武) (1732・享保17): 追加楓集 (稿本)
- 杉村勇造 (1966・昭和41): 中国の庭, 求竜堂
- 墨江武禪 (1822・文政5): 占景盤
- 住田正雄 (1931・昭和6): 盆栽道, 博文館
- 田口松旭 (1892・明治25): 美術盆栽図
- 高橋誠一郎 (1965・昭和40): 春信, 美人画役者絵 2, 講談社
- 田中正俊 外 (1966・昭和41): 教養人の東洋史 (下), 社会思潮社
- 田能村直入 (1863・文久3): 青湾茶会図録
- 田能村 順 (1881・明治14): 直入寿筵図録
- 田代与志 (1970—'71・昭和45—46): 明治盆栽三大商のうち香樹園鈴木孫八と村田利右衛門について(1)
—(13), 盆栽世界 8—20
- 橙 軒 生 (1908・明治41): 三樹園盆栽談 1・2・3, 華 6・7・8
- (1908・明治41): 梅丈園盆栽談 華 10
- 東京国立博物館 (1964・昭和39): 明清の絵画, 便利堂
- (1971・昭和46): 東京国立博物館図版目録 浮世絵版画篇, 東京美術
- (1974・昭和49): 絵巻 (特別展), 東京国立博物館
- (1975・昭和50): 日本出土の中国陶磁, 東京国立博物館
- 図書刊行会 (1905・明治38): 古今要覧稿 (覆刻), 東京活版
- TUMURA, Toichi (1903): Japanese dwarf trees. Transaction and proceeding of the Japan Society
(倫敦日本協会雑誌) 6: 2
- 津山尚 二口善雄 (1966・昭和41): 日本の椿, 平凡社
- 上田秋成 (1794・寛政6): 清風瑣言
- 上野益三 (1973・昭和48): 日本博物学史, 平凡社
- 瓜生 寅 (1961・明治36): 梅村寿筵図録
- W. I. (1846): Chinese method of dwarfing trees. Gard. Chron. 771
- 山上宗二 (1588・天正16): 茶器名物集 (続群書類従 19 下)
- 山中吉郎兵衛 (1875・明治8): 青湾茗醺図誌
- 横浜植木株式会社 (1904・明治37): Catalogue of the Yokohama Nursery Co. Ltd,
- 横井時冬 (1842・明治25): 盆栽考, 日本園芸会雑誌 36(8)
- 横川毅一郎 (1954・昭和29): 盆栽の芸術性, 三省堂編集所編 盆栽, 三省堂, 117

吉田暎二 (1931・昭和6) : 歌磨 (浮世絵大家集成 12), 大鳳閣書房

吉村酉二 (1971・昭和46) : 海外の盆栽界, 盆栽世界 10: 42

神宮司序 (1908・明治41) : 古事類苑 遊戯部, 古事類苑刊行会

IX Summary

According to the idea, generally accepted today, bonsai will be defined as follows: bonsai consists of miniature, long-living plants and sometimes of stones, planted artistically in pots or other containers by imitating natural scenery, in order to create the beauty of nature in miniature. Thus, bonsai is different from usually what we call 'pot plants' or 'potted plants' that planted in the pots to appreciate directly their shape, colour, fragrance, etc. of flowers, leaves, stems, and fruits and overall form of the plants. The difference between them, in short, is the presence or absence of artistry (artistic beauty) in the containers created by artistic elaboration of growers who feels beauty on the objects (plants).

Although bonsai in Japan has long history, the idea of two categories stated above has appeared in the beginning of the twentieth century (20th year of Meiji) and after long campaigning for enlightenment for about 40 years, now this idea has established in the bonsai world.

Many fields of culture of Japan have unique characteristics which developed through beautiful land and environment and racial characteristics for a long time. In addition to this, there was a step introducing culture of China and Korea in the ancient times, forming characteristic culture of Japan with combination of Japanese original culture. Development of bonsai followed similar developmental pattern as various other fields of culture.

However, up to now, in China, there is no differentiation into bonsai and potted plants as in Japan and Chinese generally called 'pén-jing' (盆景), or sometimes 'pén-zāi' (盆栽), covering Japanese sense of bonsai and potted plants and even including miniature garden. Thus, there is a large difference in the general concept of bonsai between both countries.

In wider sense of bonsai, there was pén-jing already in the fifth century in the East T'sun period and in the early seventh century (Sui period) there was a poem by an emperor suggesting the presence of Camellia bonsai. Later, from the seventh to eighth centuries (Tang period), custom of decorating rooms with flowering pén-jing in early spring was popular and it is said that flower pots in those days are exhibited in National Museum in Peking.

Generally, the pén-jing beloved by Chinese was a form using natural growing trees, but men of letters of the leisure class in Tang period loved pén-jing with artificially trained trees with the hope of producing a full of artistic feeling, as an object of favourite hobby.

Since Yamato Dynasty was established in the middle of the fourth century in Japan, introduction of improved organization and culture of Tang was hastened by sending the envoys to Tang Dynasty in order to make use of them in the founding of the nation.

By 15 to 16 dispatches of envoys to that country, culture of Tang had penetrated into various fields and it may be assumed that exchanges of intellectuals between both countries resulted in an introduction of pén-jing, flower pots and ways of appreciating the beauty of pén-jing.

In the period of Sung, during the periods of the late tenth to thirteenth centuries, pén-jing became very popular in daily of the public. This is suggested by the Chinese National Museum collection of flower pots and bowls of the Chün and Ju-celadon Ware, used at court at this time.

About this time, Japan was in the Heian and Kamakura periods. Through the frequent exchanges of people and increased trade, Zen sect in South Sung was introduced, having the strong support of a man in power and at the same time, Sung ways of learning, arts, literal arts, customs, etc., were also brought in. Thus, it can be easily presumed that at this time an artistic pên-jing with feeling of Zen sect was brought to Japanese higher stratum of society and temples. This is evidenced by a number of bonsai and Chinese flower pot drawings illustrated in the picture scroll of the Kamakura period, presumably drawn in A. D. 1300.

As a result of studying the social backgrounds of these old periods in China and Japan, it may be concluded that bonsai was first introduced into Japan as early as Tang and Sung periods in China, corresponding to Nara, Heian and Kamakura periods in Japan, through the exchanges of people and trade.

Also, it can be safely said that bonsai appreciation by Shougun and priests seen in drawings and proved records in Muromachi period (the fourteenth to sixteenth centuries) was influenced by ways of appreciation made by men of letters in South Sung, Yüan, and Ming periods. Chinese people in Yüan period calls pên-jing as 'xiē-zi-jing pot plants' (些子景).

Later in Edo period (the seventeenth century), Tokugawa Shougun of the earlier 3 generations had a keen interest in appreciation of the beauty of flowering trees and bonsai. In addition, with backgrounds of stabilization of peaceful social life during the next 270 years, horticulture started first from growing flowering trees, such as camellias, cherry trees, prunus, tree peonies and in the middle period, there was a rapid increase in number of their cultivars, together with growing of maples, chrysanthemums, and adonis. In the later period of Edo, tendencies to grow plants having variegated or curiously deformed leaves and to breed new cultivars of primulas, morning glories, peonies, irises, etc., were strongly in evidence. In Edo period, many horticultural books, particularly on the culture of flowering trees and flowers, emphasizing description of species, cultivars or variegation of leaves had been published.

In contrast to this general floricultural world, there was another group of ornamental horticulture, that is, growing bonsai with Edo style, supported strongly by wider strata of the general public up to Shougun. This is understood from bonsai drawings appearing in Ukiyoe, which used to be tied together with daily life of the common people.

In the eighteenth century, men of letters of the leisure class in Kyoto and Osaka areas got together, with aristocratic and high-browed attitude, aftering for the idea and customs of Chinese men of letters. During this time, they developed 'artistic' type of bonsai, very much different in quality from Edo type of bonsai which lacks in taste and artistic nature.

After the revolution of government in the end of the nineteenth century, accompanying with change of the ruling class, this 'artistic' bonsai appeared before the general public, availing itself of the movement of improving bonsai quality artistically by Tokyo amateur enthusiasts. This would be the starting point of bonsai today. Since then, Japanese bonsai having originality and excellency in quality, from Chinese pên-jing style, has been developed steadily with various and skilful tree training.

附表1 盆栽史年表

西暦	日本	概 要	中国	概 要 (朝鮮を含む)	西暦
1500-	縄 文	狩猟漁撈生活 縄文式土器焼成	殷 (商)	彩陶・灰陶・黒陶焼成	1500
1400-				西方より青銅器の鑄造法を導入	1400
1300-				し祭祀器利器として使用	1300
1200-					1200
1100-			西 周	西方より鉄器文化を導入	1100
1000-				土地の利用区分(圃圃園)確立	1000
900-				宮廷園芸・玩石(?)はじまる	900
800-					800
700-			(春 東 秋)		700
600-					600
500-					500
400	弥 生	部族国家成立 稲作開始 弥生式土器を焼成 大陸より青銅器鉄器を導入	(戦 周 国)	孔子・老子等の思想家出現、後世にも及んで思想界に深く影響	400
300-					300
200-			秦	宮殿・宮苑の構築法急伸「焚書」から医卜と並んで「種樹書」を除外(種樹進展を示唆)	200
100-				「西京雜記」に長安における種樹の盛行を記述 長安の「上林苑」には多くの離宮が建ち広大な湖水が堀られ花木を多数植栽	100
0-			前 漢		0

西暦	日本	概要		中国	概要（朝鮮を含む）	西暦			
0	弥生	57	倭国女王後漢に遣使	新	貴族・権臣・富商による園林の個人的所有はじまる 仏教伝わる	0			
100-				後漢		豪族同志が相会して交友の場をもち「清遊」「清談」する風習はじまる	100		
200-							239	邪馬台国魏に遣使	竹林の七賢老荘思想を実践に移し、形式道徳を排撃。
266		邪馬台国女王毌与晋に遣使	江南の東晋にて貴族・権臣・富商による莊園(別荘)の所有盛行牧歌的風潮横溢		東晋の王羲之「蘭亭」を建て、「曲水」を流し、「流水曲觴」の宴を楽しむ				
300-		大和朝廷による統一はじまる					西	晋	五胡十六国
400		古墳		370		半島に進出して任那を領有	東	晋	南

西暦	日本	概 要		中国	概 要 (朝鮮を含む)	西暦
400-	古 墳	413	晋に朝貢	(六朝) 宋 齊 梁 陳 隋 唐	北 朝 魏 隋 唐	400
		421	讃宋の武帝より除授 司馬曹達、宋に使いす			
		430	宋に朝貢			
		438	宋に朝貢			
		443	齊、宋に遣使			
		462	興、宋に遣使			
		478	武、宋に遣使、上表文			
		479	齊皇帝、倭国王を征東大將軍とす			
500-		502	梁皇帝、倭王を征東大將軍とす			500
		538	百済の聖王、仏像經論を献ず			
		562	任那の日本府滅亡			
600-	(飛鳥) 飛鳥 鳥 白鳳	600	隋に遣使	隋 唐	楊帝「宴東堂」の詩に盆植(?)の海石榴(ツバキ)を詠む。大運河掘削 「文人」の「琴棋書画」の境地確立 自然賛美の風潮横溢 「地窖」による「盆花・南花」の催花保護盛行 永徽1. サラセンと通商開始、「呉市」はじまる	600
		607	小野妹子を隋に派遣			
		608	隋使來朝			
		614	犬上御田鍬を隋に派遣			
		630	犬上御田鍬を唐に派遣 (遣唐使のはじめ)			
		645	文化、大化の改新、仏教興隆の詔			
		650	白雉1. 智通・智達入唐し玄奘に学ぶ			
700-		756	天平勝宝8. 東大寺正倉院成る。東大寺御物の始め			700
		788	延暦7. 最澄延暦寺を創建			
800-						800

西暦	日本	概 要	中国	概 要 (朝鮮を含む)	西暦
800	(弘 平・仁・貞 観)	805 延暦24. 最澄帰朝し天台宗を創む 806 大同1. 空海帰朝し真言宗を創む 815 弘仁6. 大僧部永忠嵯峨天皇に献茶 — 弘仁年間、瀬戸焼始まる (宮廷用) 838 承和5. 藤原常嗣の遣唐使 をもって派遣を終る	唐	804 貞元20. 陸羽(720?~)茶経の著者 存命中自然復帰運動を提唱 819 元和4. 柳宗元(773~)、種 樹廊・卓駝伝の著者 — 白居易太湖石を発見詠物、玩石熱急騰 846 昌元6. 白居易(772~)	800
-900-					-900-
	(藤 原 安)		五胡十国	— 南唐(937~975)富有を極め文 化栄える、「文房清玩」の風潮盛行 950頃 南唐の2代の帝王李煜(李後主)海 岳庵・宝晋斋・宝晋斋山等を賞玩	
1000-		1018 寛仁2. 白氏詩巻71巻(行成)平 安文学に大きな影響を及ぼす	遼 北宋	— 北宋にて禅宗盛行、禅的思潮横溢 — 河北の定窯、河南の如窯・鈞窯等で 名品を焼成、(花盆も含んで、故宮 藏瓷として伝世、現在に至る)	-1000
1100-	鎌倉	1093 寛治7 辺民宋人と共に高麗を 侵す	金 南宋	1090頃 天祐? 蘇東坡「壺中九華」の詩を詠 む 1107 大観1. 米元章(1051~)存命 中霊壁石や研山を賞玩 1122 宣和4. 徽宗皇帝多量の太湖石を汴京(開封) に運ばせて艮嶽を築かせる。反乱誘発 — 江南の開発進展、自然讃美の風潮盛行 — 揚州杭州に花市がたち老松老柏の盆栽も並 ぶ — 文人が茶に雅趣を求め、建盞(天目)を取入れ れる 1180 淳熙7. 朱子学起る 日宋間の貿易進展	-1100
		1167 仁安2. 重源入宋 1168 仁安3. 榮西入宋、天台山で顕密二教を修 める 1171 承安1. 覚阿入宋 1186 文治2. 榮西再び入宋・天台山の虚庵禅師 に禅の正法を学ぶ 1191 建久2. 榮西喫茶の風習と茶種を伝える 1193 建久4. 宋銭の流通停止			
1200-					-1200-

西暦	日本	概 要	中国	概 要 (朝鮮を含む)	西暦
1200	鎌 倉	1200 正治2. 北条政子の発願により、鎌倉の寿福寺を禪寺として開山(栄西) 1222 貞応1. 瀬戸の陶工南宋より進んだ焼造法を導入(加藤景正)	金 南		1200
		1253 建長5. 建長寺創建(帰化僧蘭溪道隆)	蒙 古	— 禅僧蘭溪道隆・兀庵善寧・大休正年・無学祖元・一山一寧等相前後して来日し、滞留し帰化して宋風の禅・文化・風習を伝える	
		1274 文永11. 文永の役 1274 文永11僧一山・寧滞南宋風の禅を伝える 1281 弘安4. 弘安の役 1282 弘安5. 円覚寺創建(帰化僧無学祖元) 1299 正安1. 「一遍聖絵」(円伊) 1300 正安2. 「法然上人絵伝」(土佐吉光外)	宋	— 元人、盆景を「些子景」と呼ぶ	
1300-		1309 延慶2. 「春日権現験記絵」(高階隆兼)	元		
	吉 野	1331 元弘1? 「徒然草」(吉田兼好) 1336 延元1. 後醍醐天皇吉野に遷幸、名石「夢の浮橋」を常時携行 1339 延元4. 西芳寺(苔寺)庭園成る 1351 正平6. 「葵婦絵詞」(藤原隆章・隆昌) — 「祭礼草子」 — 窯業この頃より盛行		— この頃倭寇盛ん	
1400-	室 (北 山)	1 申樂能大成(親世清次)「鉢の木」. 1397 応永4. 義満金閣を建立、池中の「九山八海石」を賞玩 1401 応永8. 明と通商 1418 応永25. 「花伝書」(世阿弥)、この頃より立花・茶流行しはじめる 1434 永享6. 勘合貿易はじまる 1435 永享7. 遣明使 1451 宝徳3. 遣明使 1463 寛正4. 義政諸寺院に「盆山」を献上させる 1466 文正1. 義政富士松を配した「盆山」を受納 1467 応仁1. 応仁の乱起る。下剋上はじまる 1483 文明15. 義政銀閣を建立、書院茶・盆玩玩石に耽る	明	1392 朝鮮に李朝成立 李朝の貴族権臣の間に盆玩の風習広まる 1450 ~1500? 「十八学士図」(無款) 1474 朝鮮「蒿川養花小録」(姜希顔) 1500 ~1550? 「金谷園図」(仇英) 1522 嘉靖1. 景德鎮窯で五彩(赤絵)進展	-1400
1500-	町	1499 明応8. 竜安寺の石庭成る			-1500
	安土 桃山	— 弘治、永禄? 將軍義輝の歌会に富士石の盆山と釣香炉を飾る、法印宗に説物 永禄11. 西芳寺庭園再興 — 信長、名石「末の松山」と本願寺領とを交換、信長の火蕉の盆植を光秀の妹と家臣が損傷し光秀激しく叱責される — 文禄・慶長? 秀吉献上された松の盆山の衰弱を気に病む		1600 頃万暦? 煎茶に「陽羨陶」登場	-1600

西暦	日本	概 要	中国	概 要 (朝鮮を含む)	西暦
1600	江	—— 慶長、家康城中の局沢にお花畑を設け、小野寺の住職に手入れを命ずる(阿部家伝)	後 金	1606 万曆34、「考槃餘事」(屠隆)	1600
		1615 元和1. 秀忠「花癖」あり、お花畑に椿を蒐集		1613 万曆41、「素園石譜」(林有麟)	
		1620 元和? 家光、お花畑に盆栽を陳列、賞玩		1630 崇禎3. 「長物誌」(文震亨)	
		1630 寛永7. 「百椿集」(安楽庵策伝)		1634 崇禎7. 「閨治」(李計成)	
		—— 寛永? 有田の酒井田柿右衛門赤絵を完成		—— 明末から清にかけて文人の間に盆玩・玩石盛行	
		1665 寛文5. 「花壇綱目」(水野元勝)		天目の矮松・閩中(ピンチュウウ=福退)の梅と水竹の声価高まる。(考槃餘事・長物誌・花鏡)	
		1681~1703 天和・貞享・元禄、種樹熱急騰、楓(カエデ)流行		1688 康熙27. 「秘伝花鏡」(陳扶揚)	
		1690 元禄3. 「人倫訓蒙図彙」(源三郎)			
		1694 元禄7. 花壇地錦抄(三之丞)斑入6点			
1700-		—— 元禄年間、支那鉢を多量に輸入			-1700
	戸	1716~、享保年間 菊流行	清		
		—— 種樹の盛行に合せ、尾張にて白銅黒銅鉢を焼く			
		1735~ 享保20~、斑入り葉替り等の流行はじまる			
		1748 寛延1. 「芥子園画伝」和刻			
		1750? 寛延3? 「絵本小倉綿」(奥村政信)		1771 乾隆36. 「富貴図」(閔貞)	
		1751 宝暦1. 「絵本家賀御加」(長谷川光信)			
		1773 安永2. 「重修秘伝花鏡」和刻(平賀源内)		1795 乾隆60 「揚州画舫録」(李斗)	-1800
		1790 寛政2. 「絵本駿河舞」(喜多川歌磨)			
		1794 寛政6. 「清風瑣言」(上田秋成)			
1800-		1798 寛政10 「四時交加」(山東京伝)			
	明	1801 寛政13 「四季の花」(喜多川歌磨)	中 華 民 国		
		1803 享和3. 「考槃餘事」和刻(源謙)			
		1808 文化5. 「占景盤」(愚江武輝)			
		1827 文化10 「草木奇品家雅見」(金太)			
		1829 文化12 「草木錦葉集」(水野忠暁)			
		1830 文化13 「金生樹譜」(長生舎主人)			
		1836 天保7. 岩槻城主大岡主膳忠尚將軍家慶に安行産の松の盆栽を献ずる			
		天保7. 「江戸名所図会」(斎藤幸雄幸華)			
		1837 天保8. 「草木育種後篇」(阿部喜任)			
		1858 安政5? 大阪の草薬園が文人植木の専業者として創業			
	治	1863 文久3. 「青湾茶会図録」(田能村直人)	共 和 人 民		
		1866 慶応2. 「煎茶図式・草」(今村了庵)			
		慶応2. 草薬園等孤亭で煎茶式の盆栽陳列会を開く			
		1871 明治4. 文人盆栽東上(山内容堂製雪堂安井恒七に発注)		—— 光緒年間、蘭梅図(郭宗儀)	-1900
1900-		1871~76 明治4~9 政府要人盆栽賞玩、呼称單一化			
		1875 明治8. 「青湾茗園図誌」(山中吉郎兵衛)			
		1876 明治9. 「円山勝会図録」(熊谷直行)			
		1892 明治25. 「盆栽考」(横井時冬)		—— 日本より多数の盆栽を輸入	
		明治25. 「美術盆栽図」(田口松旭)			
		1903 明治36. 「聚楽会図録」(木曾庄七)			
	昭 和	1906 明治39. 同好会誌「盆栽雅報」(生島一編集)	中 華 人 民 共 和 国	1961 「中国盆景及其栽培」(崔友文)	
		1921 大正10. 雑誌「盆栽」(小林憲雄編集)		台湾香港で雅趣に富んだ盆景盛行	
		1934 昭和9. 第一回国風盆栽展		「文農盆景」(伍宣孫) 香港	
		1937 昭和12. フランス万博へ盆栽80展出品、金大賞			
		1964 昭和39. 「盆栽協会」発足			
		昭和39. 東京オリンピック盆栽水石展開催			
		1970 昭和45. 日本万博盆栽水石展開催			
		1975 昭和50. アメリカ建国200年(1976)に先立ち、盆栽43杯を贈呈			

錦絵の中の盆栽（作画された年代の同定が困難な場合もあるので、年表には組込まずに別記する）

江戸中期

鳥居清倍（～	享保1・1716）	植込み鉢（丹絵）
鈴木春信（享保10・1725～明和7・1770）		見立寒山給得、見立鉢の木
一筆斎文調（～	寛政2・1790）	市川高麗蔵市川金作（明和7・1770）
勝川春章（享保14・1729～寛政4・1792）		大谷広治

江戸後期

鳥居清長（宝暦2・1752～文化12・1815）	風俗東の錦一植木売、座敷八景、障子前二美人（肉筆）
喜多川歌麿（宝暦3・1753～文化3・1806）	通世山下綿・一、高名美人見立忠臣蔵、行楽図
細井鳥文斎（宝暦6・1756～文政12・1829） （細田栄之）	六歌仙一 遍照、六歌仙一 小野小町
北尾政演（宝暦11・1761～文化13・1816）	芝居絵一市川門之助
栄松斎長喜（～寛政1・1789～文化5・1808～）	青楼松竹梅
歌川国貞（天明6・1786～元治1・1864） （三代豊国）	市美弥景姿の福品唄、春宵梅の宴、美女と桜 （弘化1817頃）（弘化嘉永1848頃）（弘化嘉永1848頃）
	芝居絵西行法師、芝居絵一 早野勘平おくみ、浅草 （弘化嘉永1848頃）
	雷神門の景、南港松の賑い（二代広重と合作） （嘉永6・1853）（安政7・1859）
歌川国芳（寛政9・1797～文久1・1861）	鉢の木、絵兄弟やさすがた
安藤広重（文政9・1826～慶応2・1869） （二代目）	雷神門外の鉢

明治

揚州周延（天保9・1838～明治45・1911）	名譽色咲分小町メ子、雪月花・野州 （明治16・1883）（明治18・1885）
--------------------------	--

砂之物立花（綿絵の中で盆栽と見紛うことも考えられるので念のために附記する）

古山師政（～宝永7・1710）新吉原座敷けんすもう（漆絵）、一筆斎文調（～寛政2・1790）中あふみや半太夫、鳥居清長（宝暦2・1752～文化12・1816）隅田川船遊び（猿踊り）、栄松斎長喜（～寛政1・1789～文化5・1808～）涼み舟、鳥居清峯（二代清濤）（天明8・1788～明治1・1865）浮絵新吉原

附表2 東洋陶磁史年表

西暦	日本	概 要	朝鮮	概 要	中国	概 要
B. C.		縄文式土器焼成			(仰韶)	彩陶・紅陶・粗陶焼成
2000					(龍山)	
1900						
1800						黒陶・灰陶を加える。 白陶はじまる。 灰釉陶あらわれる。
1700						
1600	縄				殷(商)	
1500						
1400	文					
1300						
1200						
1100					西周	
1000						
900						
800						
700					(春秋)	
600					東	鉛釉の使用はじまる。
500					秋	
400						
300				青灰色陶質打型文土器焼成	(戦国) 周	
200	弥	弥生式土器を焼成			秦	緑釉陶褐釉陶を焼成
			楽浪郡		前漢	
	生				新	
					後漢	
100						

西暦	日本	概 要		朝鮮	概 要		中国	概 要	
100	弥			楽			後		青磁（古越磁）を焼成しはじめる。 灰釉陶の焼成盛行。
200	生			浪			漢		
				郡					
							(三国)		青磁の焼成盛行。
							呉蜀魏		
300	古	300頃	円筒埴輪の製作はじまる、人馬の埴輪を焼成し殉死に代って使用しはじめる（垂仁32？）伊部焼のはじめ？				西晋		黒釉を焼成。
				三国（高句麗―百済―新羅）		この頃灰色の硬い陶器（＝新羅焼）はじまる。 （自然釉のものを含む）	東胡十六国		
400	埴						晋（南）		
							（北）		
							朝		陶淵明・官を辞して故山に帰り、酒を楽しみ、菊を愛して盆栽の文字を創成。
							宋		
							北魏		
500		485	百済より須恵器の焼成法を導入、			彩画陶、黄緑釉陶を焼成。	齊		

西歴	日本	概 要		朝鮮	概 要		中国	概 要	
500	古墳	532	宮廷用食器を焼くため 饗土師部（にえのはにしべ）をおく。 物部尾與、饗土師部をたてまつる。	三 国 時 代			北 梁 魏 東魏 西魏 北齊 北周		
600	大（飛鳥）	—	瓦博士百濟より来る。				隋	—	黄釉緑彩陶焼成
700	和（白鳳）	—						—	明器として緑釉・褐釉・黄釉・白釉などの人物動物を副葬。白磁の焼成はじまる。楊帝盆植(?)の海石榴(ツバキ)を詠物、青白磁(影青)の焼成はじまる。
800	奈良（天平）	712	大宝、大宝令の制、宮中に管陶司をおき、陶器および管を作らせる。 和銅5、土師部（はにしべ＝陶工）の制をおく。	新 羅				—	北部で自磁南部で青磁が発展。
		734	奈良三彩の焼成はじまる。 天平の造仏所にて、瓷器（坏・油坏）をつくる。 行基、河内国植田において磁器の焼成を指導(?)（行基焼）。 常滑焼はじまる(?)				唐	—	盆植の迎春花(オーバイ)南花(南方の花)などを冬期地嶺で保護し早放(促成)させ、堂花と呼んで賞玩。
		—						—	三彩を焼成して明器とする。
900	平安（初期）	808	奈良三彩の焼成止む。 大同3、管陶司を大膳職に併する。					—	三彩の焼成止まる。
		815	弘仁6、尾張国山田郡の人三家、人部、乙磨呂の3名、伝習して瓷器をつくり、雑色に準じて昇殿を許される。					—	陸羽の「茶経」に邢・越・鼎・婺・岳・寿・洪各州窯の磁器を記す。喫茶の盛行に伴って窯業進展、越州窯の青磁(秘色青磁)邢州窯の白磁の声價あがる。

西歴	日本	概 要	朝鮮	概 要	中国	概 要
900	平 (中)		新羅		唐	
1000	安 (藤原)	— 長保? 紫式部「源氏物語」に「あかしの御かたの装束はあおじ (=青瓷) …」として海舶して秘色 (ひそく) の陶磁の声價を示唆する。	高		五胡十国	954 顯徳1、吉州窯で焼造。 956 顯徳4、定窯で焼造。 — 景德鎮窯にて影青の焼造進展。 — 吳越王錢俶宋に越州窯の秘色青磁を贈る。 — 定州窯越州窯で焼造。 — 鈞窯で紫紅磁の焼成はじまる。
1100	(後)	— 有識故実書「江家次第」張に尾張青瓷の名がある。	麗		遼	鈞窯如窯で宮廷用に花盆の優品を焼成、渣斗式 (袋式) 葵式 (輪花) 蓮花式 (輪花) 海棠式 (木瓜) 仰鐘式 (深円鉢)、長方、六方 (亀甲) 楕円など形状は変化に富む。
	1125	— 天治2、常滑にて、大壺を焼成。 — 渥美古窯・越前古窯・中津川古窯・信楽古窯・備前古窯等で大壺を焼成。		この頃中国の秘色青磁になった翡色青磁の焼成盛行、完成の域に達する。	北	1067 治平3、蔡襄「茶録」に建盞 (和名天目茶碗) を記載。 — この頃茶事 (抹茶) の盛行につれて建盞の声價上る建盞盛業。 — 龍泉窯で洗練された青磁 (日本の呼称砧青磁) を焼造。 — 磁州窯で和名白地黒搔落を焼成。 — 徽宗の命によって開封 (汴京) に官窯を開く — 修内磁窯と郊壇窯のいわゆる南宋官窯を開く青磁を焼成。 — 青磁の竜泉窯、建盞 (天目茶碗) の建盞、影青 (青白磁) の景德鎮窯、玳瑁の吉州窯等で優品を焼成。
1200	鎌倉	1222 貞応2、瀬戸の陶工加藤藤四郎南宋に渡る。 1227 安貞1、加藤藤四郎進んだ焼造法を導入、後人持帰った胎土と釉薬で焼いたものを唐物、和土和薬のものを古瀬戸という。 — 瀬戸で黄緑釉の技法進む (古瀬戸)。 — 正安~延慶この頃海舶した青磁の花盆を供用		この頃、独自の象嵌青磁はじまる、また鉄絵青磁、青磁辰砂、画金青磁、白磁などを焼成。	宋	— この頃浅型の袋式円盆を焼成。 — 盆景を些子景と呼ぶ。
1300					金	
					南	
					宋	
					蒙古	
					元	

西暦	日本	概 要		朝鮮	概 要		中国	概 要	
1300	鎌倉	—	越前焼で甗を焼成。 瀬戸で黒や茶の天目釉を焼成しはじめる。	高麗			元	—	瑠璃釉を焼成。
		—	瀬戸で瓶子・狛犬など焼成					—	
		—	丹波焼で甗を焼成。					—	
		—	備前焼で甗を焼成。					—	景德鎮窯で青花（染付）の焼成はじまる。 磁甗紅（辰砂）の技法開発
1400	吉野	—	信楽焼で香炉を焼成。	麗		この頃三島手の焼成はじまる。	明	1366	洪武中、景德鎮に御器廠を置く。 この地に多数の民窯が集中し、主として青花を焼く。
		—						1406	永樂中、法花（不透明釉の一種の五彩）は、じまる。 青花の技法、完成の域に達する。
		—						1435	宣徳10 この頃、五彩の技法進展。
		—						—	この頃、外緑・長方・雲足盆を供用（無款十八字土国）
1500	室町	—		李朝	1443	世宗25、日本国の使節、緑花磁器を請い受けて帰る。		1465	成化中、豆彩（斗彩・關彩）（＝極彩色の五彩）の技法完成の域に達する。
		—			1451	文宗5、安平大君、江華島にて鮮紅砂器（辰砂）を焼成。			
		—			1458	世宗3、中国より同々青（染付用の釉薬）を導入。			
		—			1464	世宗9、この頃朝鮮独自の青花の意匠として、秋草手・窓絵手などが発展。			
1500	(東山)	1515	永正12、伊勢松坂の人五良大夫（中国名呉祥瑞）明に渡って染付を焼く（祥瑞手）	朝		この頃より白磁の焼成進む。		1522	嘉靖中、五彩は発展の極限に達し、黄地紅彩・黄地緑彩・黄地緑彩・黄地紫彩などの雜彩を加え、他に金彩を施した留押（金襴手）もはじまる。
		—	備前焼の花瓶を焼成。						
		—	瀬戸で天目釉の茶碗・水指しなどを盛んに焼成（江戸中中期までつづく、）						
		—							

西暦	日本	概 要	中国	概 要	中国	概 要
1800	江	京都大黒町の趣味家奥田孫川、赤松・染付等の中国古陶磁を写す。道八・木米・鬼祐（助）嘉助らに陶法を伝える。	李 朝		清	1819 嘉慶24、江戸龍岡の松平家、長崎の清商を介し、特注（文化14・1817）した染付の方形深鉢を焼かせる。

	1796	寛政8、赤松光信、松山焼を				
	1801	享和4、加藤民吉、瀬戸焼に石田の秘法を導入				
	1807	文化4、青木本米、加州藩に招かれて春日山焼をおこす。青磁・赤松等を焼成。この頃青木本米要口に開窯、山陽・竹田・小竹（篠崎）らと交遊し、煎茶の茶碗を焼く。				

	1830	天保3、常滑の伊奈長三（2代）白泥・火摺・火色を作製。				
	1834	天保5、常滑の鯉江方寿、父方叔の遺志を継いで真焼窯の構造を完成。常滑の田常窯（鉄砲窯）は新様式に代る。				
	1847	弘化4、鯉江方寿、真焼土管（陶管）を創製。				
	1852	嘉永5、永楽保全御室門、相寺前に開窯。				
	1861	文久1、常滑の杉江寿門、朱焼焼を考案。				
	1863	文久3、田能村直人「青湾茶会図録」に紫泥円鉢を一例記載。				
	1872	明治5、加藤青山、西洋釉を使い始める。				
	1875	明治9、山中吉郎兵衛「青湾著徳園誌」に紫泥長方鉢を数例記載。				
	1877	明治11、常滑の杉江寿門、と4代伊奈長三、清人金土屋について中国式の茶注製法を習う。				
1900	明	この頃、竹本半太雑司ヶ谷にて焼成。	----- （大 韓 国）			この頃宣興盆を多数輸入（古渡り）
	1892	明治25、小野鉄田、加藤正吉を指示して鉢を焼く。				
	1897	明治30頃、常滑で泥物鉢の焼成はじまる。				
	-----	この頃、真葛青山、横浜に開窯、春伊親喜等を主とし一部盆鉢を焼く。				

1940 ?	大 正	1924 大正13、井上良清浅草橋場町より横浜に移る。陶商三珠一陽、三州高浜にて青磁碗、白釉などの薄鉢を焼く。	併 合		中 華 民 国	宣興盆を輸入（新渡）
	-----	水野東福寺、河合葛蔵の指導によって、青銅釉の広東写し鉢を焼成し始める。				
	昭 和	昭和15頃、植松陶翠、陶工品野谷松の手を併りて、水盤・薄鉢・小鉢を焼き始める。				
1940 ?	-----		朝鮮人民共和国		中 華 人 民 共 和 国	
